
幻影の金魚は緋色の檸檬水に溺れて

takao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻影の金魚は緋色の檸檬水に溺れて

【Nコード】

N5075I

【作者名】

t a k a o

【あらすじ】

四年前、あさが小学六年生の夏に起こった、二つ年上の従兄・清矢郎との誰にも言えない出来事。その日から赤い金魚の幻覚を見るようになった彼女の、大人になるまでの恋の物語。性への目覚め・葛藤、心の中のもやもや、従兄妹同士の恋の行方などを金魚をモチーフに書けたらと思います。全11章予定。（※過去作品「幻影金魚」の全面リメイク＋続編になりますが、元の作品を知らなくても読むことができます。元作品とストーリーが変わっているところがあります）

第1話 金魚が見える少女（前編）（前書き）

※直接的な表現は避けていますが、性的なものを示唆する表現やエピソードが全編にわたり出てくるためR15指定をしています。苦手な方はご注意ください。

※繰り返しますが、こちらは過去作品「幻影金魚」および続編の「青竹迷風」（個人ブログにて公開）の完全リメイク＋続編になります。主人公2人が大人になるまでの続編を書こうとしたのですが、そのためには旧作のエピソードやストーリーを最初から練り直す必要が出てきてしまいました（特に恋愛部分の描写において）。

前作は官能をテーマとしたものとしてまた切り口が違うため削除はしませんが、今回は恋愛をテーマとした新しい作品として最初から、ストーリーもいくらか変えて改稿します（前作にご感想等をくださった皆様には改めて感謝申し上げます）。

よって元の作品を知らない方でも読んでいただける内容となります。逆に元の作品のエピソードと異なるところやそのまま使う部分もありますが、何卒ご了承ください。

第1話 金魚が見える少女（前編）

四年前。あさが十二歳の夏の日。あの日、事件の最中に彼女が見たものは、真っ赤な金魚が水槽の中から飛び立ち、彼女と「彼」の周りを覆い尽くす光景だった。

それは酷く暑い、盆も近い真夏の昼の出来事だった。帰省中の祖母の家。古い畳の部屋は少々かび臭く部屋の中でも、むん、と熱された空気が肌に絡みつく。その家に二人きりであった少女と少年は無言で立ち尽くし、庭の鬱蒼とした竹藪は蟬の鳴き声を背景に何かを煽り立てるようにざわついていた。

その出来事は身近な遊び相手であった年上の従兄に身体を触られた、というショックと共に、あさが幼いながらに自分は「女」であるという事実を突きつけられた瞬間だった。

赤い金魚の幻影を見ながら。

・・・・・・・・

それから四年後、五月も終わりの日曜日の午後のこと――。

高校一年生になったばかりの少女 あさは、二年前に亡くなった祖母の家の縁側で、黒いセーラー服のスカートから伸びる黒いハイソックスの足をぶらつかせていた。視線はその足先をつまらなそうに眺めている。

斜め後ろにある部屋からは、先ほど行われた祖母の三回忌の法要の後、親戚たちが供養として酒の席を囲み、賑やかに話している声が聞こえてくる。酒も回ってきたのか、この家を今後どう処分するに始まり久々に集まった大人たちの話は盛り上がっているようで、子供のあさぎにはいつ終わるのか検討もつかない。

冬用のセーラー服では五月の陽気な日差しは汗ばむほどで、それ

も手伝ってあさぎは少々苛々としてきた。

——暑いなあ、つまらないなあ、早く終わんないかなあ。

あさぎはふてくされた顔をして、セミロングの黒い髪を指先に絡めながら幼い頃から遊んでいた庭を軽く睨む。

そんな彼女の目の前を、ふわりたゆたうのは、赤い金魚。

あさぎは金魚に詳しくない。だから見えている金魚の種類までは特定出来ない。ただ単に、実体を持たない小さな魚に似た赤い破片がひらひらと宙に浮いている幻覚が見えていた。

それはあの忌々しい出来事から見えるようになった幻であり、その一年前に「彼」と夏祭りで掬った小さな金魚に何処か似ていた。そしてそれは時に、柔らかにねじれる花びらや血のようにすら見えることもある。無論手を伸ばしても触れることは出来ず、ぱつと散っていくだけだ。

——今日も見えるなあ……って、そりゃそうだよね。

あさぎは庭の新緑と対比的な赤い影を見ながら、小さくため息をつく。この場所が「あの事件」の現場なのだから、今日は見えて当然だろう。

四年前のあの出来事から、見えるようになったこの「金魚」。それはある決まった条件の時に現れた。一つ目は、あの事件を思い出した時。だから現場であるこの家に来るのはいつも嫌で仕方ないが、両親に過去の出来事を知られたくない一心であさぎは大人しく今日の法事に同行した。

そしてあのことを思い出してしまう原因は、「場所」だけではなく――。

その時、あさぎの眼の前でまるで波が立つように一斉にざわりつと金魚の数が増えた。同時に宴会の続いている部屋から障子を通して聞こえてきたのは、昔よりも随分と低くなった、あの声。

「遅れてすみません。今日、模試だったんで遅くなりましたが、手

だけは合わせようと思って。母も担当の患者さんの具合が悪くなつたようで、来られずに申し訳ない、伯父さんたちに伝えて欲しいと言っていました」

あさが座っている場所からは少々距離があるため途切れ途切れにしか聞こえたが、そのような挨拶に対し、「清矢郎セイシロウもしっかりしてきたなー、さすが潔の息子だ」と酔っ払った伯父が機嫌よく笑う声が聞こえてくる。

——私にあんなことした人が、何、褒められてるのよ。

久々に聞いたその声は、こんなに落ち着いていたかと思うほど堂々としたものであった。しかし「被害者」であるあさは「彼」のそんな成長ぶりにも、親戚の好感度が高いことにも苛々してしまう。そう、この声の主である、あの事件を起こした張本人——二つ年上の従兄の清矢郎、その人と会った時にもあさは金魚が見えてしまふのであった。

今日は彼に会うかもしれない、と朝から緊張していたが、最初、彼の姿が見えなかったためほっとした。しかし生真面目な彼は、結局来てしまったらしい。

小さな胸がぎゅっと押し潰されそうになる。そうは言っても、今日は家族がいるので何かされることは決してない。第一、あの日から彼はあさに触れないどころか、話し掛けることすらせず、まるで彼女がそこにいないかのように無視しているのだから。

清矢郎もあの出来事は、子供の頃の失態として忘れたいのだろうか。ほんの少しであるが、従妹の少女の身体に触れたことなど。だから彼とは四年間言葉を交わさずに来たが、あさぎとしてはその存在を意識しているだけで疲れ、同じ空間にいると息苦しくなってしまうのであった。

その時の恐怖とそれからの苛立ちを和らげるように、四年前から赤い金魚は空中を飛び交っている。しかし約一年ぶりに会う清矢郎を、金魚たちは見たいとでも言うようにその部屋の前へとうろうろ

と飛んでいってしまうのだ。

——なんで、そっちに行くのよ。

あさぎにはそれが気に入らない。まるで自分だけが彼を意識しているようであるから。

確かに清矢郎は幼い頃から年齢の割に浮ついたところもなく、学校の成績もよく、習っていた剣道の大会でも何度か優勝していた。親戚受けがよいのも分らないでもない。このあたりの地区でトップレベルの高校に入学したことで、二年前の祖母の葬式の時も、一年前の一周忌で会った時も、皆に褒めそやされていた。あさぎは今年の受験で、その学校の合格ラインに達することが出来ず、諦めて一ランク下の進学校に入学したと言うのに。

——あんなことした人なのに。なんか、ずるい。むかつく！

たとえ僅かに触れられただけでも、血の繋がった相手に性の対象として見られたことは、まだ小学生だったあさぎには非常にショックなことだった。

しかし彼はとんでもない悪い男なのだと言いたくとも、幼い時にそんな目に遭ったことを身内に知られたくはなく、何より親戚の仲を悪くしたくないことから、彼女はひたすら沈黙を守るしかない。本当に一瞬触られただけのことであるし、忘れるしかないのだ。

だがそれではフェアではない気がしている。なかったことにしたくとも、こちらは金魚の幻覚のおかげで、余計にあの出来事を忘れられないのに——と。

そこであさぎがやるせなさに唇を噛み締めた、その時。斜め後ろの部屋の障子が開き、その反動で金魚の群れが風で煽られたようにふわりと動いた。そして縁側へと出てくる者を誘導するように、部屋からあさぎの方へと泳いでくるではないか。

——こ、来ないで！！

彼女の祈りも虚しく、障子の影から黒い詰襟姿の背の高い少年が、背筋の伸びた姿をすっと現した。そもそもあさぎが、祖母の位牌の

ある仏壇部屋の前に座っていたことがいけないのだが。

逃げる間もなくあさは縁側に座ったまま、高校三年生となった
従兄の少年、清矢郎を見上げる羽目になった。

第2話 金魚が見える少女（後編）

目が合った、と思ったのはほんの一瞬のことだった。それから清矢郎はあさぎから、ふい、と視線を逸らすとそこに誰もいないかのような表情で、彼女の方へと歩んでくる。四年前からそうしているように。

それを見て、あさぎの胸がきりりと痛む。揺さぶられる、記憶。

——今、彼は何を考えているの？

まるで酸欠にでもなったような苦しさを覚える。金魚の如く、口をぱくぱくと喘がせてしまいそうなほど。

彼女の耳には、縁側の板を軋ませる足音がやけに大きく響く。あさぎと一緒に遊んでいた頃や、あの日触れてきた中学二年生の少年の軽いものではなく、青年に近い男性の力強い重み。威風堂々という言葉もあながち遠くない落ち着いた足取りは、二つしか変わらないのに同学年の男子よりもずっと大人びたものにあさぎには感じられた。

それとちぐはぐな可愛い赤い金魚と一緒に——もちろん、それは彼には見えないが——歩く清矢郎。久しぶりに会った背の伸びた彼。悔しいくらい実体には存在感がある。

そわそわと落ち着かない。すれ違う時にふわりと届く体温と、幼い頃から知っている匂い。思い出せばあの時も、あさぎはこれがとても怖かった。

いや、今でも怖い——あさぎは身を縮める。なのに、金魚は喜ぶように舞い踊るのだ。彼女の恐怖を緩和するためか、それとも。

確かにその光景には少しだけ心も癒されたが、彼が近づけばどうしてもあの時のシーンがあさぎの頭の中に散りばめられる。しかし何故だろうか。怖いと思いつつ大人のような彼を見ていたら、不意にあの先の、もっと恐ろしいことまでされてしまうことを何故か想像してしまい、金魚の数もその動揺からぶわりと増え——。

だがもちろん此処で何かが起こるわけもなく、清矢郎はあさぎの横を黙したまま通り過ぎた。

彼女の背後の障子が開いて、閉まる。何も言わず、最初に彼女を見た後は最後まで見ることなく。その後は部屋の襖を開けて移動したのか、再び縁側に清矢郎が姿を見せることはなかった。

「なんなのよ……」

あさぎは大きなため息と共に、思わず呟いた。緊張が解けたと同じ時に金魚は一気に数を減らし、数匹の群れに戻って初夏の竹藪の方へとふわふわ泳いでいく。

相変わらずのあの態度に、あさぎは納得いかなかった。

——私はずっと、忘れられないのに。

忘れたい、出来事。なのに何よりも忘れられない出来事。

あの日のことをいたずらに掘り返されないことには安堵しているものの、反面、人にあんな思いをさせておいて、清矢郎が何事もなかったように平然と暮らしているのも許せないともあさぎは思うのであった。

複雑な感情が彼女の心にもややと群雲を作る。あさぎが顔を上げると、眩しい光の中を金魚たちはまだ踊っていた。心の中の黒い影に対して、具現化されるのは色鮮やかな赤の片鱗であるのが皮肉に感じる。

「忘れ、られないのに……」

そしてもう一度呟いた。なかったことにしたくとも金魚が見えてしまう。焦げ付くような思いは、「被害者」である自分の方にしかないのか。それが悔しくて、唇を噛み締める。

そこで懐かしい庭に視線を向けると、あさぎはふと彼と過ごした昔のことを思い出す。

幼い頃のあさぎと清矢郎は、とても仲がよかった。それこそ小学校の低学年までは互いの母親や祖母に「本当の妹みたいね」「清矢

郎のお嫁さんになるの？」と笑って言われるほど、あさぎは彼に懷いていた。そのように言われると幼いながらに氣恥ずかしいような、嬉しいような、複雑な氣持ちになったものである。

祖父はあさぎが赤ん坊の時に亡くなっており、あさぎの母方の実家にあたるこの家は兄弟仲がよく、一人で暮らす祖母の元へと盆や正月のたびに家族を連れて集まっていた。しかし他の従兄弟たちとは歳が離れており、可愛がってもらえても遊び相手にはなってもらえない。それに大概一泊しただけで県外の街へと帰ってしまう。

だから同じ県に住むあさぎや清矢郎の家族が祖母の傍に長居をし、結果、歳の近い二人が小さな頃から自然と一緒に遊ぶようになったのだった。

しかし血の繋がった家族と言っても男と女。一緒に風呂に入らなくなったことから始まり、いつしか行動を共にしなくなり、互いが小学校の高学年を迎える頃には会話もたどたどしくなってくる。きつとその頃から「何か」は始まっていたのだ。

あさぎも本当は氣付いていた。クラスの男子とも高学年になれば一緒に遊ばない。親戚でも同じだ。互いの身体が少しずつ大人のものに近づいていくにしたがって、「距離」が出来てしまうのは。

それでもそれを認めることが、酷くいやらしいことのような氣がして、あさぎはわざと清矢郎に無邪氣に、子供らしく話しかけるよう心がけていた。だから恥ずかしさもあつたが、小学五年生の夏休みにあえて清矢郎と金魚掬いに行ったのだった。

毎年行っていた近くの神社の夏祭り。幼稚園の頃は手を繋いでいたのに、その時には少し離れて歩いていた。何を話していいかも分からず、ほとんど言葉も交わさない。

それでもあさぎは認めたくなかった。まだ子供だということを強調するかのようによけにはしゃいで祭りを楽しんでいるふりをし、彼と掬った二匹の赤い金魚を持って帰る。するとそれを見た二人の祖母は、「せいちゃんとあさちゃんみたいに、仲良しだねえ」と言

って皺だらけの顔の中の目を更に細めて笑った。

あさぎはその言葉に、何故かむっとした。祖母の笑顔が「お嫁さんになればいい」と言った時と同じ目をしていたように見えたから――それは、男と女の意味での「仲良し」だ。思春期と反抗期に差し掛かったあさぎは、優しい祖母の言葉にすら嫌悪感を抱いたのであった。

あの事件が起こったのは、それから丁度一年後のことだった。

このことから、あさぎは気付いていた。どうして見えるものが「金魚」なのか。それは彼と掬ったこの金魚が、あさぎにとって「子供」時代の名残だったからだろう。現に次の年……あの事件の直前の六年生の夏休みに生理が来て、自分はもう子供ではないんだ、と言いやうのない喪失感に見舞われたものだった。

――起きてしまったことは、仕方ない。過去はもう、変わらない。楽しかったはずの思い出もたくさんある誰もいない縁側で、未だに続く親戚の騒ぎ声を聞きながらあさぎは諦めたように金魚を眺めていた。これだけ長年見ていると最早愛着すら沸いてくる。

――いつかはこの嫌な記憶も、やるせない想いも消えてくれるだろうか。

もっとも犯されたわけでもない。ほんの少し胸と下腹部を撫でるように触られた程度である。犬に噛まれたものだと思えばいいのか……。

彼女がぼんやりと視界に入れている紅葉や柿の木などは、亡くなった祖父母が植えたものが手入れもされずに葉を揺らしている。地面にはあさぎの父が昨日刈り取ったらしい雑草がなぎ倒されたままになっている。

その向こうに竹藪があった。手入れされていないそれこそ、相変わず鬱蒼としていた。

あの日それが風にざわついていた記憶と、清矢郎が剣道を嗜んでいるからか、あさぎとしては複雑な感情を抱いているにも関わらず、

何故か彼には若竹のような清廉なイメージがある。赤い幻影はその緑の影に、苛立つほど綺麗に映えて見えた。

第3話 赤い金魚は何故泳ぐ？

あさが久しぶりに清矢郎に会ってから十日ばかりが過ぎた、六月の中旬。彼女が着ているセーラー服も涼しげな白い夏服に衣替えされた。駅へと続く線路沿いを、通っている高校から一人で歩く、夕暮れ時。入学してすぐに同じクラスの宮坂 夕映^{ユヱ}という少女と仲良くなったが、いつも一緒に帰る彼女はアルバイトの面接だと言って先に帰ってしまったのだ。

あさが五月で十六歳になっているものの、両親からは厳しく「学生の本分は勉強だ」と言われ、また「女の子が犯罪にでも巻き込まれたら」と過保護なほど心配もされ、興味はありながらそうした大人社会への切符は渡されていない。だが両親が健在で仕事もあるからこそ学業に専念出来るありがたさを、彼女も高校生になり少しは理解していた。

そうは言っても社会に出たいという憧れや好奇心、自己実現の欲求もある。残念ながら部活動では芽が出ることなく、中学時代に補欠で終わったバレーボールは辞めてしまった。それでも流石に何もしないのは、と読書がそれなりに好きだったあさは本の趣味が合った夕映と文芸部に入ったが、まだ文章を書いたことはない。

何も部活でなくともよい。たとえば特に成績がよくなくとも、目立って人気がある同級生もいる。たった一人でもいい恋人を作って、「誰かに必要とされている」という自信を持って笑っているのもいい。そんな「認められ方」でもよかった。

だがあさは昔はお転婆であったが、清矢郎のことや中学生時代の経験から男子が苦手となって話す機会自体少ない。よって告白をした経験もなければ、された経験もないのである。

——本当に、誰からも必要とされる場所がない。あさぎには、自分があまりにつまらない人間のような気がしていた。それでもある

べきルールから外れることで無理矢理「大人」になろうとも思わないので、人のことを指を咥えてうらやましそうに見ていることしか出来ない。

本心では誰かに自分を認めて欲しい、自分に自信を持ちたい、自分は何も出来ない、だけど自分では何もしない——後ろ向きな考え方のあさぎにとって、社交的で行動力のある友人の夕映はとても輝いて見えた。しかし夕映だけでなく、あさぎと同じように地味な中学時代の友人相手でも同様にうらやんでしまう時がある。形のある成果を収めたり恋人などいなくとも、何かに胸を張っているならば、その姿に。

結局、あらゆる他人と自分を比べて拗ねている、精神的な幼さが今のあさぎの心を頑ななものにしていた。

そしてその結果、あの出来事を思い出す以外にも、こんなものか——欲求不満な気分の時も、金魚は姿を見せていた。更に金魚が現れるのは、あさぎの精神状態だけでなく、身体の変化にも密接に関係しているようだ。

——あ。また、ちらちらと見えてる……。

駅の上に広がる灰色の梅雨空に、赤い金魚が浮かんでいる。苛々していたあさぎはそれを振り払うように傘を持ち上げると、軽く振った。しかし傍から見れば変な人に思われることに気付き、傘を下ろすと慌てて辺りを見回す。

今、彼女が金魚を見ているのは清矢郎のことを思い出したからではない。そう、それは金魚が見える時の一番の条件——あの経験之境に、金魚が現れるようになったことを証明しているものだろう。

あさぎも他人には見えないこの幻覚が怖くなって、何故見えるのかその原因を考えたことがある。最初は子供だったので、不思議で面白いな、と思っていたほどであったが、成長するに伴い自分の精神に異常があるのではと不安になってきた。

だが時が過ぎても健康上何事もなく、視界が遮られて危険な目に

遭ったり、勉強に集中出来ず成績が落ちるということもなかったため（逆に他のことに集中すると金魚は見えなくなる）、特に何の害もないならば、とあさぎはそのことを誰にも話さないでおこうと思った。

第一誰かに話すということは、そのきっかけとなった清矢郎との出来事まで話すことになるかもしれない。最初、母親に幻覚が見えることを相談しようと思ったが、心配性の家族があさぎの言動にどんな反応をするか考えると恐くなった。あのことまで知られれば、清矢郎はどうなってしまうのか――それを想像すると、親戚の仲を険悪なものにしたくないあさぎは口を閉ざすしかなかった。

何よりも、「男にそんなことをされて、そんなものが見えるようになった可哀想な子」として家族に見られたくない、心配をかけて煩わせたくないというのが一番大きい。だから彼女は何故私だけが、と清矢郎を恨み苛々しつつも、この現象を仕方なく受け入れ、自分だけが見える「特別」な美しい光景を楽しんでしまうことにした。

そんなある日、あさぎは何も考えていないのに金魚が浮いているということに気が付いた。ふとその理由に思い当たる。――今、現在もそうだ、帰り道を歩いている彼女が感じる、鼻をつく、つんとした匂い。それは生理のひどい二日目などに身体に訪れる特徴であった。

あさぎのそれは決して「軽い」と分類される方ではない。濃くどろりとした赤い老廃物に毎回うんざりとし、腰や腹の痛みに耐える。まだ子供を産める状況でもないのに、無駄に流れる雌の証を汚らしいものに感じていた。そんな日にも、金魚は見えるのだった。緋色の血や匂いそのものが幻影となったように。その汚れたものを、少しでも美しく見せようとするように。

そして生理の時だけではなかった。中学生に入学した頃から夜、一人になった時など、わけもなく身体が疼くことがあった。内側から沸き起こる、制御出来ない衝動。――誰かに傍に、居て欲しい。

誰かに必要だよと囁かれない。誰かに愛されたい——触れて欲しい。そんなおかしい気分の夜にも金魚は闇の中に、誘うように妖しく浮かぶ。

決定的だったのが、あさが友人から借りた性描写のある漫画を読んだ時だ。それを見て妙に心をざわつかせ、身体の一部に異様な変化が現れた時に、金魚がいつもよりも数を増やして乱舞する姿が見えたのであった。

そこで彼女はひらめく。その当時の拙い言葉で表せばこうだ。——いやらしいことを考えた時に金魚が見えるんだ、と。

言い換えれば、動物に生まれたあさぎの身体が無意識のうちでも性的欲求を抱いた時に、金魚は現れるのだろう。だから生理前や生理の日には、その幻覚が見えるのだ。

あの時、生まれて初めて「女」と見られた時に見えたあの金魚。そのように男の欲望の対象とされ、自分の性を十二歳の幼さで強引に自覚させられた。だが同じように、女である己の身体にも本能的にそういった欲求があることをこうして知った。

あさぎの方でなかったことにしたいと言うくせに、夜、ベッドの上で彼女の心や身体がざわめけば、金魚たちが現れる。すると必然的にあの日の出来事も鮮やかに蘇り、それをこの欲求を満たすために胸の中で幾度も反芻してしまうのだ。それはあの忌まわしい出来事が、唯一男性に女性として「求められた」と、劣等感の塊のあさが歪んだ優越感を持てることであったから。

「私だって、大人の女だもん」と誰にアピールするでもなく、自分に対して言い聞かせてアイデンティティを保つ。忘れた方がいいそ忘れられないならば、と開き直り、甘美な疼きへと変換してあさぎはこの四年間それをずっと味わっていたのだ。いけないと思いつつも、あの日の続きをしたらどうなるだろうか——とすら考えてしまったことすらある。

そんな汚れた自分に、あさぎはぞっとした。「被害者」のはずなのに何を考えているのか。誰にも言えない愚かで浅ましい己の性^{さが}に情けなくなる。

灰色の空からは、黒い雲が隙間を開けオレンジ色の光が僅かに差し込んできた。明日は晴れかもしれないが、あさぎの口からは今日もため息しか出なかった。

第4話　こんなの、まるで……みたいじゃないか

一人きりの帰り道、生理中の条件も手伝ってふわふわ浮かぶ金魚を見ていたあさぎ。同時に久々に清矢郎と会った十日前の法事のことまで思い出してしまい、益々心の中で風が吹き荒ぶ。

『そっかあ、あさちゃんは東高かあ』

あの食事の席で言われた、どことなくがっかりしたような一人の伯父の言葉。その伯父は特に何の悪気もなくそう言ったのだろう。だが、今の捻くれた心境のあさぎはそうのようにしか聞こなかった。その後、清矢郎の大学受験の話になり、

『あいつは北高だから、大学なんてどこでも選べるだろう』

と伯父や伯母にあさぎの母親までも混じって、全国的にも有名な国立大学の名前を挙げては勝手な想像をして笑っていた。

どのみち酔っ払いの戯言なのだが、得てして大人は子供の未来について勝手な予想をしてくれる。子供の頃から、あさぎはそれが気に入らなかった。何故なら凡庸なあさぎは期待されることもなければ、逆に時折勝手に期待されてはそのとおりにならず、「ダメだったのか」という顔で見られている——ような気がするからだ。そのうえ比較される相手が清矢郎であったため、尚更悔しさが増す。

「北高」と「東高」。あさぎと清矢郎は同じ県に住んでおり、住んでいる市は離れているが大きく分ければ同じ地区に属する。その二校は、地区内でもトップレベルの進学校だが、合格している大学の偏差値や地元での知名度には幾分隔たりがある。地区で一番と言われているのが「北」の方。つまりあさぎはそちらに行く学力がなく、一ランク下の「東」を受験したというわけである。

そうは言っても北高に入学していれば清矢郎と同じ学校になってしまうのだが、学年も違い大きな高校であること、何よりも「北」ブランドへの憧れが強かったことから、あさぎは彼への苦手意識以

上に入学への憧れを抱いていた。しかし結局このような結果となり、褒められている清矢郎、がっかりされている自分、という図をこうして目の前に突きつけられてしまうのであった。

子供の頃から清矢郎は学校の成績にしろ、習っていた剣道の大会の成績にしろ、親戚からは褒められてばかりであった――彼の父親はそれでもそれ以上を求める厳しい人であったが。あさぎの母親も男の子供が居ないからか清矢郎をとても最良にしており、「せいちゃんを見習いなさい」とあさぎに言い続けてきた。

昔も今も、何故自分にあんなことをした清矢郎だけが褒められているのか、あさぎには許せなくて仕方がない。「被害者」だからというだけでなく年の近い従兄へのライバル心も加わって、あさぎの清矢郎への醜い感情は水風船のように膨れ上がっていく。

高校受験の失敗もあさぎの自信のなさに拍車をかけ、第一志望の高校に合格した友人など、身近な他人と自分を比べてはいじけた気持ちになっている。こんな気持ちの時は、可愛らしい金魚も腹立たしく見えてくる。

――ばっかみたい。

こんな幻覚が見えていても何にもならない。確かに他の人には見えないものだが、だからと言ってあさぎが人より優れている証明になったり、メリットになることも見つからない。ただ清矢郎に心を壊された、その名残なだけなのだ。

あさぎはふわふわと宙を飛ぶ金魚から眼を逸らして俯く。黒いローファアの爪先が見えた。傘の先端を蹴り飛ばす。こつりと音がしたけれどまた足りず、そのまま傘で小さな水たまりの水をばしやりと払う。こんな小さな抵抗をしたところで心が晴れることはない。知りながら空を見上げれば、灰色の雲が重く押し掛かり、金魚が未だに数匹浮遊している。

「せいしろうの……ばっかやろう……」

思わず何年かぶりに彼の名前を呟いた。妙に心が高揚した。だか

ら慎重に、小さな声で呼んだのだ。誰も聞いていないのに、何故かとても勇気が必要なのが不思議だった。

あさぎはやけにドキドキとする胸を、セーラー服のリボンの前できゅっと押さえた。

そんなことを考えながら歩いていたあさぎだが、やがて通学に使っている駅へと辿り着いた。

進学校以外にもいくつかの高校が建っている、人口二十万人ほどの都市の駅。観光地というほどではないがそれなりに企業もあり政令指定都市が近くにあるため、利用する人々は少なくない。

——結局、せい……しろーは、どここの大学、行くんだろう……。

彼のことをまた思い出してしまったのは、改札口で北高の制服を着ている生徒を眼にしたからだろう。入学して二ヶ月間、友人を作り高校生活や授業に慣れるため必死だったが、最近はこうして周囲に目を向ける余裕も出てきたようだ。

あさぎは中学生時代の思い出によくないことがあったことから、やや遠くの駅から通学している。あさぎの住んでいる市にも、東高レベルの高校はあったのだが、あえて同じ中学出身の生徒が少ない学校を選んだ。もちろんそれだけでなく少しでも都会の学校に行きたいという願望や、もうひとつの候補が元工業高校だったからなどの理由もある。

いずれにせよ、電車に乗るだけでも二十分以上は要する。駅から家や学校までの徒歩分を足すと、片道一時間を超える通学時間。更に門限まで早めに決められている以上、やはりアルバイトや忙しい運動部に参加することはためらわれる。

だがそれもこれも、全て「自分」で選んだ結果なのだ。だからこそあさぎは苛立ちを抱えたまま、知らない人ばかりが行き交う改札を通り、最も遠くの番線を目指して一番線ホームの端にある階段へと歩く。——と、そこへ梅雨のむっとした空気を縫って、後ろから金魚の集団がざわざわと飛んできたではないか。

そこであさぎは、ぴんときた。――まさか!?　と思い振り向く。彼女が今歩いているのは一番線のホーム。改札前にあり、大都市に向かう電車が何本も到着するため人の行き来が多く、男性に女性、若い人から年寄りまで大勢の人々が歩いている。その人、人の波の中、あさぎに向けて目印のように赤い金魚の群れが整列しているではないか。

――ああ。

金魚の示す先にいたのは、白いシャツを着た北高の男子生徒の集団が話しながら歩いてくる様。その中にいたのは、他の少年よりも少し背の高い、がっしりとした体格と対照的にフレームの細い眼鏡を掛けたあまり笑わない少年。

あさぎは呆然と立ち尽くしていた。

確かに、こういった偶然もあるのだろう。やはり同じ高校でなくてよかったのかもしれない。「家」ではない「外」での「男の子」としての清矢郎を見て、こんなにも簡単に心が乱されてしまうなら、しかしこのタイミングでは金魚が彼のことを引き寄せたのだろうか、とすら思ってしまう。

人の流れの中で棒のように突っ立っている彼女に、通り過ぎる人々の傘や鞆が時折ぶつかる。それでもあさぎは動けなかった。金魚の列もふよふよと背びれや尾びれを動かしながら、同じ位置に静止していた。

彼――清矢郎が友人と共にあさぎが立っている方へと近づいてくる。清矢郎が顔を上げてちら、とこちらを見たような気がした……が、彼らはあさぎよりも十メートルほど手前で立ち止まると、そこがいつもの定位置なのか電車を待つことにしたようだった。

清矢郎は二度とこちらを振り向かなかった。友人らしい少年たちとそのまま話をしている。

がっかりしたように金魚が一匹ずつ減っていく。彼とのつながりは一方的な幻影でしかないと、あさぎの心に哀しい強調だけをして。

——ばっかみたい。

もう一度心の中で繰り返す。何やら泣きたいほどに悔しく、あさは清矢郎の姿に背を向けた。その後ろから、残った金魚たちが慰めるようについてきた。

第5話 電車の君

しかし運命が廻り出す時というのは、望むと望まずに関わらず放っておいてはくれないらしい。

子供と大人の境界を踏んでしまった出来事。二人が生まれた時から訪れていた祖母の家。可愛がってくれていた祖母が亡くなり、二年。因縁を抱えたまま身体だけは大人になろうとしているあさぎと清矢郎。――先日のある家での再会から、何かが動き出していた。

四年経ちあさぎが改めて自覚した、あの出来事が忘れられないという事実。金魚の存在が、嫌と言うほどそれを証明している。不毛に苛々としている日々が苦しく、悔しくて、元々負けず嫌いの彼女はそんな過去から決別したいと思い始めていた。

トラウマへの決着は、いつかつけなくては自分を変えられない。これは赤ん坊の時に出会った瞬間から、二人に科せられた運命だったのかもしれない――。

大人の姿になった清矢郎と久々に目を合わせたあの瞬間、言葉はなくともあさぎの中で何かが確実に動き出し、ゆっくりと歯車が回り始めていた。

でなければ、こんな「偶然」が頻繁に起こる理由が、説明出来ない。

あさぎは通学に使う駅構内の一番線ホームを歩きながら、呆然としていた。歩く速度をやや緩め、視線は一点を見つめている。

そこにはまた北高の生徒の集団がいた。男子生徒だけでなく、女子生徒もいることがブレザーの制服で分かる。当然、あさぎの通う東高や別の高校の生徒も居る。

その光景を何故彼女が凝視しているかと言えば、やはり他の生徒よりも少しだけ背の高い眼鏡の少年、彼女の従兄、昔は「せいちゃ

ん」と読んでいた男——つまりは清矢郎が今日もそこに立っているからであった。

清矢郎と一緒に居るのはもちろん、彼と同じ学年の三年生だろう。あさが意識し過ぎなだけかもしれないが、三年生ともなると男子も女子も随分大人びた雰囲気に見える。二歳の歳の差はないようにでしっかりとあり、中学を卒業してまだ三ヶ月のあさぎには男子生徒は少々おじさん臭く見え、女子生徒からは匂い立つような女の色気を感じる。

そんな青年と少年の境の清矢郎をあさぎの視線が見つけるのが先か、金魚が映るのが先か。今も電車のホームを金魚たちは飛び交い、実体などないのに電車がホームに入ってくれば、ごう、という埃臭い熱風で吹き飛ばされ、健気にまた戻ってくる。

あさぎの視界の中でそのような生きた反応を見せる金魚は、最早ペットか何かのように愛着を持って見えてしまう。しかし彼女の方がそれほど強く彼のことを考えているというのに、今この瞬間、清矢郎があさぎを見ることはないのだ。

腹が立って眼を逸らす。ふと視線を感じた気がして再び彼を見るが、やはり清矢郎はこちらを見ておらず友達と話しながら電車へと乗ってしまった。

「やっぱ、北高の方が行く人多いよね」

「え？ 何が？」

今日は隣を友人の夕映が歩いていた。自分の世界に浸っていたあさは、はっと我に返り、清矢郎ばかり見ていたことを知られてしまったかと心の中で焦る。

「予備校。それでこっち方面行く三年生が、この時間多いんですよ。春の大会で部活引退した人もいるし」

夕映にはあさが、一番線の電車に乗る生徒の数の多さだけを疑問に思っているように見えただろうか。そういうことにおきたい、と従兄との秘密を誰にも言いたくないあさはそう思い、「ふーん」と生返事をしておいた。

——ならばこの偶然もそういうことだろう。あさぎはそう結論付けた。あれだけ小中学校と剣道を頑張っていた清矢郎だ。高校生でもきつと部活に入っただろうし、そうなれば帰りは夜になっていたはずだ。受験のため部活を引退し予備校に通い始めた、だからあさぎのような帰宅部同然の生徒と同じ電車になるのだろう、と少しばかり納得がいった。

だが眼の前をしぶとく金魚が飛んでいるのを見れば、この魚たち——言わばあさぎの彼への想いが、清矢郎を呼び寄せているのではないかと、つい考えてはぞっとする。

こうして会う機会が増えたことで彼のことを以前よりも考えてしまい、そのことが余計に会う確率を増やしているような気がするのだ。

昔、「怖い話をしていると本当に幽霊が出る」という話をあさぎは聞いたことがある。中学生の時に怪談話で盛り上がっていたところ、『この年齢の子って、本当にそういうのを見ちゃうんだよね。いるかもしれないって思う、心が幻覚を見せているのかもしれないね』と若い教師に言われたのだ。

そう思うと思春期の子供が幽霊を呼び寄せてしまうように、あさぎが金魚の幻覚を見るように、強い思念が超常現象を起こすこともあるだろうか。

あさぎはそこで、ぶるりと身震いした。あの過去が、自分にそこまでの思い込みを抱かせていることが恐ろしくなってきたのだ。しかしそれ以上考えないようにしようと、彼女は夕映と何か他愛無い話題をするべく口を開いた。しかし夕映はピンク色の携帯電話を閉じながら、耳に痛いことを指摘してきたのだった。

「てゆうかさあ、最近、よく一番線にいる上級生の方、気にしてない？ 誰かかっこいい人でもいるの？」

手を下ろすと同時に揺れる、重そうなストラップ。にやりと笑う表情。染めた長い髪が、次にホームに入ってきた特急電車の風に煽

られ、短いスカートがきわどい所まで捲れあがる。さすが中学時代から何人かの男子と付き合ったことがある、と豪語するだけある、とあさぎは驚く以上に感服してしまった。

先日ホームで清矢郎を見かけた時から、あさぎはいつも挙動不審にきよろきよろとしてしまい、彼を見つければ動揺していた。それは誰かと一緒の時は態度に出さないよう隠していたが、どうやら夕映は気付いていたらしい。

「そ、そんなことないよっ」

ばればれの返事だな、と思いながら、あさぎはホームの階段を急いで上がり首を振る。セミロングの黒髪で顔を隠そうと俯きながら。「ふーん。面白そうな話なのになあ。いいや、また話したくなったら、話してね」

このあたりが、あさぎが少々大人びた夕映の傍を居心地よく思う理由である。深入りしすぎず、冷たく突き放したような言い方でもない。いつでも相談に乗ってくれる気遣いは残した言い方に、あさぎはやっぱり夕映はすごいなあと思いつつ、こくんと頷いた。対する自分は、もやもやとした汚い気持が消化出来ずにいることを恥ずかしく思いながら。

その後、二人で電車を待ち期末テストの話などをして、やってきた七番線の電車に乗る。夕映は一区間のみを乗ると、高校と同じ市内にある駅で降りていった。一人きりの世界に戻ったあさぎは、まだ夕暮れのオレンジ色に包まれている見慣れた川や畑を目にしながら、既に癖になってしまっているため息をついた。金魚はまだ一匹、あさぎの顔と窓の間に残っていた。

『最近、よく一番線にいる上級生の方、気にしてない？ 誰かかっこいい人でもいるの？』

——その言い方だと、まるで電車でしか会えない先輩に憧れているみたいじゃないか——。

しかもこちらばかりが胸を焦がし、向こうはこちらを見てくれな

いという、切ない片想いの如く。

そんな少女漫画のような仮定をした瞬間、何故か金魚が二匹三匹と増え出し、あさはきは慌てて頭を振ってその像を消した。

——なんで、そうなるのよ！ 悪いことしたのは、向こうなのに！
悔しい。悔しい——。あさはきは唇を噛んだ。

自分にとってこれだけの引っかけ傷を残した出来事を、相手になかつたことにされていることが悔しい。それなのに、まるで恋愛感情のような態度で相手を気にしてしまっていることが、更に悔しい。確かに容姿はあの集団の中でも悪くはない……かもしれない、と認めたくないがあさはきは思う。だから余計に嫌悪感よりも、気になる方が先に立ってしまうのだろうか。

夕映は今頃、どうしているのか。先ほどメールをやり取りしていたアルバイト先の彼氏と電話でもしているのか。それをうらやましく思うにつれ、逢魔ヶ時の美しい色合いの中、あさはきは一人ぼっちで虚しい想いを持て余していることが、やけに寂しく感じられた。

第6話　して、みたい

人に言えない過去があるものの、あさぎも人並みの生活を送りたい。悩みやすい性格でも、悩んでばかりいては楽しくない。そう考えたあさぎはこの金魚は一生見え続けるのか、大人になり清矢郎以外の人を好きになった時にどうなるのか、などと未来の不安はあまり考えないようにしていた。

夏休み直前のテストも終わった七月初旬。あさぎは部活に行くため、別棟にある国語科準備室へと向かった。二階が図書館になっており、その隣に国語科の職員室と準備室があるのだ。

先述のとおり、あさぎは文芸部に所属する。夕映に誘われて入部したものだ。本を読むのは嫌いではなかったことと、夕映と本の趣味が合ったことによる。

正直なところ、この部活にはいわゆる「オタク」集団というイメージがあったあさぎだが、意外にも二年生の部長を筆頭に少し大人びた雰囲気、そして明るい少女たちが多かった。大人びた——というのは服装や素行などの表面的なことではなく、どんな物事に対しても大勢の意見に流されず自分をしっかり持っている、という意味だ。言い換えれば個性が強いとも言える。皆、「自己表現をしたい」という意欲に溢れているのだろう。

そういった芯の強い女子ばかりでなく、あさぎ以上に地味で口数の少ない女子や多少は男子もいる。ただ強い女子に押されて、そういった生徒たちはあまり顔を出さないか、来ても黙っていることが多かった。

あさぎにとっては彼女たちとの会話は発見があったり、楽しめる部分もあったので、定例会の水曜日以外にも週に何度か顔を出している。原稿を提出して、それを印刷し冊子にするのは月一回。それ以外に皆でする活動は実は何もない——学校要覧に掲載されるような表向きの活動内容としては、書いた文章を互いに読み合い助言し

合ったり、既存の作家の作品の検討などが挙げられているが、結局はただ雑談をしている帰宅部同然のものだ。しかし通学に時間をとられている彼女には、その程度の息抜きと交流が丁度よかった。

ちなみにあさがこのように小さな、女子だけのコミュニティの方を居心地よく思う理由には、前述のとおり男子が苦手だという背景もある。昔は元気な少女であったが清矢郎との一件や、中学の時に失言をして仲のよかった男子に突然怒鳴られたことなどから、同世代の異性は何を考えているのか分からず恐くなり、次第に何を話してよいか分からなくなったのであった。

「失礼しまーす」

準備室へと行くには、隣接する国語科の職員室を関所のように通る。席に座っていた文芸部顧問の三十路男性教諭、荒芝に声を掛けただあさはそのまま隣の部屋へと行こうとした。が、無精髭を生やした教師の手元に、ふと眼を留める。

「先生、そんなの読んでいいんですかー？」

彼が開いているのは競馬新聞。珍しく軽口を叩いたあさがだが、不思議なものでこうした年上の男性とは話がしやすい。第一、教師の場合はそういう「仕事」なので子供たちにはサービスよく接してくれるからだ。

それに荒芝は何処かけだるそうに授業をするが、どの生徒にも分け隔てなく気軽に声を掛けてくるので、あさぎのような引っ込み思案でも話し掛けやすいのだろう。

「んー、じゃあ内緒にしといてよ」

彼は新聞をがさりと捲り、耳に赤いペンを挟むと口の端に笑みを浮かべた。

「えー、どうしようかなー」

とあさぎも意地悪なことを言いながら、笑って部室へと入っていった。

本当はあさがとて男性だからといちいち避けて通りたくはなく、

出来れば普通に誰とでも話をしたいと思っている。しかし同世代の異性と親しくなるにあたって、とりあえず恋愛または性的な対象と見なすか否か、という「選別」を第一印象でされているような気がしてしまい、そう見られることも見られないことも嫌で、どうしてよいか分からなくなるのだ。それも自信がないうえに考え込みやすい彼女が、捻くれて見ているだけなのだが。

それはさておき、荒芝とならば話していても金魚は見えない。「性」の対象としての感情は、お互い抱いていないからだろう。そう思うと、男と女とは何なのか。どうしてこんなに意識しなくてはいけないのだろう。意識しすぎて自分を上手く出せないあさはきは、やはり悩んでしまう。

しかし部室に入ると、いつもどおり女性の先輩や同学年の女子が話をしていたので彼女はその輪に加わることにした。

今日も他愛の無いファッションの話や芸能ニュース、読んだ本や漫画の話、学校の噂話で盛り上がっていたが、ここでの話題も次第にどろどろしたもののへと移ってしまった。

「そういえばさ、中学一緒だったから噂聞いたんだけどさ、花梨先輩」

その話題の卒業生のことは知らないものの、周りに合わせてあさはきは耳を傾ける。

「なんかね……、大学入学してすぐ妊娠しちゃったんだって。彼氏できたのかな？　結婚するかは分からないけど、産むつもりだって聞いたよ」

「えー！！　ウソだあ」

「だってだって、言っちゃ悪いけどすごい大人しい、つうか暗い人だったのに……アニメの話なら盛り上がれるみたいな感じの」

「でも大学だし、いろんな人いるじゃん。同じようなタイプがいたか、慣れてないから適当に遊ばれたとかじゃないの？」

自分に関係のない話だからこそ盛り上がる。十代の少女たちは矢

突き早に想像で言いたい放題。話によれば噂の少女は、とにかく大人しく友達も少ない少女で、男性とそういう関係になるのは皆、想像がつかないことだと言う。

しかしあさはその少女に会ったことはないが、彼女の気持ちが少しだけ分かるような気がした。——もし、彼女が上手く人と関われないだけで人並みに性欲があれば、その「女」になる登竜門のよいうな行為に興味を抱いたのではないか。快樂の持つ魅力だけでなく、大人しい自分でも優れた者になった、世間に認められたような気がする憧れにまかせて。

誰かに「選ばれ」なければ、そこには至れない。そんな形でもいいから、誰かに認められたい、誰かと密に接したい。誰でもいいとは言わないが、あさはにも近い気持ちはあった。だからこそ、おそらく男性慣れしていないのも手伝って、噂の少女はその「毒」に手を伸ばしたのではないだろうか。

あくまでこれはあさぎの中の推測で、既にこの世に宿っている生命のことを思えば、どうか相手と愛し合ったうえでの行為であって欲しいと、知らない人のことであっても彼女は祈りたくなるのだが。

「でもあたしも気をつけなきゃな」

そこで大学生と付き合っていると言う二年生——部長の中村 琴音は思わず呟くと、しまった、というようにわざとらしく口を塞いだ。

彼女はそれこそ綺麗な外見だけでなく、セーラー服も自分らしく着崩すなど人一倍個性が強く、他人と違う空気を持っている。書いている小説もさすが部長と言うだけあり、あさはには売っているものと同等な文芸作品に見えている。内容も女性心理や性的なものを主題にしていることが多く、校内には文芸部以外にもファンがいると言う話だ。その手合いのエッセイまで手がけているため、オープンな彼女のことで、既に「経験済み」ということに誰も疑いは持たない。

「そうね。気をつけなさい」

琴音と親しい二年生が、眼鏡を上げながらため息混じりに琴音の肩を叩く。あさがちらりと隣の夕映を見れば、彼女も神妙な顔をしていた。口には出さないが、他校生で先輩の彼氏との関係を考えているのだろうか。

――夕映も経験、あるのかな。

そんなプライベートなことは聞いてはいけないと思っているあさがだが、身に纏う空気や、彼氏と過ごしている時間の長さから、高校生になったのだしきつと「そう」だろうと想像していた。

――いいなあ。

その時あさはふと、そんなことを思ってしまった。

性行為をしていることをうらやましいと思う――その瞬間に金魚が飛び立つのは自明のことだった。赤い影はいやらしいあさを囁し立て、小さな胸は急かされるように高鳴ってくる。

そういうことをしている少女たち。そういうことをしている自分。そんな淫靡な光景を想像しては、顔や体を熱くしてしまう。

しかし実際は虚しい妄想だけで、相手は居ない。

あさがそれらを手にしている「女」の彼女たちに感じるのは、劣等感。

噂の先輩のように、地味な女性でも経験しているというのに。経験が早ければ優れているわけでもないのだが、アルバイトの件といい、どうしてこうも「大人」の真似をしている彼女たちをうらやましく思うのだろうか。

――でも、私だって、……少しなら、経験、あるもん。

ぺちやくちゃとお喋りをする少女たちの間を泳ぐ金魚を見ながら、あさはスカートをいじり、こっそりと唇を尖らせた。自分だって、「女」と見られたことがある、男に身体を触られたことくらいあるんだ、と自慢出来ることではないのに自己主張する。

そこであさぎは、はっと気付く。あの忌々しい一件を、醜い優越感や同属意識を感じたいがためだけに思い出そうとしている汚らしい自分に、自己嫌悪を感じて顔を顰めた。

そしてあのままその続きをしていたら、小学生でそれを経験していたことになるのか、その時に自分も妊娠でもしていたら――と有り得なかった過去だが、恐ろしさに身を震わせる。だがそれを想像したことは、一度や二度ではなかったのだ。たとえば……。

そこまで考えた時、どうしたことか窓の外へと金魚が泳いでいった。あさぎが視線をそちらに向けると同時に、開け放たれた窓の下から複数の人の話し声が聞こえてきた。

「あれ？ 平日に練習試合？ 珍しい。日が長いからかな」

こういう話題が苦手なのはあさぎだけではないようだ。別の二年生があさぎの視線に気付き立ち上がると、話を変えるように窓の方へと歩いていく。

「へー、どこー？」

運動部と兼部している女子もいる。別の女子生徒も興味を示すと、窓から外を見下ろした少女は答えた。

「やっぱ、北高だ。近いし、レベル的にも似てるもんね。柔剣道場であの荷物だから……剣道部かな？」

その言葉に、金魚がぴちゃんと跳ねた。あさぎの心も驚きに爆ぜる。

しかし「彼」は三年生だ。引退している可能性もある。それでもこの金魚のはしゃぎようからも、そして乙女の直感からも、彼――清矢郎は居るのではないかという確信と心踊る期待が、あさぎの胸に宿る。

そしてもしも本当に彼が居るならば、見に行ってみたい……かな、などと性に関する話題から清矢郎を思い出していたからか、彼女は自然とってしまったのだった。

第7話 百鍊自得の男の過ち

親戚付き合いの場でしか清矢郎を見たことがないから、このように一人の少年としての「彼」が気になるのだろうか。友達と電車で話している姿を見た次には、部活で剣道をしている清矢郎を見たい、とあさぎは思ったのだった。

あの日からあさぎが悶々と生活していたように、清矢郎も清矢郎の生活を送っていた。自分を傷つけておいて彼がどのように生きてきたのか、家族からはいい噂話しか聞かないが本当にそうなのか、それを確かめるチャンスと感じられた。

「やっぱ北とは交流多いんですね」

「合コンとかもやる子はやってるよ」

「っってお酒出るの？」

「かっこいい人いないかなー」

夕映やその他の女子部員たちは、窓の外を見たり机に身体を投げ出したりしながら早速新しい話題に飛びついた。やっぱり変な部活だなあ、とあさぎはこっそりと胸の内と思う。この他人への興味が、創作の糧になっているのかもしれないが。

そんな女子生徒たち——いわば噂好きの「女性」の楽しそうな空気から、息継ぎをするようにあさぎはそっと席を立つが、それは「もうひとつの目的」に対する言い訳かもしれない。

あさぎは、こちらを見た夕映にはトイレだ、とでも言うように目配せするとこっそり教室を出た。隣の職員室に荒芝の姿はなかった。今のおかしな気持ちを誰にも悟られなくなかったあさぎは、ほっとしながら図書館のある別棟を出る。

途中、緊張から一階で本当に用を足した後、手を洗いながら鏡を見る。今から清矢郎をわざわざ見に行こうとしている自分が映っている。恥ずかしくて見ていられなくなり、あさぎは眼を逸らした。

この四年間、ずっと性のことで悩んできた。これから先もこんな気持ちでいるのかと思うと、とても憂鬱になる。このもやもやを解決したいならば、危険な茨でも飛び込んでいかねばならないのではないか。

金魚はそんな決意を抱き始めたあさぎを誘導するように、柔剣道場のある方向へと泳いでいく。第一、この金魚もいつまで見えるのか。その答えも出ないまま、自分の心を投影する赤い幻に従ってあさぎは上履きの足を一步一步踏み締める。

柔剣道場には休憩中の他の運動部や、下校途中の生徒の姿もちらほらとあったため、彼女が一人でうろついてもさほど目立ちはしなかった。緊張しながら、中を覗ける場所を探す。クラスでも目立たないあさぎは、知り合いも少ない。よって誰にも声を掛けられないのは幸いであったが、皆がこちらを見ているような気がして落ち着かない。

落ち着かないのは後ろめたさがあるからだ、本当はあさぎ自身自覚している。

——い、従兄が、来てるんだもん。気になって、当然だよ。

その従兄との因縁を思えば、顔も見たくないという心理になるべきではないか。だが相手が完全に無視してくるのに、こちらはあの事件が忘れられないことを悔しく思い、だからそれを根本から解決したくなったのだ。あさぎはそう自分に言い聞かせた。

清矢郎はあんなことをしておいて、全てを忘れて普通に生活しているのだろうか。余りに自分よりも幸せならば恨みも募り、何か一言くらい言ってやりたくなるかもしれない。

あさぎは複雑な気持ちになりながら、「だから少しだけ、見るだけだよ」と誰にも聞かれていないのにぶつぶつと呟いた。対面の図書館の二階にいる文芸部の少女たちに気付かれないよう、上は見ないようにして柔剣道場をぐるぐる回る。やがて開いているドアを見付けた。

試合中のためかドアはひとつだけ開いており、他は閉められている。そこから何やら音や声が聞こえてきたため、あさぎは他の生徒に紛れてこっそりと中を覗いてみた。——と同時に、竹刀のぶつかり合うけたたましい音と、気合の入った男性の掛け声が響き、柔剣道場の高い天井へと吸い込まれていった。

梅雨明け宣言が未だされない現在、雨上がりの夕方は蒸し暑く、むうつとした汗臭いような、湿った空気があさぎの鼻をつく。だがそれに顔を顰めることはなかった。

それは他のギャラリーも同じようだった。道場の中央で間合いを計りながら対峙している二人の少年の緊迫感に、見ている周囲も思わず目を奪われているからだ。隣で少人数で練習をしていた柔道部の面々もあさぎのような見物者も、今この瞬間に睨み合う二人の、どちらが先に攻め込むか固唾を飲んで見守っている。そしてどちらかが動いた、その時の素早い攻めと防御からも目が離せない。

そんな男同士の激闘の場に、ふよふよと上空を泳ぐ可愛らしい赤い金魚はそぐわないものであったが、

——え!?

あることにあさぎが気付いた瞬間、金魚の数は道場の中にぶわっと増えた。

試合中の双方から出されている大きな声。最初は聞いても分からなかったが、「彼」はどこかと目を凝らして探していたところ、ちょうど今、試合をしている二人のうちの一人の垂れ部分に——「加納」と清矢郎の苗字を見つけたのだ。

確かに身長から、彼であることに間違いないだろう。あさぎは焦った。湿った暑い空気の中を赤い金魚がぷかぷかと嬉しそうに浮き沈みする。慌てて目を閉じると頭を振った。

——どうして数が増えるの!?

だがいくらこの光景を見ないようにしても、朴訥とした清矢郎が相手に勝ちたいと攻め入る時に、腹から出される怒声——あさぎが初めて聞く無口な彼の大きな声、そして竹刀を叩きつける音、大き

な足で床を素早く動く様は、目を閉じていても空気や床の振動から嫌でも伝わってきた。まるで鼓動のように。

そこで急に静かになり、あさは試合が終わったのかと眼を開けた。しかし勝負はまだつかないのか、二人の剣士は再び正眼に構える。懸待一致。飛び懸かる、そして待つ、二つのタイミングを心の中で計っている。ほんの数分間の試合だが呼吸の変化のひとつも見逃さないよう、お互いの動きに全神経を集中させている緊張が周囲にも伝わり、声も出せずに二人の動きを追いつけてしまう。

じり、じり、と二人は摺り足で牽制し合って動き、竹刀の切っ先が相手を誘うように揺れる。一瞬でも、集中力が途切れた方が負けだろう。精神力の勝負とも言えた。

——見たい。

その時あさは、そう思った。もう目が逸らせなかった。戦う、男の彼が見たい、最後まで見届けたい——と小さな試合であっても思った。

こんな心と心のぶつかり合いを、あさは体験したことがない。これは彼がどんなに酷いことをしようがあさぎにはない闘志であり、彼が子供の頃から培ってきた強靱な精神であり、未だに変わらない真っ直ぐなものなのだ。

子供の頃、祖母の家に来て、毎日素振りの練習をしていた清矢郎。厳しい父親に殴られても、絶対に泣かなかった清矢郎。並以上の成績を残しても一番でない限り彼の父親は強く叱責し、それでも彼は何も言わず黙って耐えてきた。そして更なる努力をしていたのだろう。

祖母の家で幼い頃からその光景を見てきたあさは、ただひたすら堪えている清矢郎が痛ましくて、彼女の方が苦しくなって泣いてしまっていた。泣いたあさを、清矢郎が逆に困ったように慰めていた。

あの頃の彼にあった、あさぎには到底持ち得ない強い心。それを裏切るような辛い思い出があったとしても、どうしても忘れられない温かな思い出。

見たいという衝動と見なくてはならない義務感に駆られ、あさぎは今度こそしっかりと顔を上げた。赤い金魚のボールの向こうに見えた、防具で顔の見えない少年は――青い竹だ、とやっぱり思った。今でも。

一瞬全ての音や光景が遠のき、ざわめく風の音が聞こえてきた気がした。

祖母の家の横にあった竹。あの日、吐き気のする予感と共に、ざわざわと心を揺さぶった竹。

重なり合い、何処までも勢いよく伸びていく緑の群れ。

それがざわりと強い風でしなり、あさぎの赤い金魚は一斉に散らされる。そしてその反動で竹は跳ね飛び、一気にはあん！ と弾けた。

数秒後、はっと気付いたあさぎの耳に生徒たちのどよめきと歓声が入ってきた。ルールを知らない彼女は、清矢郎が相手から二本目の面を取り勝利を収めたことに、少し経ってから気付いたのであった。

第8話 夕暮れの中で

ぷはあ、とあさは柔剣道場の外で大きく息を吐いた。ねっとりとした汗臭い空気と初夏の夕方の空気を体内に入れ替える。いつの間にか握り締めていた手を開けば、それも汗ばんでいるほどだった。あさはその手から顔を背けるように横に下ろすと、オレンジ色になる準備をしている空に視線を移し言い聞かせる。この汗は柔剣道場の湿度の所為だ。たとえ赤い金魚が今も見えていたとしても、と。

試合は丁度一段落ついたのか次の試合もすぐに始まらず、ギャラリーの生徒たちは徐々に動き出し、三々五々に散っていく。先ほどの興奮から逃げるようにあさは一人先に飛び出したものの、あさは面を取った清矢郎の顔も見たいような気がしてしまった。

壮絶な緊張が解ける瞬間の表情を、何故か見てみたくなった。あの戦いをしていた人の素顔が。

だがそれは恨んでいる相手に抱くには、大層おかしい気持ちである。あさぎにはそのようなことを思う己が許せなかったし、解せなかった。しかし、

「北高って頭いいだけかと思ってたけど、すごいんだねー」

そんな感想を漏らした女子生徒の声が耳に入れば、現金なもので、あさは「あれは私の従兄なの……あんなことした」と、自慢したような馬鹿にしてやりたいような、誰に対してか分からない優越感を抱いてしまう。

実際、運動部に力を入れている近隣の商業高校等と比べれば、北も東もレベルの低さには変わりないのだが、今の試合の後に言ったということは、勝った清矢郎の姿がこの生徒の眼には「すごい」と映ったようである。

あんなことをした相手だが——いや逆にそんな相手だからこそ、情けない姿を見せて欲しくなかった。

『いい男に抱かれれば、女の価値が上がる』

経験はないが、そのような言葉をあさは耳にしたことがある。確かに自分の身体に残った汚点を少しでも肯定するには、せめて清矢郎の評判がよくあつて欲しい、と思ってしまう。あのようない男が自分に興味を示したのだと。小中学生同士が、ほんの少し触られただけで何を言うかという気もするが。

しかし四年前はまだしも、今は彼に興味を示してもらっていない。視線すら向けられないのだ。なので清矢郎が褒められればほっとする反面、そういう意味でも苛立ちやコンプレックスを抱くのだ。

矛盾した醜い気持ちを抱いている自分に気付いたあさは、私って性格悪いのかなあ、と今度は落ち込み出す。こんな本性は折角友達になった夕映や、他の女子には知られたくない。あさは、まだ背後に居るだろう清矢郎への思いを振り切るように歩き出した。――これ以上変なことを考える前に、早く彼と関係のない生活に戻ろう。とりあえず、国語科準備室へと。

そう思ったが、金魚はあさぎの後ろをついてこない。彼女がふと後ろを向くと、金魚たちは名残惜しそうに柔剣道場の前にたゆたっているではないか。

――何してんのよ。

あさは焦った。が同時に、喉がからからに渴いていることにも気が付いた。

――み、水くらい、飲んでいこうかな……。

運動部に所属していた中学生時代ならまだしも、外の水道で水を飲むなんてことはしばらくしていないのだが。無意味な言い訳をして、あさは金魚の方へと足を向けた。

彼女自身もよく分らない。一体何がしたいのか、何を求めているのか。

何がこんなにも気になって、何がこんなにも、欲しいのか。

ただひとつ分かることは、許せない相手がすぐ其処に居ると言うことだ。

己の意識下にあるはずなのに後に続かない金魚に苛々しながら、あさぎはそれらを呼び戻すべく、一步一步近付いていく。何人もの知らない生徒とすれ違いながら、先ほどより人の減った柔剣道場へと戻る。

正面にある水道まで来ると野太い笑い声が聞こえ、あさぎはびくんと身を震わせた。胴着姿の少年たちがそこで休憩していた。恥ずかしくてそちらを見られない。

あさぎにはそもそも男子の知り合いが少ないため、よく見なければ彼らがどちらの高校の生徒かすら分からない。しかし自分がこの場所にひどくそぐわれないことは分かるため、彼女は俯くとそのまま男子生徒たちの方を見もせず九十度左に曲がり、柔剣道場の脇を通り抜けた。

——やっぱ無理、帰ろう！

自分のしていることが妙に滑稽な気がして、恥ずかしくてたまらない。それに部活に打ち込んでいる彼らは、先ほどの試合の印象や服装もあって、文化系の部のあさぎには妙な威圧感があった。

だが彼らの目の前で百八十度回転して引き返すのも不自然であるかと思い、あさぎは柔剣道場の裏へと逃げてきた。そこにも水道はあった。正面に設置されたものと違い、ひとつしか蛇口のない小さな洗い場が。

見上げれば金魚たちも一緒にやってきて、水道のあたりに水を求めるように浮いている。

——なんか、よけいに喉が渴いた。水、飲もう。

幼い頃はお転婆だと言われたあさぎだ。蛇口を捻ると、啜えないまでもスカートから伸びた脚を開いて顔を近づけ、ごくごくと水を流し込んだ。呼吸すら忘れて一気に渴きを潤すと、はあ、と息を吐き出し再び黄昏時の新鮮な空気を入れる。

そして制服のポケットから魚の絵柄のミニタオルを取り出し小さな口を拭った瞬間、反対側から人の気配がし慌ててそちらに顔を向けた。

同時に――最初から知っていたかのように、踊る金魚。

「え……」

まだ冷たい唇が驚きに震える。

何で、と問うのも愚かだが、其処に胴着姿の清矢郎が一人で立っていたからだった。

彼も驚いた顔をした――ように見えたのは一瞬のこと。やはりいつもの無表情で、首にかけたタオルで濡れた髪を拭いていた。あさぎを見つけると同時にその手を止める。

無表情になったのは、やはりあさぎの存在を認めたくないからか。しかしその眼は、珍しく彼女の顔を正面に捕らえていた。眼鏡の奥の光も思ったよりは冷たくなく、先ほどの試合の高揚感が残っているのか熱いもののようにも見えた。

――さっきまで、試合していた「あの人」だ。

初めて見た清矢郎の試合の衝撃が強く、まるで他人のように遠く感じられる。だが彼には、あさぎと同じ血が流れているのだ。そう思うと不思議な気がしてくる。

汗にしては髪から滴が落ちているその頭は、どうやら水でも被ったのか。濡れてしまうにも関わらず、眼鏡は外さなかったらしい。今更気付いたように、レンズの水滴を拭う清矢郎に、妙に「らしさ」を感じてしまう。しかしすぐにそんな呑気なことを考えている場合ではないと、我に返る。

――会っちゃった。でも、どうしよう……。

あさぎは嬉しそうに乱舞する金魚たちを呆然と眺めながら、立ち

疎む。しかしきつと、すぐに彼は立ち去るのではないか。こつちを見たのも一瞬で、またあさぎのことを無視して。

——どうして、こつちを見てくれないの！？ 私、此処に居るよ！！

あれからずっと、親戚同士の集まりで無視されるたびに叫びたかった。それは清矢郎への恨みだけではなく、世間にも自分を必要とされる居場所がないような、虚しい自己主張も手伝って。

あさぎが悔しそうに清矢郎を見上げていると、そこで意外なことが起きたのだった。

「……どうした」

「えっ！？」

なんと彼の方から喋りかけてきたのだ。突然のことにあさぎの胸が高鳴り、ひっくり返った声を出す。

「何で、此処に居るんだよ」

先日親戚に挨拶をしたような落ち着いた低い声で、先ほどの高い気合の声が嘘のように、あさぎにゆっくりと問い掛ける。

清矢郎の表情が固く乏しいため、彼が咎めているのか困っているのかあさぎには分からない。だがその質問の答えを考えると、あさぎの顔が熱くなってきた。

「なんで、って……」

久々に話しかけられたのに、彼の質問に答えられない。確かに当然の疑問だが、言われてみて自分でもこの状況は不自然だと思ったのだ。

ギャラリーが居た時ならまだしも、皆が散っていった後にこうして裏口へとやってきて、剣道部の部員でもなければ、友人が近くに居るわけでもない。柔剣道場の裏は敷地の境である鉄柵があるだけで、校門も校舎もない。一人でこんなところで何を、何のためにしているのかと言われれば、どう答えてよいか分からない。

学校での清矢郎の姿を見たかった、あの興奮する試合を最後まで見届けたかった、あの試合をしていた人が見たくてこっそり戻って

きた、などという正直な経緯を話せるわけもない。

いっそ逃げ出そうか。あさぎはそう思った。

だが金魚は逃げずに、二人の周りを泳いでいた。その姿にはっとする。――そうだ。逃げてしまったらあの日からの彼への苛々も、やるせない想いも解決出来ないまま、一生付きまとうのだ。

自分がここで逃げたら、あの日あんなことをしておいて何も言わないこの少年と同じ、「卑怯者」になる。それだけは嫌だ――。

清矢郎と金魚を見ては苛々する。この気分の悪い状況と、人と比べては誰かの所為にするばかりの醜く小さな自分を何とかしたかった。

そう決意したあさぎは、今日に限って自分を呼び止めた清矢郎を、逃がさないように真っ直ぐ見上げた。だが何の言葉も思いつかず、唇をきゅつと結んで。始まりかけた初夏の夕暮れのように、頬をほんのりと染めて。

第9話 四年ぶりの会話

「何で、此処に居るのか」という清矢郎の問いにあさは答えられなかった。だが二人は今、久方ぶりに見詰め合っている。長い時間避け合っていたのに、こんなにも簡単に視線は重ねられるものかとあさは驚いていた。

今、赤い金魚はとても可愛らしく見えた。――清矢郎が自分を見ていくからだ。それが、嬉しいだからだ。それに気付いた瞬間、今度は恐ろしくなってくる。

――どうしてそんな風に思うのか。

困ってしまったあさは眼を逸らした。此処に居る理由――清矢郎を見たかったから、などと言えるわけもない。まるでただの告白みたいではないか。

だから咄嗟に別の言葉を口走った。こちらの言葉も恥ずかしかったが、彼の問いには答えたくなかったから。それが彼今一番、彼に言いたいことであつたから。

「無視、しないで」

「え？」

清矢郎から低い声で意外そうに尋ね返されれば、自分の言った言葉の意味に気付かされる。だが何もせず此処から逃げ出し、また今までのように苛々し続けたくないと決めたのだ。このチャンスに何かしないと、苦しいままだ。清矢郎から話しかけてくれることなど、もうないのかもしれないだから。

口にしてしまえばもう引き返せない。あさは俯いたまま、少し大きな声で言い直した。

「私のこと、無視しないで！」

「……」

清矢郎が息を飲んだ音が聞こえる。しかしあさぎだって四年間苦しかったのだ。彼だけがあの出来事を忘れて、幸せになるなんて許さない――。

そうだ、これは恨みによるものだ。今の自分がどれほど醜い顔をしているかなど気にもしないで、あさぎはぐつと顔を上げると、昔のように負けん気の強い真っ直ぐな視線を清矢郎に向けた。

彼は今度こそ驚いた表情であさぎを見ているが、その眼は逸らさなかった。その切なげにも見える視線に、あさぎの方がたじろぎそうになる。だが顔を背けられなかったことと、その瞳が昔と変わらない彼女を心配する色を含んでいたことに内心、安堵した。どうやら邪険にされることはないようだからだ。

やがて清矢郎は、やや困惑したような声で呟いた。

「何でだよ……。俺のことなんか、眼も合わせたくないんじゃないのか」

あさぎはかあつと顔が熱くなった。金魚も炎のようにぶわつと舞い上がる。

――やっぱり、覚えてたんじゃない！

四年前、この彼に胸や陰部に触れたことをフラッシュバックさせてしまう。混み合う竹の中に居るような、蒸した息苦しさまでも。相手も今、自分のそこに触れたことを思い返しているのかと思うと、尚更恥ずかしい。

これ以上、色々と考えてしまう前にあさぎは早口で言い切った。

「いや、だし、せ……せいちゃんのことなんて、きらい……。でもそっちが悪いのに、無視されるのは、もっといやなの！」

「嫌い」と他に表現が思いつかず口走った瞬間、あさぎの胸が不思議と痛んだ。言霊という言葉があるように、言えば形を成してしまふ。それは刃物のような形をしており、あさぎの心を切りつけた。どうしてそんな気持ちになるのか分からないが、今更訂正は出来ない。

そして心の中では「清矢郎」と悪態をついているものの、実際本人を目の前にして三年生であることもあり呼び捨てには出来ず、と言って「くん」付けや「さん」付けもおかしく、結局幼い頃の呼び名で呼んでしまった。それもまた子供のようで、恥ずかしい。

様々な感情に痛いほど胸を軋ませるあさぎは、青いリボンの結び目を握り締めると唇を噛んで俯いていた。

「――」

そこであさぎの言葉に、清矢郎が今一度何かを言いかけた時、

「加納ー、何してんだー」

休憩が終わったのか、先ほど通り過ぎた柔剣道場の正面から、胴着姿の男子が二人ほど清矢郎の姿を見つけ、こちらへとやってくるではないか。

どきりとする間もなく、二人は不思議そうな視線をあさぎの方へと向けてきた。それを眼の端に捉えた彼女は、清矢郎の顔も見ず慌てて駆け出した。

「おい！」

清矢郎が呼び止める声が聞こえたが、振り向くことなど到底出来ない。

我に返れば、とても恥ずかしい状況である。彼と違う学校でよかったと心底思った。でなければ、あの光景を見た生徒に誤解され、あらぬ噂が立つかもしれない。清矢郎は彼らに何か言われるだろうか。従妹だと弁解するのだろうか。流星にあの無口な彼が過去の恥まで話すとは思えないが。

しかし沈黙を守れば余計に冷やかされるだろう。それを迷惑に感じ、あさぎのことを悪く思うかもしれない――それも哀しいな、と思いつく切なくなる。

そこで彼女は気が付いた。あの日のことが忘れられない。自分を傷つけた彼のことの許せない。だからこそ、清矢郎がこれ以上あさ

ぎを虐げるような態度を取ることは絶対に許せなく、あさぎのことを大事に思っただけだ、と。

あの日のことをなかったことにしたいと言う割に、清矢郎には忘れさせたくない、この小さな自分の存在を、彼だけにでもどうにか認めさせたい、誰かに必要とされたいと望んでいるのであった。

これはただのコンプレックスからくるものか、どのような感情から生まれた気持ちかあさぎにも分からない。きっと金魚を見せられた恨みからだ――と、こびりつくような赤い幻影と共に走りながら、あさぎは自分に言い聞かせるのであった。

鞆が国語科準備室にあるため、このまま帰るわけにもいかない。あさぎは急いで準備室へと戻ってきた。隣の職員室を通過する際に、椅子に凭れて座っている荒芝の視線を感じたが、そちらは見ないようにして。

文芸部の女子部員は未だ話に花を咲かせていたが、

「あさぎちゃん？ どうしたの？」

流石、と言うべきか。部長の琴音は、入ってきたあさぎのまだ赤い顔と複雑な表情に気付いてしまい、お節介にも心配してくる。その言葉に全員が、戻りが遅かったあさぎの方を振り向く。

「な……なんでも、ありません」

あさぎは俯いて首を振ると、そう呟いた。「ちょっと生理で、おなか痛かっただけです」と突っ込みづらい嘘を付け足し。

恋愛や性の話題に敏感な少女たちは、「何か『そういうこと』があったのではないか」という目であさぎを興味深げに見ている。従兄の試合を見に行っただけに、そんな眼で見られることは絶対に嫌であった。

清矢郎のことは憎むべき存在。そうでなければいけないとあさぎは頑なに思っていた。でなければ、あの日のことを何度も思い出し、彼に忘れて欲しくないと主張する理由がつかないからだ。

「えっと……、じゃあ、文化祭で作る冊子の件だけどさあ」

別の二年生が、気まづくなりそうな空気を何とかしようと、部活らしい話題に変えて皆の気を引いた。

先輩に気を遣わせることになってしまい、申し訳ないと思いながら、あさぎはずっと俯いたまま、唇を噛んで動揺を懸命に抑えていた。

今日のことで、何かが変わるのか。動き出すのか。あさぎに「無視しないで」と言われた清矢郎は、とても意外そうな顔をしていたが、どのような気持ちになったのか、今、何を考えているのか。それがとても気に掛かる。

案の定、この日の出来事がいつまでも忘れられず、あさぎは今までになく毎日金魚を見る羽目になってしまったのであった。

第10話 夜の秘め事

いつそのこと、もう二度と会わなければ忘れられただろうか。近くの高校に入学してしまったのも、駅や学校で顔を合わせたのも運命なのか、それとも無意識のうちにあさが清矢郎を引き寄せたり、彼に近付こうとしていたのか。

柔剣道場で清矢郎の雄姿を見て、数年ぶりに言葉を交わした日の夜のこと。あさは柔らかな布団の中で眠るべく眼を閉じる。しかしいくら暗闇を作っても、赤い金魚が瞼の裏に映って眠ることが出来ない。

それは体調の所為というよりも、今日の出来事、即ち清矢郎のことを思い出してしまっているからだ。

しかも今宵描く彼の姿は、四年前のまだ幼さを残し、身体も細かった中学校のジャージ姿ではない。竹がしなるように素早く、果敢に動いていた姿。そして久々に会った縁側や駅の構内を歩いていた時の、背筋の伸びた堂々とした姿。四年前よりも逞しくなった腕や広くなった肩、大人びた顔立ち。血の繋がった身内であったが、最早他人のように見えてしまった。

そんな現在の「清矢郎」が、昔の忌まわしい思い出に上書きされている。

それは一体どういうことなのか。考えると、胸がやけに逸り出すあさはもう暑いほどだというのに布団の中に潜ると頭を大きく振ったが、その残像は何処までもあさがに迫ってくる。

上書きされたということは、もしかしたら、あの件を吹っ切って新しく歩き出せたということなのだろうか。

——そんなわけがない。

だとすればどうして、金魚がまだ見えるのだ。あの、肉欲の具現が。

金魚と一緒に清矢郎の幻影を重ねるということは、あさぎの意識下であの汚らわしい思い出の相手を、「今の彼」に置き換えているということだ。

そう思うと金魚がぶわりと増えると共に、幼いあさぎの身体に伸びる二本の手が、袴姿の、北高の制服の清矢郎のものとなり、幼かったはずのあさぎも髪が伸び、膨らみもついて今の体形になっている、そんな情景が浮かぶ。

あさぎは勝手に浮かび上がるその妄想を懸命に振り払うと、熱いため息をつく。身体が火照っているのは布団を被っているからだ、自分に言い聞かせて。

では身体の奥までも疼き、熱を帯びている訳は――？

清矢郎があさぎの胸の奥を、なぞるように通り過ぎていく。

今日、ようやく話が出来た。声が聞けた。あさぎに向けられた、あの低い響きと鋭い視線。思い出せば出すほど、身体の内側がもぞもぞとしてくる。

苦しい――いっそ、触れて欲しい――求められたい、心から。大切に。

それは、誰に？ 認めたなくとも、目の前の金魚が誰なのか証明している。

――いっそ「そこ」に突き落とされれば、私は呼吸出来るのだろうか。何も思い通りにならないと拗ねているこの世の中で。

幻想の水の中ではくぱくと苦しそうに喘ぐのではなく、自分の求める人に焦がれられ、必要とされれば。

むずむずする。熱い――こんなことは、してはいけない……のに！己が憎らしかった。しかしあさぎは自身に負けた。前から何度も興味を持ったり無意識のうちに、手を伸ばしては引っ込めていたが、今夜は自らの肌に自らの手で触れることしか、今のこの説明のつかない感情の爆発を抑え、葬り去る方法が思いつかなかった。

逆に衝動に負け、甘美な世界に足を踏み入れている間は、何も考

えずにいられるだろう。快樂への本能的な期待に、恐くとも胸が震える。たとえその行為が、あの日の思い出の続きを「今の十八歳の清矢郎」としたい――などと考えてしまった結果であつても。

結局好奇心が勝り、その身が求めるままに指で触れた。流石にTシャツとハーフパンツは身につけたまま。

身体と共に気持ちが高ぶり、「清矢郎」と呪文のように彼の名を呼んでしまいそうになるが、唇を噛んであさは堪えた。そうすればもっと満たされるだろう。だが理性や感情はそれを許さない。

隣の部屋の姉や階下の両親にこの妖しい吐息が聞こえないよう、布団の中で必死に押し殺す。

もしも素直にその名を口にすれば、何かが変わるのだろうか。もしかしたらこの悶々とした気持ちもすっきりするのだろうか。だがそれ以上に、「何か」が確実に始まってしまふことの方があさは恐かった。

――従兄なのに、いいのかな。

何度も思い描いた命題。両親や可愛がつてくれた伯父伯母の顔がよぎり、だからこそ抗っている。

そうでなければ、もっと自由に彼を感じられたのだろうか。しかしそもそも血縁関係でなければ清矢郎とは出会わなかっただろうし、彼を信頼することも懐くこともなく、あの事件が起こり苦しむこともなかった。十六歳のあさは運命さえも恨みたくなる。

それでも、何故彼のことをこんなに考えているのか。

何故、彼があの日のことをどう考えているか、そればかりが気になるのか。

何故、自分を粗末にしないで欲しい、もっと大事にして欲しいと強く相手に要求するのか。

答えなど出ないまま、頂へと登りつめるあさが見たものは、赤い魚の美しき乱舞。

その向こうに見え隠れするのは、若々しい青竹。

——ねえ、お願い。その切っ先で、赤い幻影を貫いて——。

そんな恐ろしい願いを、最高の興奮状態に達した瞬間、あさぎの全身は叫び出すのだ。

成長途中にある若い少女のエネルギーは最大限に膨れ上がり、それが狭い空間に凝縮され、爆発寸前の危険な状態を迎えている。いっそ痛くとも引き裂かれれば、楽になれるのだろうか。この呪縛から解き放たれて、前に進めるのだろうか。

——ああ。あの、続きを、あのひとと、したい、したいよう……。それはぞっとするほど、原始的な叫びであった。

あさぎは手足を投げ出し、呆然とベッドに寝転んでいた。うつすらとかいていた汗も引き、呼吸も落ち着いてきた。理性を取り戻した彼女の眼からぼろりと涙が溢れる。透明な雫は頬の横を伝い、シートに熱い染みを作り、伸ばしている黒髪を濡らした。

なんという罪深いことを願ったのだろうか。恐くて、虚しくて、恥ずかしく、惨めな気持ちが入り混じる。あさぎが冷静になると共に金魚は数を減らし、火照った身体を冷やすように寄り添ってくる。やはり思い出すのは、今日の清矢郎の真っ直ぐな視線。だが彼が今でも同じようにあさぎのことを求めてくれているとは、彼女には思えなかった。しかも性欲以外の感情で。

それなのにここまで心を乱され、清矢郎のことで胸を一杯にしている自分が悔しく、情けない。

ばっかみたい、ばっかみたい、と幾度も心の中で繰り返す。あさぎは今、自分のことが一番憎らしかった。指先や身体からはまだ雌の匂いがむん、と立ち上っているようで、それにも嫌悪感を覚える。

——何やってるんだろう、私……。

頭を振って金魚を追いやりながらあさぎは起き上がった。ゆっく

りと立ち上がり窓を開ける。夜風の心地よさに、この穢れが払われていく気がした。それでも清矢郎の姿が頭から離れない。

——こんなの、まるで……、恋みたいじゃないか。

冷静になりつつある頭でそう仮定し、呆然としてしまう。あさぎはわざと少年のようにごしごしと拳で目をこすると、梅雨で曇った夜空を睨みつける。

それなのにあさぎの空想の中の清矢郎は、その鋭い視線を逸らして背を向ける。揺れる緑の向こうへと消えてしまう。後には、ただ竹を揺らす風が残るだけ。

「どうして此处に居るんだ」という清矢郎の問いに勇気を出して答えていれば、何かが変わっただろうか。いや、そんなことを言えば彼を困惑させ、余計に避けられてしまったかもしれない。それこそ従兄妹なのだし。

あさぎの惑う心を笑うように、金魚は暗い夜空をしつこく泳ぐ。

——逃げたくないとは思ったが、こんな感情を自覚したところで困るだけだ。認めたところで辛いことしかないではないか。

そこで彼女は「清矢郎に欲情なんかしてない、金魚なんか最初から見えていない」と自分自身に言い聞かせると、後は眼をぎゅっと閉じて無理矢理眠ってみることにした。

そんなことをしたところで、あの金魚が消えるわけもないのだが、今夜彼女が夢の中で会う金魚は、さぞかし黒い、出目金のようなものだろう。

第11話 「好き」という気持ち

再会した清矢郎を思い出しながら自分を慰めてしまったという事実は、しばらくあさがさを落ち込ませていた。

学校で友達と笑っている間はいいものの、退屈な授業の際や一人で乗っている電車の時間、入浴や就寝前など、ふとした時に蘇り自己嫌悪に苛まれる。そして自分が恐くなる。

抗おうとしても、彼のことを考えている。金魚が見えて目を閉じる。それでも瞼の裏には、彼女を啄ばむ赤い光。

四年前の忌々しい一件から、性的に意識している相手へのこの感情は、恋として成立するのだろうか。

七月中旬の放課後、文芸部の部室――と称する国語科準備室にあさが入ると、丁度二年生の女子がホワイトボードに今月の部誌の締切日を書いたところだった。

「締め切り、今週末だよー。来週、夏休み前に七月号出すからね。」

文化祭で出す冊子の締切は七月中だから、覚えておいてー」

今来たあさがや他の一年生は、彼女の言葉に顔を上げる。ボードには日付が大きく書かれた横に、黒や赤のマーカーで人の似顔絵などポップなイラストが添えられていた。美術も得意でないあさぎには、それが十代向けの雑貨のデザインに十分使えそうなほどこなれたものに見えた。

その眼鏡を掛けた二年生の副部長だが、彼女は文章よりもイラストを描くことが得意で、部誌の表紙を担当している。それだけでなく美術の授業で描いた絵が廊下に飾られていたこともあり、今年の文化祭のパンフレットのデザインも友達に任されたらしい。

漫画を描いていると言うと「暗い」と後ろ指を差されがちだが、それなりに他の情報や周囲にも関心を持ち、なおかつその技術が一定のレベルを超えれば、このようにその腕を必要とされることもある

る。

将来はデザイン系の仕事に就きたいと語っていたこの少女も、あさぎからすればまた「誰かに認められている」「自分の好きなことで自信を持って頑張っている」という憧れと羨みの対象である。もちろん人当たりがよく面倒見のよい性格も備わっているからこそ、人に好かれるのだろうか。

「中村、いるかー」

そこで野太い男の声が、女子生徒ばかりの狭い部屋に響く。背後から現れたのは、隣の国語科職員室に居た顧問の荒芝。

「はい！　いますよー」

長いストレートの髪に短いスカート、その割には子供っぽい返事をする部長の二年生、中村琴音が笑って手を挙げた。

「お前さん去年の冬、なんか文章コンクールに出して、佳作とかとってたじゃん。遅くなったけど、今度の壮行会で春大会のと一緒に表彰するらしいから、覚えって」

うわあ、すごい、とあさぎはこれまた思ったものだが、琴音は「はい」と気さくに返事をした。周囲の二年生もむやみに褒めず、「へー。運動部と一緒に表彰なんだねー」とだけと意外そうに言う」と別の話をすぐに始めた。

「なんですか？　コンクールって」

そこであさぎと違うクラスの一年生が、イラストを描いていた眼鏡の二年生に質問する。

「先生に出してって言われたり、自分で見つけてきたりだけど、そういう賞みたいなの到时々出してるよ。一応、文化祭の冊子も対象。まあそっちは東高程度じゃ出すだけで終わるけどね」

ちなみに文芸部だけでなく美術部はもちろん、化学部や生物部でも研究発表をするなど、文化系の部活でも体育系の部活の大会に相当する目標はそれなりにあるらしい。そのやり取りを聞きながら、あさぎはとりあえず自分も部誌に何か書いてみるべきだろうか、と

ふと思った。

今質問した一年生の少女も、少々大人しい子だがポエムのようなものをきちんと書いていた。今日此処に居ない夕映も、琴音とはまた違う傾向の、迫力のあるミステリー作品を先月書いている。たくさん年齢の人々と関わりを持ち、たくさんの本を読んだことがよく分かる内容の作品だった。アルバイトもして恋人もいるのに、彼女は実に精力的な女の子である。

何も皆が特殊な能力を持っているわけではない。それぞれの少女が様々なことを前向きに受け入れ、好きなものを好きだと言って追いかけて、等身大に生きているからこそ、人からも居心地良く思われるのだろう。少なくともこの時のあさぎには、そのように見えていた。

——私だけ、何もしていない。

あさぎはホワイトボードに描かれた手足の細い女の子のイラストを上目遣いで見ながら、唇を軽く噛んだ。文芸部の活動で頑張っても、と笑われればそれまでであるが、「その程度」の活動ですらしていないのである。それでただいじけているだけなど、それこそ馬鹿みたいではないか。

——こんな私じゃ、駄目に決まってる。これじゃ追いつけないよ……って、誰に？

その時、あさぎの心に一陣の風が吹き、ざわりと緑の陰影を揺らした。しかし次に現れる赤いものを見ないよう、慌てて目を閉じた時、

「おーい、山本」

と荒芝に呼ばれ、はっと現実を引き戻された。

「暇ならちょっと手伝ってくれ。お前さんのクラスに配る分もあるから」

「はい？」と訝しげに聞き直したあさぎだが、荒芝は此処にいる他の一年生の国語を担当していないようなので、洪々と彼の後に続

いた。丁度金魚を見てしまいそうなところだったので、それが中断されたのはよかったかも、と思いつつ。

「悪いな。それ駄賃」

荒芝はそう言うと、机の上に小さなビニールの包みを転がした。赤い大きなリボンの掛かった、イチゴ味の飴が入った袋。貰い物に手もつけていないという様子であったが、あさは大人しく受け取っておくことにした。

荒芝が頼んできたのは配布するテキストの修正部分にシールを貼るというものだったが、こういう単調な作業は意外と嫌いではないあさぎ。実は文芸部での毎月の製本作業も好きな方だ。

「別にいいですよ。でも他にも人いたのにー」

やり始めてみればさほど嫌なことでもなかったが、少しの冗談を込めてあさは荒芝に向け生意氣そうに唇を尖らせた。男性は苦手でも、教師と言う公的な立場の恋愛対象でない人物とは話がしやすい。

現に荒芝は女性にだらしない、手が早そう等々生徒の間では根も葉もない噂がありつつも、あさぎには彼の周りに金魚は見えない。二人の間には、微妙な空気がないからだろう。

「あれ？ お前さん、あそこから連れ出して欲しかったんじゃないのか？ そんな顔してたぞ」

言わないほうが良かったかな、という表情をしながらも、荒芝は目の奥に見透かすような、悪戯を仕掛けるような光を置いて、あさぎの目を見た。

これは生意気を言ったことへの仕返しだろうか、とあさは一瞬思ったが、間違っただけではいなかったのを目を伏せてしまう。しかし文芸部の生徒たちと仲たがいをしているなどと誤解されたくはなかった。

「そんなこと、ないですよ」

と小さな声で言い返した。荒芝の「そうか」というあっさりした返

事後、二人は無言になったが、あさはふと顔を上げて再び問い掛ける。

「先生って……、去年まで北高にいたんですよね」

「そうだけど？」

しかしその先の質問については口を噤んだ。

——加納 清矢郎って知ってますか？ どんな生徒、だったんですか？

思わず尋ねてみたくなってしまった。「従兄なんですけど、最近会ってないので」などと空々しい理由も考えたが、全て飲み込む。

——何でこんなこと、聞こうとするんだろう。

学校での「外」の彼をもっと知りたいから？ それは何のため？ 彼のことを駄目な男だと証明し、嫌いになりたいから？ それとも……？

気にしないようにしていても、することが全て裏目に出て、清矢郎のことが頭から離れない。追い払ったはずの金魚も、国語科職員室にまでやってきた。いちごの飴に興味があるのか、近付いてはつんつんと突いている。

何かを尋ねようとしたくせに黙ってしまったあさに、

「何、気になる奴でもいるとか？」

流石は「寝癖のある日はホテルから出勤した時だ」と女子生徒にかかわれているような教師だ。そんなことを、思春期の少女に単刀直入に尋ねてくる。教育委員会に訴えられるぞ、とあさは思いながら荒芝を上目遣いで睨む。

「……そういう質問、きらいです」

「そうか、悪かった」

と荒芝は再び苦笑すると、彼も黙って作業に戻った。

——悪いのは変な質問してきた先生の方だもん。私は何も、悪くないもん。

しかしもつと可愛げのある切り返しは出来なかったのだろうか、とも考えてしまう。夕映や琴音だったら、どのように言い返しただろうか。ここで気の利く言葉が言えるからこそ、彼女たちは異性にも好かれるのではないか。男性を苦手とするのは、「女性」というものに対するコンプレックスの裏返し――。

あさぎの悩みはいつの間にか、どうすれば年上の清矢郎に「女性」として見てもらえるのか、ということにまで派生していた。そして心で思い描いた相手を荒芝にも「気になる奴」と形容されたことに、妙にときめきを感じている。

もう何をして清矢郎を意識してしまい、「好きな人」相手に行動しているようになってしまったのだ。

――私は、せい……ちゃんのことを、好き、なのかなあ。

唱えてみた「好き」の言葉。心がふうわりとしてくる、不思議な言葉だ。だが今の複雑な気持ちこそその甘い言葉で言い表すには、何か違和感があった。そんな簡単な言葉で言ってよいものだろうか、と。

現にたった二文字だというのに、その先を考えると恐くなる。それは従兄妹同士だからだけでない。子供の頃は、兄のような存在として「好き」だったのは確かだ。だがあの日から関係が狂った。男として意識するようになってしまった。今はあさぎの方が、能動的に求めてしまっている。

「好き」という感情はきつと、この袋の中のピンク色の飴玉のように、胸の中どころころと転がる甘い想いであるはずなのに、あさぎの目に見えるのは燃えさかる炎のような赤い金魚。

まだ「好き」程度の軽い感情の方がましではないか。もしもこの紅蓮に手を伸ばしたら、どういうことになるのか――。

確実に、あさぎの胸の中で熱を持っている小さな灯火。それが己を内側からいつか焼き尽くすような気がし、あさぎはぞくりとした。その恐怖を誤魔化すように、彼女は慌てて包みを破ると甘いピンク色の飴を口の中へ放り込んだ。

第12話 出目金コンプレックス

あの試合の日から、あさは週に一度ほど駅のホームで清矢郎を見かけるようになった。受験勉強に本腰を入れているのか、彼も早い時間に帰ることが増えたようだ。しかしもうじきに夏休みだ。そうなれば、彼のことも見られなくなるのだろうか。

その姿を見れば心が躍り、見られなければ残念に思う。そんな自分が確かに存在していることを悔しく思うあさがだが、この自然な心の営みはどうすることも出来ない。

七月も後半に差し掛かった明るい夕暮れ時。あさが利用している、高校の最寄り駅の改札口に、いつもの通り清矢郎を含む一団がやってきた。金魚は当たり前の如く人の多い駅構内を飛び交い、そのおかげで清矢郎の姿も見つけやすい。彼の友人の三年生の顔も何人か覚えてしまった。この前の練習試合で見た顔もある。

自分の気持ちすら掴めないままにいる、あさ。この感情はもう「恋」ということでいいのだろうか？　しかし認めたくない。何よりそんな簡単なものとは思えない。だが先日の激闘から、彼女は更に清矢郎を意識している。彼を想像して汚らわしい秘め事をしてしまったほどに。

抗おうとするくせに、駅では彼のことを今まで以上に探している。見つければほっとするが、こちらを見ないことに余計に苛々させられる。

しかしこの日に限って、背の高い眼鏡の顔がちらりと後ろを振り向き、後から改札に入ろうとするあさを一瞬見た……気がしたのだった。

——ま、まさか、ね。

あさは期待しないようにするものの、
『無視しないで！』

あの日、恥ずかしかったが本心を言ってしまったのは確かだ。清矢郎も、それを気にしてくれているのだろうか。

真面目な彼のこと、あさが悪いと思ってくれているのかもしれない。そう思うと安堵する。心も身体も成長し、遠い存在になってしまった気がするのに、昔のままの優しい彼でいてくれたことに。だからもし本当に清矢郎がこちらを見てくれていたのなら、嬉しい。しかし無視しないなら、声くらい掛けてほしい。そして……などと、その先までも貪欲に望んでしまう。

『北高に気になるヤツでもいるの?』

教師の荒芝の言葉を思い出し、あさは歩きながら顔を真っ赤にする。清矢郎はどうに改札を通っていった。早く追いかねば一番線のホームに電車が来てしまう。

——って、何焦ってんのよ。

あさぎの心に反し、金魚は赤々と嬉しそうに空を泳ぐ。性欲の象徴でもある、可愛らしい影を揺らめかせ。

——せ、せーしろーのことなんか、好きじゃない、のに……!

言霊という言葉があるように、その二文字を思い描くだけでとくと胸の鼓動が早くなるくせに、あさは尚もそれを否定する。その時だ。

「ちよっとお。もう、また見てるし! 一体誰が好きなの? 北高なら知り合い居るよ? 上級生? あの中行って話しかけてこようか?」

自分の世界に入り込んでいたあさに、遂に夕映が痺れを切らした。あさはすっかり忘れていた。今、彼女が横に居ることを。

あさが話したくなるまで待つと言った夕映だが、あさがいつもぼうつと誰かのことを眺めており、と言って行動を起こしたりするわけでもなく、切なげな表情をしているため、行動力のある彼女は何をうじうじしているのかと耐え切れなくなったのだろう。

しかも夕映は顔立ちも整っており、堂々としている少女だ。その

うえ交友関係も広く、派手なタイプだけでなく地味な雰囲気的女子や男子など、誰とでも分け隔てなく楽しそうに会話をしている。彼女にとって、他校生だろうが上級生だろうが、初対面の男子と話すことなど大した事ないのだろう。

そして己に興味を持つてもらえるような話しかけ方のテクニクも、会得しているように思える。何人かの男子に告白され、付き合った経験のある夕映は、そういった経験による自信も持っていたそうだった。

だが対照的なタイプのあさぎには、そんなことは頼めない。

「ごめんごめんごめん。ぼうつとしてて、ごめんね！でも、ごめんね、好きとかじゃないかもしれないし、恥ずかしいし、いいのっ！」

改札を通ったあさぎは、一番線ホームで電車を待つ北高の少年たちの方へと今にも特攻してしまいそうな夕映の手を引き、彼女を止めた。

「そうなの？もう夏休みだしさあ、会えなくなるよ？ひと夏の思い出でも作ってきたら？」

——ひ、ひと夏の思い出って！

真面目な顔で言う彼女に照れくささから突っ込みたくなるものの、確かに夏休み中は会えなくなるのは事実。そのことも夕映のお節介に火をつけたものと思われる。

騒ぐ女子二人を北高のみならず、東高や私立の女子高の生徒まで振り向いていく。流石に会話までは聞かれていないと思いたい……と願うあさぎであった。

「で、誰？」

二人が帰る方向の電車は田舎の方面に向かうので、本数が少なく待ち時間がまだある。いつもより少し早くホームに入ったため、時間に余裕のある二人は一番線ホームの端に寄るとそのまま話をする。あさぎは十メートルほど前方で友人と話している清矢郎にちらり

と視線を送ると、申し訳なさそうに首を横に振った。

「……そんなに言いたくないなら、いいけどさあ」

従兄とあんな思い出があり、現在も汚く複雑な想いを抱いているとはやはり言えない。彼と話すチャンスは欲しいが、あさぎとしては口を聞いたこともない上級生男子の群れに飛び込んでいくのは恐い。清矢郎にも図々しく思われるのではないだろうか。

「ごめんね」

そう呟くあさぎの胸の奥は、じんわりと熱かった。

——好きな人……か。

夕映からも言われた。もうこの態度はどれだけ否定しても、「そう」なるのだろう。何度も否定しても金魚は飛び交い、その言葉が頭から離れない。

しかし受け入れたところで、清矢郎があさぎのことを同じように想っている可能性は少ない。従妹としか思っていないかもしれない。それにもし、彼が誰か別の人を好きだったらどうするのか。——そう思うとぞっとする。

あんなことをしておいて、ここまでの幻覚を見せて、他の女に夢中になったり、あの日の続きを他の女としたりするなど、やはり許せない。彼の自由を奪う権利など誰にもないのに、そのような醜い感情を抱いてしまうあさぎ。

それに上手くいったとしても、父親や母親にどう説明するのか。赤の他人と付き合うよりも、紹介することに抵抗がある。親戚だからと、反対されたらどうすればいいのか。

もう苦しいことだらけだ。——みんな、清矢郎の所為じゃん！
もう全部、なかったことにしたいよ！

あさぎは今月、文芸部の冊子に初めて原稿を出した。書いたら今の気持ちですっきりするかもしれない、と思ったのだ。

タイムマシンに乗って、「あの日」よりも前に戻り、「あの日」の自分を消して全ての歴史を無しにしてしまうという文章を書いた。

ノートに下書きし、シャープペンシルで何度もぐちゃぐちゃにし、パソコンで清書した。

しかしそのような気持ちで書いた文章はあさぎ自身にも大したことなく感じられ、一応掲載されたものの、誰からの感想も得られなく、彼女は益々居場所のないような面白くない気持ちになってしまったのだった。

上手く発散出来ないストレスを溜めていくあさぎの眼に映る金魚は、益々その赤を濃く鮮やかにしていく。埃臭いホームの空気と夕方方の淡い光の中、群れをなし大きくうねり出す。

あさぎが夕映と一緒に清矢郎たちの集団を追いつ越そうとするこの瞬間にも、金魚の群れは膨れ上がり、電車の高さを追いつ越すほどの大きさになってきた。

あさぎはその赤の隙間から、もう一度ちらりと彼を見た。

——こっちを見てよ!!

しかし清矢郎は友人と話をしていた。しかもその相手は珍しく女子生徒であった。大人っぽい様子からして、同じ三年生だろう。しかも彼女は、親しげに彼の肩を叩いているではないか。

——いやよ、やめて!!

あさぎの心が噛み付くように吠えた。

——彼に触らないで!

清矢郎は仏頂面をしてそれを受け止めているが、万が一悪い気などしていないとすれば——いや、その彼女に好意でも抱いていれば——。そんな仮定をし、単なる想像に過ぎないのにあさぎの胸中に怖気が走る。

自分はこの幻覚が見えるほど、彼に囚われているというのに。彼のこととあの日のことは、一生涯忘れられないだろうと言うのに。彼の方はあさぎ以外の女性に恋焦がれて、求める日が来るのか? 不安定になったあさぎの心は、ぐらぐらとその揺れを止めない。夏休みになれば会えなくなるという不安も手伝っているだろう。

——いや！ 嫌！ いや！！

その瞬間、彼女が見たものは非常に醜い幻影であった。

赤い金魚が、真っ黒な出目金の大群に変化した。

第13話 差し伸べられた手

近頃あさぎが見るようになった、真っ黒な出目金の幻影。たとえば先日、タイムマシンの文章を書いた時のような、酷く恨みがましい心境の時に。――今のこれは、嫉妬心。

清矢郎が同級生らしき女子生徒と話している横を通り過ぎる瞬間、電車よりも高くなっていた真っ赤な美しい影は、黒く醜いものに変わった。そして夕映と歩いていたあさぎに、その黒い魚たちは襲い掛かってくると、彼女のことを頭から飲み込むように覆い尽くしてきた。

声を上げる間もない。金魚は今まで数え切れないほど見てきたが、このようなことはあさぎにも初めてだった。視界の全てを遮られ、これでは何も見えなくなる。真っ黒な闇を泳いでいるようだ。慌てて手を伸ばし、泳ぐようにもがいても、ぬらりとした感触があるだけ。ただの、闇ではない。金魚がうようよと蠢いている、その中にいるのだ。

ぬるぬると動く黒い影が、セーラー服から伸びた手足にまとわりつく。

――なに、これ!?

あさぎはぞつとして、更に腕を振った。それでもおぞましい感触からは逃れられない。誰かが名を呼んでいる気がするが、それすらもよく聞こえない。

――いや! こわい!!

眼をぎゅっと閉じると、もう一度抵抗するように腕を振ったり、足を払ったり、目の前の黒い影、そして身体に貼りついてくるうねりを取り払おうとするが、全ては無駄に終わる。眼を閉じたまま頭を振った勢いでふらついたあさぎは、形を定めない黒の金魚に足をとられて膝を折る。

それでもどうにか光を探そうと、恐る恐る眼を開けると、今度は

真っ赤な鮮血のような色に戻った金魚の群れが彼女の双眸に飛び込んだ。

緋色。濃すぎるほどの、赤。まるでその血を彼女に注ぐように。体内に浸蝕するように。黒とその気味の悪いギャップに、あさぎは思わず叫んだ。

「――いやああっ!!」

そして頭を抱えると、下を向いてうずくまる。

「あさぎ!!!」

聞き覚えのある友人、夕映の心配している声が遠くで聞こえる。だが突然の金魚の暴走に自分がどうなってしまったのか分からず、恐怖に震えるあさぎにはそちらに眼を向けることすら出来ない。――恐い。今は何も考えられない。

顔上げればまたあの幻に襲われるような気がして。眼を開けても、あの気持ちの悪い金魚以外の何も見えない気がして。このまま一生幻影に囚われて、この中に閉じ込められてしまうような恐怖に震え――それは罰なのか。あの日、女に目覚めてしまった汚れた少女への。

己への罪を犯した少年を相手に、抱かれることを想像してしまっただ、あさぎへの。

――私が汚くていやらしい子だから、こんな目に遭うの？ 誰かにも必要とされなくなつて、消えなきゃいけないの？

混乱するあさぎの胸には、絶望しか浮かばない。

全ての音が遠のき、何も聞こえなくなる。

が、その時。

力強い何かに腕を引っ張られ、あさぎは赤と黒の金魚の大群の中から、ずるりと引きずり出されたのであった。

現実には腕を引っ張られたのだ。強い力で。それが誰かの熱く大き

な手であることに、しばらく経って彼女は気が付く。

それだけは信じられる気がして、それだけが今の自分を救えるもののような気がして、あさぎは引かれた方向に顔を上げた。

「何やってるんだよ」

心配そうに彼女を覗き込む眼鏡を掛けた少年の顔が、赤い金魚を背に立って居た。しっかりと居た。

それが幻であるならば、このまま幻の中で生きていきたい——そう思うほど、安堵に包まれる。しかしその瞬間、金魚の不気味な大群はぱちんぱちんと泡のように次から次へと弾け飛び、また元の可愛らしい姿へと戻っていった。そして数はいつもよりも多いが、駅のホームをいつものような穏やかな動きで、その背の高い少年の周りをゆったりと泳ぎ始めたのであった。

あさぎの耳にも人々のざわめきや、駅のアナウンス、電車の機械的な音などが戻ってきた。まだ明るさを残している夏の夕暮れが、そこにはあった。

呆然とするあさぎの腕を握り、彼女を心配そうに見ているのは……言わずと知れた、清矢郎であった。

無表情が崩れている。どうしてよいのか分からないような、だが彼女を心配してくれていると伝わる真剣な顔。子供の頃、伯父に叱られている彼を心配し、火がついたように泣いたあさぎを慰める時と同じ顔だった。

この手があったからこそ、この世に再び戻ってこられた。その温かさにほっとして、あさぎの眼から、ぽろりと涙が零れた。

「おい？ 大丈夫か？ 具合でも悪いのか？」

少々焦ったようにあさぎを覗き込む清矢郎だったが、

「とにかく、立て」

彼女の細い腕を再び強く引いた。——何で清矢郎が、と混乱していたあさぎであったが、そこでようやく、周りの大勢の人々が彼女に

異様なものを見るような視線を向けていることに気付く。

公衆の面前で幻覚を見て、叫び、うずくまるという醜態を晒してしまった。知らない人々だけでなく同じ学校の生徒たちにも、何より恋心のようなものと恨みを同時に抱いている清矢郎にも見られた。あさぎの顔がぶわっと一気に熱くなり、これまでにない羞恥と恐怖に身体が震え出す。彼女は俯くと清矢郎の手を振り払おうとした。これでは彼も一緒に変な人に見られてしまうのではないか……。しかし力では敵わないそれは決して離されず、彼女は「いやっ」と小さく叫ぶが、余計に無理矢理手を引かれる。

「いいから、立て。ここじゃ皆の迷惑だろ。立てないなら担いでやる」

厳しくもあくまで冷静にそう言う彼は、やはり昔と同じ、あさぎと血の繋がった頼りがいのある兄貴分であることに変わりなかった。その言葉を聞いたあさぎは、抱き上げられるのだけは勘弁、と咄嗟に思い、清矢郎の手の力を借りると下を向いたままよろよろと立ち上がった。

貧血の時のように力が入らない。息苦しく、頭がまだ痛く、くらくらとする。確かに彼の助けはありがたかった。「あさぎ、大丈夫！？」と手を添えてくれる夕映にも弱弱しく頷く。

「とりあえず、向こうで休め」

彼は部活でも具合が悪くなった部員の面倒を、こうして看てきたのだろうか。周囲に見られていることを忘れたいあさぎは、てきぱきと指示する清矢郎の慣れた様子にどうでもよいことを考える。

その少し偉そうな口調もまた昔、あさぎの世話を焼いていた時と同じ――いや、その時よりも更にぶっきらぼうになっている気もした。このような状況だから当たり前前であるが。

「……加納、その子何なんだよ」

あさぎをホームの端に連れて行こうとする清矢郎に、彼の友人らしき少年が後ろから声を掛けた。不思議な少女を庇う彼の気迫に押

され、戸惑っているようだ。

人ごみの中突然叫んで座り込んだ、おかしい女子高校生に手を差し出したのだ。彼の友人が驚くのも無理はない。あさは周囲の視線を改めて恥ずかしく感じ、清矢郎にも恥をかかせたことを思い知る。この先清矢郎が同級生に何を言われるかと、ただ彼に申し訳なく思い、立ったまま身を縮ませる。

清矢郎だって、そんなことは予想出来ているだろう。そう思うと、確かに身内ではあるが、この場であさに手を貸すには、途轍もなく大きな勇気が必要だったのではないか。

それでもその腕は離されない。そして何処までも清矢郎は平然としていた。

「知り合い、だ」

声の聞こえてくる方向からして、友人の方も見ず、あさぎの方も見ず、ただ前だけを毅然と向いているようだ。惑うことのない彼の低い声を聞き、あさはそこで思わず顔を上げた。

——どうして、一番手っ取り早くて納得してもらえるのに、「従妹だ」って言わないのかな……。

あさはそう思いながら、その眼鏡の横顔と、彼の頭上をふよふよと呑気に浮遊する金魚をただぽかんと見上げていた。

第14話 動き出す時

夏休みを直前に控えた夕方。あさぎと清矢郎は、一番線ホームの端に置かれたベンチに座っていた。ここは特急列車の末尾の車両が止まる位置。今の時間にこの場所で電車を待つ人はおらず、改札と階段の間を大勢の人が行き来している様子が、空間を隔てて見える。時々電車が、都会の方向に人を乗せてざあっと移動し、反対からも大勢の人を乗せてやってくる。ベンチの後ろは屋根のある駐輪場で、自転車動かす重い音が時々思い出したように聞こえてくる。

誰も居ない環境にあさぎも落ち着きを取り戻し、清矢郎に渡されたペットボトルのスポーツドリンクをこくりと飲み込んだ。しかし今度は隣に居る彼のことを思うと、落ち着かなくなってくる。金魚はそれこそ「水を得た魚」のように、先ほどの不気味な様相が嘘のように、空中を生き生きと跳ねている。

あさぎを引っ張ってきた清矢郎と言えば、彼女と少し距離を置き、同じベンチの上にどっかりと座っている。黒い学生ズボンの長い脚を前に投げ出し、片方の脚を上にも組むと、肘掛に頬杖をついている。同じスポーツドリンクは、とっくに飲み干されていた。近くの自動販売機で彼が二本買い、あさぎにも「飲んだ方がいい」と渡してきたものだ。

——部活で、こういうの飲んでるのかな。

あさぎは滅多に買わないスポーツドリンクを改めて眺めた後、何を考えているのか、線路の方を向いている無表情の清矢郎をちらりと見上げた。半袖の白いシャツから伸びた腕は、やはり先日の試合結果も頷けるほどの逞しいものであった。

この大きな手に、助けられたのだ。

「もう、大丈夫なのか？」

「え？」

清矢郎が線路の方を見たまま、突然話しかけてきたのであさぎは驚いた。ややあって、自分のことを聞かれていると分かった。――あの公衆の面前で幻覚に飲まれ悲鳴を上げたところを、彼が助けてくれたのだ。

恥ずかしかっただろうに。頭のおかしい子だと思われたよなあと、あさぎは心配になるが、清矢郎は友人の前でも堂々とし、今もあさぎに付き添ってくれている。

「う、うん、大丈夫。……助けてくれて、ありがとう。これも買ってもらっちゃって、ごめんね」

自分の醜態と彼に助けられたという事実が恥ずかしく、先ほどのことを思い出すとあさぎの声は徐々に小さくなり、最後には俯いた。

・・・・・・・・・・

身内として具合の悪くなったあさぎを見捨てておけなかったのか、雑然としたホームからあさぎの腕を引き、彼女をひとまず何処かで休ませようとした清矢郎。あさぎは大勢の視線の中で男子に腕を引かれていることも、叫び出したことも恥ずかしくてたまらなかったが、彼の力は有無を言わせないものがあつた。

夕映も心配し、清矢郎に掴まれた反対の腕を支えて、あさぎを助け起こした。しかしこうなってしまった原因の相手が隣にいる以上、あさぎは夕映に何も説明できず、「うん、大丈夫だから」とそれだけを繰り返した。

「心配かけて、ごめんね」

申し訳なさそうにそう言うあさぎと、初めて見る北高生の少年を、夕映は見比べた。しかしあさぎが夕映よりもこの少年の手に体重をかけ、あさぎの意思でそちらに歩こうとしていることに気付いた彼女は、この少年があさぎが電車で気にしていた北高の相手だろうと勘よく察したようだ。まだ心配そうな表情はしていたが、最終的に

二人のことを見送った。

「ちゃんと帰れたら、あとでメールしてね！」

最後にあさぎにそう呼びかけて。

痛いほど視線を浴びていたあさぎであったが、運良くそこで電車がやってきて、ギャラリィたちを運んでいった。電車が動く音と共に自然と人波も散っていく。清矢郎は再びあさぎの腕を引き、歩き出した。

――あの四年前の日以来、男性から初めて触れられている、という事実にあさぎは気付いた。しかも、性の対象と見てしまった相手に。そう思うと、触れられた部分から腕全体がどんどん熱くなってくる。

元の可愛らしい様子に戻った金魚と清矢郎を同時に見ながら、あさぎはふわふわとおぼつかない足取りで、ベンチまでやってきた。

人から見られることもなくなりほっとしたのも束の間、あれだけ騒いだのだ、ベンチに座ったあさぎに、今度は駅員が近付いてきた。しかしそこで、あさぎにスポーツドリンクを渡した清矢郎が、

「従妹です。貧血か何か起こしたみたいで」

駅員に堂々とそう言い切った。今度はそっち！？ とあさぎは慌てたものの、彼女も何度も頷き同意したため、駅員も不審そうな顔はしていたが不問としたらしい。休むなら駅務室の方へ、とは言ってもらえたが、あさぎも「大丈夫です。少し休めば歩けますから」と小さい声だが、しっかりとした口調で答えると首を振った。

若い駅員はまだ少し釈然としないようであったが、いつでも見回れる場所であったため、何かあったら声を掛けるようにだけ言うと思っていた。

清矢郎の中で、従妹と言う時と知り合いと言う時は何が違うのか、もしかして自分と同じ――？ なんてことはないよね、と心の中で思い、一人どきまぎとするあさぎであった。

.....

そして今に至るのである。助けたことに対してのあさぎのたどたどしい礼に「別に、いい」と呟くと、清矢郎は再び前を見たまま問い掛ける。

「病院は？」

「そこまでしなくても、いいよ。歩けるし、……病気じゃないし」

「じゃあ何なんだよ」と聞かれたら、あさぎはどうしようかと思った。正直に答えるのか。彼があんなことをした所為で見えるようになった金魚の幻覚に、彼への恋情などから苛々して嫉妬した結果、飲み込まれました、などと。

そんなことを言えば、清矢郎はどう思うだろうか。彼こそ気持ち悪く思うのではないか。そんな醜くおぞましい感情を、自分に抱いているのかと。

——でも先に悪いことしたのは、せいちゃんじゃないか。

何も言われていないが、あさぎは心の中でむくれてしまう。

だが悲鳴を上げた時点で頭がおかしいと思うだろうに、よく見放さなかったな、とあさぎは再び不思議な気持ちで清矢郎を見た。その視線に彼が気付く。そこで電車がまた一本通り過ぎ、その短い髪を揺らした。あさぎの伸びてきた髪も揺れ、唇に触れる。

「顔色は戻ったな」

一瞬だけその顔を確認すると清矢郎はまた前を向いたが、あさぎはそこでもう一つ大事なことに気が付いた。

「ご、ごめん！ 電車、乗り過ぎちゃったよね。予備校は？ もう間に合わない？」

予備校のためか帰宅のためかは分からないが、あさぎがそこでようやく彼が友人を見送った——つまりは予定の時間に乗車しなかったことを思い出し、急いで謝罪を付け足す。

「大丈夫だ」

しかし取り付く島がないとはこのことだろう。一言で言い捨てられる。

「ごめんね……」

あさは再度謝ったものの、清矢郎は答えなかった。確かに元々彼が悪いのかもしれないが、このように迷惑を掛けていい理由にはならない。

しかし四年ぶりにこれだけ長く話をしているが、昔と変わらなければ彼は嘘を言わない少年だ。「大丈夫だ」と言えば大丈夫なのだろう。それに怒っていないからこそ、自分のことを心配して隣に居てくれるのかもしれない――。そう思うとあさぎの心が少しずつときめいてくる。

だからと言って嫌われていないという証明にはならない。あさは彼の横顔を意を決して見上げると、更に問い掛けた。

「でも、どうして助けてくれたの？ 頭のおかしい子だって、思ってたでしょ？ あんなところで叫んで」

金魚が見えるという話は誰にもしなかったが、雰囲気にかかしら出ているのか中学生時代は「変なヤツ」と男子に馬鹿にされ、男性が苦手になった要因のひとつにもなっている。

「……あさぎなら、あり得るし」

清矢郎のその言葉に、あさはぷくりと頬を膨らませた。

――何よ、それっ！

残念ながら、当たっている。幼い頃のあさは、蟬の鳴き声がどういう喋り声に聞こえるか、など清矢郎に得意げに語っていたものだ。元々変な子だと思っていた、と言いたいのだろう。

「ひど……っ」

怒って彼の広い肩のひとつでも叩きたくなったが、それでもあさを助け出してくれたのは事実であり、四年ぶりに「あさぎ」と呼ばれたことも嬉しかった。しかも背筋がぞくりとするような低く響く声で。そんな感情は出さずに、彼女は拗ねたままの表情を作って

いた。

「それに、あんなところで、身内が叫んでりゃな」

そして清矢郎が続けた言葉に、あさぎはまた顔を真っ赤にする。

——もう忘れて！　と言いたいほどの恥ずかしさと、「身内だから」心配した、という言葉への苛立ちから。昔からやんちゃなあさぎの面倒を見ていた彼は、周りの迷惑にならないよう、思わず手を出したに過ぎないと言うのか。

「な、何よ。誰の所為だと思って……」

あさぎは悔しさから思わずそう言いかけたが、はっと気付いて口を手を当てた。

清矢郎の視線が、ゆっくりとあさぎへ向く。聞き返さないで——、とあさぎは首を竦めて願ったが、

「誰の、所為なんだよ」

あの真っ直ぐな視線と共に答えづらい問いを返され、彼女はぎくりと押し黙った。

第15話 謝罪

四年ぶりに会話を進行させていた二人だが、ここでまた無言になってしまう。コン、コン、という音にあさが視線を泳がせると、空になったペットボトルを持ち無沙汰に振る清矢郎の手が、眼中に飛び込む。透明なボトルを突く金魚も一緒に。

この手を何度思い描いてきたことか。顔が熱くなる。動悸が速くなる。

——言えるわけ、ない。

金魚のことも。この汚い欲求のことも。

だが無視しないで言ったように、わがままかもしれないが清矢郎に対し、自分をないがしろにして欲しくない、あの日のことを忘れて幸せになって欲しくないという要求はある。転がってきたこのチャンス。今度こそ踏ん切りを付けるため伝えるべきかもしれない。しかし見えてきた気持ち、彼への異常な性欲と、それが恋心ゆえではないかという仮定。そんなこと、十六歳の少女には到底口に出来ない。だが、

「別に身内だから、だけじゃねえよ」

いつでも迷いを打ち砕く、声。再び前を向き吐き捨てるように言う清矢郎を、あさは目を丸くして見る。

「お前の方が、まだ何か言いてえこととか、話してえこととかあるんじゃないの」

先日の柔剣道場での一幕を、二人同時に蘇らせる。あさぎから近寄っていったくせに、一言叫んで逃げ出した。困ってしまい再び俯こうとするあさぎだが、次の彼の予想外の言葉に顔を上げることとなる。

「……駅でも、ずっと、こっち睨んでたみてえだし」

「えっ!？」

あさぎの口がぽかんと開く。清矢郎はあさぎの驚いた顔を見下ろした。彼女もまた嘘がつけない性質である。その表情に、彼は自身の言葉に確信を持ったらしい。

「し、知ってたの!？」

「違うかも、とも思ってたけど。なんとなく」

「いつから……」

「少し、前から」

清矢郎は目を逸らすと、再び膝に頬杖をついた。あさぎはその様子を愕然と見ていた。電車の通る音も人に見られているかどうか、金魚のことも気にならないほど驚愕していた。

「う、うそ……」

あさぎは頬に手を当てる。

「この前の試合の時だって、わざわざ話しにきたのかと、思った」手で隠しても無駄だった。あさぎの頬が、夕暮れよりも赤く耳まで染まる。確かにあれば、もやもやしたものをどうにか晴らしたいと、あさぎの方から彼を探しにいったようなものだ。途中で邪魔が入り、言葉も思いつかなかったが。

困惑から逃げ出したくなるあさぎに、清矢郎の言葉が更に畳み掛けられる。

「今日だって、そうだっただろ。だからあさぎがホームに居たのも知ってたし、分かんねえけどもしかしたら俺の所為かもって、叫んだ時、思った」

——恥ずかしい!

これまで駅ではずっと、嫉妬や複雑な想いから濁った目で清矢郎のことを見ていたのだ。どれほど醜い顔をしていたのかと思うと、あさぎは泣きそうになってくる。恨みがましく、一方的に恋するストーリーカーのように、彼を追いかけていたのだ。

「法事で会った時も、中学の頃も……こっち、睨んでたよな」

一体、どれほど前から気付かれていたのか。更には五月の法事や

何年も前のことまで指摘され、あさぎの心拍数が上がってくる。

「俺のことなんて、もう見たくもねえだろうって思ってた。なのに
お前は何度もこっち見てくるから、何か言いたいことがあるのかっ
て、ずっと思ってた」

——全部見抜かれている！？

もしかしたら、清矢郎の方でもきっかけを探していたのだろうか。
「言いてえことあるなら、言えよ。俺が悪いんだから、何言われて
も、聞くし」

もう一度、視線と一緒に真っ直ぐにあの日の「事実」を突きつけ
てくる清矢郎。彼もまた、四年前の「罪」から逃げないと決めたよ
うに。清矢郎の方が「悪い」はずなのに、今度はあさぎが顔を逸ら
してしまう。しかし彼はそれを違う意味に取ったらしい。

「口も聞きたくねえなら、ごめん」

自嘲的な響きと共に彼の顔が逸らされようとしたため、あさぎは
慌てて頭を振った。

「ち、違う！　ずっと、喋りたかった。あの時言ってみたのに、無
視してほしくなかった——」

先日の柔剣道場での言葉を思い出したのか、清矢郎の細い目が見
開かれる。

二人の周りを泳ぎ、時に煽り立てるように、時に宥めるように寄
り添う金魚。その中で視線が絡み合った。

——嗚呼、そうだ。ずっとこうして、一個の「あさぎ」が居るこ
とを、清矢郎に認めて欲しかったのだ。たとえあの時のことがただ
の性欲からであったとしても、誰かの中に、生きていきたいのだ。

何を言えばいいのか分からないが、今、念願は叶った。その喜び
に呼応するようにあさぎの胸は震え、金魚は乱舞している。

想像もしていなかったことを言うあさぎに、清矢郎は狼狽した声
を搾り出す。

「……話しかけて欲しくねえと思っていた。違うのか」

あさぎは唇を噛み締めて、首を大きく縦に振った。長い間あの件で苛々していたのだが、どうやら清矢郎も少なからず自分のことを気にしてくれていたことが分かり、内心ではほっとしていた。

「どうして――」

しかし、その問いには何度でも口を噤んでしまう。

「どうしてだよって、お前に話しかけられてから悩んでた」

たどたどしくも静かに紡ぎ出される清矢郎の言葉に、あさぎの胸が高鳴る。彼も私のことを、あの試合の日からずっと考えていてくれたんだ、彼の胸の中に少しでも居たんだ――と。恋愛感情ではないかもしれないのに、この高揚感は何なのだろう。

「四年前から、謝ろうって何度も思ってた。でも謝りそびれて、時間だけが過ぎた。あさぎは忘れたはずだろ。思い出したくもねえ、俺の顔なんか見たくねえ、声も聞きたくねえって……普通、そう思うだろ。でも練習試合の時、お前から俺の方に来て、俺のことが嫌いで、俺が悪いのって言ったよな。だから、やっぱり謝らなきゃいけないって思った。別に何言われても構わない。殴りたきゃ、殴ればいいし、頭下げろつうならそうするし」

過去を悔いているというのに、一種の潔さすら感じるのは、彼がそれでも意志を持った強い瞳をあさぎに向けて、微動だにせず座っているからだろう。

清矢郎らしいな、とぼうつとそれを見ていたあさぎであったが、どう答えようかと考えているうちに、次の彼の一言が彼女の心を抉り取った。

「――ごめん」

強い光を保っていたその眼差を、微かに後悔に揺らしながら。

「今更だけど、四年前の、こと」

瞬間、あさぎの心がささくれ立った。――違う。ざわりと黒緑の

波が立つ。赤い金魚と黒い金魚が一緒にびちゃびちゃと跳ねた。

清矢郎が目の前であさぎに向かい合ってくれている今は、あの恐ろしい幻覚に飲み込まれることはない。寧ろ何かが燃え上がろうとするあさぎの心を象徴し、魚の群れは勢いよく回遊している。

——欲しい言葉は、そんなものではない——。

謝罪などではない。そんな眼ではない。四年前のあの事件を、そんな風に「表現」して欲しくない。

違う。違う！ もっと——。

「やめてよ！ 謝らないでっ」

夕方の駅のホームのベンチで。知らない人々がテレビの画面の中のように遠くを通りゆく中、幾度も電車の埃臭い風を浴びる中、あさぎは固い声で清矢郎の謝罪を遮った。

第16話 誘惑？

夕暮れの埃臭い風が、あさぎの長く伸びてきた髪を揺らす。謝罪を断られてもなお、清矢郎はあさぎの眼を見つめていた。もう逃げない、と決めたように。何処か、切なげに細められて。まるでそれは、懺悔というよりも憐憫の情。

あさぎの脳裏には、四年前のことが蘇っていた。それは清矢郎も同じだろう。胸や局部に触られたことを思い出されているのは恥ずかしい。今の彼の、その大きな手に触れられることを夢想したのも、恥ずかしい。

だが先ほどあそこまで感情が爆発したのも、そもそも金魚なんてものがこうして見えるようになったのも、全てこの少年の所為なのだ。でも、何をどう言えばいい。どう説明すればいい。口を開けば彼への――。

重い沈黙に対し、先に口を開いたのはまたしても清矢郎の方からだった。

「俺は、あさぎに、何をすればいい」

一語ずつ区切られる言葉に顔を上げれば、彼はあさぎに実直そのものの眼差を注ぎ続けている。その光から感じられるのは、やはり、後悔。

――彼はきつと償いたいのだ。だからきつと人前で狂ったあさぎを何も省みずに助け、そして口数も少なくせにあさぎよりも先に沈黙を破り、自分の気持ちよりも彼女の気持ちを吐き出させようとする。

彼なりに、あさぎを大切にしようとしているのだ。昔と変わらない真面目な彼のままなら、そうだろう。だが、今のあさぎにはそれが許せなかった。

「だから、いやなの。謝らないで……。だって、謝れば、それで終わりになるんでしょ？ 謝って許されれば、せい……ちゃんは気が

済むかもしれないけれど、私は、それじゃ嫌！」

いつまでもこんな風に大切にされていては、あさぎの望むものは何も手に入らない。血が繋がっているからこそ、傷つけ合わなければ、手に入らないものがある。

清矢郎はあさぎの言葉に、再びはつとした表情をする。助けてくれた人に何を言っているのだろう、とあさぎは自分に嫌気が差すが、滾る気持ちを抑えることも出来ない。

「謝って、私が許せば、あの日のことがなしになっちゃう」

——どうしてだ。あんな出来事、全部なかったことにしたいんじゃないのか？

あさぎにも彼の心の声が聞こえてくるようだ。清矢郎の見開かれた眼がそう物語っている。あさぎは首を横に振った。

「だから、いやなの！ なしにしないで！ 忘れちゃだ、一生……覚えてなきゃ、やだ！」

——無視しないで。

「『私』を否定しないで！！」

清矢郎に求められた、それを「事実」にしたいのだ。自分が彼にとって、必要なものであると、劣等感で拗ねている今の精神状態だからこそ、あさぎは証明したがつている。

しかし彼はこれで終わりにしたいのかもしれない。ただの気まぐれや性への興味だけでああいうことをし、あさぎに対して従妹以上の感情を持っていなければ、そう思うだろう。だがあさぎの方は、最早それでは済まない。彼を「加害者」、自分を「被害者」とすることで、彼の一生を縛ろうとしている。

心から清矢郎に求められたい。必要とされたい。自分の居場所が欲しい。

相手が身近な従兄だからではない。昔から憧れて信頼していた清矢郎だから。成長した姿から目が逸らせなくなったから。だから彼がいいのだ。

他の女性に同じ事をして欲しくない。あの日幼いあさぎに向けた、「あの眼」を誰にも向けて欲しくない。私だけを――。

まるで子供のわがままのように、悲痛な声で空気を切り裂いたあさぎは、はあ、と熱いため息をついた。金魚が踊る、その理由は言えずに「分かってよ」と言うように、少しだけ身体を前に倒して清矢郎の眼を下から見上げる。

こんなことでは清矢郎にも嫌われてしまうだろう。だからと言って、差し伸べられた手を離したくもない。今許してしまえば、何も残らない。

彼が欲しい。あの日のようにもう一度、彼に一線を踏み越えて欲しい。

あさぎには男女の駆け引きの方法など分らない。冷静に物事が判断出来るほど、大人でもない。ただその葛藤に苦しみながら、唇を噛み締めて、清矢郎の眼を必死に見つめる。逸らして欲しくはなかった。

だが当然の如く、彼の瞳は困惑の色を強めていく。それでもあさぎの要求の意味を凶ろう、それを叶えようとじつと彼女を見据え、その言わんとすることを考えている。そんな彼だから「好き」なんだ、とこんな時だがあさぎは自覚していた。

「どういう、意味だよ」

低い声は更に低く、掠れたものになる。

「お前に、『ああいうこと』をしたことが、お前を否定することに、なるんじゃないのか？」

清矢郎に示唆されるたびに身体が熱くなるあさぎだが、再び首を横に振った。

この逞しい身体に、今はあさぎの方が触れたいほどののだ。だから、その逆である。

「違うの……」

従兄に身体を触られたくせに、それを忘れるな、と言う。その先

にある要求を、どれほど鈍感な少年でも薄々と感じ取ってはいるだろう。

清矢郎は彼の想像と異なるあさぎの本心に、完全に戸惑っていた。その動揺があさぎに伝わり、彼に申し訳なく、居たたまれなくなる。それでもあさぎに対し罪を償いたいと決めた清矢郎は、背筋を伸ばしてベンチに座り続けていた。

初めて「女」として求められたこと。だから金魚が見えるようになったということ。

それくらい、彼の影響力が強いということ。まるで刷り込みのよう。

それを、恋愛感情と呼べるのか分からないのだが。

「ごめん、どうしよう……」

あさぎは顔を上げた。髪がさらりと下方に流れる。困ったような眼を清矢郎に向ける。こんな時だけ、彼を兄貴分と頼るのは卑怯だと思いがち。

「私、……せいちゃんじゃなきゃ、だめに、なってる」

彼の心が此処にあるのか分からない。彼が今のあさぎを「異性」として見ていないならば、これほど困らせる一言はない。だが、金魚が証明している。あの日から、「雄」としての彼に囚われている。

あさぎの主張に、清矢郎は息を飲んだ。それでも逸らされない、この真っ直ぐな瞳。そうだ。これが、欲しかったのだ。そうでなければ金魚のことだって、とっくに嫌いになっていた。

——だけど恐い。拒絶されることが。清矢郎があさぎのことを煩わしく思い、いつかこの心が離れることを望まれることが。

それでも彼が今、あさぎを見てくれていることは、うっとりするほど嬉しいことなのだ。

どうしてよいか分からない。どうすれば手に入るのか分からない。ただその熱に浮かされるように、あさぎは呟いた。その強靱な心を、

濡れた金魚の尾びれで撫でようと。

「責任、とってよ……」

その緋色のゆらめきで、誘惑までもが出来るなら、どれほど嬉しいことだろうか。

「――分かった」

だが、電車の音と駅員の間延びしたアナウンスが聞こえる現実の世界で、あさぎに届いた言葉は、彼女の壊れた心を重く受け止めた故の、決意を固めた清矢郎の声だった。

驚くほど、簡単に受け入れられた要求。責任感の強い彼らしい答えだった。あの出来事を深く後悔し、家族を哀しませたくないと言えず、彼一人で全てを解決しよう、あさぎが望むことは何でも叶えようというのだろう。

向けられる視線があまりにも哀しく優しくて、あさぎの胸は違和感と絶望で詰まりそうだった。

だがその一瞬。

高い硬度を保っていた清矢郎の瞳が、彼女の熱のこもった一言に溶かされ揺れたこと。その心の隙間に、一陣の風が迷い込んだこと――に、あさぎは気付いていなかった。

第17話 告白?

時間と共に電車が次々と流れていく夕方の駅のホームで。「清矢郎じゃないと駄目になっている」「あの日の責任をとって」と彼に突きつけたあさぎだが、これだって十分、告白に聞こえるじゃないか、と今更焦り出す。

しかしそれに動揺する以上に胸が締め付けられそうになっているのは、清矢郎があっさりと、そして重苦しい声でそれを了承したからだろう。それに相手が従兄であるからこそ、愛の告白という単純な言葉でくくりたくはない。

これまで迷いのなかった清矢郎の瞳の奥に、僅かなゆらぎが存在していた。しかしあさぎはそれに気付かないまま、彼から落ち着いた声で尋ね返された。

「でも責任、つうけどさ。何をどうとれば、納得するんだよ」

素っ気無い言い方だが、突き放されてもいない。「あさぎに何をすればいい?」と最初に尋ねた時と同じような、同情的な響きも感じる。彼女を苦しみから解放させるため、その望みを全て聞こうとするように。

——子供の頃、あさぎがお菓子が欲しいと言った時も、カブトムシを取ってきてと言った時も。清矢郎は黙っていたのであさぎは無視されたかと思っていたが、後からちゃんと彼女の望んだものを、無言のまま渡してきた。

思い返せば、彼はいつでもあさぎの望みを叶えようとしてくれていた。それくらい優しくかった彼が、何故あの日狂ってしまったのかあさぎには分からないが、そんな優しい日々を思い出す。

そのくせ己には厳しくひたむきに剣道に打ち込み、叱られても泣かない清矢郎。その姿もあさぎの胸に焼き付けられ、だからこそ「せいちゃん、だいすき」と当時は素直に思っていた。

その時の優しさは義務感ではなかったはずだ。家族に対する無償の愛のようなものだ、あさは感じていた。だから彼に懐いていたのだ。なのに、今。清矢郎は償いのために、義務であさに尽くそうとする。それがあさは気に入らなかった。自分の気持ちが一方通行しているように。

確かに過去の罪を詰られ、性的なトラウマを受けたと主張されれば、幼い頃のように純粋に優しくも出来ないだろう。しかし清矢郎が義務感を持っていたのは、あさの本心に欲しいものは手に入らない。

「……責任とって、ほしいけど、義務感じゃ、いや」

恥ずかしそうに、だが真剣に言うあさの言葉に、清矢郎は困ったように眉間に皺を寄せた。

「だから、どうすりゃいいんだよ。言ってることが、わかんねえよ」
十八歳の彼にはこれ以上女性心理を汲むのは限界か、お手上げだと言う様に、腕を組むとベンチに深く凭れ込んだ。しかし身体の半分はあさぎに向けており、彼女の話を真面目に聞こうとしてくれていることは伝わる。

そんな誠実な彼に、あさは祈りながら話を続ける。

——どうか、どうか、私の気持ちを受け入れて。

祈りに合わせて、金魚が跳ねる。

「だから、せいちゃんが、あ、あんな変なことしたから、全部、いけないんじゃない」

「……そうだな」

「それで、私もおかしくなっちゃって、苦しくて、忘れられなくなっちゃって、どうしていいのかわかんなくなつて——全部せいちゃんのおかげで」

最早何を言っても、相手のことを責めるばかり。これではやはり嫌われてしまう。だが、許せば此処で終わりになる。葛藤の中、あさぎの想いは訥々と口にされる。

「なのに、せいちゃんは私のこと無視して」

「――だから無視なんか、してねえって」

「え？」

いつの間にか俯いていたあさぎは、清矢郎を見上げた。そう言えばあさぎの視線に、彼も以前から気付いていたと言っていた。それを思い出し、あさぎの顔が再び熱くなる。その気持ちの高ぶりのまま、一気に言い切った。

「でも、今日までそんなこと知らなかったし、私はあの時からずっと、苦しかったんだから」

「被害者」であることを盾に彼を脅しているようで、これではどちらが「加害者」なのか分からない。こんなのはただの気持ちの押し付けだ。そう思いながらも、あさぎは止まらない。いい加減、解放されたいのだ、この煩悶から。

「あの時からずっと、せいちゃんのことばかり考えて……せいちゃん、いっぱい……なんだから」

流石に金魚が見えているということは、言えなかった。頭がおかしいと思われることも恐いが、何より清矢郎のことを考えている時以外にも、別の身体の事情で見えてしまう――つまりは、欲情の証と言える現象だから。だから咄嗟に言葉を探し、似た意味合いの言い方に変えた。

「せいちゃんじゃなきゃ、だめ、責任とってってそういうこと……」
全て言ってしまった後、あさぎはくたんと力を抜いた。

――やっぱり、告白、みたいじゃないか……。

呆然とした表情で清矢郎と眼を合わせたあさぎは、顔を手で覆い膝を見た。泣きそうであったが、泣いていると思われなくなかった。泣き落としをしたいわけではない。ただ恥ずかしくて、困っているだけだ。

唇を噛んで、鼻がつんと痛むのを堪える。

あの日のことが忘れられないのは、性的な意味で。

それをはっきりと言えないまま、二人の間で宙ぶらりんになっているが、何か甘美なものを匂わせる気恥ずかしさが漂っている。

金魚がその甘酸っぱい空気の粒を餌にするように、口を上向きにして啄ばみ合っている。

そこであさぎは、改めて気付く。もしも清矢郎に好きな人や、付き合っている人などが居たらどうするのか。その相手に彼を渡したくはないが、困らせてしまっただけではないか。

何より従妹を特別扱いしろなどと、強要されても辛いだけではないか。

許してやるべきなのか。

自分の想いも、悔しさも、幼い頃の淡い憧れも、全部全部殺して、忘れなくてはいけないのか――。

眼を閉じても瞼の裏にしつこく見える、赤い光。もう勘弁して欲しかった。

本当は彼のことなど、忘れない。

――全部無かったことに出来ればいいのに。

ホームに入ってくる電車の音に、あさぎは一瞬線路にでも飛び込みたいような衝動に駆られる。

緊張と葛藤から激しくなる動悸に、あさぎが呼吸困難にでもなりそうになった時、更に心臓が止まるかと思う一言が、下った。

「よく分からんけど、とりあえず、……付き合え、とか、そういうこと？」

長い沈黙の後の割には軽い表現の言葉に、あさぎは眼を見開く。しかし確かに、そういう性的なことをした「責任」をどのように取ればいいのかとなると、結婚など出来ない今、そういう結論になってもおかしくは、ない。

何を、言ってるの？

これは、夢？

あさが信じられないような顔を上げると、うわあい、うわあい、と喜ぶような金魚たちの舞の中で、清矢郎はあさを一度見ると、視線を逸らした。表情は固いが、その頬がわずかに染まっている。あさはそれが夕日の所為かと思った。

だが一瞬あさぎに向けられた視線には、先ほどの同情や懺悔とはまた別の、何かひとつの覚悟を秘めたようなものが見えた。どちらかと言えば、竹刀を振っていた時の眼に近い。

彼は嘘を言わない男だ。

——ってことは、本気で！？

「え！？」

あさは思わず大声を上げる。

「な、なんで、なに、言って……」

混乱するのもそのはずだ。けしかけたのはあさぎの方からだ。こんな形でも生まれて初めて男性に交際を申し込まれたのだから。

だが、相手は身内だ。清矢郎の方は恋愛感情からのものではなく、あさぎの気が済んだところで関係の解消を求めてくるかもしれない。

——でも、嬉しかった。この提案を取り下げられたくはない。そう思ったあさは、

「なんで、そんなこと……？ う、ううん！ 嫌、とかじゃなくて、その、いいのかなって。あの、色々大変だし、せいちゃんだって、好きな人とかいるかもだし……」

何だかんだと言いつつ、焦ってその提案に応じようとしてしまう。言葉のひとつひとつが相手への想いを表しているようで恥ずかしく、どもりながらも彼の真意を尋ねた。

遠くを過ぎる人の流れが、ぼんやりと霞んで見える薄暮時。これだけ長く話していれば、既に知り合いに目撃されているかもしれない。しかしこのような公共の場所であるにも関わらず、一人眠る夜

以上にあさぎの身体は熱くてたまらなかった。

第18話 関係のはじまり

「そういうのは、いない」

ぼそりと呟かれた清矢郎の言葉に、あさぎの胸が躍る。「好きな人がもしいれば」の部分に対しての否定だろう。

「か、彼女とかは」

「いるわけねえだろ」

あさぎの矛盾した質問に、清矢郎はつつけんどんに答える。しかし嬉しい答えに彼女の心は舞い上がってしまい、無愛想なことなどまるで気にならない。

——せ、せいちゃんと、付き合えるの？

すっかりと大人びた三年生が、中学を卒業して四ヶ月の一年生を相手にしてくれるということもあさぎには驚きだった。

それはとても魅惑的な匂いを放ち、棘を伴って花を咲かすが、手を伸ばさずにはいられない。弱い金魚がその傷に耐えられるのだろうか。だが誘惑に負けたあさぎには、この先訪れる新たな葛藤までは想像出来なかった。今日の前にある、望んでいた「自分」だけを手に入れようと、必死に手を伸ばす。

「ほ、本当に、いいの？」

「……あさぎが、そうしてえなら」

そこで顔を赤くして動揺するあさぎに対し、清矢郎は恋愛関係になるとは思えないほど、硬い表情で答えてくる。その言い方に、あさぎの火照った心が少しばかり冷やされる。

「で、でも、さっきも言ったけど、悪いことしたからとか、私が可哀想だからとか、義務感で付き合ってくれるのは……いやなの」

「……」

従兄妹同士で付き合う大義名分であった、「罪を償いたいという義務感」を取り除けという。この言い方では、彼に対し恋情があることを素直に打ち明けているようである。あさぎは一言口にするご

とに、墓穴を掘っているなと思ひながら、俯いた。

清矢郎は何も言わなかった。――このまま突っ込まないで、とあさは祈る。痛いほどの視線をつむじのあたりに感じる。

「義務感じゃ嫌って、なんだよ。なんか、それって……」

しかしやがて、清矢郎は困惑したような声を絞り出す。無骨な彼から直球の質問が飛び出す、と思ったあさは急いでそれを遮った。

「い、言わないでっ!」

――おれのこと、好きなの? とか聞かないで――。

言いたい。

言うのが恐い。

二つの強い思いがせめぎ合う。

言霊の力で、言えば全てが動き出す。

まだ知らない、魅惑の世界に向けて。

見えない力が、働き始める。

あさぎの悲痛な叫びに清矢郎は再び黙った。

「よ、よく分らない……」

震える小さな声を聞いた彼は、彼女の気持ちをそれ以上問い詰めなかった。代わりに、あさが嫌な予感を抱いていたとおり、

「じゃあ、やっぱりやめるか?」

と、あっさり言い出す始末。あさはがばつと顔を上げると、セミロングの髪を乱して首を大きく横に振った。

「だから義務で、とかじゃなくて、せいちゃんが、いいなら、そうしたい、の……」

最早何を言っても「好き」という言葉を使っていないだけで、「親戚としてではなく、異性として清矢郎の傍に居たい」ということは鈍感な彼にも伝わってしまうだろう。あさは観念したように、紺のプリーツスカートを握り締めた。喉がからからに渴いている。

清矢郎はまた少し考えていたが、あさぎから顔を逸らすと膝に頬

杖をついて、ひとつ頷いた。

「……いいよ」

——うそっ。

ふわり、と飛び立つ金魚。二匹、四匹、十匹。群れをなし、空へと飛び立ち、また舞い戻る。ぐるぐると廻り出す。

本当に望んでいたように、身内としてでなく一人の男性としての清矢郎が手に入ろうとしている。あさぎの胸が、身体中が燃え上がる。

——どういうつもりで、そう言っているの？ 私のこと、どう想っているの？ 本当に「恋人」になれるの？ 私をあなたの特別にしてくれるの？

彼の特別になれるはずなのに、どうしてまだ金魚が見え続けるのか。それについては考えず、あさぎは今決定された事実だけを確かにしようと、何度もなぞる。

金魚たちの舞が、違う、それでは何か足りない——と訴える。そんな胸の余白も感じながら、今のあさぎは初めて誰かと付き合えるという喜びを、強く噛み締めていた。

「私のこと、嫌いじゃないの？」

あさぎは初めての相手となる「彼氏」を、痛むほどの胸を押さえて見上げた。お互いに、具体的な愛の言葉は口にしていない。だが彼は確かに、「義務でなく付き合いたい」というあさぎの言葉に了承した。そして更に、呆然と呟くあさぎに思いがけない一言が返ってきた。

「嫌いだったら、わざわざ電車の時間なんか、合わせてない」

「え……」

何やら期待出来そうなものを孕む言葉に、あさぎの身体はそのままばらばらに崩れ落ちてしまいそうになる。本当に心臓の病気にでもなったのかと思うほど、息苦しい。

——私だけじゃ、なかったの？ 四年間、ずっと気にしていたの

も。高校に入ってから、駅で会おうとしていたのも。

清矢郎がどうしてそうしたのか、理由はまだよく分からないものの。

あさぎもこのどろりとした感情の全てを、いつ彼に打ち明けるのか分からないものの。

とりあえず「因縁を持つ従兄妹同士」から、あさぎが望むとおり「恋人」の関係になろうとしているのはどうやら確実であり、それはもう覆したくもない。

「それに、義務でこんなこと言うかよ」

最後にそう言われ、あさぎは驚いたように眼を見開いた。確かにその言葉は、この関係となるにあたって清矢郎の能動的な意思も感じられる、嬉しいものであった。――が、自嘲するようなその言い方はあさぎに現実を突き付けた。清矢郎はゆっくりとあさぎの眼を見る。

「叔父さん、叔母さんには言うのか？」

「い、言えるわけ、ないじゃない！」

四年前のことも、清矢郎とこんな関係になったことも――。

「だろうな」

清矢郎は珍しくふっと笑った。それは何処か空虚なものに見えた。

「バレたら、大変だろうな」

「……うん」

「それでも、大丈夫か？」

「うん」

「――本当に、覚悟、できてんのか？」

「……うんっ！」

清矢郎の言おうとしていることを今ひとつ理解していないあさぎだが、どうしても彼との関係を始めたく、真剣な顔で頷いた。

確かに清矢郎の言うとおり、厳しい伯父と伯母、そしてあさぎの

両親のことを思えば、今、二人の関係が知らればどんなことになるか、ある程度は予想がつく。幼い頃は「清矢郎のお嫁さんになったら」と冗談で言われていたものの、実際にそんな関係だとなれば驚かれるだろう。身内同士だから駄目だと、反対されてしまうだろうか。

何よりも、あさが高校受験でランクを下げたことを母親は快く思っていない。大学受験があるんでしよう、くだらないことにうつつをぬかしていないで勉強しなさい、と叱られることは間違いない。三年生の清矢郎は、大学受験を間近に控えている。まだ子供の癖にこんな関係になるのはまだ早いと、引き離されてしまったら――。

それでもあさは、両親以外の「他」の存在に認められたかった。自分がこの世に必要だと、肯定して欲しかった。あの強い眼で、己自身と戦い、修練を積んできた彼に。

四年前に、自分を「女」にした存在に。自分の全てが、此処に必要であると。

幼い頃からほんのりと憧れを抱いていた、誰よりも優しくしてくれた相手に。

口を真っ直ぐ横に結んだその表情に清矢郎は幼かった頃のあさを重ねたのだが、彼女はそんな彼の気持ちを知る由もない。

あさを射抜くような視線で見た後、清矢郎は再び苦笑した。今度は随分切なげな笑顔だった。だが、あさぎには彼の気持ちがやはり分からなかった。

それでもいいと言うように、清矢郎は言い切った。迷いのない、凜とした声で。

「分かった。じゃ、こっちも、覚悟する」

嘘を言わない彼が、その一言にどれだけのことを決意したのか。

あさがそれを知るのは、この時から何年も後のことになる。

「別にこれくらいで、許せるわけでもねえと思うけど……とりあえ

ずは、これでいいのか」

二人が長きに渡り悶々とし決着をつけようとしていた、四年前のことに話はついたのか。ぼうっとしていたあさぎに向かって、清矢郎はひとまず話を終えようとした。折角甘い関係になるというのに、そういう言い方をされると、やはり形式的なもののように、あさぎは少々むっとし、言い返した。

「何それ。やっぱり義務みたいじゃない。それじゃ、やなの。なら、許してあげない。ううん、許すとかそういうのもやだ。ほ、ほんとの意味で、付き合ってくれなきゃ……」

贖罪のつもりで彼は「あさぎに何でもする」と提案したはずなのに、今やそれを利用してしまっている。それはあさぎの下心に他ならない。立ち上がるうとする彼の制服のシャツを、あさぎは恥ずかしそうに下を向いて引っ張った。

「分かってる」

しかしその手を振り払うことなく、清矢郎はぶっきらぼうに言い捨てた。

——なんで？ 何でそんなに、優しいの？ 本当に、義務じゃないくて？ せいちゃんこそ、ま、まさか、私のこと、好き、なの？

あさぎの口がうずうずと動くが、それをごくりと飲み込んだ。確かめたくて仕方なかったが、両親への秘密を抱えた後ろめたさと、彼にそれを否定されることが恐い。だから彼女も、まだ「好きだ」と口にしていないのだ。

いつか、恋になればいいな。そう思いながら、あさぎは「彼氏」となった清矢郎のシャツを掴んだまま、立ち上がった。

「遅くなるから、帰るぞ」

そこで清矢郎に促され、彼女ははっと周囲を見回した。いつの間にか辺りは夕日の色から薄暗い灰色へと変化していた。遠くを歩く人々も先ほど以上にぼやけて見え、帰宅ラッシュでその数を増やしている。

清矢郎はそこで携帯電話を取り出した。あさぎもその意味に気付
き、慌ててそれを取り出す。

「あ、アドレス、教えて」

「そっちも」

従兄妹同士でも四年も会っていなければ、このようなプライベ
ートなもの知らない。本当にこうしていれば、血など繋がっていな
いようである。あさぎはたどどしくボタンを操作し、水色の携帯
電話に清矢郎のデータを入れた。

逆に彼の電話にも自分の名前が、存在が入力されるんだな、と嬉
しくなってくる。

「メールしても……いいの？」

「ああ」

本当に彼氏なのかと思うほど素っ気無い態度の清矢郎だが、あさ
ぎの望みを何でも聞こうとした時のあの真剣な瞳は忘れない。冗談
で従妹にあんなことを言う彼ではない。そういう真面目で、誠実な
少年なのだ。でなければ、四年前の汚点の償いをわざわざしような
どとしない。

だとすれば、彼の言ったこと、約束したこと全ての全てに嘘はないだ
ろう……ないはずだ。一番線ホームの階段の下まで一緒に歩いてき
たところで、あさぎはもう一度不安そうに清矢郎を見上げた。

二人の帰る方向は違う。あさぎはこの階段を上って、七番線のホ
ームまで行かなければいけない。今はまだ家族に知られたくないの
で、同じ学校の生徒にもあまり見られない方がいいだろう。四年ぶ
りに二人で過ごした時間だが、今日はこれで終わりにしなくては
いけない。

別れ際に、あさぎは今のことが夢ではなかったかと心配になった
のだ。

その階段の陰で、彼女の揺れる瞳と眼鏡の奥の眼を合わせた清矢
郎は――、その黒髪の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

怒ったような顔だったが、たったそれだけで、あさぎの胸が熱くなる。幸せになる。

四年前のあの時と違い、今度はとても優しく温かいものに感じた。
——その掌が、嗚呼、愛しい。

あさぎが「じゃあね」と言うと、頷かれ、後ろ手を軽く振られる。彼女の見送る中、清矢郎は階段に背を向け一番線ホームの人波に飲まれていった。

——早く、帰らなきゃ。

まだ誤魔化せる時間だ。両親には悪いと思うが、とりあえず家に帰ろうと、あさぎは階段を駆け上がった。

四年前の出来事は、確かに両親に話せない。金魚が見えることも、身体がいやらしく疼くことも。——今夜からはそれらを包括した上に、更に嘘を重ねるのだ。

それでも心は踊っている。電車の中で、今の出来事を確かめるように、金魚のシールが貼られた水色の携帯電話を開く。浮かび上がる、英数字。アットマークより前をどうしてこの文字列にしたのかと想像しては、彼の素顔に近づけたような気がし、思わずあさぎの頬が綻んでしまう。

金魚が見せて、と言うように光るディスプレイを突いてきた。

——あれ？　そう言えば。願いは叶ったはずなのに、どうしてまだ泳いでいるの？

あさぎはその時ようやく不思議に思ったが、今は清矢郎にどんなメールを送ろうかという方に気をとられ、まあいいか、とそれ以上考えようとしなかった。

これより彼女の胸の内では、これまで以上に身も焦がすような狂おしい葛藤が始まるのだが、何かを予感させるような赤い揺らめきから、あさぎは眼を逸らした。

第19話 青竹迷風

ざわり、ざわりと風の音。

緑の陰の間から、雲を、空を垣間見せながら、幾重にも重なり合った細い幹と葉先が、風に揺れる。

時に大きくしなりながら、激しく。

——赤い金魚が、その中に迷い込んだ。

・・・・・・

高校最後の夏休みが訪れようとする、いつもと変わらない夜の自室。しかし彼——清矢郎にとっては今日、これまでの人生で最大の出来事が起こった。大げさではなく、彼にとってはそれほどのことだった。

大学受験のために通っている予備校も、今日は休んでしまった。そちらの方が大切な用事だと、咄嗟に判断したからだ。両親は予備校の時間割など知らないため、いつもよりも早い帰宅になったが、休講になったと嘘をついた。そのことだけでなく過去の分、そしてこれからもずっと嘘を積み重ねていくのだが、それに対する後ろめたさには蓋をすることに、今日決めた。時が満ちるまで隠し通すことに決めた。

それにしても予備校を欠席した分、家で勉強せねばいけないのに、今の清矢郎は何も手に付かない状態だった。入浴して汗を流しても、心は全くさっぱりしない。いっそ外で走り込みでもしたいほどだ。今夜は諦めてもう眠るかと思屋を暗くしベッドに寝転ぶが、それも無駄で眠れそうもない。

——熱い。

梅雨明けのニュースも耳にした。この熱さは夏の気温の所為だ。彼は自身にそう言い聞かせる。

心の中では轟々と風が吹き荒れているのに、外は無風。窓を開けても意味がない。冷房でも入れようか。そう思うのに、そうすることも億劫だった。このまま、熱に浮かされていたかった。その方が、何もかもが麻痺する気がした。

清矢郎が顔に当てていた手をベッドの上に投げ出すと、放置してあった携帯電話にぶつかった。記憶が蘇り、思わず暗闇の中、開いて確認する。そこには今日登録したばかりの名前があった。

やはり夢ではないらしい。生まれて初めて出来た、「彼女」の名前。……相手は二つ年下の従妹であったが。

ざわり。

ざらついた黒い風が、清矢郎の胸の中を這いずり、撫でる。

ざわり、ざわり。

踏み入れてはならない領域へと来てしまったのかも知れない。だが、もう遅い。

それを望んだのは、彼の意思なのだ。

しかし意外にも、先にこうすることを望んだのは相手——あさぎの方からであった。

罪を償い、彼女の傷が消えないまでも少しでも気持ちを軽くしてやりたい。清矢郎は中学二年の時からずっとそう思っていた。己の欲望と衝動のために、誰よりも大切な、妹のようなあさぎを傷つけたことをずっと後悔していた。

四年間そう思っていた彼だったが、ここ最近、何故かあさぎの方から接触を図ってきたのは驚いた。なので今日、具合が悪くなった彼女に清矢郎も思い切って近付いた。そして腹を割って話してみたところ、なんと、あさぎはあの日から彼のことを忘れられないと言い、恋愛関係を結ぶことを求めてきたではないか。

はっきりと言葉にされていないので、恋愛感情とは違うかもしれないが、「責任をとれ、清矢郎でなければだめだ」と言われた。

一歩間違えれば、身体の関係すら求められているようにも聞こえてしまう、きわどい言葉。経験のない彼は、あさぎの大胆な発言に内心焦ったが、精一杯冷静を装った。彼女はもう二度とそんな眼で見て欲しくないかもしれない、そう思ったからだ。

どういう意味にも取れる言葉だが、清矢郎があさぎに対し何らかの行動をとらねばならないことは確かであった。思いもかけない要望に彼は戸惑いながらも、もしかしたら、と思い「付き合えばいいのか」といった提案を口にした。すると彼女に「そうしたい」と応じられた。

——ということとは、やはりあさぎは自分に恋愛感情を持っているのだろうか、まさか。

何考えてんのか、わかんねえ、と清矢郎は携帯電話を閉じて投げ捨てる。これはもう何も考えない方がよさそうだ。

四年前にしてしまったことが、幼いあさぎをどれだけ傷つけたのか、彼女をどんな心境に陥れ、今の結論にさせたのか。どれだけ想像しても何も分らない。分かるわけがない。

俺のこと、好きになった、わけはないだろう——こんな人間を。そう思う清矢郎は、あさぎにその質問をすることも憚られた。

だったらもう、何も考えず、彼女を守ろう。

ただひたすら、大切にしよう。彼女が望むなら、一生でも構わない。それが償いだ。

もしかしたら、自分のことなどすぐに飽きるかもしれない。その時は、彼女の望むままに手を離そう。その時に、どんな気持ちになろうとも。

彼はそれ以上、自分の感情の正体を探ろうとはしなかった。ただひたすら、そうすればよいだけのことであるから、と。

「あさちゃんのこと、よろしくね」「男の子と女の子は、違うんだ

よ。それに、清矢郎はお兄ちゃんなんだから、あさちゃんを守ってあげなきゃ」

思い返せば、清矢郎は物心ついた時から――きつと、あさが生まれた日から、母親や叔母、祖母にそう言われ続けてきた。幼い彼はそれを刷り込みのように覚え、泣き虫だった年下の、血の繋がった少女を守ってやらねばと思い続けてきた。家に帰れば、一人っ子の彼は厳しい父親に叱られるだけだが、祖母の家に行けば同じ子供の彼女がいる。だからいっぱい遊んでやろう、と思っていた。

その時と同じだ。一番大事な女の子を、一生かけて、男として守ってやる。それだけのことだ。

その感情に名前をつけるような、こなれたことが出来る清矢郎ではない。寧ろ、四年前に釦ボタンをひとつ掛け間違えてから、あさぎに対して身構えてしまい、それ以上深く考えてはいけなような気がしていた。

なのに身体は別で、四年前の光景を、初めての「女」の感触を何度も何度も蘇らせてしまう。そんな自分に反吐が出そうになる。

それでも、あさぎは清矢郎を望んだ。だから彼は決意した。自分などでもいいならば、守ってやろう。望みは叶えてやろう。四年間、口も聞けなかったが、またあの頃のように大切にしたい。

しかしどれだけ強くそう思っても、それでは何かが違う、と心に生温かいものがまとわり付いてくる。

確かにあの頃とはわけが違う。これからは従妹ではなく、「恋人」としてあさぎに接するのだ。義務感でなく。それも償いのうちだと言われた。

恋人と言われても、一体、何をどうしてやればいいのか。同じように可愛がればいいわけではないだろう。

焦燥感を無表情で隠しているが、清矢郎の心の中はずっとざわついている。むせ返るように甘い、そして何処か生々しい特有の「匂い」。体形や仕草、全てが少しずつ魚の流線形のように滑らかに、

男の彼にはないものに進化してきた、あさぎ。

今日目の前で見たその流線形は、益々輪郭をくつきりと現していた。その色はきつと、女性らしさを象徴する、綺麗な赤い色。中学を卒業したばかりだが、華奢で折れそうな体の線も、内に感じる母親のような強さも、全部、思った以上の存在感を持って、小さな身体の癖にしっかりと其処にあった。

駅で遠目に見ていた時は、長くなった髪がセーラー服の襟に翻るのを、ぼんやりと可愛らしく思う程度であった。きつとあの練習試合の時から、あさぎが自分と心をぶつからせようとしていることが分かってから、彼女が清矢郎の中で現実の、意思を持った個体として感じられるようになったのだろう。

本当は恐れもある。両親や親戚に知られた時、どうすればよいのか。

それでも、その小さな手を取りたいと思ったのは、ただの責任感や罪の意識から逃れたいだけではない。寧ろそれだけの方が、ずっとまだ。

四年前以前と同様に、あさぎを守りたい——その気持ちに嘘はない。しかしそれと同時に、恋愛関係になりたいという彼女に対し、清矢郎の中で四年前と同じ、卑しい好奇心が働いた。

興味の無いふりをしているが、女性経験のない彼にとって、それは魅惑的に手招きしてくる。恐れを抱きつつも、そこに踏み込みたいと思っている。何も出来なかったあの頃とは違う。あの頃よりもっと狡くて、そしてもっと凶暴になっている。

どれだけ竹刀を振るっても、友達と笑っても、将来を見据えて勉強に励んでも、塞がることなく毒すら吐き出している深く暗い穴を、あの少女で埋めようとするんだろう。

もう、四年前の小さな女の子ではないのだ。あれだけはっきりと赤い輪郭を描いていれば、もう——。その事実正直、何処か胸を躍らせている。

「付き合う」が示す具体的なラインは分からないものの、今日のあさぎの言葉に何か艶かしい期待を感じてしまった。そんな自分が憎らしい。

――祖母の家に行った時、二人で掬った小さな金魚。小さな空間で身を寄せ合う二匹を見ては、祖母は「せいちゃんとあさちゃんみたいに、仲良しだねえ」と皺だらけの顔を歪めて笑っていた。

その時清矢郎がちらりと見たあさぎは、ノースリーブの薄い服から白い肩と鎖骨と、隙間からその下の肌を僅かに見せていた。彼の眼には祖母のしわくちやの笑顔が、やけに下卑たものに映った。

ざわり、ずくん。

己を見上げる、潤んだ黒い双眸。それを思い出すと、清矢郎は言いたくない気持になる。守りたいのか滅茶苦茶にしたいのか、分からなくなる。

だけど今度こそ、「あんな気持ち」に負けたくない。だから今はただ、黒い気持ちに負けないように、それだけは彼女に見せないように、ただひたすら大事にしようと心に決める。何度でも、誓いを繰り返す。

考えないでおこうとする割には清矢郎がぐるぐるとした思考の中に居ると、突如、新着メールが届いた。それは、あさぎからだった。『今日はありがとう。帰り、おそくなっただけど、大丈夫だった？』何を考えているか分からない彼女だが、どうやら長いこと話をしていたことは気にしているらしい。何故か、金魚の絵文字で締められている。

返信しようとするが、何を打てばよいのか分からない。折角出来た「彼女」に格好悪い態度はとりたくないと思うが、気の利いた言葉も思い浮かばない。

『大丈夫だ、心配するな』

と話す分にはまだいいが、文字にしてみるとやたら偉そうな文面し

か思いつかず、それを送信する。

——だから、付き合うって、何すりゃいいんだよ。

そんなことを考え頭を抱えたりなりながら、あさぎと二度ほど他愛のないメールのやりとりをした。

ざわり。ずくん。

立てた膝に、額を当てる。この電波の向こうに、これまで気にしていた相手が現実にいると思うだけで、妙に胸が騒ぐ。せいちゃん、と四年ぶりに呼んでくれた高く甘えた声まで、蘇る。

一度、実体を思い出すと止まらない。

思わず、そのさらさらの髪に触れたくて、最後に頭を撫でてみた。それだけで気持ちがいよくなった。

——やばい。絶対に、やばい。

心の中では、ざわざわざわと闇の中で伸びた枝が激しく揺れ、警鐘を鳴らしているのに、その豪風は収まることなく、竹林に迷い込んだ赤い金魚を甚振りたがる嗜虐心ばかりが焚きつけられる。魅惑の流線形が、怯えながらも彼の身体を包み込むように、溶けて広がる。

——限界だった。一瞬だけ、全てを忘れて、衝動と悦楽に身を委ねた。

.....

散々高ぶっていた清矢郎の心が、波が引くように落ち着くと、その代わりに虚しさが一気に押し寄せてきた。汚れたものを片付けると、受験勉強を再開しようと、のろのろと立ち上がり部屋の電気を点ける。

暗闇が消えていく。心のざわめきも多少は収まった。今は見ることにすら恥ずかしい黒い携帯電話が、ベッドの上に呆然と転がっている。

やや冷静になった頭で、清矢郎は考える。

——俺たちはこれから、どうなるんだろうな。

それでも若竹は伸び続ける。沸き起こるエネルギーを抑えることが出来ずに、ただ、伸び続ける。迷おうがどうしようが、伸びることしか出来ないのだ。

赤い金魚を、傷つけながら。

第20話 白い鳥と赤い金魚

あさが清矢郎と「付き合う」ことになった次の日。昨日の駅での醜態を見ていたのか、あさぎを見て「あれ？」と変な顔をする生徒も居たが、彼女が目立たない存在だからか、知らない相手から多少の視線を浴びる程度で済んでいた。夏休みを二日後に控え、高校全体が何処となく浮き足立っている。そんな些細な記憶もすぐに忘れてもらえるものと思いたい。

そのうえ此処は二期制の学校のため、休み前に成績表が配られることもない。前期一回目のテストも七月上旬に終わっており、あさぎの周囲はまだ一年生だからと結果もさほど気にしていない生徒が多い。あさぎも北高を断念し合格ラインを超えている東高を受験したからか、成績も思った以上によい結果となり、両親にとにかく言われることもなかった。

中学生気分を残しつつ、高校生活初めての夏休み。始めたばかりの部活に燃える者、合コンや旅行の予定を楽しそうに立てている者と、教室では皆それぞれに夏休みの予定を話しているが、あさぎと夕映はこの日の昼休み、喧騒を避けるように外へと飛び出した。

特別教室棟から続く、人気のない渡り廊下。弁当を持って、二人並んで低い階段に座る。渡り廊下には壁がなく、柵だけがあるため外からの埃臭い風が宙を舞う。しかし二階の北側であるその場所は、校舎の影になり教室よりもずっと涼しかった。

ただでさえ暑いというのに、若いエネルギーが燃え滾っている教室はどうも落ち着かない。正反対のタイプのあさぎと夕映だが、二人とも少しでもだけ大衆から「ずれた」感覚を持ち、価値観の重なるところがあるのだろう。

しかし今日、二人が外でこそそと食事をするのは、それだけが理由ではない。誰にも聞かれたくない話をするためであった。

「で、昨日は一体何だったの？ 今日午前中の授業、妙に忙しかったもんね。体育あったり実験あったり。ようやく聞けるわ」

夕映は短いスカートの脚を伸ばすと、尋問するように腕を組み、迫力のある笑顔を浮かべてあさぎを見た。膝には既に広げられた弁当箱。三十分間、食事をしながらじつくりと話を聞くつもりなのだろうか。

昨日は無事に帰ったことのみメールで伝えたものの、あさぎはそれ以上のことは何も話さなかったのだ。夕映もあさぎの体調を心配してか、昨夜は電話もしてこなかった。食べた気がしない……と思いつながら、あさぎは母親が作ってくれた小さな弁当の蓋を開き、一口摘んだ。大好きなはずの卵焼きが、やけに子供染みた味に感じられた。

しかしそんな夕映のことを、煩わしく思うわけがない。昨日の奇行もさることながら、それ以前から挙動不審になりがちなあさぎに、何かと親切にしてくれる大切な友達。何か秘密を抱えていそうなあさぎの恋の話を聞きたいという好奇心もあるだろうが、彼女のこれまでの行動からすれば、親身になって心配し、困った時には力になってくれるだろう。

あさぎも両親に言えないような肩身の狭い恋だ。初めての経験であり、分からないことばかり。誰か味方が欲しかった。

それに昨日のことを話したいと思うのは、何よりも既に男性経験があるらしい夕映に感じていた、「女」としてのコンプレックスが一番の理由だ。友達と同じ立場に私も立っているんだ、という妙な対抗意識があった。可愛い女の子と自分も同じ経験をしたい。そうすることで、自分に自信を持ちたいと、この時のあさぎは思っていた。

「で、あの人は？ 北高生だよな。三年生っぽいよね。片思い？ まさかもう、付き合ってるの？」

制服などから推察出来ることを、夕映は立て続けに尋ねてきた。

逆に清矢郎も、友達にあさぎのことを詮索されているのだろうか――などと人の心配をしている場合ではない。あさぎは早速核心に触れられ、口に入れていた弁当を咽そうになった。慌てて小さな紙パックに入りたいちご牛乳と一緒に飲み干す。変な味がしたが仕方ない。

どうしようかと一瞬迷ったが、言い逃れも出来ない。それこそあんな状況で助けてくれるなど、恋人か身内でない限り有り得ないだろう。本当は後者の理由だったのだが、その後あさぎの要求により二人は恋人関係になった。だからあさぎは顔を赤くしながらも、初めて口に出して宣言してみた。

「つ、付き合ってるよ……」

「そうなんだー。いつから？」

「き……昨日、から」

言いながら唐突に感じられるが、間違いはない。恋の話とはこんなにも恥ずかしいものか。大きな声でしている女子もいるが、あさぎは到底無理だと、小さな掻き消えそうな声で呟く。俯く彼女の目の前を、金魚がわざわざ通過していった。

「あの後そうなったの？ やったじゃん！ でも彼は何者なのよ？前から知り合いみたいだったけど、中学一緒だったの？ ……とかって、聞いてもいいの？」

再び矢継ぎ早に質問しようとした夕映だが、あさぎが真っ赤になって固まっている様子を見て、質問の最後にそう付け加えた。

清矢郎との関係を、どう答えればよいのか。従兄であると答えるのは、何やら恥ずかしい。夕映ならば従兄妹同士だと話しても「ふーん」と言うだけで終わりそうだが、あさぎはもう少し「他校生の三年生と付き合っている自分」を演じていたかった。

夕映のように「選んでもらった」わけではないのだ。あの出来事と彼の罪悪感があったからこそ、この関係になることが出来た。清矢郎は義務感ではないと言ってくれるものの、それも分からない。

何より四年前の事件のことまで、知られてしまうような気がした

からだ。夕映と張り合いたいならば、「小学生で経験したんだ」と自慢のひとつでもすればよいのだが、襲ってきた相手に恋をしたという自分の性欲の強さを露呈しているようで、恐くもある。結論的にあさは困ったように首を振った。

「そっか。言いたくない、か」

「ごめんね……」

「別にーよ」

夕映はあっさりとそう言うと、弁当を頬張った。あさは首を竦める。不安の雲がうつすらと心を覆う。

中学の頃はこんな態度を取ると、急によそよそしい態度となったリ、掌を返したように悪口を言うようになる女子も居た。話したくないという態度は、相手との距離になってしまうようだ。

女子同士の関係としては失礼ではないかと心配になり、あさは夕映を横からそっと見た。彼女は渡り廊下の隙間から空を見上げながら、白い頬をもぐもぐと動かしていた。スカートからはみ出した膝小僧に視線を落とせば、黄緑色の小さな四角い弁当箱に、ご飯と野菜のおかずが彩りよく収められていた。

夕映は弁当を自分で作っていると言っていた。仕事で忙しいのか、詳しくは知らないが両親があまり家に居ないらしい。それなのにまるで母親が作ったもののような綺麗な弁当を、彼女は毎日作っている。

しかし他校生の彼氏と頻繁に会ったり連絡を取っているのは、「寂しいからだ」とも言っていた。何処か悲しそうな微笑みに、それ以上聞いてはいけないような、逆にとても心配に思ったものだ。

夕映の心の中のこととは分らないが、きっと彼女が見ているものは、遠くを飛んでいるあの小さな白い鳥のようなものかもしれない。寧ろ、彼女が鳥そのものなのかもしれない、とあさは何となしに思った。あの鳥からすれば、あさぎの姿はさぞ小さく映ることだろう。

だから夕映は今あさが案じているような小さなことなど、気にしないでいてくれるかもしれない。そんな思いが心に浮かんた。

風が吹く。夕映の茶色い髪が揺れた。甘い香りがした。あさは毎日制汗剤を一吹きしているが、夕映はどうしていただろうか。汗臭い彼女は、あまり想像がつかない。きっと彼氏の少年も夕映には女の色気を感じていることだろう。

あさがぼんやりと考えていると、突然夕映が話を再開した。

「でも昨日の人、背高いし、地味だけだったよさげで、何か真面目そうで、いい感じじゃない？ 体育会系の人？ ぼんやりしてて文化系っぽいけど、体格しっかりしてるよね。あれは鍛えてるよ」

なんと空を見上げながら、夕映は昨日の清矢郎のことを思い出していたらしい。人事であるのに楽しそうな笑顔にあさは絶句する。大人びた寂しがり屋の彼女は、男性そのものに積極的な興味を持っているらしい。

途端にいびつな形の青空を高く飛べない金魚が埋め尽くし、白い鳥は見えなくなった。夕映のことを考えている間は身を潜めていたが、赤と水色のコントラストの中で、緑の中に佇む背高の影が揺れ始める。

基本的に、夕映は清矢郎を褒めているらしい。好意を持っている上に恋人となった相手だ。あさも褒められて嫌なわけがない。次の授業に間に合うよう食事の手を速めると、あさはどうにか言葉を返す。

「剣道、やってる……」

「そっかー。姿勢もよかったもんね」

よくそこまで見てるなあ、とあさは彼女の観察眼に改めて脱帽する。

そうかー、武道家かー、私そういう人と付き合ったことはないなあ、とぶつぶつと呟いていた夕映であったが、

「っていうか昨日のは、愛だよな、愛」

今度は拳を握って断言してきた。力説する彼女の手には、紙パックのオレンジジュース。握り締めたことで噴き出しそうになっている。それより先に、あさぎの全身から汗が噴き出し始める。

「な、何言って」

「だって、あの状況で助けてくれたんだよ？　その後付き合い始めたってことは、好きな子だったから助けてくれたってことでしょ？　優しいなあ。いいなあ」

夕映は大げさに天を仰いでそう言うと、「いいなー」ともう一度言いながら思い出したように弁当を口に運ぶ。しかしあさぎの手は、再び止まってしまった。代わりに金魚たちが残っている野菜を突つつくように、覗き込んでくる。

――あ、愛って……そんなわけ、ない。でもせいちゃんは、私のこと、どう思っているのかな。

従妹だから、身内が皆に迷惑掛けていたから、自分の所為であさぎがおかしくなったと思ったから。昨日の彼の行動の理由が、次々とあさぎの脳裏に浮かぶ。しかし心の中で否定しつつも、夕映の言葉に期待しそうになってしまう。恥ずかしいけれど、本当にそうだったいいのに、と。

四年前からあさぎを気にしてくれていたということは嬉しかったが、それはただ酷いことをしたあさぎを心配してのことではないか。清矢郎はあさぎに恋愛感情を持ってくれているのか。今は持っていないなくても、これから持ってくれるのか。昨日は浮かれて気にならなかった不安が、あさぎの中で募り始めた。

第21話 会いたい、から

清矢郎のあさぎへの感情は、夕映は「愛」だと言うが、本当に恋愛感情なのかどうか。罪の償いをしたい、だが義務感ではないと言った彼の言葉の意味は。

期待と不安に動揺するあさぎだが、冷静になろうと首を振り金魚の幻影を追い払った。しかし夕映に本当のことを言おうとも思わなかった。女としてのつまらないプライドが働く。多少のコンプレックスを抱いている夕映には、もう少しの間「格好いい彼氏に愛されている」と思われていたかった。自分の醜い心がつくづく嫌になりながらも、あさぎはそのまま話を逸らしてしまう。

「で、でも、付き合うって、一体何すればいいのかなあ」

このことはこのことで昨日から悩んでいたため、恋愛経験の先輩である夕映に素直に問う。

「んー？ 何でもいいんじゃない？ 会って好きなことすれば。会いたければ会えばいいし、会いたくなければ無理に会わなくてもいいんだし。行きたいところ行ったり、話してるだけでも楽しいし。でもあさぎのところは相手、受験生か。そうなると会いたくても会えなくなったりするのかなー」

そこであさぎは、はっと気が付いた。確かに、清矢郎は受験生。受験が忙しければ会ってくれなくなるかもしれない、そのまま県外の大学へと進学し、たった半年足らずで別れる羽目になるかもしれない。

それを想像した瞬間、あさぎの胸がぎゅう、と痛んだ。心配そうに寄り添ってくる赤い金魚が、まるで胸に滲んだ血のように見える味がなくなってしまった弁当を噛み締めることになるが、残すのは母親に悪いので無理矢理口に押し込む。

そんなあさぎの様子に夕映は「ごめんごめん」と肩を叩いてきた。付き合い始めたばかりの彼女には、酷な一言だったと思ったらしい。

しかし昨日から浮かれていたあさぎは夕映の言葉に、とりあえず直面している現実の問題を知った。まずは受験生の清矢郎にそのあたりの忙しさ――本当に「付き合う」なんてことが出来るのか、志望大学も含めて――を確かめたいと思った。しかし下手にそんな先のことを尋ね、「重い」と思われたくもない。

どうすればこちらの気持ちを伝えつつ、別れたいと思われずにいられるのか。相手から告白されたわけでもないのに、余計に自信がない。あさぎはどうにか弁当を食べ終えたと、複雑な気持ちで片付けた。

――会いたい。

その時ふと、そう思った。一度その言葉を心の中に落としてみると、その想いは波紋のように広がり、随分前からそうであったように大きく響き渡った。

学校も違う。約束しなければ、中々顔が見られない。不安でたまらない。本当の恋人同士になりたいならばまずは会って話し、相手を知り、もっと近づかなくてはいけない。

「うん。とりあえず……会いたい、から。会おうって言ってみる」
恥ずかしいが言葉に出すと勇気が湧いてきた。――そうだ。自分を変えたくて清矢郎にこの関係を迫ったのだ。赤い金魚も、今度は応援するようにすり添ってくる。きつとまだ、あさぎの心が満たされていないから見えるのだろう。それは清矢郎の心が手に入れられていないからだ。あさぎはそう思った。

「そうだね。がんばれ！　なんだか、初々しくて可愛いなあ。私も彼に、会いたくなってきた」

わざと大人びた言い方をした夕映は、弁当箱を片付けた膝に耳を乗せ、横向きにあさぎを見た。こんな話を始めて聞かせた赤い顔のあさぎに、エールのように微笑を送る。

その後、「どういうところに、夕映たちは行くの？」という質問には、ゲームセンターだのカラオケだのという回答が帰って来たた

め、これは参考にならないなあとあさぎは思った。そんなことをしている清矢郎は、あまり想像がつかない。

「でも、人がどうしてるじゃなくて、あさぎがしたいことちゃんと相手に言ったほうがいいよ？」

夕映の的確なアドバイスに、あさぎは神妙な顔をして頷いた。しかし、

「まあ、そうは言ってもつい流されちゃうんだけどね」

という切なげな横顔の意味は、あさぎにはよく分からず、ただ一抹の不安が冷たい風のように過ぎていった。

それでも今は夕映の言ったとおり、自分のしたいことをする――まずは会いたいと思う気持ちに従ってみよう、と心に決めた。

昨日のメールでは素っ気無い返事しか戻ってこなかったため、あさぎは本当に清矢郎が自分を彼女だと思ってくれているのかと心配になってきた。もしかしたら今日誘ってみることで、相手の気持ちを計ることが出来るかもしれない。

では、どのように声を掛ければいいのか。午後の授業時間中、あさぎはずっと考えていた。教師の声が遠のき、授業中まで金魚を見ってしまうほど、今は清矢郎に夢中になっていた。そのまま、とうとう掃除の時間にまで至る。

――うーん、自分の好きなことか……。

箒でアスファルトを掃きながら、未だに考え続けるあさぎ。文芸部に入っているからか、あえて言えば本くらいしか思いつかない。本と清矢郎――のイメージを合わせ、ふと目の前の図書室を見上げた瞬間、「図書館で一緒に勉強」という恋人らしい図が思いついた。思い起こせば学校や市立図書館には、そうしているカップルがいくらかも居る。「いかにも」なことであるが、相手が受験生だと思えば、それは名案かもしれない。

次にお誘いのメールをいつ送ろうか悩んでしまう。帰りの電車でもメールを打ってみたが、清矢郎が予備校に通っていれば、授業の妨

げになってしまいかもしれないと躊躇われ、送信ボタンを押すことが出来ない。昨日の授業を休ませてしまった負い目もあり、あさは携帯電話をそっと閉じる。他の友人ならば気にならないことでも、嫌われたくない一心で気になってしまう。

というわけで昨夜と同様、風呂上りの時間、ベッドの端にちょこんと座り、あさは清矢郎にメールを送った。

——返事、来るかな。

電話をした方が早いのだが、両親に聞かれそうであるし、相手に迷惑がられるのが恐い。それに電話が癖になり小遣いの範囲内とされている料金をオーバーし、母親に携帯電話を取り上げられても困る。だからメールの返信を待つしかなかった。

緊張し、その間何も手に付かない。あさはベッドの上に転がった。生乾きの髪では布団が濡れるのでうつ伏せになり、ねっとりとした夜風に吹かれる数匹の金魚を眺めていた。

無意味に足をばたつかせてみたり、昨日の清矢郎からのメールを読み返してみたり、とつくに読み終えた漫画を手にとってみたり……最後には諦めの境地でぼうっとしながら、数十分が過ぎた。

何か変なことを言ったから返信がこないのかと徐々に心配になり、先ほどの送信メールを読み直そうとした瞬間だった。携帯電話が優しいメロディーを奏で出す。それは、一番好きな曲のオルゴールバージョン。清矢郎からのメール着信音だった。

——きた——！！

がばっと身を起こし水色の蓋を開けば、彼からのメッセージが眼に飛び込む。内容は、『いいよ、いつにする』との短い返事。

「や……っ」

やったあ！ と両手を挙げて叫びそうになり、あさは慌てて口を噤む。だが頬はにやけてしまう。小さな胸は早速、とくとくと鼓動を速め始める。

——これって、「恋人」として会ってくれてることだね。

恋愛感情を持っているかは分からないが、会いたいと望めば会っ

てくれる、その優しさが今は嬉しい。

会いたい。彼の顔が見たい。あの細い眼で自分を見て欲しい。あさはその一心で、小さい機器を食い入るように見つめながら、清矢郎と会う日の約束をした。

そして、大きな丸い月が天頂を横切る頃。

——せいちゃんと、初デート、かあ……。

眠れずに、その甘酸っぱい単語を何度も何度も胸の中で繰り返す。胸が、熱い。身体が、熱い。熱い。疼いちゃう。眠れない——。

あさは清矢郎の顔や広い背中、大きな手などを思い出しながら、ベッドの上で金魚と一緒に何度も何度も寝返りを打ち続けた。

第22話 二人は恋人？

金魚の姿を見ながら、あさは朝の電車で揺られていた。夏休みに入りいつもよりも遅い時間の車両のため、乗り合わせている人々の姿は多くない。――そう、今日が清矢郎との「初デート」の日なのだ。二人が待ち合わせたのは、通学で使っている駅だった。

ミニスカートを穿いているので、意識的に膝を揃える。落ち着かない。あさは自分よりもずっと派手な服装の女性が乗り込む姿を見ては、もう少し大人びた格好の方がよかったか、化粧のひとつでもすればよかったかと、ピンク色のリップクリームを塗った唇を軽く噛む。

ボックス型でカーキ色のスカートに、太腿近くまである長めのパフスリーブのTシャツ。鎖骨が見えるほど広い襟ぐりから、別の色のタンクトップを覗かせる。トップスは今年買ったものだが、あえて体に沿った形のものを選んだ。胸板が薄く、幼い体形にコンプレックスのあるあさだが、こうすればささやかな胸も多少は強調される気がする。足の先に視線をやり、大きな花のモチーフが夏らしいサンダル、ストライプのトートバッグ、指のプラスチックのリング、シャツをほんのり押し上げる胸元までのチェックをしたあさは、諦めたように視線を前に戻した。

それでも昨夜、タンスの前で何枚も服を並べて選んだもののなのお互いの私服姿は何度も見慣れているが、今日はこれまでとわけが違う。だが気合を入れすぎて母親に疑われてしまってもいけない。それに「勉強しよう」と清矢郎を誘った以上、何をしにきたのかと真面目な彼に顔を顰められたくない。更にはあまりに可愛らしすぎるものや、大人びた格好はあさ自身、恥ずかしくて抵抗があった。それでもやはり、女の子らしいと相手に思われたい。自分を可愛く見せられる服は何かと、あれこれ悩んだのだ。

しかし、そもそもあさはお洒落が得意ではない。もっと可愛い

格好はなかっただろうか。夕映あたりにコーディネートしてもらった方がよかっただろうか。そんなことを思いながら電車の揺れに身を任せ、いつもより念入りに梳いた黒髪をかき上げた。

それでも友人に頼むということもまた、ささやかな「女」のプライドが邪魔をした。恋愛経験のないあさぎだが、ようやくスタートラインに立てたのだ。自分の意思で考え、選び、主体的に清矢郎と付き合っていきたいと思っている。だからその相談は誰にもすることなく、自己解決したのだった。

それにしても緊張する。あさぎはやはり落ち着かないように、金魚を見ながらもぞもぞと脚を擦り合わせる。「彼女」になってから、清矢郎と初めて会うのだ。

——せいちゃんは、どんな気持ちでいるのかな。

楽しみで、恐くて、胸が潰れそうだ。今日会ったら彼があさぎのことをどう想っているのか、受験を控えているのに長く付き合っているのかということ、聞くことは出来るだろうか。

不安と期待に金魚はずっと見えたまま。涼しげに泳いでいるのに、その緋色をあさぎの内に籠った炎の色のように。二人の関係はまだ入り口でしかない。あさぎには清矢郎の気持ちたちが同情のように感じられる。付き合い始めてもなお、不安ともどかしさは消えない。だから金魚はまだ現れるのだろうか。

——私を見て！ 無視しないで！ 私でいっぱいになって。あの時、私をそうしたように。

その強い欲望は消えることがない。清矢郎の心があさぎで一杯になったという証が欲しい。

一見、物静かで地味な少女のあさぎだが、心の中では熱い想いを抱えていた。そんな自分に暑苦しさを感じ、あさぎはやるせないため息をつく。

約三十分間一人で悶々と考えていたあさぎだが、電車を降りる頃

には現実への緊張感の方が強まり、サンダル履きの足をもつれさせながら改札へと向かった。待ち合わせ時間の二分前に到着した。もう来るかな、何処で待とうかな、あさがそう考えながら自動改札を出て、眼を泳がせると、

――あ……。

金魚がこっちこっちと尾びれを振りながら泳いでいくので、分かりやすい。広告の貼られた壁の横にいつもと同じ眼鏡を掛けた、ジーンズ姿の清矢郎が凭れていた。

――もう待っていて、くれたんだ。

今日会うのが嫌ならば、流石に待ち合わせ時間よりも前に来ないのではないか。

――もしかして、せいちゃんも楽しみにしてくれた、とか？

まさか、とこそばゆい気持ちになるが、清矢郎ならば、嫌な相手とでも約束の時間は守りそうなどころはある。それでもあさを待つという目的で其処に立っていてくれたことは、嬉しいものだ。

走り出したいが何か照れ臭く、と言って待たせているので少しでも早くたどり着きたい。急ぎ足で近寄る。清矢郎もすぐにあさを見つけたようで視線を向けたが、手を挙げることもなければにこりもしない。仏頂面で腕を組んだままだ。

「ご、ごめんね、待たせて」

あさは彼の前に立ち、不安そうに見上げると謝った。やっぱり嫌なのかな、待たせたこと怒っているのかな、と不安になるが、

「別に、そんなに待ってない」

清矢郎は素っ気無くそう言った。そして長い脚を踏み出したので、あさは慌ててその後を追う。背中を追うのは四年ぶり――いや、その頃には既によそよしくなっていたから、もっと前が最後になるだろう。あの頃よりも随分と広く、高くなってしまったそれを追いつける。

「待って」

あさが小さな声で言うと、その足が止まった。待っていてくれ

ることに嬉しくなる。しかしあの頃の清矢郎はまた先に行ってしまう、それをあさが追い掛け、彼が再び待つことを繰り返していた。だが今は、二人並んで歩き出す。それが兄妹のようだった関係の時と恋人との違いなのかな、とあさは何処となく肌で感じていた。

無言もおかしいので、昔のようにあさがから話し掛ける。それは慣れている。

「予備校、今日は大丈夫？ 受験勉強の邪魔になってない？」

「ああ」

無愛想なのも慣れているが、流石にその冷たい反応は気に掛かる。

「怒ってる？」

「別に」

「怒ってるじゃん」

「何でそうなるんだよ。いつもどおりだろ」

そうかなあ、とあさは清矢郎の横顔をじっと見上げる。確かに眉間に皺を寄せたり、逆に酷く無表情だったりという、過去、父親に叱られた時に彼がしていた表情とは違うので、怒っているわけではないのだろう。いつもどおりの、ただの恐い顔、だった。

「それなら、いいけど……」

想像していた彼女彼女つてのと、何か違うなあと思いながら、あさはぶつぶつと呟いた。今日の格好を可愛いと言ってほしいと考えているわけでもなく、そんな風に褒めてくる清矢郎も想像つかないが、少女漫画で読んだような甘い空気を一応夢に見ていたのだ。

電車や学校で見るカップルは、もう少しちやいちゃしている。付き合い始めて数日でそれを望んではいけないか、とあさは貪欲な自分を戒めた。そのまま二人はつかず離れずの距離をとって、駅から二十分ほど歩いたところにある市立図書館を目指した。

「し、知ってる人、いるかなあ」

「かもな」

「やっぱ、見られない方がいいよねえ」

「まあ、どういうルートでばれるか分からんかな」

それは互いの両親に、という意味であるのは暗黙の了解だ。

「でも、ここしか思いつかなかったし、お母さんにも行ってくるって言いやすかったし」

あさぎは母親に、学校近くの図書館で友人と勉強すると言って家を出てきたのだ。だが焦ったようにそう言う彼女に対し、清矢郎は表情を変えずすっぱりと言い切った。

「毎回じゃねえなら、どうにでもなるだろ」

あさぎは眼を瞬かせて清矢郎を見上げた。

一見、神経質で融通が利かないように見える彼だが、実はそうでもない。無骨なのは当然として、おおざっぱで豪胆な一面もある。だからこそあれだけ威圧的に叱られても、周囲に期待をされても、それらのプレッシャーを跳ね除けて自分を保ってきたのだろう。彼のペースで淡々と努力をし、確実な結果を残してきたのだろう。おそらく、部活や学校で辛いことがあった時もそうして乗り越えてきたのではないか。

それもまた彼の一つの頼りがいであり、そういうところもいいな、とあさぎは素直に思った。そして恋愛とは好きになってから付き合うだけでなく、付き合い出してから更に相手のことを深く知り、もっと好きになることもあるのだということも知った。それに「毎回じゃないなら」という言い方は、清矢郎がまたあさぎと会おうとしてくれている意思があるとも言える。

「そうだね」

そこでようやく、あさぎは笑って頷いた。そして先ほどから思っていたことを、きちんと口に出した。

「ねえ、歩くの早いよ。もう少し待ってよう」

「……悪い」

清矢郎は少し驚いたようにあさぎの下半身に眼を向けて、謝った。彼女の足の長さとサンダルであることから、それもそうかと思ったらしい。

その後は朝からアスファルトの熱が照り返す中、清矢郎の足ならば図書館まで二十分も掛からず行けるにも関わらず、じりじりと身を焦がされながら、あさぎのペースで二人並んで歩いていった。そんな小さな優しさも、今は幸せだった。

開館直後だったが図書館は既に冷房が効いており、汗もすぐに引いていった。午前中を選んだのは、席を確保するためだ。なるべく人に見られないよう二人は隅の席を選ぶが、今のところ知り合いの姿はない。

円形のテーブルで何処に座るか悩むが、あさぎは先に荷物を置いた清矢郎の横に來ると、「いい？」と言うように彼を見上げた。あのような出来事を境に四年もブランクがあると、隣り合って座るところすら未だに恥ずかしく感じる。

結局二人で並んで座る。あさぎは夏休みの課題や、夏休み明けの前期末テストのための勉強を始めた。だが邪魔はしたくないが、折角のデートなのに黙々と勉強しているのもつまらないな、と思ったあさぎは隣の清矢郎をちらりと見た。手元の参考書からは、一年生の彼女には理解出来ない数式が眼に飛び込む。まだ志望大学の対策本などは買っていないのか、そういったものは見られないので、何処を指しているのかは分からない。

清矢郎もあさぎの視線に気付いたのか、彼女を見た。駅で会ってからあまりあさぎを見てくれない彼と、近い距離で眼が合ったことを内心喜ぶ。勉強中にも関わらず、心拍数が上がる。図書館と言う場所のマナーをわきまえつつも、あさぎは何か会話をしたいと清矢郎に英語の参考書を差し出して尋ねた。

「この文法、どう意味が違うのかわかんないんだけど……」
彼も図書館であることから、ややあさぎに顔を寄せて、低く静かな声でそれに答える。

その説明もまた、簡潔で分かりやすい。不明な点は聞き返せば、怒ることなく丁寧な、気長に教えてくれる。声の響きとその優しさ

が心地よく、今、この時間、彼を独り占めに出来ていることがあさぎの心を浮つかせる。あれだけ無視されていると苦しんでいたのに、今、こんなにも近くに居られるのだ。

英単語と清矢郎の唇の動きを見比べていたあさぎだったが、その視線に合わせて赤い金魚は清矢郎の頬のあたりを何度もキスするようには啄ばんでいった。

第23話 拙い駆け引き

しかし一応折角のデートだ。一日中勉強をしているのも、おかしな気がしてきた。それとも清矢郎は受験生なのでそうしたいのか、そうさせてあげた方がいいのか。頭のいい彼に呆れられたくないと、様々な煩惱を振り払いつつ懸命に机に向かっていたあさぎだが、腹時計が素直に鳴り出す頃、思い切って顔を上げた。

「ねえ」

清矢郎は手を止めるとあさぎを見た。

「これから、どうする？」

携帯電話の時刻を見るあさぎの仕草に、清矢郎も彼女の言いたい事に気付いたようだ。

「昼か」

頷いた後、続きをどう言い出そうか、もごもごと口を動かすあさぎに、

「……メシでも食いに行くか。喉、渴いたし」

清矢郎の方からそう提案してくれたため、彼女は照れ臭そうに「うん」と小さく頷いた。

恋人なら当たり前のことだろうが、そう思ってくれたことが、嬉しい。食えることなど、遊ぶ目的以外のことも一緒に出来ること、一日中傍にいられることが嬉しい。彼と一緒にすることは、どんなことでも楽しい。

恋は盲目とは言うが、どうやらあさぎは「付き合う」という憧れの行為が実現したことで、その喜びから相手にどっぷり浸かってしまったらしい。あさぎの母親あたりが知れば、それは「恋に恋をしているだけだ」と眼を覚まさせようとするかもしれない。それでも付き合うということが嬉しいこと尽くしであることに、あさぎの内心は窒息寸前の状態だった。

恋に恋をしていたって、構わない。誰かが自分を認めて傍に居て

くれるのは、こんなに喜ばしいことなんだ。あの鬱屈とした日々に終止符が打たれた。もう、この幸せを手放したくない。

——なのに、金魚が飛んでいた。何らかの欲望を具現化した、欲求不満の証の。

それを見ないようにしながら、あさぎはふと心配になったことを尋ねた。

「でもいいの？ 立ったら席、なくなっちゃうよ」

あさぎの言葉に少し考えていた清矢郎は、やがて彼女の眼を見ると逸らしながら呟いた。

「お前、まだ勉強したい？」

「え？」

「多分、席待ってる奴も居るだろうし。一日中座ってるのもかえって疲れるし」

そう言うとき清矢郎は彼の荷物をまとめて立ち上がったので、あさぎも慌てて片づけを始めた。その行動からとりあえず図書館を出ようということは見て取れ、彼女は手を動かしつつ清矢郎を見上げつつ、慌てて尋ねる。

「勉強、本当にいいの？ 受験生なのに。それとも疲れたって、私邪魔しちゃった？」

それは食事をしたら帰りたい、あさぎとこれ以上一緒に居たくないと思ったからか。一年生の宿題を尋ねてくるので集中出来ず嫌になってしまったのか、と不安になったあさぎは、焦ってまくし立てる。それに対して清矢郎は、再びぼそりと呟きを落とした。

「違う。受験生でも、たまには息抜きしてもいいだろ」

「……」

——それって、私と一緒に居ることが、息抜きになってるってことかな。

あさぎは呆然としながら、先に席を後にする清矢郎を見つめていた。我に返って、その背中を急ぎ追い掛ける。

表情に出さず言葉も少ない彼は、昔からしつこく問い詰めるか、

察してやらないとその考えていることが分からない。子供の頃は何も言わなくとも心を共有していたかのように、年の近い彼の気持ちが分かり、分からなくとも気にならなかった。しかし大人に近くなり、特に恋人同士と言う「他人」の関係になった今は、駆け引きや隠し事が存在している気がする。あの時、あのようなことをした彼の気持ちは未だに分からない。

それでもこうした些細な言葉から、やはり女の子として見てくれているのかな、と期待に小さな胸を弾けさせるあさぎであった。

結局、食事は手近なファーストフード店に入った。たったそれだけのことでもあさぎは同世代の男女を見ては羨んでいたため、舞い上がってしまう。第一、男性と二人きりで食事をするなど、これも初めてのことだ。

相手が無口な清矢郎なので話が弾む、ということはなかったが、あさぎは昔のように思いついたことや眼についたものを話題にして彼に話し掛けた。素っ気無い態度をされると、つまらないのかとすぐ心配になる。だが少し変わったことを言うあさぎでも、否定するわけではなく受容してくれるような彼の短い一言一言は、やはり昔と同様、安心出来るものに変わりなかった。

昼食を取った後、二人は本屋に寄ったりと目的もなく市内をぶらついた。日頃通学で使っている場所のため、適当に時間を過ごせる場所なら知っている。だがただ「時間つぶし」のために歩いているのもどうかと思ったあさぎは、

「ねえ、喉渴いたから休憩しようよ」

夏の午後の暑さに身体がだるくなってきたこともあり、今度は彼女から提案する。勉強をしなくていいなら、折角なのでゆっくり話をしたい。

二人は駅の裏手の緑の多い小さな公園で、自動販売機の飲み物を買い、日陰のベンチに座った。ごくごく喉を鳴らす清矢郎。あさぎの手を濡らす、ペットボトルの水滴。枝を揺らして二人に届く、

僅かな涼風。

蟬の鳴き声が心地よく、それでいて煩わしい。緑の草の匂いが瑞々しく、それでいて暑苦しい。

デートってこんなのでいいのかなあ、とペットボトルのラベルを睨んだあさはの心に疑問が過ぎる。しかし夕映や友人と遊ぶ際もこのように何となく時を過ごし、だらだらとお喋りをするところがある。あの安らぎに満ちた、けだるい時間を好きな人と過ごすのも、内向的なあさぎには十分心地よく感じることだった。

それに誰も居ない場所でゆっくりと話したかった。聞きたいことは山ほどある。公園の脇にあるのは車が一台ほどこしか通れない細い道で、時折、思い出したように人や自転車が通っていく。暑い時間だからか、子供が遊びに来ることもない。

枝の隙間から青空を見上げる清矢郎の、上下に動く喉仏に見入っていたあさは、照れ臭さもあって少々ふてくされたように呟いた。「ごめんね」

謝っているのにあさぎの方が怒った顔をしていた。

「何が」

清矢郎はペットボトルを口から離すと、あさぎを見下ろす。

「だから、受験生、付き合わせて」

「別にいいって言っただろ。二十四時間勉強してるわけじゃねえし、それ分かってて、……こうするつつったんだから」

彼は再び前を見た。眼鏡の横顔から見える素顔をあさは凝視する。「こうする」というのは、付き合っている今の状況。つまりは受験生だという自覚がありながら、あさぎの要望を聞き入れたということだ。それは同情なのか愛情なのか分からないが、受験の迷惑でないと言ってもらえたように聞こえ、あさはほっとした。

「い、息抜きに、なってるの？」

「……なってるよ」

「じゃあそんな恐い顔しないでよ」

むくれたあさぎの言葉に清矢郎は驚いたように彼女を見る。珍し

く虚を突かれたその顔には、「恐い顔なんかしてねえのに」と書いてあるようで面白い。そこであさぎは、わざと大人びた微笑を作って見せると、

「ねえ、それ……、一口、味見させて」

そう言って清矢郎の方に、プラスチックのリングを嵌めた細い指を伸ばした。あさぎの買ったペットボトルにはまだお茶が残っている。清矢郎は不思議そうな顔をしたが、彼女にそれを渡した。

「……」

ドキドキとしたが、じっと見ているのも不審がられてしまう。あさぎは不自然でないよう、それを一気にごくりと飲んだ――彼が唇を触れさせていた、飲み口を拭わずに。

おどけたように彼の真似をして豪快に飲もうとしたところ、思った以上にたくさん液体が入ってきてしまい、格好悪くも咽てしまった。もう一度だけ、ちびりとそれを飲む。清矢郎の分がなくなってしまうようなよう、気をつけて。

ぷはあ、と唇を離れたあさぎの視界には、緑陰の中に、金魚、金魚。

――間接キス、しちゃったあ。

何でこんなことをしたのか、あさぎ自身にも分からない。だが衝動的に、そうしたくなったのだ。触れる勇気がないけれども彼を感じたくなったのか、女性としてもっと意識して欲しかったのか、様々な感情から。

上手くいった、してやった、と妙な達成感と罪悪感で、清矢郎の顔が見られない。当たり前だが彼の唾液の粘つきよりも、香ばしく爽やかな茶葉の匂いの方が勝っていた。

だが今でもずっと気になっていた。四年前のこと。あれは大人の愛情を示す行為だとあさぎは思っている。彼にその気持ちはなかったのか。だからこういう関係になった今、試したい。今現在、彼があさぎのことをどう見ているのか。

一度だけ性の対象に見られてから、性の対象と見てしまい、好きになってしまった少年。この呪縛から解き放たれるためには、相手も同じくらい狂って求めて欲しくて。だが女の子からそんなことを言うのは、淫らでおかしいことだとブレーキが掛かるので、こんな小手先のことしか出来ない。

あさぎは懸命に演技をすると、何と言うこともないように「はい」と清矢郎にペットボトルを戻した。清矢郎はそんなあさぎを驚いたように見ていたが、彼女が眼を逸らしたので、黙って再びペットボトルに口をつけた。――彼もまた、口元を拭わないで。

――ねえ、ねえ。今の、どう思った？

聞けるわけがない。あさぎは短いスカートの両端を押さえ、太腿から脚をぶらぶらとさせる。地面近くをたゆたう金魚を蹴ろうと、ひまわりを模した足先の大きな花が揺れる。

今度は誤魔化すように聞こえてくる、蟬の声。少しずつ、少しずつ、自分たちの関係を大人のそれに近付けようと足掻いている自分自身を、あさぎはひどく滑稽でもどかしいものに感じていた。

第24話 伝え合うココロ

しかし「そうだよ、私たち、付き合っているんだ」とあさは再度自分に言い聞かせる。こんな風に一日一緒に居てくれているのは、決して自分のことが嫌いだからではないと思いたい。今の己の行動に勢いづけられたように、彼女は思い切って口を開いた。

「ねえ、大学、何処行くの？」

「行けるかどうかは分からねえけど、……大」

清矢郎の答えた大学は隣の県に建っているが、普通電車で十分通える大都市の国立大学だった。東高ではトップクラスの成績の生徒しか受験しないだろうが、北高生ならば多くの生徒がその学校を志願するだろう。それに清矢郎が通っている予備校も、その学校に比較的近いという。

「そっか。せいちゃん、頭いいもんね！」

納得したように答えたあさがだが、心の中ではガッツポーズをしたい気持ちで一杯だった。あさが自身は何処の大学を目指したい、という夢はまだしっかりと持っていない。それよりも清矢郎が遠くへ行ってしまうまいことの方が嬉しかった。清矢郎の頭が良くて良かった、そして田舎でも大きな学校が近くにあって良かった。

「って、まだ行けると決まったわけじゃねえし」

「県外の大学とか、受けたりするの？」

「滑り止めに、少し考えてる。あの家もいつかは出たいし。大学進学の時に出るかとも思ってたけど、調べたら近くにやりてえこと出来る学校、実は結構あるし、仕送りしてもらってまで県外行くのもどうかと思って。家出るなら生活費の方をバイトで稼ぐわけだからだったら学費の一部でも自分で稼いで、行きたい学校行って、どこかに就職してから家出る方がいいんじゃないかと思えてきた」

それでいいのか分からんけど、と清矢郎は一旦言葉を区切った。無口な彼がこれだけ話すのは珍しい。

父親に強く叱られてきた彼には、自立したい気持ちが強くあるのだろう。母親は穏やかな人だが、仕事を持っているため一人息子の彼に家事や身の回りのことを全て出来るように教えてきたと、あさぎの母親から聞いて知っている。

それでも最近の親子仲が険悪だとは聞いていない。清矢郎も先日のように両親の代わりに法事に来るあたり、反抗期を通り過ぎ、それなりに親子の距離が上手く取っているように思えた。あさぎの脳裏には未だに、幼い清矢郎に平手を食らわせていた伯父の恐ろしい姿が残っているが。

一人っ子の彼は特に、その距離について悩んでいることだろう。あさぎには彼の心の底は分からなくとも、自分よりはずっと深く考えているのだな、ということは分かった。ちなみにあさぎと言えば、それこそまだ「行きたい大学」と呼べるものがない。通えそうな大学が近隣の大都市に幾つもあることや、家計のこと、あの心配性の母親のことを思い、仕送りをしてもらうよりも近場での進学を、と考えていた。

「せいちゃんって、すごいね……」

「いや。多分、全然甘い」

軽く拍手すらするあさぎから、清矢郎は顔を逸らすとそう言った。どう甘いのかも分からないあさぎには、二つの年の差を大きく感じるのだった。そんな彼に改めて憧れを抱くと同時に、今度はまた不安がむくむくと首をもたげてきた。

「どっちにしろ、これから受験忙しくなるよね」

「まあな」

「大学行ったら大人の世界になっちゃうから、きっと楽しいこととか誘惑とかいっぱいあるだろうし」

「……何が言いてえんだよ」

清矢郎は膝に肘を置いて手を組むと、じろりとあさぎを見た。

「んー。いつまで、付き合ってもらえるのかなって……あ！　っ

て、今のやっぱ、なし！」

あさぎは大きく手を振った。こんな後ろ向きなことを言っているのは、すぐに嫌われてしまいそうだ。

——いつまで、私なんかこうして付き合ってくれるの？ 大学生になっても、こんな高校生の子と遊んでくれるの？ 生活も合わなくなるんじゃない？

等々、あさぎには不安がたくさんあるが、そのようなことを言っても自分に魅力を持ってもらうことには繋がらない。だったら自分をよく見せるようなことをした方が……だが残念ながら、何をすればよいのか分からない。ならばせめて、楽しい前向きな話題を探すべきだ。

どうして四年前にあんなことをしたのかなど、重い話題はもってのほか。「空気が読めなかった」ことから中学生の頃、苦い経験をしたあさぎは、珍しくそれを察して話題を変えた。

「ね、ねえ、今度さあ、花火大会あるじゃない。一緒に行こうよ」

「何処の？」

「小学校の時に、行ったやつ」

「ああ、ばーさん家の近くのか」

「だめ？」

「俺はいいけど、お前の家、夜出て大丈夫？」

「多分、大丈夫」

クラスの女子と行くなど嘘が必要で、夕映にも工作を頼むかもしれないが、それは高校生の分際で恋愛をするためには仕方ないことだ。

「分かった」

あっさりと了承してくれた清矢郎の言葉に安堵し、再び万歳でもしたくなる。懐かしい花火に行けると分かり、あさぎの視界の金魚たちも里帰りを喜ぶように、飛び跳ねている。

あさぎが提案したのは、二人で金魚を掬ったあの夏祭りの花火大会のことだ。子供の頃一緒に過ごした時間を蘇らせ、あのわだかま

りをなかったことにしたいという焦りもある。あれからの四年間を埋めたいという気持ちもある。ただあの事件がもしなかったならば今の関係はないのかもしれないので、そう思うと複雑な出来事なのだが。

それでも受験生をあまり振り回してもいけない。あさは温度と湿度の高い風を、汗の滲んだ首筋と黒髪の間を受けると一呼吸置き口を開いた。

「私の行きたいとこだけじゃなくって、せいちゃんの行きたいところも言ってね」

「ん」

彼は相変わらず無口だった。

「でも一緒に居たくないとか、受験だから無理とかだったら諦めるけど」

「何だよ、それ」

こちらに向けられた清矢郎の視線に、――しまった、また習性でうっかりとネガティブなことを言ってしまった、とあさは首を竦めるが、そもそも同情や贖罪から始まったような交際だ。どうしたって自信など持てない。いっそのこと開き直って正直に彼に相談することにした。

「だって年違うから、受験のこととか私には分からないし。付き合うこと自体、初めてでどうしていいのか、何していいのか、分からなくて」

「……別に自然でいいだろ。無理するもんでもないと思うし。無理しなきゃいけねえようなら、『付き合う』って形じゃおかしいんだろうし」

正論を言う清矢郎。だからこそあさは焦り出す。

「それって、せいちゃん、私と付き合いたくないってこと？」

「だから何でそうなるんだよ」

怒っているわけではないようだが、流石の清矢郎も心外だと言う

ようにあさぎを軽く睨んだ。

やばい。あさぎの背中に汗がつうつと流れる。男性にこの表情をされることが、「恐い」。これ以上の失言を重ねれば、苛立たせてしまう。どうにか空気を変えないといけない。だが焦燥感から、自分を守ろうとする張りぼての言葉ばかりが出てこようとする。あさぎが何を言えればいいのかと言葉を失っていると、清矢郎にしては珍しく次の言葉を繋いだ。

「お前こそ、本当は俺と付き合いたくねえんじゃねえの。だからそういうこと尋ねたり、簡単に諦めるとか言うんだろ」

空も雲行きが怪しくなってきた。二人の上に涼しい影が落ちる。後から夕立が来るかもしれない。思ってもいないことをぶっきらぼうに吐き捨てる清矢郎に、あさぎは慌てて言い返す。

「違うよ！」

——そうじゃないのに。

信じてもらうには、もう気持ちを打ち明けるしかない。あさぎはそう思った。このままでは、始まってすぐに別れる羽目になりそうだ。不安を抱えたまま、お互いに不信感を抱いたまま、恋愛関係など成り立つわけがない。清矢郎は嘘のつけない少年だ。彼の言うことを信じるならば、もういっそ——。

「付き合いたくないなんて、あるわけない！ 私は、せいちゃんはずっと付き合いっていたいの、別れたくなんてないの。従兄妹でも受験あっても、いっぱい会いたい、ずっと一緒に居たい！ 誰かのものになるなんて、やなの！」

ぶちまけると重い気持ちしか伝えられない。どうしたら日頃の会話の積み重ねから、相手への気持ちを示しつつ、かつ自分の株を上げることが出来るのだろうか。男性に好まれる夕映や琴音部長の顔が過ぎる。あのように器用に明るく優しくなど、自分は出来ない。出来ない——。

あさぎはやけくそのように、清矢郎のTシャツを握ると俯いて、これでもか、と叫んだ。

「せいちゃんが、好きなんだもん！」

勢いで言ってしまった、ずっと秘めていた二文字。生まれて初めての愛の告白は、もっとロマンティックなシチュエーションを夢みていた。

どうすればそう言う以外に不安から解放されるのか、今のあさぎには分からなかった。ただ既に「自分は清矢郎でいっぱいになっている、だから付き合いたい」という話をしているため、その二文字は言うてはいけないと思っていた割に自然と口をついた。

しかし言葉にしてしまった以上、もう後戻りは出来ない。彼に罪の償いをして欲しいからではない。あさぎ自身が清矢郎に恋をしてしまったから、だからこういう仲になりたいのだと主張してしまった。言った後で恥ずかしさに顔は熱くなり、金魚がぶわぶわと公園内を大円舞する。

「ごめんなさい……」

もう、これ以上の言葉は無い。あとは清矢郎任せだ。ただ罪滅ぼしのつもりだけで付き合っているのですそれ以上の感情は持てない、と拒絶されてしまったらそれまでだ。

——恐かった。だが、知リたかった。あさぎは顔を上げた。

「せいちゃん、は、私のこと……」

どう想っているの？ それ以上は声に出来ない。

しかし次の瞬間、あさぎの身体は前のめりになり、汗臭い匂いに包まれると同時に固い何かにどん、とぶつかった。

「ひあっ！」

それが清矢郎の胸だと知った途端、あさぎは思わず小さな悲鳴を上げた。それでも抵抗することはなく、寧ろ生まれて初めての事態に硬直していた。

背中に回された、頑丈な腕。肩を掴む、大きな手。あさぎは清矢

郎に、片手で引き寄せられていた。

目の前で燃える赤いうじゃうじゃとした、魚たちの影。首を振るとそれは白地にロゴの入った彼のTシャツに変わり、また赤く染まろうとする。それを再び首を振って追い出そうとすると、かえって清矢郎の苦いような酸っぱいような男の匂いに額を擦りつけるような格好になり、これが現実なのだと、あさは赤い沼の中で思い知る。

その中で、確かに聴こえてくる。命の音。あさと同じくらい、速い拍動。何かを堪えるような、熱い吐息。

——同じ、気持ちなのかな。

焦がれるという気持ちをこの二つ年上の少年が自分に持っているとは思えないが、確かに寄り添っていれば、同じ緊張した気持ちではないかと錯覚を起こしそうになる。

「せ、せいちゃん？」

不安そうに尋ね返すが、その腕は離れない。

「何で、謝るんだよ」

あさぎの身体に低い声の振動が伝わる。それって一体——。混乱したあさは、腕の中で身じろぎもしないで尋ねる。

「何でって、どういうこと？ いや。怖い、ちゃんと行って」

何をされているわけでもないが、あの日思い出させるこのぬくもりが恐かった。彼が動けば抵抗など出来ないであろう、本能的に察する力の差が恐怖だった。あさが身を固くしたのを知った清矢郎はその腕の力を僅かに抜く。あさが顔を上げると、赤くちらちらした光の中、清矢郎は彼女を見下ろした。あさは上目遣いで、それでも勇気を出して自分の想いを伝えた。

「せいちゃんの、言葉で聞きたい。じゃないとあの時と、同じじゃない……」

最後は消え入りそうな声で要求したが、「あの時」が何を示すか清矢郎は分かったようだ。何も言わずに、突然幼いあさに触れてしまったことは、やはり清矢郎の弱点らしい。

眼鏡の奥の眼を揺らめかせると、彼はぐつと口を横に引き、やがてあさぎと顔を見合わせたまま、言い捨てた。

「俺も、嫌いじゃない。その、逆」

「って？」

「だから、こっちも……好き、だし」

瞬間、あさぎの世界が清矢郎を除いて真っ赤に燃えたことは言うまでも無い。

第25話 募る想い

あさぎの胸がばくばくと躍る。張り裂けそうだ。清矢郎は照れているような複雑な顔をして、あさぎの身体を離した。

「ほ、本当……？」

予想もしていなかった。いつの間にそんな想いで見ていてくれたのか。てっきり、同情や贖罪の気持ちだけで恋人になってくれたのだと思っていた。人生で初めて「告白」をされた。こんなに嬉しいものだと思わなかった。身体がそのまま甘酸っぱく赤い水の中に溶けてしまいそうだ。

聞き返したあさぎに、清矢郎は仏頂面で小さく頷いた。日焼けしたその頬が、少しばかり染まっている気がする。彼も人生初めての「告白」であつたわけなのだが、その心中をあさぎが知る由もない。「いつから、なの？」

女心としては知りたい。しかし清矢郎から帰って来た答えは曖昧なものだった。

「……んなの、分かんねえ。お前がそう思つてとは思わなかったから、そういう気持ちは考えないようにしてた。でも嫌いだったら、最初から電車の時間なんか合わせなかったし。今言われて、そうかもって」

その言い方だと自覚したのはいつなのかよく分からないが、付き合う前からあさぎを気にしてくれていたようだ。それは嬉しいのだが、もうひとつ気になることがある。

——あの事件の時は、好きだったの？ 嫌いだったの？

しかしこれを尋ねると、折角好きだと口にしてくれた、その柔らかなで脆い想いが壊れてしまいそうだったので今は押し留めた。

今度こそ、「両想い」というやつである。嬉しくないわけがない。顔がにやけそうになってしまい、あさぎは慌てて俯くと彼のTシャツを引っ張ってみる。

「何だよ」

「何でも、ない」

あさぎは思わずはにかんだ笑いで清矢郎を見上げ、また俯いた。彼はしばらくあさぎを見下ろしていたが、唐突にその頭をぐしゃぐしゃと撫でてきた。

子供扱い？　と思ったあさぎは、少々唇を尖らせ、乱れた黒髪を押さえながら清矢郎を見上げる。それでも触れてくる大きな掌は気持ちがい。甘えん坊のあさぎは子供の頃からそうされるのが好きだった。

「なによ？」

横を見て尋ね返すと、清矢郎は手を離しながら驚いた顔であさぎを見ていた。

「お前さ。俺に触られて、嫌じゃねえの？」

「ん……」

恥ずかしそうにあさぎは小さく頷く。その大きな手は再びあさぎの頭の上に乗ると、ゆっくりと滑らかな黒髪を下方向へ撫でる。やがてその髪を滑り降り、無骨な指が柔らかい頬を微かに掠めると、肩に掛かる髪の裾を軽く持ち上げするりと離れていった。

「分かった」

そして清矢郎は、頷いた。気持ち徐々に、言葉にしていく。罪の償いから始まった関係が、少しずつ少しずつ形を変えていく気がする。同時に言葉にしたことで、止められない何かを命を持って動き出す。少しずつ少しずつ、底なしの淵へとその足を伸ばそうとしている。

清矢郎の言ったとおり、従兄妹同士の切っても切れない関係。別れることになれば、後々の親戚付き合いも意識してしまい、居心地悪いものになるだろう。それでも、このまま恋愛関係になりたかった。

そして遂に、触れられることが嫌ではないと伝えた。

——初めて、男の人に抱き締められた。

あさぎの中に灯る、小さな炎。その熱が、あさぎの身体中にじんわりと甘く染み込んでいく。

少し恐かったものの、温かく、気持ちよかった。清矢郎に触れられてみたいと、思ったこともあるのだ。あの日のことをきっかけに、もっと大きくなったその掌に、と願っていた。

清矢郎は四年前のことから、あさぎに気を遣っているのだろう。

——今伝えたことで、もっともっと触れてくれるようになるのかな。あさぎははしたないと思いつつも、そんな期待も抱いていた。

静かに風が流れていく。熱気を孕んだそれ。まだ蝉は鳴き声を響かせ、空も青く晴れているが白い雲が立ち上ってきた。駅の近くにいるので心配していないものの、それほど経たないうちに夕立がやってくるだろう。

——まだ、帰りたくないな。

あさぎはそう思い、清矢郎の方にじりじりと何センチか寄り添うと、彼の顔を見上げて尋ねた。

「り、両想いになったら、何すればいいの？」

「へ？ 何って……」

頬杖をついていた清矢郎はきょとんとした顔で、手を外すとあさぎを見た。間抜けな返事に彼が虚を突かれたことがよく分かる。

夕映にも尋ねたが、行きたいところへ行ったり、一緒に過ごしたい場所へ行ったり、ただ一緒に居るだけでもいいと言われた。それは分かるのだが、男性で年上の清矢郎はどう考えてるのか、あさぎには不安になってきたのだ。

じいっと彼を見上げていると、清矢郎にまじまじと顔を見返された。まずいことを聞いたのかと思い、あさぎが首を傾げると、彼はぶい、と顔を逸らした。

「そんなん、こっちが聞きてえよ。お前は、何したいんだよ」

「え……っと、会ったりとか、遊んだりとか」

「じゃ。それでいい」

「えー。何それ」

「あさぎのしたいことでいい」

「そんなの、つまらないじゃん！　せいちゃんは何がいいの？」

「別に何でもいいから。お前が楽しければ、それで、いい」

「……」

何と主体性の無い、そして何と優しい言葉だろうか。怒っているのか、照れていいのか、あさぎは分からなくなってまた俯いた。

最初の「間」は何だったのかな、とふと疑問に思ったもののそのことはすぐに忘れ、こんな二つも下のちっぽけな私をよく好きになってくれたな、と今の状況をただ幸せに思い、サンダル足をぶらつかせるのだった。

・・・・・・

離れがたくはあったが、来週末の花火大会で会おうという約束をし、その日の夕方、二人は別れた。

「両想い」になったことだし……とあさぎは受験生で、かつ無口な清矢郎の迷惑にはなりたくないと思いつつも、一日に一、二度はメールを送ってしまう。返事が来ず不安になることもあるが、いくらあさぎのためと言えどもメールに夢中になる清矢郎の姿も、あまり想像がつかない。彼らしい短文だったが、それでも一日一度は律儀にメッセージが戻ってくるので、「自分のため」に時間を使ってくれている、そんな小さなことに喜びを感じる。

そうは言っても、メールをしたいたの、返事が来なくて不安だの、会いたい、いつも傍に居たいだの、狂ったように彼のことがばかり考えているのもおかしい。あさぎは清矢郎のことを振り切るように、他に出来ることを探した。何もせずについて、年上の彼に置いていかれることや、嫌われてしまうことも恐かった。

夏休みで母親が働きに出ているので家事をいつも以上に自分でしてみたり、文化祭の準備に学校にも出かける。週末には文芸部があ

るので、文化祭用の冊子の原稿も書かなくてはいけない。

あさは長い文章が書けないので、紙に下書きしたものをパソコンで清書する。まだほとんど下書きも出来ていないが、家に誰も居ない隙に、パソコンの電源を入れそのままインターネットを始めた。パソコンは家に一台、居間にあるのみ。あさぎ専用のものを小遣いを貯めて買えばいいのだが、まだそれだけの貯金はない。両親の居る時間に、部活の原稿や学校の調べ物以外で使っているとすぐに叱られる。

だから誰も居ない時はチャンスだった。携帯電話も小遣いの範囲でということでパケット代や通話料を制限され、それを超えれば契約を解除される約束になっている。それこそ清矢郎や友達との連絡に必要なため、あさは携帯電話でウェブサイトを見ることが出来る。は殆どしていない。

だからあさは少々世情に疎いところがある。久しぶりにアクセスしたインターネットで、噂になっていたコミュニケーションツールをようやく覗いては、あまり出来ないけれど、夏休みだし私も始めてみようなあ、どうしようかなあと、文芸部の友達のアカウントや、更にその友達のアカウントを眺めながら考える。

ちなみに夕映もよく携帯電話に触れているが、そういったコミュニケーションには手を出さないらしい。お気に入りブランドのサイトを見たり、通販サイトのランキングなどが好きだと言う。OLのようだにあさは思っていた。

その他にも様々なサイトを巡り、世の中にはこういうものが出回っているんだな、こういう出来事があり意見があるんだな、私はこう思うけどなあ、とあさは最近のニュースなどのコンテンツ、それについてのブログなどから自分なりに考える。事件から芸能事情好きなテレビ番組や漫画のこと、意外と好きな歴史のこと、可愛い服のこと、そう言ったことを調べていたが……うっかりと好奇心で過激な見出しのところをクリックしてしまう。

こくりと唾を飲み込み、簡単に見られてしまう「大人の世界」を垣間見る。注意書きを読み回避する場合もあるが、ただの知識として発信されている情報で、誰でも見ることが出来るサイトは多くある。

考えないようにしていたが、その科学的な基礎知識から想像するだけで下腹部が疼き、暑い部屋の中にうだるような赤さの金魚が現れ始める。

これまで「その情報」が自分に必要だとは思わなかったが、両想いとなった今は、必要になることもあるのだろうか――。

あさぎの身体から汗が噴出してくるが、眼を逸らせない。自分の身体の変化のこと、子供が出来てしまうかもしれないメカニズム、未知の男性の身体のこと。知りたいと思う。理解したいと思う。

むずむずする気持ちの中で、たゆたう金魚を見ていたら、清矢郎の顔が浮かんできた。その罪悪感で眼の前が真っ赤になる。暑くて頭がくらくらとしてきた。パソコンを落とし、二階に上がっていくと残っていた高揚感で清矢郎に「元氣？」などとあえて他愛の無いメールをし、そのまま勢いで――、文化祭の冊子に提出する文章を書いてみた。

外からは蝉の声。窓から午後のねっとりした風を感じながら、手と紙の間に汗をかきながら、あさぎは夢中になって赤い金魚の波の中、自分の想いを言葉にした。

それからその文章を読み返したり清書する間はずっと、清矢郎の顔が浮かぶことになる。

それから花火大会までの間には、更にまだ時間があつた。

――せいちゃんに、会いたい。

そう思ったあさぎは、いつ学校に来るのかと清矢郎にメールで尋ねた。彼は補習を受けるため、学校に来ることもあるらしい。あさぎにも文化祭の準備がある。ということは、またあの同じ駅で会う

ことが出来るのだ。

わざと電車の時間を合わせ、待ち合わせる。話が出来なくてもいい。顔が見られれば、それだけで嬉しい。あえて友達などと一緒に来ず、清矢郎よりも先に着いたあさぎは、改札口の付近でうろうろしながら彼の到着を待つ。

遂に清矢郎が降りてきた。金魚が導くので、分かりやすい。

——言葉は交わさないが、眼が合って心が躍る。

一瞬の、逢引だった。

だが会いたい気持ちが収まらないあさぎは、彼の優しさに甘え、次の機会の時は例の公園で待ち合わせた。たった一度だけ、少し話せばいいと思っていた。

制服を来ているので、周辺住民に見られて学校に電話されても困る。それでも短い時間でも、道からの死角に隠れて話をしたかった。公園で待っていると、清矢郎がやってきた。赤い金魚がいそいそと彼を迎えに行く。あさぎも思わず立ち上がる。

「元氣？」

「ああ」

「文化祭って北高も九月なの？」

その低い声が聞きたい。どんなことでもいい、話をしたい。部活に顔を出してきたという清矢郎からは、つん、と汗臭い匂いがした。

こうしてあさぎに初めて「彼氏」が出来た高校一年生の夏休みが過ぎていく。

第26話 触れて、みたい

花火大会までの間に、電車で眼を合わせたのが一度、駅裏の公園で二度、あさぎと清矢郎は会うことが出来た。

公園では学校の用事が終わってからの短い時間、話をしただけ。

清矢郎は予備校へと向かい、あさぎも制服姿なので周辺住民の眼がやたら気になり、早々に帰った。

ただ声を聞き、顔を見る。汗の匂い。日焼けした太い腕。細いようでどっしりとした、腰や脚。広い背中。眼鏡の奥の細い眼。唇。ひとつひとつのパーツを観察しながら、清矢郎の声を聞く。

それにうっとりとするあさぎは、不安を覚えさせる赤い金魚を見ないように、彼の話に集中した。

『ごめん、どうしよう——。私、せいちゃんじゃなきゃ、だめになってる』

あの日、あの時、見え始めた金魚。金魚の幻覚が見えるほど、清矢郎によって性というものに壊された。彼の心も同じように、自分で一杯になってほしい。

だがその悔しさを恋愛感情だと認め、彼からもそれを示してもらってからは、幻覚への恐怖や葛藤も忘れかけていた。しかし恋心が募れば募るほど、赤い金魚は燃え上がるように増えていく。

元々友達に嫉妬した時や、生理時にも見えていた、欲求不満、欲望の証の金魚。あさぎの心の中の、最も醜い部分。それが愛しい相手の前で美しく見える、不思議。

——いや、不思議ではない。

本当は、答えはただ、ひとつ。

あさぎは笑顔の下で、それに抗う。

笑って誤魔化し、昔のように妹のような存在として語りかける。

——せいちゃんに、触れたい。
——さわって、みたい。

そんなことは、言えない。認めたくない。

だけど、触って、みたい。

ただもっと、近づきたくて。

そうした時に、どれだけ幸せになれるのか知りたくて。

興味を覚えて「してみたい」と直情的に思ったことは、一度ではない。相手がどう変わってしまうのか想像もつかず、様々な危険も伴う怖いことだと思っているが、この内側から沸き起こる「それ」への憧憬は何なのか。そこを超えたいと思うのは、好奇心だけか。

だが清矢郎に身体ごと包まれることで、それ以上に想像も出来ないほどの温かい気持ちになれるような気がしたのだ。絶大な安心感が得られるような。自分だけ金魚が見えるという孤独やあの記憶への恐怖、そういったものから解放され、求める「大人の女性」に到達できる「気がした」。

この時のあさはきは自分が自分であることよりも、形のない未来にただ憧れていた。逆にそうした浮ついた気持ちから、現実の男性のぬくもりが呼び戻してくれるような、守って、支えてくれるような、そんな期待もあった。

反面、深いことなど考えられず、単純に触りたいという気持ちだけが先走りもする。

金魚が見える限り、自身のこの欲望は気のせいだと言えず、寧ろ常にそればかりを考えているのかとあさぎの心を苛んでいく。だからこうして自分に言い訳をしては、心の振り子が行ったり来たりと繰り返す。

昼に夜に、独りの時は、彼を想う。そのような淫らな気持ちは忘れようと、あさはきは夏祭りの数日前に中学時代の同級生数人と久々

に会う約束をして、街に遊びに出た。

.....

家の最寄り駅で久々に会った友人と別れたあさぎは、川沿いの道を一人で家路につく。夏の夕暮れ。未だ残る地熱が、電車の空調で冷たくなった彼女の身体を再び暖める。

中学時代の友人と騒いだことは、とても楽しかった。前半のカラオケはあさぎの性格上、気を使ったり恥ずかしかったりするところもあったが。しかし最初は照れ臭さがあったものの、高校に入学してから友達よりも付き合いの長い彼女たちとはすぐに数ヶ月前のように話ができ、安堵と共に懐かしい楽しさが蘇る。

中学校には嫌な思い出もあったが、楽しい思い出もあった。友達と言っても全てを打ち明けられるほど深くは付き合いなかったが、一緒に居て楽しいと思えるから傍に居た。そんな仲間との再会の時間は、あさぎに心地よい高揚感をもたらしていた。

この空間にもっと居たい気もしたが、現実の生活に戻らねばならない。だがあさぎの知らない仲間と頑張っている友人たちの話を聞けば、何やら夕映などの「大人」を思わせる優しさの元に戻りたくもなり――何より清矢郎にも会いたくなり、時間はちゃんと進んでいるのだな、ということをあさぎは実感する。

子供の頃から通ってきた道。車の音の狭間に聞こえる、せせらぎの音。揺れる夏の草。花火大会まで、あと少し。

一人で悶々と苦しんでいた中学生時代も終わり、今は傍に居てくれる人がいる。その人の元に戻れるなど、何と幸せなことだろうか。

今日最後に交わした友人との会話を思い出しては、顔がにやけそうになってしまい、あさぎは誰も見ていないのに慌てて二、三歩走り出した。

女性同士が集まれば、近況の中で最近の恋愛事情について軽く報

告することはほとんど「きまり」のようなものだ。だから出掛ける前から、もしかして彼氏ができたかと尋ねられるだろうか、どう答えようか、どんな反応が返ってくるのか——とあさぎも想像はしていた。

しかし友人からは、予想以上の反応があった。

『へーっ！ あさぎ、もう彼氏できたの？』

『違う学校のの三年生？？ 同中とかじゃなくて？』

あさぎの中学校の時の友達は、あさぎと同様に少々地味で真面目な生徒ばかりだ。そういったことに興味はあるものの、まだ「彼氏」というものは居ないようで、自分が四人の中で最初に恋人を作り羨望的になるとは自分でも思わず、あさぎは何ともくすぐったい気持ちになった。

優越感——などと醜いことは思いたくないものの、誰かよりも先に、という経験のない彼女はこのようなことでも何処か誇らしい気持ちになるのであった。

しかし——。

その後に聞かれたことには顔を赤らめる。文芸部の仲間同様、中学時代からそういった話題が好きな友人がいる。冗談染みて『いきなり子供できて、結婚しちゃったりして』と言われたことを皮切りに、『もうしちゃってるの？』『つきあってどれくらいですか？』などを顔を寄せられて聞かれる始末。流石にそういったことは、未経験のうえに優越感などという自分勝手な理由で清矢郎を利用したくもない。

それでも何度も思ったように、踏み込みたいと思う気持ちは確かにあるのだ。まるで自分の醜い欲望を露呈されている気がして、あさぎは恥ずかしさに俯いてしまった。ただ『そんなの、まだだよ』ということは、小さい声で相手に伝えたものの。

経験したら報告するようにとまでは言われなかったが、『私に彼氏できたら相談に乗ってね。あさぎのほうが先輩なんだから』など約束させられて、友人と別れた。

無論それ以外に互いの学校の面白い話、学校に関係のない話も昔のようにたくさんし、充実した時間ではあった。だがその一点により、今日の楽しさで消し去ろうとしていた炎があさぎの心に尚更広がってしまった。

川沿いの道は終わり、人家の並ぶ道に入る。母親に会うまでに、どうにかこの頬の緩んだ赤い顔を戻さなくてはいけない。誤魔化さなきゃ、とあさぎのサンダル履きの足が小走りになる。この動悸も赤い顔も走って帰ってきたからだと言いつつ諷することにした。

しかしそれから花火大会までの夜は、より具体的に悩んでしまう羽目になる。

——付き合っているってことは、やっぱりしなきゃいけないのかな。してみたい気もするけれど、するって……どういう感じかな。私はどうすればいいのかな。せいちゃんはどう考えているのかな。

赤い金魚を暗闇に眺めながら友人たちからの身体の奥をくすぐる質問を、あさぎは幾度も幾度も思い返していた。

.....

それから数日後の夕方。カラコロと下駄の音を鳴らしながら、あさぎはいつも通学に使っている駅の階段を降りる。歩き慣れない足元は時によろめきそうになるので、ゆっくりと進む。姉のお下がりである浴衣の帯が崩れてしまわないか、どうにかアップにしてきた髪も落ちてしまわないかと気になって仕方がない。

妙な悩みに取り付かれているが、やはり会いたい相手とようやく会える日なのだ。とりあえずは何も考えずに楽しみたかった。

祖母の住んでいた市は、それこそ清矢郎の通うような予備校がいくつも建ち、国立大学もあるような市だ。花火大会を行う会場は市内でも大きな河川のある郊外——つまりは祖母の家の近くになるが、それでもこのあたりの夏祭りでは大規模なものだった。

まだ明るい時間であるが、もうこの駅にも既に大勢の人々が集まっている。知り合いには会いたくないとちらちら眼を配るあさぎだが、うねるような人混みに紛れられてほっとする。

階段を降りたところに、待ち合わせたように金魚たちが集まっていた。当然だ。とくんとくんとあさぎの胸が高鳴る。

――いた。

清矢郎は前を向いていて、あさぎの方にはまだ気付かない。生まれて初めての、夏祭りでのデートだ。いつもと違う格好をしてきた。久しぶりに会えた嬉しさ以上に、緊張してしまう。

「お待たせ」

人波の中、階段の下であさぎは清矢郎に声を掛けた。雑踏の音で近付いてきたあさぎに気付かなかったのか、彼は驚いたように彼女を見下ろした。いつもと同じような、Tシャツにジーンズ姿で。

しかしあさぎが折角いつもと違う格好をしてきたというのに、清矢郎は「ん」と頷いただけで、ふいと横を向いてしまう。何か言ってもらえると期待してもいけないが、あさぎは少々がっかりしてしまった。

諦めて「人いっぱいだね」と他愛無い話をしながら、あさぎはやって来た電車で清矢郎と乗り込む。混んでいる車内なので、出入口の傍に二人並んで立つ。

「帰り、八時前の電車に乗らなきゃいけないんだ。花火ちよつとしか見られないの。残念。……せっかくなのに、ごめんね」

「いいよ。お前、まだ一年生だし。つうか、よく出てこれたな」

「お母さんに、『クラスの友達何人かと行くから』って言っちゃった」

「そっか」と清矢郎は呟いた。嘘のつけない彼だが、彼もまたあの出来事を隠している時点で、両親に対しては「嘘つき」となるのだ。どうやらそこは黙認してくれるらしい。

従兄だからという理由よりも、男性と二人きりで夜遅くまで遊ぶ

ということに反対されそうで、あさぎは団体で行くと嘘をついてしまった。同じ祭りに彼氏と行くと言う夕映にもしもの時の言い訳の協力を頼み、彼女の顔を知っている母親の説得に成功し、どうにか行けることになった。子供の頃は祖母の家から暗くなってから出掛けられたが、その時とは事情が違う。残念ながら同じ思い出は再現出来ないようだ。

「帰りも一人で帰るなって言われるから、同じ方面に帰る友達がいるって言っちゃった」

重ねての嘘に、あさぎは肩を竦めて苦笑する。浴衣の襟が持ち上げた髪のため触れる。

夜遅く電車に乗る娘を心配する母親に、あさぎは反対されたくない一心でそう言ってしまった。そのくらいの時間に帰るのは、部活をしている生徒にはよくあることだ。それにあさぎ自身は自分の平凡な容姿なら、大丈夫だろうと思っていた。しかし、

「……それは、そう言ってもいいだろ。送るから」
「え？」

あさぎは素っ頓狂な声を出して清矢郎に問い返す。何を言われているのだろう。彼は電車の窓の外を向いている。寧ろあさぎの声に驚いた隣に立っている女性の方が、彼女を振り返った。

「早く向こう出ても、お前の家着く頃には遅くなるし。駅で叔母さんに会わないように引き返せばいいだろ」

「だって、せいちゃんすごい遠回りになるじゃん。時間もかかるし」
あさぎは嬉しさよりも申し訳なさや心配な気持ちの方が勝り、首を振る。

「元々花火終わるより前に向こう出んだから、俺の方は帰る時間、同じになるだろ」

「でも、」

それでも引き下がるあさぎを、清矢郎が睨むように見るのであさぎは言い返せずに首を竦める。彼は何かを言おうと口を動かしたが、

また眼を逸らした。

「え？　なあに？」

あさぎは電車の壁に手を添え背伸びをすると、清矢郎の声を聞き取ろうと背の高い彼の口元に顔を近付けた。

「――だから、時間、遅えし。お前、そんな格好だし」

清矢郎はもう一度顔を顰めてあさぎを見、小さな声でそう言う
と「何でもねえよ」と吐き捨て、あさぎから顔を逸らし続ける。

やがて彼の言葉に、とても自分が心配されていることと、今日の格好が特別だと示す言葉が混じっていることに気付いたあさぎが、
どういう反応をすればいいのやら、と頬を染めてきよんとした時
だった。

電車が駅に止まり、下駄を履いて背伸びをしていたあさぎはバランスを崩した。よろけた身体は、清矢郎の大きな手に支えられ、彼の背中にも守られ、あさぎが誰かにぶつかることはなかった。

「あ、ありがとう」

人前なのですぐに離れるが、一瞬でも触れられて、思わずときめいてしまった。まだ夏祭りに辿り着いてもいないのに、あさぎの小さな胸はざわめき出し、浴衣の柄の花びらが一斉に散るかのよう
に、赤い魚影が電車に乗り合わせる人々の姿を隠していった。

第27話 幻影金魚（前編）

浮ついた気持ちのまま、あさぎは清矢郎と夏祭りの会場へとやってきた。清矢郎と子供の頃に見た花火をもう一度見たかったが、それが始まる頃帰宅せねばならない。という理由から祭り自体は昼間から行われているので、早い時間から会場入りをした。

八月の夕方はまだ昼間と呼べるほど明るく、祭りの風情にはやや欠ける。それでも秋に近付いている太陽は力を弱め、あさぎの白地の浴衣を薄いオレンジ色に染めていく。

幼い頃は夜の人波を歩き、はぐれないようにあさぎと清矢郎とその母親とで手を繋いだ。だが早く行きたくてたまらなかったあさぎは、人の少ない道から彼の手を引っ張っていたものだ。

しかし最後に行った夏祭りでは、二人が手を繋ぐことはなかった。あさぎが十一歳の頃の話だ。それから五年。清矢郎と二人で、恋人同士としてもう一度此処へとやってくるとは思わなかった。

「ほんと、久しぶりー。屋台自体、最近行ってなかったし。あ、かき氷。暑いから食べたいなー」

流石は都市部の夏祭り。昼間でも子供を中心に、大勢の人々が集まっている。色とりどりの店や、同じように浴衣姿の人々。香ばしい匂い。にぎやかな音があちこちで響く。縁日が催されている通りは場所を変えていないため、この光景はあさぎの記憶と大差ない。

祭りと言えばあさぎも中学生の頃、友人と地元のものに出掛けているが、それを数えても数年ぶりとなる。元々彼女はこういった夏の風物詩が好きなので、このざわめきに心も踊り出す。

それに清矢郎がはしゃぐということは、昔から絶対がない。よってあさぎは自分が場を盛り上げようと、子供の頃の自分たちに戻ろうと、清矢郎のTシャツを引っ張り屋台の方へ連れて行こうとした。わざと無邪気さを装って。

彼に見下ろされ微笑み返したが、あさぎ自身、自分でもわざとらしいと分かっている。清矢郎の真っ直ぐで静かな瞳にお粗末な演技を見抜かれそうで恥ずかしくなり、すぐに眼を逸らした。こんなやりとりは五年前の夏祭り、そしてあの四年前の事件でもあった——その時の様子が、金魚の幻影と共にあさぎの脳裏に蘇る。

しかし気まずい空気が二人を襲っても、もう逃げる必要はない。Tシャツの握った裾を離さなくてもよい。それがあの頃と違うことだ。

ようやく恋愛感情と認めて、気持ちを通わせた。あのトラウマを浄化するために。付き合い始めたのも、今日此処にやってきたのも、元々はそのため。そうするためにも、今はこの手を離してはいけない。もうすれ違ったまま、寂しい想いをすることもない。これからあさぎんと向かい合い、話が出来る——そう、思いたい。

あさぎのそんな想いを汲み取ったように、清矢郎も頷いた。

「分かった。行こう」

前を見たまま彼は一歩踏み出し、Tシャツを握っているあさぎの手に触れた。振りほどかれるのかとあさぎは不安になったが、ほっそりとした指先は大きな掌に包まれ軽く引かれた。

手を五年ぶりに繋いだ——が、その意味もあの頃とは違う。

目的の屋台に向かうまでの短い時間。あさぎまたしても清矢郎に優しく触れられ、時々すれ違う人々にぶつかりながら、ふわふわとした足取りで歩いた。

だがそれは数十秒のことで、かき氷を買い、しゃくしゃくと音を立てて食べている間は手を離すことになる。それからまた歩き出す。清矢郎もいつもよりゆっくり歩いているが、今日のあさぎは浴衣で下駄履きだ。ちまちまと歩きながら「待ってよう」と言い、困ったようにもう一度手を出した。

再びTシャツを掴もうとしたが、先ほどの清矢郎の手の温かさが忘れられないあさぎ。ためらいがちにその骨ばった指先に触れてみ

る。ちらりと彼を見上げる。ちらりと彼に見下ろされる。――少しだけ指先が触れて、再び握られた。

「手を繋いでいる」という事実が照れ臭いからか、清矢郎はあさぎの指を指でそっと包むようにするだけ。ともすればすり抜けてしまいうであるが、混雑したところを通り抜ける時は強い力で握り締めてくる。

しかしそうでない場所では、指の力を弱められる。そうすると今度はあさぎの方から確認するように、清矢郎の指を軽く握る。もちろん、お互いの顔も手も見もしない。視線は屋台や人々の群れに向けたまま。そしてあさぎは、意識的に明るい声を上げる。

「いい匂いするねー。ごはん、家で食べなさいって言われたけど、おなかすいたかも」

「まだ食うのかよ」

「屋台ものっておいしいじゃん。家で作っても同じ味にならないし」「まあな」

「あ、今度は射的。宏伯父さん得意だったよね」

「そういや、そうだったな」

「あの時には的がすぐ遠く見えたけど、今はなんて言うのかな、屋台そのものがちいさく見える。だからと言って、当たる気もしないけど」

あさぎは苦笑する。指先が、熱い。それを顔に出さないよう懸命に努める。

今、手を繋いでいるのは、子供の頃と違ってあさぎが彼に触れたいからだ。それは自覚している。触れていて、気持ちがいいから。小さな頃も、人に触れることは幸せで気持ちいいことだった。だが、その感覚とはまた違い――。

そんな内面の葛藤を見せないようにしているが、ざわめきに混じって視界にちらつく金魚の幻影は誤魔化せない。あさぎはそこから目を背け、見えるようになる前の自分を一生懸命思い出しては、その頃のように楽しんでみせる。

だがこの空々しさは四年前の夏の日とやはり同じもので、逆にあさぎの胸を騒がせた。それでもこの手を離そうとは思わない。寧ろもっとたくさん触れたいくらいだ。想いが繋いだ手から流れ込み清矢郎に勘付かれてしまいそうだが、もう少し彼と繋がっていたかった。

どうか、気付かないで。そう祈りながらあさぎの手はまた清矢郎の指をきゅっと握り、大きな掌の中にするりとその手を忍び込ませた。

そうしながらも、口では「涼しそうだし可愛いし、持って帰れるし、水風船釣りしよっかな」と他愛無いことを喋りながら、あさぎがきよろきよろしていた時だった。

「あれは？」

と珍しく清矢郎の方から話を振ってくるので、彼の視線を追った。その先に在るのは、水風船と同じように平たく狭い水槽の中で、人間たちに涼しげな姿を披露させられている……赤と黒の金魚の群れ。

「金魚すくい」の文字に、あさぎは軽く息を飲み、身を竦ませた。ひやりとした彼女に対し、後ろの金魚たちは里帰りを喜ぶように跳ねては、目の前の水に次から次へと飛び込み仲間たちと一緒に泳ぎ始める。

——まさかね。

清矢郎に、金魚が見えると言う話はしていない。確かにあさぎの視線が金魚を気にして変なところを泳いでいたかもしれないが、あさぎ以外の人間には見えないはずだ。彼女の心が、本人に幻覚として見えているだけなのだから。

実際、彼にホームで助けてもらった時も、貧血か何かで倒れたと思われていたようだ。金魚が見えるということを、何よりもどういう気持ちの時に見えるのかということを清矢郎には知られたくない。だが、見えていなかったとしても何故清矢郎は金魚を指差したの

か。ただ単に懐かしいだけか。彼もまた、あの件のことを意識しないように、あえて口にしたのか。

——ねえ。何を、思っているの？

四年前の事件は、この祭りで帰ってきた金魚を、あさが清矢郎と見ていた時に起こったのだ。

あさは無表情のままの清矢郎の横顔を、眼を見開いて凝視する。

第28話 幻影金魚（後編）

懐かしい金魚たちが泳ぐ屋台の前で、あさぎの脳裏に四年前の記憶が過ぎっていく。

『せいちゃんとあさちゃんみたいに、仲良しだね』

あさぎと清矢郎が最後に一緒に出掛けた、五年前の夏祭りで掬った二匹の金魚。祖母の家に置いて帰ったそれは、一年以上に渡り飼われていた。

その一年後の夏休み。古くなった柱や畳の匂いのする祖母の家で、あさぎが清矢郎と二人きりになった時にその事件は起こった。あさぎに初潮が訪れた、わずか二ヵ月後のことだった。何もすることがなく退屈な気持ちと、次の月経が近付き身体が重くけだるい気持ちから、ふてくされていた夏の午後には。

あさぎにはない喉仏の出っ張りも、皮脂の汚れも苦い匂いも、「おじさん」のように変化してしまった清矢郎が、金魚を見ていた自分に近付いてきたのは彼女も驚いた。久しぶりのことである。六年生になって、彼とは益々喋らなくなってしまったというのに。

しかしその日の彼の様子は、昔遊んでいた時と明らかに違って——。あさぎは一目見て本能的に察した。だがそう思うことは、子供の自分には早いような、いけないことのような気がし、「それ」に目を向けてはいけないような気がした。

だからこそあさぎは、あえてその場から逃げ出さず、必死に言葉を探し、無邪気に清矢郎に話し掛けた。

『去年の金魚、まだ生きてたね』

彼と一緒に子供であった頃を思い出して。そうすれば、また元のような優しい清矢郎に戻ってくれる気がして。

しかし彼女のほのかな期待は、無残にも打ち砕かれた。隣から二本の手が、何の前触れもなくあさぎの身体に向けられた

ことによって。

その時、あさぎの中で何かがぱりと音を立てて壊れた。

清矢郎にそっと触られた瞬間、彼女の眼に映ったのは、金魚の幻。水槽から飛び出したような緋色の魚影が、幼い子供ではなくなってしまった二人の姿を覆い尽くした。

傷ついたあさぎの心を慰めるように、これ以上小さな胸を粉々にしないように、現実逃避でもさせるようにその幻影を見せてくる。

——きれい……。

あさぎはそれに心を奪われた。実際、清矢郎は彼女の胸などに少し触れただけであり、すぐに、はっと気付いたように手を離れた。だがこのようなこと、両親にも伯父伯母にも言えはしない。恐くなつたあさぎはその場から逃げ出した。

しかしあさぎの瞼には、あの美しい金魚の幻がこびりついていた。小さな赤い炎のように、いつまでも消えずに彼女の心の奥底で燃え続けている。

清矢郎からの裏切りにショックを受けているはずなのに、胸が、熱い。

一体自分に何が起こってしまったのか。——「性欲」という三つの欲求の存在を彼女が知るのは、中学生になりそうした知識をつけてからのことになる。

だがこの時、既に気付きかけていた。何か大切なものが失われてしまったにも関わらず、自分が新しい生き物になったかのような、喪失と再生の狭間に立っているような。恐ろしいながらも、大人の世界を垣間見てしまったような。

やんちゃだが年の割にはしっかりとしていたあさぎは、近所のよく遊んでいた神社に駆け込み、大きく揺らいだ心を夕食の時間までにはどうにか落ち着かせた。涙は不思議と出なかった。ただ胸がドキドキとした。高く揺れる竹のざわめきを聞き、飛び交う金魚の群

れを見つめながら。

.....

その時水槽から飛び出し、あさぎに己の「性」を自覚させるようになった金魚たちは、今は小さな流れの中で気持ちよさそうに泳いでいる。清矢郎はそこでようやく、あさぎが呆然としていることに気付き、息を飲んだ。

「悪い。——ごめん」

唇を噛み、視線を逸らしながら、軽く頭を下げる。繋いでいた手が離れていく。その様子からあさぎを傷つけたと、彼が未だに自身を責めていることが伝わってきた。

「そういうつもり、じゃなくて。お前、あんとき、すごい楽しそうに金魚掬ってたから。そのこと、思い出して。ごめん！」

清矢郎にしては珍しく言葉を取り繕ってくる。あさぎは目を瞬かせた。

どうやら彼は本当に悪気などなく、ただ単に幼い頃の思い出を再現しようとしていたらしい。あさぎが、あの頃のように子供っぽく振舞おうとしたからか。四年前の事件よりも更に前の自分たちに戻ろうと、あの頃と同じことをしようとしていたらしい。あさぎにある事件の苦しみを忘れて、また笑って欲しいと言うように。

忘れられないくせに虚しく足掻いているのは、清矢郎も同じなのかもしれない。そこまで自分を想ってくれることがあさぎは嬉しいが、手を離されたことにはがっかりしてしまう。

清矢郎が自分に気を遣っているのは分かる。あさぎが彼に性の対象と見て欲しくないと思っているのではないか、と考えたのだろう。しかし「好きだ」と伝え合ったことは、夢幻ではない。相手に「触りたい」という気持ちは、それに繋がっていると思いたい。ようやく手に入れたこの関係を、罪の償いのためとして欲しくない。

あさぎがあの子で傷つき、清矢郎にもう触れて欲しくないと思っ

ている、と誤解されている――。そう思った彼女は、慌ててその大きな手を両手でぎゅっと握り締めた。

「ううん！ 違うの。大丈夫」

あの時、清矢郎に恋愛感情までのものは抱いていなかったのも、驚きと恐怖があったのは事実だ。それでも時は流れ、あさぎも少し大人になり、同じように大人になった清矢郎のことを意識し、彼の生き方や姿勢の全てに異性として惹かれていく。

逆に言えば、もう金魚をどれだけ掬っても、戻れはしないのだ。

あさぎは実感した。

お互いあの事件を無かったことになど、最早出来ない。それがなければ、どのような感情を彼に抱いていたかなど、今となってはもう分からない。それを起点に今のあさぎの気持ちは生まれ、二人の関係も始まった。そして二人で過去を乗り越えようと、歩き出しているのだから。

だとすれば自分も現実に向き合い、取り繕おうとするのをやめなければいけない、とあさぎは思った。

「それに、それとは関係なしに、今日は、金魚いや。持って帰るの大変だし、すぐに死なせちゃうのも可哀想だし、そうになったら折角のせいちゃんとの思い出なのに、悲しいし」

清矢郎は、笑顔を浮かべてそう言うあさぎを見下ろした。しかし彼の方はまだ心配そうな表情をしている。あさぎは「私は微笑んでいるのに、どうして」と今度は清矢郎のことが可哀想になってくる。あの時どういった気持ちで自分に触れたのか未だ分からないものの、これだけ純粋な彼が、ただの下卑た欲望を満たすためにあのようなことをした訳でもない気がし、清矢郎のことを理解してあげたくなってきた。

握った手を、あさぎは下へと引いた。

「ねえ。嫌じゃなかったら……神社、行こうよ」

「え？」

「おばあちゃん家の近くの。小さい頃、よく遊んでた」

「……花火、よく見えねえぞ」

「いいよ。どうせ少ししか見られないんだし、そこからも少し見えるし。どうせ遅くまで居られないんだから、だったら二人でゆつくりしたい」

誘っていることが恥ずかしく、あさは「だめ？」と遠慮がちに清矢郎を見上げる。

「別に、いいけど」と彼はいつもの仏頂面で頷いた。戻れないことはお互いに分かったのに、尚も子供時代の思い出を強調するあさに戸惑いつつも、何処かほっとしているように見えた。

——もう戻れない日々。お互いに傷ついた、あの日。

無かったことにしたい。

無かったことにしたくない。

無かったことに出来ない。

複雑な感情にがんじがらめになるなら、もうその渦へ飛び込んでしまおう。

十六歳のあさぎには、そのような拙い手段しか考えつかなかった。だから四年前の事件の後、たった一人で小さな胸に全てをしまい込んだ場所——祖母の家の近くの神社へと、清矢郎のことを誘ったのだ。今度は二人で、秘密を分かち合おうと。

午後六時。黄昏。逢魔ヶ時。熱い空気と冷たい空気が行き交う、昼と夜の間。

何かが潜んでいそうな、闇に変わる前の白ぼけた空気が、鬱蒼と竹の茂る神社を覆い、脚を踏み入れんする一組の男女を待ち構えていた。

第29話 はじめての…

ざわりざわりと、竹の音。薄暗闇を泳ぐ金魚。それらが祠の周りで手招きしている。柔らかな流線型を描くようになった少女と、青年に近付きつつある少年を、土地の神社は再び迎え入れた。

二人の手はしっかりと繋がれている。あの頃にはもう戻れない。だったらもう進むしかない。それ以外に、あの嫌な思い出を上書きする方法はない。あさぎはそう信じていた。

それに清矢郎と付き合い始めたことで落ち着いてはきたが、あの、心がざらつく劣等感——清矢郎や友人への。それも彼の胸に飛び込むことで全て解消出来るような、そんな焦りもある。醜いことに、この関係を利用しようとしているのだ。

——触れたい。そう思っていることも、もう相手に知られているだろうか。誰も居ない静かな神社で、あさぎはこっそりと清矢郎を見上げる。

「どっか座る？」

すると彼の方から尋ねられ、あさぎはこくと頷いた。

「花火、まだ始まらないし……」

それは言い訳だ。それこそ竹林や杉の木が生い茂り、花火などほとんど見えない。今日は特に此処へ来る者も居ないだろう。さりとて車両が入れないよう車止めがしてあり、掃除も行き届いているからか、たまり場になっているわけでもなさそうだ。

そうは言っても人家が近くにあり、鳥居の向こうの道路には車が何台も通っている。立っていれば外から見えてしまいうで、何やら恥ずかしい。二人はどちらからともなく手を引き合い、あの日あさぎが一人で座っていた社——の裏側へと、自然に足を向けていた。

氏子の人々が草を刈ってくれていたからか、あさぎの下駄履きの足も傷つかずに済んだ。裏には倉庫や焼却炉もあるが、其処にも人の気配はなさそうだ。

「座ろ」

今度はあさがそう言った。あの時はたった一人で心を癒していたが、今日はその原因となった相手が隣に居る。しかもあさぎの全てを受け入れてくれる、それが償いだと言うのだ。――いや償いでは嫌だと言ったら、あさぎのことを好きだとさえ言ってくれた。だから償いの義務感以上にあさぎの心を支えてくれるつもりなのだろう。これまでの寂しさを思えば、何と心強いことだろうか。

元々花火大会が目的であったので、あさは下に敷くために大判のハンカチを持ってきていた。もちろん金魚の柄だ。縁側にハンカチを敷くと、あさはちよこんとそこに腰掛けた。あの頃よりも五センチほど身長が伸びた。下駄履きの足の先がぎりぎり地面につく。隣の清矢郎は、相変わらずでん、と足の裏までつけて座っている。

――折角二人きりになれたのに、どきどきしてくれないのかな？ 座ったことで手も離れてしまった。あさは表情の変わらない清矢郎を、横から少々膨れて覗き込む。

「つままない？」

もしかしたらそうかもしれないと不安に思い、尋ねた。

「別に」

つっけんどんな返事はいつものことだ。分かっている。しかしあさぎも清矢郎に対し、彼女が一方的に喋ることもあれば、気を遣って黙ることもあった。

昔からそうであるが、清矢郎も集中したい時は、あさがどんなに話し掛けても無視して彼の世界に没頭していた。しかし「うるせえなあ」などと、クラスの男子のような乱暴なことは言わない。黙って自分のしたいことをして、終わればあさぎの相手をしてくれた。あさぎにはそれが清矢郎の「優しさ」として映っていた。そうだった大人びたところが好きだった。

それは今でも変わらないかもしれない。だったら彼に合わせて無言のまま、夏の宵闇の空気を楽しむのもいいだろう。

しかし黙っているとどうしても、色々なことを考えてしまう。やはり思い出すのは、最後に此処に来た四年前のこと。あの時、自分を緋色の水に突き飛ばした少年が隣に居る。あさぎはこのことは言わない方がいいだろうかと思いつつ、まるで花火のような赤い魚影を見上げて呟いた。

「昔、よく此処に遊びに来てたね」

「そうだな」

「最後に来たのは……四年前の、あの後、だったかな」

「……そっか」

しつこいと嫌われてしまうだろうか。寧ろあさぎが彼を傷つけてしまっているだろうか。

だがもう、無理にあの時のことを禁忌のように忘れよう、触れないでおこうとするのはやめたい。そうしている限り、いつまでも互いに遠慮がある気がする。特に清矢郎があさぎに遠慮し、罪を償うまではと彼の全てを曝け出してくれないのが悔しい。

単純に、あさぎが好きだと叫んで欲しい。必要だと吠えて欲しい。求めて欲しい。それをもっと感じたい。――それが独りよがりの望みであつたとしても。

もう、一人で抱え込まなくてもいいのだ。あの事件の衝撃に耐えたことも、両親にも友人にも言えず苦しかったことも、祖母の家で清矢郎と会うたびに一人やきもきしていたことも、周囲と自分を無意味に比べて苛々し、あんなことをしたくせに褒められている彼を引き合いに、憎しみに似た劣等感を抱いていたことも。

きっと傍に居れば、全部解消される。だからもう、忘れたい。乗り越えたい。彼の手を借りて変わりたい。

「ごめん」

「だから、謝って欲しいわけじゃないもん」

また誤解されてしまったと、あさぎは慌てて彼の方を見た。

「じゃあ、どうすればいい」

「あの時、何であんなことしたのか分かんないけど、今は私のこと……す、好きになって、くれたんでしょ？」

「ああ」

「私も、あれからせいちゃんじゃなきゃだめに——好きに、なっちゃったんだし、だからもう、気にしなくていいのっ」

「……ん」

どう反応してよいやら分からない、という様子でもあるが清矢郎は頷いた。しかし彼はまだ黙って前を見ているだけ。

「怒ってるの？」

「何で俺が。お前の方が」

「だから怒ってないって」

「……」

そしてまた無言に戻る。闇は一秒ごとに深くなっていく。時々車の走る音と、草むらに潜む虫の声、そして竹のざわめきが聞こえてくる。予め虫除け対策はしてきたが、一箇所刺された腕をあさぎはぽり、と掻いた。

清矢郎は依然あさぎに気を遣っているように見える。昔から思慮深い少年ではあったが、大人になって益々慎重になっているようだ。豪胆な一面もあるようだが。

先ほど昔のことを二人で蘇らせ、そして二人で遊んだ、二度と遊ばなくなったこの場所に戻ってきた。底の見えない渦に飛び込むしか前に進むには方法がないと思ったが、間違っていたのだろうか。

逆に妙に意識してしまい、会話も出てこなくなる。——これでは、

「なんか、四年前、みたいだね」

「……」

ため息混じりに呟いたあさぎを、清矢郎はゆっくりと見た。組んでいた腕を、驚いたように下ろして。

あさぎも彼を見た。夜と言う帳が下りても、その表情はまだ辛うじて分かる。

その言葉の意味を、彼は察したのだろうか。四年前みたいだ——この気まずさが。そしてこの男と女特有の微妙な空気が流れた後に、何が起ったか。

流石に女の子の方からは言い出したくない。「それ」は夢に見ていることだから。

「どういう、意味だよ」

静まり返った空間に、低い声が波紋を作る。あさはびくんと肩を揺らす。——四年前とは、違う。彼が沈黙を破った。清矢郎もまた成長したからか、それとも今は恋人同士という安心感があるからか。

あさは黙って清矢郎の眼を見つめていた。いつの間にか身体を彼の方に向け、にじり寄るように前のめりの姿勢になって。暗闇に赤い金魚が浮かんでいる。いくつもの黒い眼まなこがくるくると回る中で、彼の瞳だけは見落とさないように。

清矢郎もあさから眼を逸らさなかった。それは深い水の底のような眼をしていた。四年前と同じ大きさのはずだ。なのにあの時と違い、濁ってはいないように見えた。透明度が高く、奥の奥まで透き通っているような。だが深くまで見え過ぎて、それはかえって闇のような様相になっている。

——もう、触れてくれないの？

その水底に吸い込まれてしまいそうだと思いながら、あさは胸を波打たせていた。

触れたいよ、今なら。

触れて欲しいの、あの時のように。

唇がそう、素直に動きそうになる。そんなこと言ってはならない。いやらしい女の子だと、真面目な彼に嫌われないか。だが、「触りたい」くらいは言ってもいいだろうか。先ほども触れた、その大きな手くらいは。

あさぎの唇が震える。それを清矢郎の眼が捉えた。――そう思った時、赤い金魚のベールをかいぐり、いきなり彼の顔が近付いてきた。

望んでいたはずなのに恐かった。しかし眼を閉じる間もない。勢いを止めるように細い肩に手が置かれたが、歯がこつんとぶつかった。あさぎは無意識のうちに肩を疎めると、眼を固く閉じた。

柔らかな、唇同士が重なった。

第30話 金魚、花開く

瞼の裏には真っ赤な魚。上手く泳げない、緋色の酸っぱい水の中で、溺れそうになる。まだ押し付けられている清矢郎の唇の上で、あさぎは息継ぎをするように自身の唇をぱくりと動かした。すると相手の柔らかなそれを啄ばむ格好となり、慌てて顔を逸らす。

清矢郎も無理強いするつもりはないらしく、唇はそこで離れた。力の抜けたあさぎの身体の重心が揺らいだところを、頑丈な両手が支える。

——嬉しい。そう実感する半面、——何が、起こったの？ と混乱もしている。

「キスをされた」のは確かだ。しかも初めてのそれという、あさぎの人生において重大な出来事が起こった。それは事実として把握している。だが緊張しすぎて、何が何であったのか、感触もあつという間に消えてしまってもう思い出せない。

顔を上げて微笑む余裕などない。恥ずかしい。胸が痛い。あさぎが俯いていると、清矢郎にそのまま引き寄せられた。だがその両手は肩の上に置かれたまま、彼も自分の顔を見せたくないのか、その胸にあさぎの額を押し付けていた。あさぎも苦勞して結った髪や、自分一人では直せない帯がほどけてしまったら困るので、彼が静かに密着してくれていることにはほっとしていた。

廻る金魚、廻る。だが四年前とは全く違う。状況も、幻影の様も。赤い花卉のようだった小さな金魚たちは固まったように大きな数匹の魚となり、ぐると大きくたおやかに動き、ドレスの裾のような尾びれで清矢郎に寄り添うあさぎをぱしゃん、と叩く。二人を取り囲む金魚たちに、このまま世界から見えなくして欲しいとあさぎは願うものの、これは彼女にしか見えない幻覚なので、実際は人に見られないよう気をつけていなければならぬ。

「……浴衣、自分で着たのか」

沈黙を破ったのは、清矢郎からの朴訥とした口調の質問だった。

「う、うんっ」

口を開くのも照れ臭いが、あさぎはどうか答えを返した。そして「ふうん」と気の抜けたような返事を聞きながら、彼が何故そのようなことを聞いたのか考えた。その途端、まさか、とその細い身体が燃え上がる。

「もしかしたら」と思いつつ、「どういう意味？」と聞き返すのも恥ずかしく、男女の微妙なやりとりから彼の内心を推察してどきまぎすることしか出来ない。恐れているのか、期待しているのかあさぎは自分でも分からなくなってきた。

それから再び清矢郎は黙ってしまふ。彼が無口なことは重々承知しているが、初めての口付けの後だ。あさぎも流石に不安になる。

確かに四年前、此処で一人でやるせない気持ち堪えていたことを思えば、比べ物にならないほど幸せだ。

思い切って踏み込んでよかった。四年前を払拭する――その染みは完全には消えなかったとしても、それ以上の思い出が出来た。それでも新たな不安は沸き起こる。

「い、いやじゃなかった？」

今度はあさぎが顔を上げると、清矢郎を覗き込んで問い掛けた。

その言葉に彼は驚いたように身じろぎする。

「それ、俺の言うことだろうが」

「だって、だって」

此処に誘ったのはあさぎの方である。そのうえあさぎの子供っぽい反応に、清矢郎が「こんなものか」とがっかりしている可能性もある。

しかし清矢郎は軽くため息をついた後、顔を逸らして聞き返してきた。灯りのない神社なので、この暗がりでは表情がよく見えない。それは彼にとって幸いだった。

「お前の方が嫌だったんじゃないの」

あさぎはすぐに首を横に振った。

「う、嬉しかった、よ」

正直に言うのは恥ずかしかったが、勘違いされても困る。ふしだらな子だと思われても困るが、もうしたくないどころかその逆なのだ。ああいうものなら、何度したっていいな、大人ってやっぱりいな、と想着てしまうほどに。

そしてまた、沈黙に戻る。竹のざわめきが、二人の気まずさを煽っているようだ。だが今の清矢郎の言い方からすると、彼の方も嫌だったわけではなく、あさぎに対して「こうしたい」と思ってくれたのだろう。それにやはり、先ほど浴衣のことを尋ねられたのも、もしかしたらその先も……と望んでいるからかもしれない。そう思うと、恐怖よりも期待であさぎの胸が震えてくる。

——私って、汚い子なのかなあ。

この欲求を「汚い」と表現するのは、適切なのかそうでないのかあさぎには分からないが、両親には言えないことであり、こんなはしたない願望があると知られれば相手にも気持ち悪がられてしまいそうだ。だとすればやはり、汚いことかもしれない。それでもあさぎは、あの日の続きを望んでいた。その大きな手に何処までも触れられたかった。

しかし性に関しては、十八歳に達していないことで禁止されていることがたくさんある。それはまだ今の自分には早いからだとあさぎは理解しており、全く興味が持てないことも多々あった。

だが清矢郎に関することだけは、別だ。十六歳は結婚も出来るのだし、と現実には不可能であっても開き直ってしまう。

求めてよいものなのか、ここで留まるべきか、あさぎにはやはり答えが出せない。分かっているのは、今の初めての口付けがとてもとても嬉しかったということ。今年の夏の、きっと最高の思い出になるだろうと、この時あさぎは思っていた。

——せいちゃんは、どう考えているのかな。

それは更に分らないことだが、「あさが好きだ」と言い恋人関係になった後で触れてくれた、それだけで今は十分だった。あさは清矢郎の胸にそっと凭れた。横向きに、髪や帯が崩れないように。多少の乱れは人混みにぶつかってそうなった、と母親に言い訳しようと思ひながら。

清矢郎も今夜はこれ以上踏み込む気がないのか、一旦手を離してから触れることなく、あさぎの好きにさせていた。しかし「くっつきたい」とあさが恥ずかしそうに小さく零すと、その肩にもう一度手が回された。

ほっとした。温かかった。気持ちがよくかった。
胸が、身体が疼いた。それが真実。

どん、と突き飛ばされるような衝撃があった。

どん、と下から突き上げられるような振動があった。

どん、どん、とあさぎの小さな胸の中で何かが弾けるような音を立てていた。

それはいつの間にか始まっていた、遠い花火の爆音だった。

「花火、始まったね」

「……そうだな」

あさぎの呟きに清矢郎も同意したが、二人は身を寄せ合ったまま固まったように動かなかった。

——大好き。

あさぎは清矢郎のTシャツをきゅっと握った。上手く言えないが、ただ好きで好きでたまらなかった。花火の代わりに炎のような金魚を眺めていた。大きくゆったりと、ふうわりと、あさぎと清矢郎を包む。

——だいすき。

あさぎの手に力が籠る。シャツ越しのぬくもりが、もどかしかった。

無意識のうちに、また顔を上げた。清矢郎がそれに気付いてあさぎを見下ろした。

顔が、近い。息の匂いすら感じられそうだ。

彼の唇は、こんな形をしていただろうか。

もう小さな子供同士でも、年の近い優しかった「お兄ちゃん」のような存在でもない。今の清矢郎は、誰よりも大好きな異性だ。

あの時、裏切った「家族」でもない。今はあさぎからも触れたいと思う、愛しい相手だ。

全ては過ぎ去った過去。こんな唇の形をしていたのかと、今更ながら見つめる。昔はそんなことなど意識しなかった。しかし今はその輪郭を辿り、その感触を、熱を狂おしいほど求めている。

あさぎは少しだけ伸び上がり、顔を近づけた。薄桃色の唇が揺れて、開く。

——もういちど。

大きな花火が、連続で打ち上げられた。空間を隔ててはいるが、無視出来ない存在感で響いてくる。

頬に手を添えられた。そのまま耳を挟み、顎を持ち上げられて、彼女の望みどおりもう一度唇を重ねられた。

気持ちがよかった。息苦しいほどドキドキとした。

この感覚が、永遠に欲しかった。学生として他に大切な、すべきことがあるのは分かっている。これだけを永遠に求めることは、今の年齢のあさぎには許されない。

それでもあさぎは、苦しくてたまらないほど幸せだった。

——ずっとずっと、「これ」が欲しかった。

ようやく、手に入った。

あさぎの望みを何処までも叶えてくれる彼は、どうなのだろうか。これが彼の望みであり、欲望であれば、更に嬉しいことなのに。

やがて清矢郎の唇が離れても、まだぼうつとしていたあさぎであったが、彼の方から「時間、いいのか」と尋ねられ、現実引き戻された。熱い身体は水をかけられたように冷やされ、途轍もない寂しさと喪失感が襲う。

――帰りたくないな。

だがまだ子供なのだ。仕方がない。それこそ、こんなことに溺れてはならない年齢だ。

――早く、大人になりたいな。そうしたら、一晚中一緒に居られるのに。

身体はもう子供を産むことも出来るのでこうして早熟して異性を求めるが、人として社会的な責任が取れない。あさぎ自身も、もっと様々なことに興味を持ち人として成長しなくてはいけない。清矢郎の受験の邪魔も出来ない。

「受験勉強、頑張ってね」

縁側から下りると自然に手を繋ぎながら、あさぎはそう言って笑顔を作った。そう言うことしか出来なかった。

鳥居をくぐった二人は、竹の影が手を振る異空間を、夢のような時間を後にして、また小さな体に戻り群れて泳ぎ出した金魚たちと一緒に、日常に向かって歩き出す。

清矢郎はどれくらい自分に触れたい、一緒に居たいと思ってくれているのか。あさぎはこの興奮のまま聞き出したかったが、そんなことを言っただけで呆れられたくない。黙って相手の気持ちを探る、恋の駆け引きをするしかない。

しかしあさぎはそうしたことが苦手なため、もしかしたらいつか口に出して聞いてしまうかもしれない。そうした予感もしながら、代わりに気になったことを問い掛けた。

「ねえ、せいちゃんは、今の……はじめて、だった？」

すれ違う人には聞こえないだろうと、真剣な顔でそう尋ねてくる

あさぎに対し、清矢郎は口を横に結んだ。恥ずかしいと言う割に相手が答えにくいことを素直に尋ねてしまうのは、彼女がまだ子供だからか。

「知らん」と清矢郎は早口で言うと、先に歩き出した。しかし駅が近くなり人が増えてきたため、直ぐにあさぎとはぐれそうになり、「待ってよう」の声に諦めて立ち止まった。彼の反応にあさぎの心配は却って募る。彼は二つも年上であるのだから。

「もしかして、したこと、あるの？」

甘い時間のまま今夜を終わらせればよかったのに、余分なことかな、と分かっていつつも経験のないあさぎは焦って問い詰めてしまう。

清矢郎は舌打ちしながら視線を下に向けて、彼女の小さな手が自分のTシャツの裾を握っていることを確認すると、

「したことなかったら、いけねえのかよ」

顔を上げずに吐き捨て、後はTシャツを掴ませたまま、あさぎの存在を横目で確認しながら駅へと足を向けた。

「経験がないことは格好悪い」。清矢郎にもそういったコンプレックスがあるのだろうか。あさぎも友人と比べては常々感じていた。だが清矢郎ならば、小さな見栄よりも本当に好きになった人を大切にしよう。だからこそあさぎは彼が他の女性にそんなことをするのが許せないのであり、もしそうならば、四年前の時のことも誰でもよかったのかと怒りたくなる。だからあさぎも彼の「はじめて」になれるのは、嬉しかった。

「ううん！ それなら、よかった」

あさぎははにかんで笑うと、素直な気持ちを伝えた。清矢郎を嫌な気持ちにさせてしまっただろうか、と嫉妬からつまらない詮索をしてしまったことは反省するものの、初めてあさぎの「女」に触れてきた清矢郎から、彼の初めての接吻を奪えたことはとても満足のいくことであった。

その夜あさが金魚の群れに囲まれながら、清矢郎の唇の感触や、擦り寄った胸の温かさ、色めいた表情のひとつひとつを思い出し、遅くまで眼が冴えて眠れなかったのは、言うまでもない。

闇の中、薄い唇をそっと指先でなぞっては、びりりと走る微弱電流のような痺れに震えていた。

第31話 青竹迷風 弐

ざわり、ざわりと風の音。

竹の葉が風に揺れる。枝をしならせ、打ち鳴らす音。

鬱蒼と生い茂り、その緑を濃くしていく。

一匹の赤い金魚が、その中に迷い込んだ。

小さな金魚はやがてその数を増やし、群れをなし、暗い竹藪の中を、警戒しながらもちよろちよろと散策し始める。そして時には竹の幹に白く噴いた粉を、餌の代わりにちよい、ちよい、と啄ばんでみる。

小さな口で、はくはくと、懸命に。食べられないと知っていながら、戯れのように。

.....

あの花火の夜から、数日後のことだった。

「……で、あの東高の子とはどうなったんだよ」

「で」と言われたものの、前後の話とどう繋がるのかと、清矢郎は相手の友人に気付かれないよう、こっそりと眉を寄せた。気晴らしにと引退した部活へ友人たちと顔を出した帰り道に、唐突に尋ねられたのだった。

夏休み前に駅であさを助け、その後すぐ彼女と付き合うことになった――それをこの友人らに見られていたのだ。当然、他の同じ学校の生徒にも見られていた。これまで時々しか女子と会話をしなかった清矢郎のその行動は、非常に大胆なものに映ったらしい。

予備校をそのまま無断欠席したこともあり、次の日も親しい彼らにあの子は何なんだと追及されたが、元々無口で自分のことを語らない清矢郎、だんまりを決め込んでいるうちに友人もやがて諦めた

ようだ。あのよう注目を浴びながらも、誰にも有無を言わせない勢いだ。彼に圧倒されたのもあるだろう。何も言おうとしない素っ気無い態度からも、何か事情があることは相手に伝わったようである。

それから一ヶ月近くが経ち、友人もそろそろいいだろうと、そのことをまた聞き出したくなったらしい。思い出さなくていい、人のことは放っておけよと思うものの、

「えっ！ 加納、彼女できたん！」

その件を知らなかった別の友人が、話に首を突っ込んできた。彼は腕組みをしながら、「そう言えば、二年の奴らが変なこと言ってたなあ」とやけに納得した顔で言う。

いつの間にそこまで話が広がっていたのだろうか。どうやらあの場には、知り合いの二年生も居たらしい。先輩を冷やかせるような雰囲気の一部活ではないが、後輩たちが内心そう思っていたのかと考えると清矢郎は面映い気持ちになる。

それでもあさぎを助けたことに後悔はないので、何を噂されても愚痴を言うつもりはない。清矢郎が口出ししてきた少年をじろりと睨むと、彼は首を竦めた。しかし今日一緒に居る連中は、そういった話には縁がないらしく、また興味もあるらしい。受験のストレスもあるだろうか。残念ながら誰かが話を逸らしてくれるということもなかった。

どうと言われてどう答えればいいのか。あさぎとの間にあった出来事を全部教える気はないが、「彼女」だと宣言すれば納得されるのか、それによって何か不利な状況になることはないだろうか。

慎重に考えていた清矢郎だが、そこでふと、あさぎの顔が脳裏に浮かんだ。彼女など居ないと言えば、あさぎのことだ、頬を膨らまして怒りそうだ。もしかしたら泣くかもしれない。……それはそれで困る。

しかし、ここでの話題が彼女の耳に入るわけではない。だからと言

って、隠し事をしたり嘘を言っている理由にはならない。だけど正直に話すには、照れ臭い。どう答えればよいか、何を期待されているのか。このまま話が流れていかないかと、清矢郎が困ってしまつてむつつりと黙り込むと、

「何年生の、何者？」

先ほどの少年が竦めた首を伸ばして清矢郎を見上げ、懲りることなく尋ねてきた。もう一人は気を遣っているのかそこまで興味が無いのか、話には加わらないが話題を変えてくれることもない。

「三年……じゃあねえよな」

最初に話を始めた少年が、そう仮定して清矢郎を見る。この少年があさぎのことを知るわけもないが、彼女は体型も雰囲気も、まだ中学を卒業したばかりの幼さが抜けていない。清矢郎の方も兄貴分として偉そうな態度を取っていたこともあり、ちゃっかりと観察していたらしい彼には二人の年齢関係が分かったようだ。

嘘をつく意味もないので、清矢郎はとりあえず頷いた。その時点で清矢郎とあさぎに何か関係がある、というのは認めているようなものだ。だが従妹だという真実は言いづらく――それはあの事件への罪悪感が未だにあるからだ、清矢郎はそれ以上何も言わなかった。

少し沈黙した後、あさぎのことを尋ねてきた友人が何気ない様子を装いながら、清矢郎に対して核心へと斬り込んできた。

「もう彼女とは――」

その時、タイミングよく、ごう、という音とともに、道沿いの線路を特急電車が走り抜けていった。しかし彼の質問は、追い風で髪を乱した清矢郎と興味津々なその他の友人たちの耳にもしっかりと届き、誰もが固唾を飲んで清矢郎の返事を待っていた。

「うるせえな」

彼らの期待を裏切ることになろうとも、それについては答えない

という権利も許されるだろう。これまでの学校生活で、猥談で盛り上がることは何度もあったが、清矢郎は聞き役の一方だった。そんな清矢郎だ。相手が悪く友人の質問は不発に終わり、それからはおかしな無言の時間が訪れてしまう。

「……一年生っぽかったもんな」

もう一人の少年がフォローするかのようにぽつりと呟いたが、会話が続くことはもうなかった。

嫌な空気となってしまい清矢郎も申し訳ないと思うが、仕方ない。夏の熱気も凍らせるような拒絶から、やはりまずいことを聞いてしまった、ということはデリケートな問題だから友人たちも察したところだろう。

第一、清矢郎は、自分に対するその話題で盛り上がりたいたいと思わない。あさぎをそうした想像の対象とさせたくなく、あの花火の時にしたことも、したいと思ったことも、その欲望を自制していることも、恥ずかしくて言えるものではない。口下手なため自分の経験など話せば、そんな気持ちを手取るように分かってしまうだろう。しかし他人はどうなのかと興味を持たれることも、分からないでもない。清矢郎とて、そうした情報をインターネット等で目にすることもある。そうした願望を平気で口に出している仲間だって居る。だから清矢郎も友人を怒るつもりもなく、ただ黙々と歩いていた。

真夏の昼下がりに。アスファルトからの地熱と天から降り注ぐ太陽が、のろのろと道を歩く十八歳の少年たちを焦がしている。

「コンビニでも寄るかー」

一人がそう言い、残りのメンバーもけだるそうに頷くと、丁度目に入ったコンビニエンスストアに連れ立って入った。少しの立ち読みをして飲み物でも買えば、また空気も変わるだろうという暗黙の了解だ。

コンビニエンスストアの冷気が、歩くだけで汗をかいていた清矢郎らの身体をふわりと包むと同時に、詰まっていた息がほっと吐き

出される。来店を知らせる機械音とコピーされたような店員の声が、彼らを現実の生活へと引き戻してくれた。

・・・・・・・・・・

この出来事は清矢郎にとって、彼に自身の欲望を却って認知させることとなり、悔しいようなもどかしいような気分になされた。花火の時のことも思い出さないようにしていたのに、これをきっかけにあの感触や匂いを思い出してしまい、受験勉強の合間に考えてしまう。電車に乗っている時や、眠る前など、一人きりの時間に深い淵へと引きずり込まれそうになる。

正直なところ、あさぎのことが好きだとか、そういった俗物的な感情は清矢郎も考えたことがなかった。あの事件があったからこそ余計に、そういう対象として考えてはいけなような気がしていた。だが、他の男があさぎにあの日の続きをすることを想像すると胸がもやもやし、傷つけてしまった彼女が幸せに笑っているかと、駅で見かけるたび気になっていたのは事実。四年間、彼女よりも気になる存在が現れなかったのも、事実。

だから両親に秘密を作ることになると分かっていたても、あさぎからの交際したいという申し出を受け入れた。身内相手となるが、そういうことに興味がないわけでもなく、嬉しかったからだ。

恋心を自覚する前に、罪の償いの意識から始まったこの関係だったが、身を寄せてきたあさぎに「好き」と生まれて初めて囁かれれば、驚きや嬉しさを上回って清矢郎の心に迫るものがあった。

自分なんかでいいのか。いいと言ってくれてるんだ。まさかそのように自分なんかを思ってくれるとは思っていなかった――。清矢郎の中で、何かが急速にせり上がり、それが見えない手で彼の背中をどつく。

だからつい、自分もだ、と清矢郎は勢いに任せて答えていた。

しかしそれは間違いではなかった。言葉の力と言うものは大きい。はっきりと口に出したことで、清矢郎の中で償いだとはかり思っていたあさぎへの気持ちをはっきりと見えてきた。自分で思っていた以上に、彼女を好ましく思っていたのだということを実感した。逆に好きだと言われたことで、あさぎのことがより有難く、愛しく、大切なものに思えてくる。

あさぎが好きだから。だから昔から、大事にしたかったのかもしれない。だから、また会いたいと思っていたのかもしれない。

だから今、……触れたいと思うのかもしれない。

夢見がちなあさぎと違い、そういったことを考えるのが苦手である清矢郎だったが、度胸がないわけでもない。ここぞという時には直感で豪胆に行動することもある。あさぎにそう言われ、自分も前からそうだったのかもしれない、今自分も言わねば彼女が離れていくかもしれない、と思ったのだった。

そういった感情の存在を認めればなおのこと、あの日の不甲斐ない自分を思い出しくなくなる。そうした感情を伝える前に、幼いあさぎに手を出した卑怯な自分など許されるものではない。

それは償いようなもないことなのに、想いを重ねることであさぎの望みが叶えられ、自分も満たされるなど、そんな贅沢なことがあっていいのだろうか。考えても分からないので、もう堂々としていればいいじゃないかという気持ちにもなってくる。

そして頭で答えが出るよりも前に、身体の方が要求を訴えてくる。こればかりはどうしようもない。

頭や感情が追いつかない。正当化の理由を後付けにしたくないのに、魚のようなたおやかな身を近付けられ素直に甘えられれば、甘い蜜に酔わされて何も考えられなくなる。「それ」でいいじゃないかと飛び込みたくなる。それでもせめて、あさぎが望むのを確認してから――。そう思い、彼女との日々を過ごしていた。

そして、花火の夜。あさぎが、望んでくれた。こんな自分を、再

び好きだと言ってくれた。

気が付いたら、顔を重ねていた。衝動的に。

だが心が満ち足りた途端、凶暴な衝動と切ない虚無感がざわざわと這い上がり、清矢郎を煽り立てる。

もう二度とあんなことはとっていたけれど――そこまで許してくれたならいいじゃないか、と闇が手招く。

それを懸命に振り払いながら、清矢郎はその日の夜も受験勉強に励んだ。

『まだ一年生だしなあ』

そう言いたげだった友人の声が、耳の奥を掠っていった。

第32話 緋色の檸檬水に溺れる金魚

夏休みもそろそろ終盤に差し掛かる。花火の夜に清矢郎と初めての口付けを交わしたあさぎは、数日後に不思議な夢を見た。

赤い金魚と黒い金魚が、身体を重ねて泳いでいる夢だ。同じ水の中にあさぎも居る。だが、流石は夢の中。問題なく呼吸が出来ている。しかも有り得ないことに、赤い金魚の方は生きているのに腹を上に向けて、器用に泳いでいる。

――あれ？ 金魚ってどうやって赤ちゃんつくるんだっけ？

夢の中があさぎも疑問を抱く。ちなみに後から調べてみたところ、金魚は生殖器を重ねての繁殖行動はしないようだ。雄が雌の腹を刺激した後に雌が卵を産み、雄がその上に精子を放出し、体外で新しい命を繋いでいるのである。しかし夢の中にあさぎの眼には、それは現実には有り得ない金魚の交尾として映っていた。

金魚は上下に向かい合い、重なった姿勢のまま、ゆったりと泳いでいく。水は酸っぱい匂いがした。清涼感のある、檸檬に似た匂いだ。乱反射した光の粒が踊る。まるで海の中のように広くて青い――と思っていると、急に酸っぱい匂いが鼻に付くようになってきた。気が付けば水が濁り、辺りが薄暗い。水草がぬるりとあさぎに絡みついて、金魚の姿も見えなくなってしまった。

――何処に行ったの！？ もっと見たいのに！

水草はあさぎの腕や脚、腰や胸、喉をまでもを締め付けてくる。もがいても離れず、水草自身が意思を持っているように侵食してくるので不快でたまらない。しかしその不気味な刺激で身体が熱くなり、胸が高鳴り出す。

高揚感に任せてあさぎがそう強く願った時――、それは再び叶った。どうにか首を動かしたところ、二匹の金魚が再び視界に入った。何故か今度はその表情まで確認できる。

赤い金魚は黒い目玉をかつと見開き瞬きもしないのに、その何も見ていないような黒真珠の瞳が恍惚の表情を浮かべている気がするの、あさぎの気持ちの問題だろうか。黒い金魚は瞳も顔も黒いので、表情が全く分からない。

——いいなあ。私も、ああんりたいなあ……。

どうしてそう思うのか分からない。一体、具体的にどうなりたいのかも分からない。だが、己の妄想で描き出した二匹の愛し合う金魚を見て、あさぎはそのような憧憬を抱いた。

いつしか、あさぎを苦しめた水草は消えていた。そして黒く汚れた水は、立ち上ってきた緋色の煙に染まり出し……。

そこであさぎははっと眼を覚ました。身体にタオルケットが巻きついている。だから夢の中で、あれだけ苦しかったのだろう。しかも無性にトイレに行きたい。水の中の夢を見ていたのも、そういった理由だろう。

起き上がったって、まだ胸がドキドキとしている。見てはいけないものを見たような気持ちになっていた。あさぎの深層心理が金魚にさせた行為。妙に生々しく、臨場感のある夢だった。己の想像力の逞しさ——言い換えれば性欲の強さには、ほとほと呆れてしまう。

——もう！　せいちゃんのせいだからね。

清矢郎に四年前のことは気にするなと言うくせに、恥ずかしさから彼の所為にもしてしまう。もちろん両想いになった今は、もう彼を責めるつもりはない。寧ろ彼に関係なく、小学生で目覚めてしまったような自分は、そうした淫乱な要素を生まれつき持っていたのではないかと、あさぎは自分で自分が恐ろしくなってくる。家族でもおかしいのは自分だけだろうか。

悶々と悩んでいたが、所詮は夢。生々しい映像も胸の高ぶりも、トイレから出る頃にはあさぎの中から消えつつあった。残ったのは変な夢を見てしまったという事実だけ。

だが夢の中で感じていたときめき、身体の熱さは尋常ではなかった。まるで人のその行為でも覗いていたような、自分が行為を体感しているような。それくらい肌が敏感になっていた。もう今は水草も触れていない半袖シャツの腕を、あさぎはそっと撫でてみる。ぞくりとした。焦って手を離す。

カーテンの隙間から見えた空はまだ夜の闇に包まれ、朝までは遠い。しかし用を足したことであさぎは眠れなくなってしまった。明日は朝から文化祭の準備に行かなくてはならないのに。あさぎはどうにか眠ろうと再びベッドに横になったが、全く眠れなかった。

寝苦しさに、無駄に何度も寝返りを打つ。こんな時に思い出してしまうのは、やはり花火の夜のこと。ちなみに盆には祖母の墓参りに行ったものの、親戚が集まるということではなく、清矢郎一家に会うこともなかった。だから花火の夜以来、まだ彼には会っていない。

——やだなあ。

寂しいと思った途端、再び身体が燃え上がってきた。今度は現実のことであるので、あさぎ自身が先ほどの汚れた水の中のようになってしまう。美しくない。こんな自分は大嫌いだ。

あれから何度も何度も想像していた。誰も居ない神社で肩に触れたあの大きな手が、抱き締めてくれたあの広い胸が、もどかしい糸の全てを取り去って、何よりも近くで自分を包んでくれること、あの柔らかな唇が唇以外の場所を吸ってくれることを、抵抗を感じつつも想像する。

——いけない。

しかしそう思ったところで、無駄だ。抑えきれない何かがあさぎの細く小さな身体の中で、濁流のように暴れ出す。眼の前では小さな金魚たちが泳ぎ出し、あさぎの心を惑わせる。

——せいちゃん、せいちゃん……清矢……郎！

呪文のように、お守りのように、媚薬のように唱える名前。

大好きだと心が叫ぶ。

あなたが欲しいと心が叫ぶ。

助けて、と心が泣き叫ぶ。

「だれか、たすけて、よう……」

砕け散った疼きから解放されれば、後に残るのは自己嫌悪と虚しさだけ。どうしてよいか分からず、あさはきは切ない吐息と涙を、繰り返しベッドの上で零した。こんな自分を救えるのは、唯一人しか――いない。

しかし救って欲しいはずなのに、彼にそれを求めることは救いにはならないのだ。それはまだ責任の取れない自分にはしてはいけないと思うことなのに、「大人」の世界に足を踏み入りたいと望んでいるのだから。

まだ高校生なのだ。本当に救いを求めるならば、清矢郎との恋ではなく学業などに専念し、其処から眼を背けるべきだろうか。あの厳しい母親に知られたら何と言われるだろうか。嘘をつき続けることに耐えられるのか。万が一、子供が出来たりしないだろうか。自分の身体も耐え切れるのだろうか。

とても怖い。――それでも、憧れる。そして、彼にもっと近付きたい。欲深くとも、もっともっと深い幸せを感じてみたい。

既に初体験を済ませたという友人の夕映や文芸部部長の琴音など、恐くはなかったのだろうか。夕映はまだ中学生であったというのに。一度話を聞いてみたいものだ。

あさはきもう一度眼を閉じて、先ほどの幸せそうだった二匹の金魚を思い出そうとした。だが残念ながら夢は泡のように消えてしまい、上手く蘇ってくれない。いつもの小さな赤い魚影がちらつくだけ。あの擬似体験をもう一度味わうことが出来ず、あさはきは残念そうにため息をつく、今度は剣道着姿の清矢郎の勇姿を思い出しながら、寝返りを打ち続けるのであった。

.....

あさぎのクラスの文化祭の準備は、あまり盛り上がっていないかった。さほど仲のよくないクラスということもあり、廃棄物で大きな展示品を作るといっただけのものであった。

他のクラスメイトも部活の方の屋台や有志でのステージ練習に燃え、クラス発表の方はおざなりである。あさぎはそうしたものにも参加していないので、更に退屈だ。文芸部の冊子の販売に夕映と当番の時間に当たるほかは、ぶらぶらと校内を見て回ることくらいしか予定していなかった。

「文化祭、暇そうだから、あさぎも彼氏と会ってきたら？」

「え？ 向こう学校だよ」

「一日目はね。二日目は土曜日じゃない」

準備が終わった帰り道、夕映とファーストフード店に寄ろうと歩いている途中の会話だった。あさぎは逆に聞き返した。

「夕映の彼は？ 文化祭に来てくれるの？」

「うーん、行こうかなって言ってたけど、友達と来るかもしれないし」

どうやら夕映の予定はまだ不明のようだ。彼女と一緒に居られないのは、あさぎにとっては寂しいことだった。一応夕映以外の友達も居るものの、やはり常に一緒に居る女子の方が安心出来る。特にあさぎのような内向的なタイプにとっては。

しかし友人を束縛することも出来ない。その時はその時でどうか楽しめる方法を探すしかない。あさぎの不安をよそに、夕映はわくわくとした様子で提案してきた。

「でも、私らの方はまた会えるじゃん。あさぎはあんまり彼氏に会えないでしょ？ だからチャンスじゃないかって。うちのクラスも部活もそんな大したことしないだし」

「どうやら彼女は、あさぎに気を遣ってそういう言い方をしたらしい。」

「じゃあ当日急に、せい……か、彼と会ってことになってもいい

の？」

「もちろん」

夕映は気前よく頷いた。彼女はあさぎよりもずっと社交的だ。きつとあさぎが居なくとも、彼氏に会えなくとも、他の友達と遊ぶくらいわけがないだろう。夕映が居ないかもしれないから恋人の清矢郎に頼るといふのもどうかと思うが、これは彼女の言うとおりチャンスだ。夜遅くまで出掛けられる夕映とは違い、あさぎは太陽の出ているうちしか清矢郎に会えないのだから。

「じゃあ折角だから、誘ってみるね。ありがとう」

「うん！ 頑張れ。少しでも一緒に居られるといいね」

人の幸せを心から願う様子の夕映。演技をしているとも思えない。きつとあさぎのように劣等感を抱くこともないだろう。もつと達観していそうだ。自分の気持ちが上手くコントロール出来ている。だから年上の彼氏も彼女には安心してゐるのだろうし、たくさんの男女に好かれるのだろう。

「いつそ二人でどっか行っちゃったら？」

あさぎは黙って考えた。学校行事を抜け出すのもいけないことだが、人目のある場所では、寄り添えないのも確かだ。そこであさぎは、あの金魚の夢を思い出した。重なり合いたいと願った夢を。

「ね、ねえ」

「なあに」

あさぎはためらいがちに、だが思い切って夕映に尋ねた。

「夕映は……はじめての時、恐くなかったの？」

あさぎの恥ずかしそうなもじとした様子に、夕映はすぐに何のことが察したらしい。あさぎに対し、あっけらかんとした明るい口調で答えてきた。

「ううん。全然」

「そうなの！？」

「って言えばと嘘になるけど。ああこういうものなのかってびっく

りしたこともあるけど、それ以上に私がしたかったから」

そう言い切る夕映に、あさは眼を瞬かせた。やはり過激な少女である。それでも彼女の人柄に強く憧れ、日頃の仕草や行動が大人の「女性」のように落ち着いて感じられるところもあるからか、あさは夕映を軽蔑したりはしなかった。

「私なりに覚悟は決めたよ。絶対に後悔しないって決めて、でも赤ちゃんだけは作りたくないって言って――方法よく分かんなかったから、相手がいいやつで、ほんと運がよかったけど。そりゃすごく痛くて、こんなもんかーってつまなく思うところもあったけど、あれでよかったと思う。その時はすごくそいつのこと好きだったもん」

セーラー服を押し上げる胸を更に逸らしてそう言う夕映を、夢の中の金魚を見ていた時のようにあさは眺めた。彼女の周りで踊る金魚も、とても自由に楽しげに、誇らしげに見える。通り過ぎた車の残した熱風が、夕映の短いスカートと長く茶色い髪を優しく持ち上げた。

話によれば、結局その相手と夕映とは中学卒業後、自然消滅で別れたと言う。それからすぐに今の彼氏と付き合い出したが、相手が経験のあることに逆に安堵したらしい。

「こっちが初めてじゃないからって、嫌がられても困るし。もちろん身体だけとか絶対嫌だから、大事にしてもらえるってのが一番だけど」

清矢郎以外の男性と関係を持つことが、想像もつかないあさは。そう言って肩を竦めた夕映という金魚は、今度は赤く燃える炎そのものに変化した。妖艶に揺らめき、焦げた砂糖に似た甘く苦い匂いを放つ。まるで彼女が違う空間を生きているような気分に陥ってしまったが、そうした夕映もいつもの屈託ない夕映も、同じ夕映だ。相容れないところがあっても、友人を否定したくないと思った。彼女にも何かしらの過去や悩みなどがあって、そうした行動をとった

のかもしれないのだから。

あさぎもあの劣等感や、清矢郎への性欲、ベッドの上で一人うねる姿などは、誰にも見せられない。他人には気持ち悪いものに見えることだろう。

それは誰もが持つ、汚い部分であり、それでも人は人として生きていかねばならないのだ。それを自分がどうするのか。否定するのか、受け入れ共存するのか、あくまで抑制するのか、こうして他に向けて前面に押し出すのか――どういう方法をとったとしても。

「――分かった。ありがとう」

「え？　こんな話でよかったの」

決意を秘めたようなあさぎの声に、今度は夕映が驚いて彼女を見た。

「うん。結局は私の覚悟ひとつだってことが、分かったから」

「そっか。でもあさぎにはあさぎのペースがあるんだから、焦らなくていいんだよ？　人のことは気にしないで、自分、大事にしなきゃ駄目だよ？　後悔したって遅いんだからね！」

夕映も決して経験が早いことがよいことだと、自慢したいわけではないらしい。大人しく生真面目なあさぎに変なことを教えてしまったかと、少々焦っているようだ。

「うん、大丈夫」

人の真似をすればよいわけではない。両親に迷惑を掛けるかもしれないのに、そちらに歩み出すならば、尚更あさぎがしっかりと自分を持たねばいけないことだ。夕映との話で、それだけは得心した。本当は何も分かっていないかもしれない。誰よりも自分を心配してくれる大人たちに言えない危険を冒そうとする、嘘をつくということは、その信じる人が許してくれないことだ、よくない素行だと自分でも思っているということだ。

――だけど、彼が欲しい。結ばれたい。

その気持ちには変わらないどころか、日に日に強くなっていく。

まだ付き合って一ヶ月だというのに、あさぎ自身も気の早さに驚いている。だが昨日今日彼を性的に意識したのではなく、もう四年も赤い金魚の幻影に囚われ、懊悩しているのだ。自分の中の性への葛藤に加えて自己実現の欲求の水草でがらん締めになり、原因となった清矢郎と両想いになっても、それでも金魚は現れ続け、その様相を更に禍々しくしていく。

絡みつく狂気、妄執から早く解放されたい。それそのものが自分であるが故に苦しみ、逃れられない。

ただ彼に、触れたかった。

第33話 危険な夏休み

唇を重ねてから初めて、あさぎと清矢郎が会う日が来た。清矢郎のことをこれまで以上に男性として意識し、その先のことまで具体的に想像し出したあさぎは、楽しみな半面、非常に恥ずかしい気持ちで胸をいっばいにさせていた。

文化祭前だから、と準備を理由に家を出る。実際には学校の図書館で時間を潰し、偶然会ったクラスメイトとお喋りをし、それから待ち合わせの時間に駅前へと向かった。これも夏休みだから出来ることだ。清矢郎も受験生。寒くなる頃には、頻繁に時間も合わせられなくなるだろうか。

先のことに不安を覚えるが、今はまだ考えないようにする。あさぎは駅の近くの本屋で清矢郎を呼び止め、駅裏の公園へと暗黙の了解で向かう。飲食店は同じ学校の生徒に見られているようで居心地が悪く、電車に乗って他の駅まで行くのも時間が勿体無い。

此処でばかり逢引し周辺住民に苦情でも言われれば困るが、今のところその気配はない。訪れる人も少なく、と言ってそれほど汚くもないという条件のよい場所だった。ベンチや遊具が少ないのも、人が来ない理由だろうか。公衆トイレの近くの木の下で、二人は立って話していた。この位置なら道から見えるわけでもない。

あさぎの投げる言葉に対して戻ってくる、清矢郎の低い声。その振動を空気中に送り出している、彼の唇の動き。恥ずかしさに見ていられないが、それでもその動きを辿りたくて顔を上げては、目に飛び込んでくる生々しさにまた俯く。その繰り返しであった。

血の繋がりのある兄のような存在、という認識はとくに消えている。あの四年前の抵抗感も嘘のように、今は異性として相手を求めている。赤い金魚が見えているのも、いやらしいことだがもう否定出来ない。あさぎの心も身体も、それを望んでいる。夕映に色々

と尋ねてしまったほどだ。――清矢郎自身は、どう思っているのか分らないものの。

会話が途切れた時に、あさぎはまた清矢郎をちらりと見上げる。じろりと見下ろされ、ぱつと顔を背ける。今日は触ってくれないのかな、と一瞬でも残念に思った自分が嫌で、慌てて話を変えた。

「それでね、この前の部活で、荒芝先生が文化祭に出す冊子のこと、来てくれたんだけどね」

笑っているものの、金魚がちらちらと見える。赤い炎が、燃えている。清流から水を得たいと、口をぱくつかせる。青い夏空に登れそうなほど厚く湧いている入道雲。雨のように降りしきる蟬の声。そして二人の間に落ちる緑の陰。それらを金魚の泳ぎが赤い糸の如く縫い止める。色とりどりの世界が、あさぎの欲望を魅惑的に描く。

――気にしちゃだめだ。

あさぎは何気なさを装って話を続ける。

「シャツに赤い染みがついてて、先輩たちがあれば絶対に口紅だつて、言い張るの。それをそのまま先生に言うんだよ？　びっくりした。でも、先生も笑ってるだけで何も言わないし」

数日前の文芸部での出来事を、清矢郎にあさぎは話す。人懐っこい琴音を筆頭に、落ち着きのある副部長など、二年生は恋人が居ない女子でも大人の女性のようにきわどい会話に参加する。もしかしたら興味の裏返しかもしれない。そうした大人の世界や、または荒芝本人への。

あさぎは荒芝自身に興味はないものの、参考までに聞きたいような気もした。しかし大人の事情を詮索してはいけない気がして、その話題には乗れなかった。しかし、

「でも後から、私も冷やかしちゃったけど」

あさぎは小さく舌を出した。やはり大人の男は、懐が大きいので話しやすい。職員室の方を通り過ぎる時に悪戯をしてからかったところ、荒芝からは「そっちこそ、夏休みだけど羽目外すなよ」と、眼を細めて言われたものだ。

大した会話でもないが、文芸部顧問で遊び人だと女生徒が噂する荒芝は、前に勤めていた高校が清矢郎の通う北高だったと言う。清矢郎に聞けば、教科を担当していたこともあるらしい共通の知り合いだ。何でもいいからこのむらむらと沸いて出る暑苦しさから解放されたいと、あさぎは思わず話題に出した。

自らの心を誘惑する金魚の存在に苛々としながら、早く消えないかと焦って。するとそこで、意外な反応が返ってきた。

「……気をつけろよ」

「え？」

普段あさぎの話には相槌しか打たない清矢郎が、彼女から顔は逸らしているもののそう言ってきたので驚いた。

「何を？」

「あの先生」

「え、さすがに生徒には何もしてこないでしょ？ それに私なんて可愛くもなんともないし、夕映とか琴音先輩とか大人っぽくて綺麗で可愛くて、話も上手な子、文芸部にだって何人もいるよ？ 担任してるクラスの子たちとも仲いいみたいだし」

彼女たちに常にコンプレックスを感じているほどなのに、どうして清矢郎は自分などの心配をするのか。あさぎは驚いて聞き返したが、彼は相変わらず無表情で何を考えているのか分からない。冗談を言っているわけではないようだ。

「つても、男なんて、分かんし」

そう吐き捨てる清矢郎をあさぎはきょとんと見ていたが、彼は舌打ちをして頭を掻き始める。その「人のこと、言えた立場じゃねえけど」と言うような表情に、思わず笑ってしまった。確かに四年前に子供のあさぎに手を出してきた「前科」があり、何だかんだで付き合い始めてからも触れてくれるのだから。

——やめてよ。金魚が、増えるじゃない。

あさぎの「女」の部分がくすぐられる。自分の身体に触れたこと

を、今、彼が思い出してくれている。そして他の男性に、そうしないで欲しいと思ってくれる。

私なんかを、心配してくれる。それは、私を可愛いと少なからず思ってくれるから？ 私なんかでも、女と思ってくれるから？ 醜い感情が、堰を切ったようにあさぎの中から溢れ出す。それが今日も巨大な艶かしい金魚の形をとり、その尾びれであさぎを撫でたかと思えば、その尻をぴしゃりと叩く。実際は、何の衝撃もないのだが。

——嬉しいな。

あさぎは笑いを噛み殺して下を向くと、小石をひとつ蹴った。清矢郎の靴に当たった。もう少し、この話題を続けたかった。眼の前にぶらさがった甘蜜を、舌でちろちろと舐り続けていたかった。

「心配、してくれるの？」

清矢郎は黙っていたが、やがて頷いた。そう言えば花火の時も、帰りはわざわざあさぎの家の近くの駅まで一緒に電車に乗ってきてそれからまた折り返しの電車で帰っていくというほどの保護ぶりだった。しかし日常生活では、メールで事細かに行動を聞かれるということはない。寧ろ彼からはメールを殆ど送ってこないで、あさぎの方から連絡をしている。

自分のことなど気にならないのか、キスまでしたのにどうでもいいのかと、受験勉強で忙しいと分かっているながらもあさぎは今日まで心配していた。女心としては少しくらい束縛されたいものだ。だからそのように考えていてくれたことに安堵する。ずるく浅ましい女だと嫌悪感を抱きながらも、あさぎはもう一度繰り返す。

「私なんかが、そんな風に思われるわけ、ないよ」

「……んなこと、ない」

清矢郎の言葉が胸の中で溶け、じわりと染み入る。本当にそう思っているが、否定してもらうことを期待して言った。彼の優しさを利用した、卑怯な駆け引き。あさぎ一人が喜びたいがための。

しかしこの「なんか」という言葉は、人の心にマイナスに作用す

る言葉だと、あさぎは夕映から教わった。使えば使うほど、自分の価値を下げるのだと。入学当初、受験の失敗などから自信を失い、よくこの言葉を使っていたあさぎは彼女に優しくアドバイスされたものだ。だからなるべく使わないでおこう。心の中ではいつでも、容姿や能力、血縁関係のことなど劣等感尽きないものの、清矢郎に嫌われてしまえば元も子もない。前向きな言葉をたくさん使い、相手に好きでいて貰いたい。

あさぎは顔を上げて清矢郎と眼を合わせようとした。待っている、と、やっと彼があさぎを見てくれた。あさぎははにかんで笑った。上手い言葉が浮かばないから、せめて笑ってしよう。この話はこれで終わりだが、この笑顔で気持ちが伝われば嬉しいなと思った。

顔を合わせると、また思い出してしまった。あの唇の感触――は消えてしまっているが、彼が迫って来た時の、胸を鷲掴みにされたかのような、波に飲み込まれたかのような呼吸も忘れるほど狂おしい、感覚。大きな赤い金魚は、今度は清矢郎を撫で始める。その逞しい身体の上に、重なるうとしてくる。

――やめて、その人には、私が触れたいの――！

あさぎの手が無意識のうちによろよると伸びると、白いシャツを掴んだ。

――だめ。かれは、わたしの、もの。

「せい、ちゃん」

その眼を見上げて、掠れた声で呼んだ。水を求めるように。助けを請うように。

瞬間、あさぎの身体は清矢郎に引き寄せられた。周囲を気にしてか背中を抱き締めることはなく、ためらいがちに肩を引き寄せただけ。それでもそのリボンの結ばれた胸に、彼の胸板が密着した。それくらい近い距離に、彼が来た。

あさぎの小さな鼻腔を刺す汗の匂いも、彼のもの。頭がくらくらするが、どうにか足を踏みしめたあさぎは清矢郎のシャツを両手で

握った。顔を傾けた。視線が結ばれた。

ください。そう眼で請うた。眼で尋ねられた気がした。返事の代わりに、瞼を閉じた。

そして大きな金魚に清矢郎を奪われることはなく、あさぎの方が早く、生の魚の身のような、ほんのりと赤味の差す彼の粘膜を奪った。

柔らかい振動の後に、唾液のねとつき。まるで大きな魚になって、水の中を泳いでいるようだ。気持ちがいい。だが泳ぎすぎたように、疲れてくる。動悸が早くなり、頭が揺さぶられているようだ。

——ああ。

顔はすぐに離れてしまった。あさぎが物足りなさそうに眼を開くと、清矢郎は彼女をじつと覗き込んでいた。

抱きつきたい。抱き締められたい。思わずそう思うが、周囲の眼が気になる。あさぎはや不服ながらも、清矢郎が自分の身を離すことに従った。だがもっとしたい——その気持ちは素直に伝えたいと思った。でなければ、火照った身体がやりきれない。

「よかった」

「え」

「心配だったの。この前のも、あれでよかったのになって。だから、せいちゃんが、もう一回してくれて……」

キスしたかったと正直に話すのは恥ずかしいが、これは本当の気持ちだ。こういうことを言わない女性の方が男性はいいと言うかもしれないが、嫌がっていると勘違いされたくもない。もっとして欲しいほどのだから。

あさぎは清矢郎のシャツから手を離さずに、より一層強く握り締めた。彼の視線を頭の上に感じる。もう一度顔を上げた。清矢郎がいつまでもあさぎの気持ちを探るように覗き込んでくれていることが嬉しく、あさぎも眼鏡の奥の眼を見詰め返した。

——もつといっぱいしたいって、分かってくれるかな？

危険な気持ちを、言葉にせずに視線だけで相手にぶつけようとする。伝わって欲しいが、伝わってしまうのも怖い。声にする勇氣など、到底ない。気付かれない方がいっそ、幸せなのかもしれない。

「……何、考えてるんだよ」

相手の気持ち分からないのは、同じだろうか。清矢郎からも尋ねられてしまい、あさは黙って首を振った。頬が熱い。大きな金魚は、二人の周りを涼しげな表情で泳いでいるというのに。

——言えないよ。でも。

迷うあさぎに対し、清矢郎が言葉が続けた。

「じゃあ、向こう行こうつつたら、来るのか」

抑えた声で囁くと、顎を公衆トイレの方に向けた。

——どういう、意味？

あさは眼を見開いて、彼の無表情を凝視する。だが人に見られない場所で二人きりになれるならば、願ったり叶ったりだ。あさは顔を熱くしながらも、真面目な顔で頷いた。

口付けまでしておいて、人目につかないところに移動するということは、その先のことをしても構わないと言うことと同義である。それくらいは、性教育や身を守る注意を受けている女性として、あさぎでも分かること。

清矢郎は表情を変えないものの、黙ってしまった。身動き一つ取らず、固まってしまっている。尋ねてきたくせに、この答えに引いてしまったのだろうか。あさは不安になる。

こんな自分を清矢郎はふしだらだと思うのだろうか。だが二度も唇を許したのであり、第一恋人同士、という関係だ。そうなることは、おかしいとは思えない。あさぎとしては、清矢郎からの提案が嬉しかったのだから。脚の間までもが熱く、そして竦んでしまい、彼女もまた身動きが取れないものの。

やがて清矢郎は、あさぎから視線を逸らさないうまま、真剣な顔で

語り始めた。

「……俺はお前のこと、大事にしたいって思ってる」
「うん」

清矢郎らしい言葉。だから彼のことを好きになったのだし、信頼しているのだ。

「だから軽々しいことは、したくねえ」
「――うん」

分かっている。でも……。

「私も、せいちゃんが大事。受験の邪魔、したくない」

この気持ちも本物だ。どちらも本当の気持ちだ。あさぎも懸命に清矢郎の眼を見て訴えかけた。

「でも、迷惑掛けたくないけど、本当は……もっと、近付きたい」
恥ずかしくて言いたくはなかったが、このままでは「おあずけ」となってしまうのではないか。我侭と分かっているつも、それは嫌だ。欲望に取り付かれたあさぎは、最早その渇きに耐えられない。彼と本懐を成し遂げられないと知ると、余計にそれに執着してしまう。

だから直接的な言葉ではないものの、遂に気持ちを言葉にした。そうしなければぐらかされてしまう、と恐れたから。彼の大学受験を応援したいと強く思い、あさぎを守ろうとする温かい気持ちにも感謝しているが、そんな彼だからこそ。

「清、矢郎が……欲しい、から」

渴望する。欲しい。欲しくてたまらない。もっと激しく気持ちをぶつけて欲しい。夜、ベッドの上で唱えた時と同じ呼び方で、あさぎは彼の名をそっと呼んだ。

「ごめんっ」

しかし恥ずかしさと申し訳なさから、すぐに俯いてしまう。女の子からこんなことを言うのか、と清矢郎に嫌われても困る。案の定、清矢郎の手は肩から離れてしまった。あさぎは泣きそうな顔で、唇を噛み締める。夏の暑さも手伝って、脇や背に汗が滲む。本当に嫌

われたのか。必死で恥ずかしいことを口にしたのに、拒絶されてしまったのか。

「……本気かよ」

その声にあさがはつと清矢郎を見ると、彼は困ったように頭を掻いていた。

第34話 赤い金魚の誘惑（前編）

女が男を欲しいと言う時――。清矢郎にはどのような意味で伝わったのだろうか。少し過激な小説などで眼にした表現を使ったが、今ならその意味が分かる気がする。

相手に隠されたところがあるのが、もどかしい。心も身体も。全部見たい。全部、自分のものにしたい。

清矢郎は黙って頭を掻き続けた。しばらくしてその手を止めると、あさぎを睨みつける。

「それってさあ、俺と……してえって、こと？」

少し迷っていたようだが、思い切って、という様子で尋ねてきた。どくん、あさぎの胸が跳ねる。苦しいほど胸の内側から強く叩かれ、呼吸が出来ない。視界も真っ赤な影で揺れ、くらくらとする。

――頷くのは、恥ずかしい。

よろけかけたあさぎを、後ろから大きな金魚が包んでくる。こつん、と口の前であさぎの頭を押した気がした。その反動で、あさぎはこくん、と頷いていた。

「……」

清矢郎が息を飲んだ。言っではいけないことだっただろうか。

しかし、もう遅い。どうしてよいのか分からない。付き合っではいても、そういう対象ではないという可能性もある。四年前にはしたくせに、と恨みがましく思っても、大人になって考えが変わったかもしれない。兄妹のように育った従兄妹同士なので、そうした関係に踏み込むことに抵抗もあるのかもしれない。

「付き合って、まだ一ヶ月だろうか」

清矢郎が困ったように言った。あさぎは俯いたまま頷いた。やっぱり――。

「私、おかしいかな」

「そんなことは、ない。でも、お前が大事だからって言っただけ」

「うん……」

「だからそんな、簡単に言うな」

「かたんじゃない！」

しかしあさは清矢郎の言葉に、むきになったように顔を上げた。

「私は、」

こんなに、金魚が見えるほど――。

「四年前から、そう思ってた！」

小学生の時からそんな欲望があったのか、と言われれば、自分が汚れた存在のような気がしてしまう。だがあの日がきっかけで興味を持つようになったと、金魚の存在が証明している。

――あの日私の心を壊したのは、あなたじゃないか！

性欲に向き合うことの罪悪感から逃れるために、もうやめようと何度も思ったにも関わらず、彼の所為にしてしまう。

「だから、あれから気になって仕方なくて、でもせいちゃんならいかなかった、他にもいっぱい好きになったところがあったから、そう思うようになって……ずっとずっと、悩んで」

これでは四年前のことを盾に、自分を抱けと脅迫しているようではないか。付き合う時は罪悪感ではない感情で、自分を好きになって欲しいと言ったのに。脅しで彼を手に入れたのか。あさは自分の醜さが嫌になる。

「じゃあ、俺とすれば満足するのかよ」

案の定、清矢郎もふてくされたような口調になり、あさは慌てて言い返す。

「それこそ、そういう簡単な問題じゃないっ！」

「じゃあ、何だよ」

しかし、答えられない。清矢郎が珍しく、彼の戸惑いを話し始めた。

「リスクが、ありすぎるだろ。お前のこと、壊すかもしれないし、傷つけるかもしれない。そうなった時に俺はまだ、責任がとれない。

取りたくないとかじゃなくて、未成年で学生だからって意味で。そりゃ何かあれば、何でもする。大学行かないで働いて、お前のこと養う、そういう責任取ったっていい。でもまだ未成年だから、親にも、叔父さん叔母さんにも許可して貰わなきゃいけないし、絶対泣かせることになる。それが、本当に今すべきことかって。あさぎだって、まだ一年生なんだし」

「それは、分かってるけど……。でもちゃんと気を付ければ、必ず赤ちゃんできるわけでも、ないじゃない」

彼はおそらく、その危険を恐れているのだろう。すぐに抱きたいと思われないのは、自分が可愛くないからかな、と哀しくもなるあさぎだが、もしもの時に自分を養いたいとまで考えていてくれるということは、本当に自分のことが好きなのかなと、都合よく考えてもみる。

やはり清矢郎はあさぎの兄貴分だ。他の女子の話を聞くに、男子高校生ならば付き合っている相手とくれば飛びついてきそうなものだが、彼は童貞を捨てるにもそこまで考えてから動くという慎重ぶりだ。確かに、清矢郎のそうしたところに惹かれたのだから。

「じゃあ大人になるまで、これ以上はだめなの？」

あさぎはもう一度白いシャツの裾を引くと、清矢郎を見上げた。彼は困ったように唇を噛み締め、何も答えない。

「それなら何で、あの時、あんなことしたの」

「……」

「あの時、何考えてたの？　あの時は……したかった、とかじゃないの？」

「だから、あの時はお前のこと、大事に出来なかったただけだって言っただけだろ！」

清矢郎の少々苛々としたような声に、あさぎは押し黙った。

「もう、あんな風に自分に負けて、お前のこと傷つけない」

「なんか、それってずるい。そっちから勝手に気にさせといて、そ

れでもうしてくれないの？」

「だから、それでお前の気持ち傷つけたんだろ。それにあれ以上は、危険があるつつってんだろ」

「そんなに、恐いの？」

「当たり前だ」

「弱虫」

「そう思いたければ、思えばいいだろ」

「せいちゃん、ずるい。私のこと、嫌い？ 要らない？」

「だから、その逆だからだって！」

清矢郎は困ったように怒りながらも、あさぎの言葉ひとつひとつに言い返してくれるので、あさぎにも彼の真剣な気持ちは伝わってきた。それは嬉しいが、彼の頑固さ、意志の強さにはあさぎも弱ってしまう。

相手が好きだから欲しいのに。たった一度結ばてみれるくらい、妊娠さえしなければ問題ないのではないか。あさぎにはどうして拒絶されているのかが、頭では分かっているけど納得出来ない。

このままではあさぎの欲望は叶わない。夕映などは中学生でもう経験しているのに。高校生は欲望を叶えてはいけないのか。全身で相手を確かめてはいけないのか――。

どろりとした執着心に捕らわれ我慢出来なくなってしまうたあさぎは、清矢郎の手を取った。手くらいなら、と思ったのか、彼は素直にあさぎにそれを許していた。

しばらく握っていると、触れ合っている掌に汗が滲んできた。あさぎは思い切って、その無抵抗な大きな手を、白いセーラー服の上から、自分の小さな胸の上に置いた。

びくん、と強靱な心と身体を持つ清矢郎の腕が肩まで揺れ、彼はその手を引こうとしたが、あさぎは自分の掌に力を入れた。呆然としている彼の表情から視線を下ろして、抵抗を止めたごつごつとした手を見下ろす。そして静かに息を吐き、ゆっくりと吸い込む。

大きな掌の熱が、薄い服と下着を通して肌まで伝わってくる気がする。大きな金魚は、再び二人の周りをぐるりと泳ぎ出す。小さな金魚も赤い花びらが散るように、はらはらと現れる。あさは伏せた眼でそれを確認しながら、清矢郎の手の甲をそつと撫でた。

「四年ぶり、だね」

――あの頃より、少しは大きくなってるかな。

そこであさははっと我に返り、誰かに見られたら困るとばかりに手を離し、清矢郎も素早く自身の手を引いた。

「ご、ごめん。いや、だった？」

「それ、は、ねえけど……」

何と大胆なことをしてしまったのだろう、と今更ながら身体が震える。あさは胸の前で手を合わせた。

ここまでくれば、自分の方がセクハラだ。自分でも自分を持て余す。だが清矢郎に女として見られていないような、六年生の頃の方が欲しがってもらっていたような気分になって、あの頃の自分に嫉妬してしまったのだ。

確かに恋愛感情が無かったかもしれない四年前とは違い、今はあさがのことが好きで、大切にしたいから触れないという、清矢郎の深い優しさは分かる。それでも、自分に女性としての魅力がないのではとつい焦ってしまう。普通は男性の方から迫ってくれるものではないかと思っていたが、彼の場合は違うのだろうか。

しかし清矢郎が首を横に振ってくれたのには、とりあえず安堵した。ちらりと彼の反応を確認すれば、無表情はどうにか装おうとしているものの、心なしか頬が赤い……ような気もする。それが暑さの所為でなく自分の所為ならば、一糸報いたような気分になるあさがであった。

「気持ち悪く、ない？」

「ん」

もう一度確認し、あさはまたほっとした。だが、もしこれが逆の立場であったなら。女性の方が男性を拒絶していて、男性がその

性の象徴に無理矢理触らせたとあれば、相手を軽蔑したうえで、一層拒むことになるだろう。男女が反対でも同じではないかと心配になったが、清矢郎もそこまで興味がないわけでもないらしい。

それにしても、みっともないほど足掻いている。あさは自分でもどうしたいのか分からなくなってきた。どうしても彼と交わりたのか。ただ躍起になっているだけなのか。大人になるまで待つ方がいいのか。

第35話 赤い金魚の誘惑（後編）

「もしかして、こういうの、受験の邪魔になる？」

そこでようやく、その可能性に気付いたあさぎは尋ねた。

「……わかんねえ」

「はっきりしてよ」

答えに詰まって呻く清矢郎に、あさぎも困ったように唇を尖らせる。

「自分でも自分がこの先どうなるかなんて、分かんねえよ。でも会わなきゃ会わないで、余計に気になって集中できねえような気がするし、逆に受験とか付き合うくらいのもことで、ストレス溜まったり勉強に集中できなくて成績下がったりつつうのも情けない気がする」

前半の彼の言葉にときめいた後、後半の言葉に以前見た剣道の試合のことを思い出させられるあさぎ。確かに、空間を通じてこちらにまで突き刺さってきそうなほどの集中力は、凄まじかった。あさぎの所為であの気が乱されるとすれば、それはそれでぞくぞくとすることだが、逆にあさぎの緋色の吐息ごときには乱されない、凜とした姿勢もまたぞくぞくとするものである。

どちらにしろ、彼のそういうところが格好良いな、とあさぎは惚れた弱みで思うのであった。

「じゃあ、こんなこと言ったりしたりする私でも、嫌わないでいてくれる？ まだ、付き合ってくれる？」

心配そうな表情のあさぎに対し、清矢郎は力強く頷いた。

「よかった」

あさぎは笑った。せいちゃんはやっぱり優しいなあと、無邪気に浮かれていた。

「……お前こそ」

「え？」

「俺、酷い奴だけど、嫌じゃねえの」

勇気を出して迫ってきた女子を、かわしてしまっていることを指しているのだろうか。あさぎは首を横に振った。遠ざけられても、拒絶されても、清矢郎を欲しい気持ちには変わらない。そうやって時に冷たくされることで、余計に追いかけてくなくなってしまうのだ。

だからと言って一度セックス出来れば気が済むかと言えば、そうでもないだろう。そういった深い関係になれば尚更相手が愛しくなり、時々はそういった方法で相手の存在を確かめたくなるだろう。そんな予感がした。

そのうえ清矢郎も責任がとれないから嫌だということは、その一線を越える時はあさぎの一生を背負う覚悟で、とても大切に触れてくれそう。その後も、態度が冷たくなるということはないかもしれない。だからこそ清矢郎がいいと、どうしても彼が欲しいとあさぎもこだわりの、彼が他の女性にそうすると思うと気が狂いそうになるのだ。

つまり、あさぎの欲求は性的な快感を得ることだけでない。

そうして底なく、遠い未来まで保証されて異性に愛されてみたいと、まだ十六歳であるが、「大人の関係」を夢に見ているのである。それは子供が味わうべき快樂ではないと、頭で分かっている。

「いやなわけ、ない。嫌われたくない。大好き」

だから陳腐な言葉ではあるが、彼への素直な想いを伝えた。本来、ただそれだけのことなのだ。

清矢郎は黙って頷いた。それでも「十代の学生同士」に相応しい方法で大事にされているのだし、あさぎは十分彼に想われていると言えるだろう。そのうえで更に、目の前の幸せも欲しいが乱れる清矢郎も独占したいと醜い好奇心が疼く。あさぎが夜、身体の欲望に負けたように、男性の清矢郎ならば同じような人に言えない一面があるはずだ。

それにあそこまで誘わせておいて、このまま諦めなければいけな

いのは、いささか寂しい。

——最後までじゃなくても、いいのに。

そんな過激なことを思い、小学生の自分に「負けた」ような気持ちになってしまったあさは、躍起になって余計なことまで呟いた。「でも清矢郎の方からしてきたのに、やっぱりずるいよ」

思わず先ほどのように、もう一度四年前のことを掘り起こしたうえに、彼を呼び捨てにしてしまった。これは幼馴染の「兄」のような彼に対してではなく、「男」としての彼を呼ぶ時だ。あさは自身も無意識の内に使い分けているようだ。

「だから悪いって」

清矢郎は呼び方にされたことについては何も触れず、弱ったように吐き捨てる。四年前のことでもう責めたくはないが、彼女は今や清矢郎の所為にすることで、行き場のない欲求に言い訳をしている。それ以外に方法が思いつかなかった。ごめんね、と思いながらも止まらない。

「私、魅力ない？」

「そんなことない」

「じゃ、いつかは……してくれる？」

清矢郎は、そこは迷いなく頷いてくれた。ふわりと金魚が花開く。彼と一糸纏わず抱き合う姿が想像され、あさはぼん、と赤くなつたが、今は駄目だという彼を、心無い言葉でその強固な心を切り裂こうとする。

「じゃあ、もう一度聞くけど、どうしてあの時、あんなことしたの？」

いじけたようにしつこく言うが、これは四年間悩んでおり、ずっと聞きたかったことだ。付き合い始めてからも二人の間でタブーとしていた質問であるが、あさは自身が今日は赤裸々な本心を口に出した。それもこれも全てこの疑問が根底にあるからだ。だからもう抱いてもらえないならば、清矢郎にもせめていやらしい心だけでも曝け出して欲しかった。

しかし一筋縄でいくわけがない。清矢郎は渋い顔をした。

「だから話したくねえって」

「勝手じゃない？」

あさぎはわざとらしくお姉さんぶった口調でそう言うが、真面目な清矢郎の心には突き刺さったようだ。口を横に引くと、狼狽したように肩を引く。

「してくれないなら、私がそうしたいって思うようになった原因くらい、解消してよ」

——四年前のことは、もう脅しには使いたくないと思ったのに。彼が思い通りにならないもどかしさから、あさぎは卑怯な戦法に出た。目の前の金魚の舞は美しいのに、自らの心は汚らしい。汚いからこそ美しいものを見せているのに、元となる心の水は清らかにならず、まやかしかだけに捕らわれて身を滅ぼそうとしている。

——私って、最低。

そう思うのに、

「……っ、分かったよ」

彼は、優しいのだ。あさぎに対する負い目がまだあるのだろう。そして、今日あさぎを拒絶してしまったことも、気にしているのだろう。彼もまたあの記憶は思い出したいくないであろうに、「被害者」であるあさぎのその要求に遂に折れた。

「でも、今日は話す気分じゃねえ」

「うん」

「今から予備校行くし」

「うん」

「だから次——」

「うん。ねえ……じゃあさ、」

あさぎはふと思ひ出したように、笑った。金魚がこの思い付きに、賛成するように踊っている。

——そうね、あなたたちも久しぶりに帰りたいよね。

「おばあちゃんち、入れないかなあ」

あの神社に行こうと言った時と同じくらいあどけない瞳で自分を見上げてきたあさぎに、清矢郎は眼を見開いた。

「もう一度、ちゃんとあの日に戻ろうよ。私もあの時のことが原因で、今こんな風に気になっちゃって困ってる。あの日のこと、ちゃんと私に話して？ 今度こそやり直そうよ」

あさぎの一見、的を得ているようで、その裏には何やら甘い毒のようなものが塗られている言葉に、真面目なうえに負けず嫌いな清矢郎が逆らえるはずがなかった。

彼もまた、あの日の自分が許せず、弱い心の自分を打ち負かした気持ちでいるのだ。あさぎを丸ごと愛そうと決めたのには、そういう理由もある。

「ああ、分かったよ。何とかする」

清矢郎はあさぎの眼を睨みつけながら、年下の従妹の幼稚な挑発に逃げることなく乗った。あさぎはそこでようやく、ほっと息をついた。

自分が性に狂った所為で、折角もう一度、いやあの頃以上に仲良くなれたのに、また心が離れてしまうのだろうかと心配になっていた。それは嫌だ。だから二人をおかしくさせたあの日に、もう一度、今度こそ戻れば、あの神社の夜のように心がまた近付けられるかもしれない。そのように安易に考えていた。

無意識の内に、何かを計算しながら――。

ねえ、あの日に戻ろうよ。

もう一度、あの神社の夜のように。

今度はそれよりも向こうまで、戻ろうよ。

もう引き返せないところまで。

赤い世界の向こう側へ。

戻って、どうする。

戻るということは、ゼロに戻って違う道からもう一度スタートするのか。それとも、触れてはならない禁忌を穿り返し、それと同類の新しい愚行で埋めようとするのか。

この時点ではどうなるのか、二人には全く予想がつかなかった。

あさぎは最早自分を抑えることが出来ずに、強靱な青竹のような清矢郎を自分の見る赤い幻惑に引き込み、どうにか呼吸しようとしていた。助けてよ、せいちゃん、と身体の要求に負けて唱えた時のように、現実の彼に甘え、手を伸ばしていた。

この日二人はこれで別れたが、楕円形になった夏の終わりの太陽が、互いの胸に鈍い焦げ跡を作って沈もうとしていた。

第36話 迷い、惑い

明後日には、清矢郎と祖母の家にこっそり出掛けるといふ日の、あさが両親と夕食を取っている時のことだった。

台所のテーブルから見ている居間のテレビでは、夜のニュースが流れていた。親子三人で話をすることもあるが、ついぼうつとテレビを見ながら食事をしてしまう。経済や政治、国際社会の難しいニュースはあさが理解しようとしているうちに次の話題に変わってしまうが、生活に関わるニュースなどは彼女の頭にもすんなり入ってくる。

そのうちのひとつに、十代後半で母親になった女性が一人で子育てをしようとし、まだ幼い子供を虐待したというものがあつた。こうした痛ましいニュースは、メディアに触れるたびに目にしている気がする。あさはその都度強く胸が締め付けられるが、自分に何ができるのかも分からず、ただ淀みに押し流されそうになるところを、自分はそうはならないと言い聞かせることくらいしか出来ない。

「助けてくれる人いなかったのかしら。第一、相手の男はどうしたのよ。まだ十代で、考えずに子供作るようなことするからよ。周りが妊娠に気付かないでトイレで出産、なんてニュースもしょっちゅうだし……まったく嫌になるわ」

母親も顔を顰める。父親は何も言わずに箸を運んでいた。そこで母親はじろりとあさぎを見た。

「あんたは大丈夫なの？」

「え？ 何よ、急に！」

「女の子なんだから、気をつけなさいよ。彼氏とかできたの？」

母親なりに性教育をしようとしているのかもしれないが、藪から棒といった尋ね方にあさは眼を白黒させた。姉は仕事で今日はいないので、逃げようがない。彼女があさぎの年齢の時は、あさが

幼かったのでこんな話は家族でしなかったではないかと思うと、姉が羨ましくなる。

そうは言ってもあさぎ自身、母親に内緒で清矢郎と付き合っているうえに、たくさんの後ろめたい出来事が頭を過ぎるが、ここで正直に話せばとんでもないことになるのは火を見るより明らかだ。

「大丈夫だよっ！」

父親が居ることもあり、あさぎは頬を染めて一言叫んだ。父親は聞こえないふりをし、黙ってビールを煽っている。

それにしても初潮が訪れた時も、母親に言うのは恥ずかしかったものだ。性の話はどんなことでも恥ずかしい。身体のこと母親には相談しづらく、知らずに尋ねた言葉に気まずい思いをしたことも何度かある。

初潮の時は「そうなんだ」とあっさり言われただけでその時はほっとしたもの、後から汚れた下着の処理の仕方や生理用品の使い方などを説明され始め、どうにも面映かった。何よりショックだったのは、母親が祖母の家で清矢郎の母親にこっそりとそれを話していたことだ。

あさぎの母親は感情表現の激しいところがあり、悪い人でもないとも知っている。しかし思ったことをすぐに口に出したり、他人に對してどうかは知らないが、娘に對してはデリカシーがないところには、あさぎも苛々させられている。

「いいい？ 先に子供作って結婚とか、お母さん絶対に許さないからね！ って高校生は勉強が本分なんだし、こっちが学費出してるんだから、変なことしないでよ！？」

「分かってるよ！」

両親に心配してもらえるのは嬉しい。一生懸命家計をやりくりし、あさぎが好きなように勉強できる環境を作ってくれていることはとてもありがたい。それにこうして干渉や監視をされていたり、きつく言われていると、あさぎの場合は両親を泣かせたくないという気

持ちになり――それは厳しくされているだけでなく、愛されてきた信頼関係もあつてのことだが――、それが抑止力になり、これまで周囲の迷惑になるようなことはしてこなかった。

だが主に母親の、高校受験に失敗した時の「東高か」という落胆した表情や、高校生の恋愛自体を頭から否定するような言い方には少々辟易としてしまう。両親に感謝しなければいけないと分かつていつつも、家族が夜遊びにまで寛大な夕映が羨ましくなる時もある。彼女だってそういうことをしていても、犯罪に走ることなく、同じ東高に通い成績も中ほどで、何よりあさぎ以上に人生経験が豊富で大人びて見えるのに。

私ももっと色々なことをしたい、周りがどんどん大人になっていくのについていけなさそうで怖い、そんなに縛り付けないで、とあさぎは反抗したいのに出来ない葛藤に心を軋ませている。

だが清矢郎とのことは、決して母親への反抗心だけから、性交渉したいと思っているわけではない。そして何をどれだけ言われようとも、やめておこうという気にはならない。

あさぎは急いで食事を済ませると、まだ晩酌をしている父親を残し、暑いから風呂に行ってくる、と席を立った。片付けは後からするとも言っておいた。ぼろが出ても困るので、今はこれ以上母親に顔を見られたくなかったのだ。

シャワーで夏の汗を落としながら、あさぎは湯気を見上げて考える。

やはり清矢郎が今はやめておけと制したように、母親が怒るように、高校生での性行為はいけないことなのだろうか。十八歳未満には規制されることがたくさんある。その意味をよく考えなくてはいいけない。

その反面、身体は成熟期に差し掛かり、夕映や琴音だけでなく複数の知り合いが性の初体験を済ませている。何歳で初体験をしたかというデータは、あさぎも目にしたことがある。焦るつもりはない

が、自分は平均と比べてどうなるのかとつい考えてしまう。

だが正直な話、規制など関係ない。規制されるから破りたい、のではない。あさぎの気持ちとしてどうしたいかだ。

清矢郎のことを思い出すので、狭い浴室内を金魚が泳ぎ出す。幻覚のそれは、温かい蒸気の中でも涼しげな顔をしている。

美しい赤。やっぱり、彼のことは好きだ。全てを知りたい。全てに触れたい。好奇心もある。それは確かだ。そして頭で考えれば、清矢郎や母親の言うよう抑止した方がいいことは合点がいく。それは人として大切なことだと思う。

だがおそらく、本当の意味では分かっているのだろう。結局自分の欲望を満たすことが一番大事なのかと、あさぎは徐々に落ち込んできた。

それが最も簡単に自分が認められ、解放される方法だからだ。清矢郎はもうあさぎの恋人になっている。これ以上何も辛い努力をしなくてよい、快樂すら得られる。だから、目の前にあるそれを求めている。

四年前のことは、確かに清矢郎が悪いかもしれない。だが今現在のあさぎの行動の責任は、あさぎ自身が取るべきだ。だから過去に何があるうとも、今の自分を律しなければならぬ。

なのにどうだ。子供を作らねばいいのではないか、そればかりに溺れず勉強をしつかりすればいいのではないかと、あさぎは甘く考えていた。誰かれ構わず関係を持ちたいわけではない。清矢郎を信じて、彼がいいるならば結婚してもいいと思える相手に処女を捧げるなら、よいのではないかと。

皮肉なことに清矢郎がそれだけの価値ある男だと、あさぎが自分の目に自信が持てるのは、少なくともあの厳しい母親と人当たりの良い父親のおかげである。

——ごめんなさい。

湯船の中で白い腕を撫で、清矢郎以外まだ誰にも触れられていな

い小さな膨らみを持ち上げると、あさぎは母親と父親に心の中で謝った。

夏休みに文芸部に行った時に、顧問の荒芝があさぎを茶化すように心配してきたが、彼はあさぎの様子から何かを察していたのだろうか。学校生活では目立たず大人しく、成績も悪くなく、アルバイトなどのこともしていないあさぎは、担任とも話をすることも少なく、心配もされていないようだ。荒芝だけが、あさぎのそわそわした態度に気付いているのかもしれない。

心配してくれる大人に対する申し訳なさはあるが、自分の人生くらい自分で決めたいと、全ての環境や権利を大人に守られている身であるのにもどかしく思う。今はまだその時期でない、もっと違うことに興味を持ち、成長せよと言われるのは分かっている。考えても考えても、堂々巡りになる。

清矢郎の気持ちは依然よく分からないままだが、たったひとつの救いは、決してあさぎは一人ではないことだ。

四年前と同じ。罪を犯すなら、二人、だ。

——私だけが悪いんじゃない。何かあっても、せいちゃんが守ってくれるもん。

全ての責任は自分に掛かってくる、自分で取らなくてはいけない。それはよく分かっているが、あさぎは彼を共犯者にすることで、罪悪感を半分にしようとしていた。これまで彼女は高校受験に失敗したことも、人と比べてコンプレックスを持ってしまうことも、全ての人の所為にして生きてきた。この件についても、同じようにしようとしていた。清矢郎を責めるのではなく、彼に頼り、依存するつもりでいる。

決して生半可な気持ちではない。相手が好きでたまらないから、そうして愛情を確かめたい。金魚の幻覚を見せるくらいの欲望の鎖から、いい加減解放されたい。高校生活に支障が無く、誰にも迷惑

を掛けない環境での行為なら、一度くらいしてもいいのではないか。あさぎはそう思うと、後はもう両親に気付かれないよう、絶対に顔にも態度にも出さないことを決めた。顔をきりりと引き締め、身体から湯を払って立ち上がる。あさぎの結論は、やはり誰に何を言われようとも変わらなかった。

.....

そして清矢郎と祖母の家に行く日がやってきた。夏休みがあと一週間ほどで終わる、平日のこと。

夕映と夏休み最後に遊ぶのだと嘘をついたが、母親は「遅くならないように」とだけ言い、パートタイムの仕事に出掛けていった。清矢郎とは午前中から約束をしているので、夕方には帰ることが出来るだろう。

服装は夕映にも可愛いと褒められた、お気に入りの薄手のワンピースにしよう……と思ったが、いくら何でもあからさまに期待しているような姿が恥ずかしくなり、あさぎはその下にジーンズを穿いた。

どうなるのか、全く予想出来ない。清矢郎はどうするつもりなのか。

ただ四年前に戻ろうと二人で話し合うことにした。それが一番の目的で、不真面目に彼の気持ちと向かい合うつもりはない。

そうは言っても、あさぎの方はもう気持ちを伝えてあるので、あの現場に戻って何が起こるか分からない。いやらしい自分に嫌気が差しながらも、あさぎは一番気に入っている下着を選んでしまうのであった。

夏の終わりの太陽が、あさぎの首筋を焦がす。あさぎは髪を下ろしている自分の方が好きなので、暑くともまとめ髪にはしなかった。川風が肩を越した黒髪をふわりと持ち上げ、首筋の汗が一瞬冷える。

化粧はしていないが、制汗剤の石鹸の香りがふわりと漂い、最後に日焼け止めの匂いが鼻の奥に届いた。

清矢郎は自分のことを、「女」だと認識してくれているのだろうか。そのように言っただけでくれたものの、胸に触れさせてもそれ以上は触れてくれなかった。小さくてがっかりしてしまっただろうか。

まだ一年生だと言われたことも気になっている。子供っぽいと思われるのか。それなのに何故小学生の細い体にあのようなことをしてきたのか、今でも不思議でたまらない。――その理由を今日聞くのだ。

祖母の家の最寄り駅で、二人は合流した。あさが私服の清矢郎を見るのは、花火の夜以来である。相変わらず着飾らない彼は、あさぎと同じようにTシャツと穿き古したジーンズ姿だった。

親戚も同級生もこの辺りには誰も住んでいないので、駅の近くのファーストフード店に昼食のため立ち寄る。

二人は他愛のない会話を交わした。先日の自分の行動があさは恥ずかしくてたまらないが、思い出して欲しくもないので一切口になかった。誤魔化すように、どうしてもよい話ばかりをラジオのように一方的に喋っている。

ただ先日の虐待に関するニュースへのショックがまだ残っていたので、若い母親の犯罪の話思わず清矢郎にもしながら、彼ならどうするだろうかとあさはふと疑問に思った。もちろん自分たちがこれからセックスして子供ができたら、という前提のつもりではない。だがあのニュースを見てから心が何処か塞いでいたので、あさは彼に重いと思われるかなと心配しながらも問い掛けた。

「せ、せいちゃんがもし、相手の人だったらどうする？」

彼は相変わらずの無表情で、あさをちらりと見たが、

「……俺なら絶対に、そんなことさせねえ」

迷うことなくそう言うと、大口を開けて食事を再開した。

第37話 少年

それからあさは清矢郎と駅に戻ると花火大会の時と同じバスに乗り、今度はそれよりも手前の停留所で降りた。降りてから十分ほど歩いた場所に、亡くなった祖母の家がある。

陽炎の立つアスファルトからの熱気の中、晩夏を歌っている蟬の声を聞きながら二人は黙々と歩く。

駅の近くでは制服姿で手を繋いでいるカップルも見かけたが、清矢郎はそういうことを人前でしない。あさは照れ臭い。あの花火の夜は、やはり二人とも魔法にでも掛かっていたのだろう。

だが触れてもらえるのは愛情表現のような気がして嬉しいので、何もされないというのもあさにとっては寂しい。花火の夜からまだ三回しかキスしていないじゃないか、とそれこそまだ十六歳の癖にカウントしてはむくれてしまう。

しかし因縁の場所へ向かっていると思うと、会話も弾まない。黙って歩きながら、今日はどうなるのかなとあさはぼんやり考えていた。二、三時間後の自分すら予想がつかない。

歩いているだけで、汗が滲む。制汗剤はどれほどの効き目があるのか。抱き締められるなら――そこまで考えてしまったところで、あさは軽く頭を振る。

「暑い？」

俯いているので辛そうに見えたのか清矢郎に尋ねられ、あさはそういうことにしてもらおうと首を縦に振った。二人でコンビニエンスストアに寄って、飲み物などをそれぞれに買う。

まだ短い時間しか歩いていないが、涼しい場所に入りほっとした。デニムのズボンやはり暑かった。夏休みも終わりと言っても、涼しくなったのは朝晩が僅かに、といった程度。アブラゼミの声はどうしてこんなに暑苦しく聞こえるのだろうか、早くヒグラシが鳴かないかなあ、とあさは思いながら再び炎天下に出る。

ヒグラシと言えば祖母の家の縁側で、夏休みの夕方、祖母や清矢郎と聞いていたこともある。都市部に建っているものの駅から外れた木々の多い場所にあるので虫も多く、駅前よりは涼しいのだ。

そして二人は遂に、幼い日を過ごした家の前にやってきた。

三ヶ月前の五月にここで久しぶりに清矢郎に会った時は、彼はまだあさぎを無視しており、あさぎはそれに苛立っていた。高校受験の失敗のコンプレックスも引きずっていた頃だ。

それから急速に――同じ駅を使って通学していたことや、清矢郎もあさぎを意識してくれていたこともあり、偶然を味方に彼に近付き、これまでの想いや苦しみをぶつけて、それが恋心であったと気づき、付き合ってもらえることになった。それから相手からも告白をされ、更にはキスをした。抱き合った。そして、身体の関係になりたいとまであさぎに言わしめた。

これまで誰とも付き合ったことなどないのに、たった数ヶ月でここまで発展するとは……あさぎは清矢郎の大きな手が裏口の鍵を開ける動作を見ながら、また考え事をしていた。

だが決して急な話でもなく、清矢郎に言い訳したように、金魚を見るようになった四年前から彼とセックスしたいと思っていたのかもしれない。あさぎは自分にそう言い聞かせた。もっとも四年前もまだ小学生の身でそのようなことを考えていたこと自体が罪なのかもしれないが、夕映も中学生で、誕生日が来る前だからたった十四歳で経験している、とそこだけは都合のいいように友人を持ち出してしまふ。

ドアを開けた清矢郎は、あさぎをちらりと見た。表から入り、近所の人に見られて家の方に連絡があっても困る。あさぎは慌てて、裏口の向こうにある背の高い竹藪に姿を隠してもらうように中に入った。

「懐かしい」

中に入ればこちらのものだ。あさぎが笑ってそう言うのと、

「三ヶ月前に来たばかりだろ」

清矢郎にぶすりと言われ、「それもそうだけど」と彼女は苦笑した後、頬を軽く膨らませる。

「せいちゃんと、この家で話すのは四年ぶりだもん」

それもそうか、と今度は彼が押し黙った後に「悪かったな」と吐き捨てた。

三ヶ月前は法事や食事をした部屋と台所、トイレしか足を踏み入れなかったので、今日は昔寝泊りをしていた二階などもあさは歩き回る。覗いた小さな畳の部屋。ここで清矢郎と一緒に寝たこともある。今の自分たちでそれを想像すると、顔も身体も熱くなるのに。男と女は不思議な生き物だなあと、あさは首を傾げながら一階に下りてくる。

その間に清矢郎はいくらか窓を開けたようだ。雨戸を閉め切っていたため黴臭い匂いが充満している。日の当たらない分外よりも涼しいが、空気の流れがなく蒸し暑い。また法事の後には電気も水道も止めている。トイレはコンビニエンスストアで飲み物を買うついでに寄ったが、外の光がなければ顔もよく見えない。風呂や台所の方が明るいが、あさが四年前に戻りたいと言ったため、二人は暗黙の了解で現場となる部屋に戻った。

そこで清矢郎が、その部屋だけ雨戸を半分開けた。これも近所の人々に気付かれないことを祈りながら。

窓も僅かにしか開けていないので、あの時ほど蝉の声は聞こえず、雨戸を開けても薄いカーテンを閉めているので竹のざわめきも見えない。だが思い出の場所に清矢郎と立つことで、赤い金魚は薄暗い部屋の中を泳ぎ始めた。

同じ光景は再現できないことにあさは少々がっかりするが、再現してどうなるものでもない。ただ始まりの時に戻りたかっただけだ。何が変わるのか分からないが、両想いになったにも関わらず晴れないこの欲望のもやもやから解放されたいという。

清矢郎はそれこそ自分が諸悪の根源と思っているからか、あさぎに根気よく付き合っている。「もういいだろ」と言うこともなく、黙ってあさぎの全てを受け入れ、今でも罪を償おうとする。その優しさと強い責任感があさぎに彼を益々魅力的に見せていた。

あさぎは清矢郎に申し訳なく思うが、此処まで来たからには気持ちに整理をつけたい。突っ立っている彼に背を向けて部屋の奥へと進んだ。

「ここに棚があって、金魚がいたんだよね」

金魚たちはよく覚えていた。彼らが生まれた場所に集まっていた。しかし住んでいた水槽があるわけもない。困ったように壁を突いたり、うろうろ泳いでいる。そうなのだ。もう元のように戻るわけではない――。ごめんね、と心の中であさぎは金魚たちに謝った。

「それを見ていたら、」

あさぎは蜘蛛の巣の掛かった壁を見ながら呟いた。あの時は、いつの間にか背後に清矢郎が立っていた。彼の通う中学校の、青いハーフパンツのジャージ姿で。

しかし今日の清矢郎は縁側近くに立っていて、こちらには来ない。あの日は望まなくてもあさぎに触れてきたというのに。

「来てよ」

あさぎは振り向くと、どちらかと言えば明るく、甘い声で彼を呼んだ。清矢郎は黙ったまま、あさぎのところまで歩いてきた。

「覚えてる？」

あさぎは表情のない清矢郎を見上げた。あの頃よりも更に身長差がついている。彼はあさぎを睨むように見下ろし頷いた。

――私に何したか、覚えてる？

一瞬だけだが、胸に触れられた、腹より下に触れられた。そんな経験はあの日より前にも後にもない。

「恐かったし、苦しかった」

あさぎはそう言ったものの、今はもう彼を恨んでおらず、ただ心から愛したいと思っている。付き合い、好きだと認めてもらえる前

までは無視してくる彼が憎くて、狂おしくて仕方なかったが。

このように言ったのは清矢郎を追い詰めたいからではなく、彼の罪悪感を利用してそ隠れた心を引きずり出したいからであった。欲望の赤い鎖に縛り付けられ、それに悶えているのはあさぎだけなのだろうか。その煩悶を直接的に訴えても、彼は誘惑に負けてくれなかった。あさぎばかりが恥ずかしい姿を見せ、恥ずかしい本心を暴露することになった。

清矢郎にもそうしてもらわなければ、フェアでない。それこそ自分分は四年間苦しんだのに——と身勝手にも思ってしまうあさぎ。相手のことが好きならば、もっと相手の立場に立って思いやらねばならないのに。依存的な傾向のあるあさぎは、最低な行為だと自覚していても、清矢郎への甘えはもう止まらなかった。

この緋色の金魚が溺れる酸っぱい泥沼に、彼を引きずり込もうとする。その中で彼に縋り、罪深いのは自分だけじゃないんだと思ううとしていた。

だからこれは駆け引きだった。清矢郎の良心を揺さぶり、心の壁を崩そうとしている。そこは年下と言えども、無骨な清矢郎とは違い、感受性の強い女性であるあさぎの方が上手であったようだ。

彼も予め、今日語る覚悟を決めていたのだろうか。確かにこの家に何度も来るわけにはいかず、あさぎにも過去に囚われず笑って欲しいという思いもあるようだ。そんな彼女を煩わしがらず、ひたすら自責の念を抱いている清矢郎。あさぎの目論見を何処まで知っているかは分からないが、彼自身が「そうしたい」と決めたのだろう。あさぎの顔を見ず重苦しい声で、静かに語り始めた。

「何であんなことしたかなんて、自分でもよく、わかんねえよ……」
その第一声に、あさぎは思わず不満そうな表情を浮かべてしまった。すると清矢郎が怒ったようにその場に胡坐をかいて座ったので、あさぎも少し遅れて腰を下ろした。

「あん時は、なんかすげえイライラしてて。それで一番身近で、俺

よりも弱いお前に……ってなったのは、最低だと思う。犯罪と変わりねーじゃねえか」

どうやらあさぎの作戦は上手くいったらしい。強く正しい清矢郎から、このような弱音が零れ出すだなんて。やはり事件の現場に戻ってきたのはよかったのだろう。誰も見ていないという状況もいいのだろう。彼の本心があさぎの金魚の餌として、住処となる水として周囲に満ちていく。

あさぎの心も妙にときめき出す。期待通り崩れ出した清矢郎の仮面の下を見逃さないよう、彼の唇を凝視し、言葉のひとつひとつを聞き逃さないようにしていた。

——彼が犯罪者であっても構わない。自分に対してであれば。そんな危険な思想すら、十六歳の少女は持っていた。言い換えれば、清矢郎があさぎに対して最も弱い部分を曝け出してくれた。そのことが嬉しいのだ。

苦しんできた四年間は無駄ではなかった。もしもあの後清矢郎が別の女性を選んでいれば、彼を罵り恨んだだろうが、彼は己のしたことを認めた上で、あさぎを大切にしようと言ってくれている。そんな彼を、誰が嫌うだろうか。

自分を傷つけた者でも、それが清矢郎の本来の姿であるならば受け入れたい。意外にも、清廉潔白な彼の裏側があさぎと同じくらい醜くどろどろとしていたなんて——なんて魅惑的だろうか。思わず生唾が湧きそうになり、あさぎは慌てた。

その臭さを胸いっぱい吸い込みたい。ぞくぞくと興奮してくる。そんな狂気染みたなことを願うなんて、あさぎは自分でも自分が恐ろしいが止められない。そしてそれでも彼は強く凜と立っているだなんて——なんて魅力的な男だろうか。

「イライラって……何に？」

あさぎは自分を落ち着かせながら、そっと尋ねた。性犯罪のニュースで、ストレスが溜まって弱い者に手を出した、という身勝手な

動機は聞いたことがある。「だからせいちゃんもセックスしてみたくなったの？」などとはとても聞けないが。

「分かんねえよ」と清矢郎は言いにくそうに吐き捨てたが、あさがそれでも彼を真っ直ぐに見つめ続けるので、あさぎよりも立場の弱くなってしまうた彼は渋々と言った様子で昔話を始める。今度はそんなところがあさぎには可愛く見えてきてしまい、大きな身体の年上の少年に対し、きゅっと胸が締め付けられる。それを顔に出さないよう、あさぎはわざと眉を寄せて難しい顔をしていた。

「それまでもイライラが重なってたのもあって、中二の夏休みにちよっと嫌なことがあった時に、滅茶苦茶ムカついて。だからって前に当たるなっと思うけど、あん時はどうにも抑えられなかった」

「ほんと、最低だ」と清矢郎は苦しげに繰り返した。彼は男性でもあるし、性格上過去の傷を簡単に喋ったりはしないようだ。男の沽券を傷つけてはならないと思うのは、男性経験がなくとも本能的に察せられる。だがそれだけでは納得できないという女心もあるもので、あさぎは困ってしまった。そこであさぎは彼を問い詰めるのではなく、その気持ちを復唱してみた。

「嫌なことが、あったの？」

清矢郎は素直に頷いた。あさぎもまた自分の中学生時代を思い出してみる。確かにあさぎ自身も小学生気分が抜けきらず、男子や女子と諍いを起こしてしまったこともある。それから自分をどう出してよいか分からなくなり、やんちゃだった彼女が今のように大人しくなってしまったのだから。

「私も……中学生の頃は、そうだったなあ」

そしてあさぎも自身や周囲の人々を思い起こし、清矢郎に共感を示した。そうしたのは、ただ彼の気持ちに寄り添いたかったから。彼にもっと近付きたかったから。身体の関係になりたいことだって、元はと言えばそうだ。

そう考えるとあさぎが中学生の時にトラブルになったのも、相手

の生徒が苛々していたからかもしれない。授業を妨害するなど、荒れている生徒もいた。身体や精神の不調を訴える者、学校活動や部活に専念する者。様々な生徒がいた。

それに今のあさぎもまだ、思春期の苛立ちの途中にある。清矢郎に対しての依存や要求に見られるように。身体と心が大人へとなる準備をしているのに、社会的には非力な立場にあり、そのバランスが上手くとれず、思い通りにならない不満から様々な葛藤を引き起こす。それなのに子供の力では、全ての希望を叶えることも問題を解決することも出来ない。

だから彼らは探すのだ。代わりに何をすれば昇華出来るのかを。しかし時に上手く気持ち処理できず、直接その欲求を満たそうと暴走してしまうことがある。

それは時に汚い方法であったり、時に他人を傷つけ、罪となってしまう方法であったり――。清矢郎は成績もよく部活も頑張っていると、親戚の評判からあさぎの母親も褒めていたが、逆にそうした反動からあの行動に出たというのか。

中学二年生の時の、急激に身体を成長させ自分に触れてきた清矢郎のことを思い出し、何故かあさぎの方が背徳感を抱いて今眼の前に居る彼を眺めた。

その時、どんな欲求不満や願望がこの無表情な彼の中にあっただのか。アンバランスな少年の身体が何を欲していたのか。あさぎにも隠したい欲望があり一人でこっそりとその処理をしているように、清廉な彼の裏側にもそんな卑猥な欲望が隠されていたのだろうか。そしてその欲望処理の矛先が、どうしてまだ幼い自分に向いたのか――。

そう思うとあさぎは不思議な感覚に包まれた。背筋がぞくりとする。それは嫌悪感からか、性的な興奮からか。

これまでの大人びたイメージを乱した清矢郎は、ぶすりとした顔で胡坐をかいて、金魚の渦の中に座って居た。

第38話 絡み合い、溺れる

しかしそこで清矢郎は、あさぎに責められるのではなく共感の姿勢を示されたことでほっとしたのか、意外にもその先のことを語り始めた。

「……あとあん頃は、親父にも反抗してたし」

「伯父さんに？」

聞き返すあさぎに、清矢郎は眼を逸らしたまま頷いた。

清矢郎の父親と言えば彼によく似た体型と、しかめ面の顔が思い浮かべられる。年を経た今でも、格好いいとあさぎも思える伯父だ。腹のたるんだあさぎの父親と比べると、尚更。ただ人当たりは、あさぎの父親の方がずっといいのだが。

伯父はとにかく一人息子の清矢郎に対し厳しく接していた。祖母の家に親戚同士が集まった時でも、彼にとっては実家であるため容赦なく怒鳴っていた。おそらく彼は自分や人に求める理想が高く、厳しい人であるのだろう。

言っていることは道理が叶っていると幼いあさぎにも伝わったが、彼女には清矢郎ほどのしっかりした少年がどうしてそこまで責められねばならないのか理解出来なかった。出来ることは後でお菓子を分けてあげることくらい。泣きもせずじっと耐える彼を、ただ切なく見守っていた。

ただ清矢郎に対するあさぎの母親と同様、女の子供がいなからと伯父はあさぎには非常に甘かった。同じことをしてもあさぎの方は叱られないため、彼女はそれについては不条理に感じることもあった。だが伯父のことが恐くてたまらず、何も言えないまま萎縮していたが。

それはさておき黙って我慢していた清矢郎も、反抗期を迎え色々と思うところやストレスはあったらしい。しかし同世代の少年と比

較しても、今の彼は非常に落ち着いている。心を歪ませることなく、努力を重ねて立派に成長したことは、あさぎにも見えていて十分分かる。そうしたところに彼女は憧れ、従兄ではなく恋人として一緒に生きていきたいと思ったのだから。

そこで清矢郎が頭をばりばりと掻き出した。汗の飛沫が、あさぎのところまで軽く飛ぶ。

「でもだからって一番身近で、俺よりも弱いお前に手出していいって理由にはならねえんだよ。なのに何でお前は、こんな弱え俺なんかと……って言うんだよ」

彼は舌打ちをひとつして、自嘲するように吐き捨てた。あさぎの前で初めて弱音を吐く清矢郎の姿が、女心を羽のようにくすぐる。青年になるまであと一歩という彼が、中学生の少年の頃と何も変わらないように見えてくる。年上の少年と付き合っている夕映が、男はいくつになっても子供だと言っていたのはそういうことかと思っただあさぎは、言葉の代わりに清矢郎をそっと抱き締めた。

埃が積もる部屋の中で、べたりと張り付く肌と肌。幻影の金魚ごと、彼の汗くさい大きな身体を包んだ。「守ってあげたい」――何やらそんな気持ちにすらさせられる。

「清矢郎が、私がいい、って言ってくれるなら、それでいいの」
静かにだが、きっぱりとした声であさぎはそう伝えた。この気持ちに嘘はなかった。一生、この想いが互いに続けばいいのにと願っていた。

だから清矢郎の体重がこちらに掛かり、その額が肩に乗せられた時、あさぎはほっとした。言葉はなくとも、自分を信じて身を預けてくれたようで。

――清矢郎のストレスのはけ口が自分に向けられた、という事実。それはあさぎが「女」だからだ。彼の言葉を借りれば、同じ学校の同年齢の少女よりも、たまにしか会えないあさぎのことを「身近な存在」だと思ってくれたからだ。「自分より弱い者」と見下されて

いたとも言える。しかしたとえ間違った意味でも、清矢郎は幼いあさぎのことを必要としてくれた。

歪んだ感覚かもしれないが、今のあさぎにはそれが嬉しかった。そう思うのも、彼があれから他の女性に手を出したわけでなく、ずっとあさぎに罪悪感を抱き、あさぎのことを考え続け、今も、そしてこれから大切にしてくれると言うからだろう。

「ねえ、せいちゃんは、私だから、ああいうこと、したんでしょ？」あさぎの問いに、清矢郎は少し考えた後、黙って頷いた。

「これから私のこと、守ってくれるんでしょ？」

あさぎの祈るような問い掛けに、清矢郎は今度は迷うことなく頷くと彼女の方に視線を向けた。

「あの時は、私のこと好きじゃなかったかもしれないけれど、せいちゃんがあのこと気にしてくれて、今、償いとかじゃなくて私と付き合ってくれるなら、もうそれでいいの」

清矢郎の方が年上なのに、逆転したみたい、とあさぎは不思議な感覚に微笑むと彼の頭を撫でた。短い黒髪に浮かんでいた汗が、あさぎの指を濡らす。

「でもそこまで嫌だったことって何なのか、気にはなるけど」

その姿勢であさぎが清矢郎の瞳を眼鏡越しに見下ろすと、彼はあさぎのことをじろりと見上げ、「学校で、部活の先輩とトラブった」と再び顔を背けて呟いた。

「それくらい理由でって、思うだろ」

それも言いたくなかったひとつの理由か。清矢郎に見えるよう、あさぎは首を横に振った。いじめと区分されるものは分からないが、よくある子供の諍いのようだ。だからと言って犯罪に手を染めてよい理由にはならない。だがあさぎは、清矢郎の雄の牙が自分にかけられたことを既に受け入れている。だから理由がどうであろうと、文句は言わなかった。

「よっぽど、やだったんだ」

清矢郎は子供のように口をへの字に曲げて、また頷いた。あさはくすりと微笑んだ。

「せいちゃん、私と違って部活の成績よかったんでしょ？ そんな人が標的になるの？」

「知らねえよ。なんか、先輩が苛めてる奴を俺が苛めてるって濡れ衣着せられた」

二年生の彼が、三年生よりも活躍していた。その妬みからだろうか。女子にはよくある話なのであさは妙に納得してしまった。

「それが親父の耳に入って、いくら向こうが悪くても、俺に隙があったからそういう風に見下げられるんだって、俺が毅然としてなかったからだって、親父からも殴られた。元々苛めがあったなら、どうして止めなかったって、それも言われた」

そこまで言ったところで、清矢郎は悔しそうに唇を噛み、もどかしそうに頭を掻いた。

子供社会でまかり通るわけがないのに、信じている大人からは倫理上正しいことをせよと教えられる。そうしたいのに出来なかった、清矢郎の立場、葛藤。正義感の強い彼は自分が一番悪いと己を責めつつ、父親への反抗心がその出来事で遂に爆発した――思い出したくないであろう心の闇を暴露させてしまった清矢郎に、かえってあさがの方が申し訳なくなってきた。

「そんだけだ。情けねえよな」

「ううん。ごめん。よくわかった……」

「お前が謝ることじゃねえだろ。格好悪すぎる。こんなの、全然理由にならない。話したら尚更、こんなことでって思えてきた。そんな理由でお前傷つけたなんて、最低だ。どんだけ謝ったって許されるもんじゃない」

彼はやはりその結論に至ったが、少しばかり肩の力が抜けたようにも見える。短い説明でも清矢郎なりに被害者であるあさに、誠実な態度を取ってくれたのだろう。

これくらいのことですんなることを、と他人は思うかもしれない。

人の心とは得てしてそういうものだ。こんな醜態は見せたくないものだ。あさぎだって、中学生の時の失敗は清矢郎に話したくない。男性なら尚更か。

あさぎの心を壊し、金魚を見せるようになったのは清矢郎の所為だが、あさぎが彼の心を土足で踏み荒らしていい理由にはならない。もう、十分踏み込んだ。彼は今、あさぎを必要としてくれている。だったらもう、それでいいではないか。

「最低じゃないよ」

あさぎは眼の前の、脆く揺らめく心の持ち主を見つめた。しかしその濁った流動体は、傷ついても決壊することなく透明さを取り戻そうとしていた。そんな清矢郎が改めて愛しくなって、あさぎは今一度抱き付いた。胡坐をかく彼の前に膝をついて、その頭をあさぎの小さな胸の中に抱えるように。

「せいちゃんの、そういう、真剣なところ、大好き」

ゆっくりと、今の正直な気持ちを伝えた。

ゆっくりと、二人の周りを金魚の群れが泳ぐ。

——ああそうだ。きつとそうだ。

狂おしいほどの、憎しみと怒りがあった。

涙が出そうなほど美しい、朱の幻を見続けた。

私はこんな幻影を見るくらい、四年前からきつと、このひとがだいすきだったんだ。

「私だってせいちゃん以外の人にあんなことされたら、もっとずっと嫌だった」

あさぎは彼の頭の上で囁いた。これだけは、四年間確かな気持ちだった。恋愛感情を認めるきっかけでもあった。

二人はしばらくの間、その姿勢のまま動かないでいた。やがて清矢郎の大きな手が、あさぎの細い腰を抱き返してきた。あさぎは胸の間へと彼の顔を押し付けるよう益々強く、その頭を抱き締める。

その時、あさぎは、くらりと天井を仰いだ。硬い畳が背中当たった。頭の後ろに大きな手が回り、痛くないよう抱えられた。

咽かえるほど重い男の肉体が、畳の上に押し倒されたあさぎの上に折り重なる。「いいのかよ」と耳元で声が聞こえた後、ふと身が軽くなった。清矢郎が一旦起き上がったのだ。だが手足を動かすことはままならない。清矢郎の膝があさぎの足を挟みこみ、腕は彼の手で畳に押さえつけられている。

彼は恐い顔であさぎを見下ろしていた。睨むように。その反面、心配でたまらないように。

「付き合う時にも言ったけど、お前こそ、本当に覚悟、出来てるのかよ」

この体勢と彼の言葉に、あさぎの胸がばっくんばっくんと踊り出す。彼を除いて視界は真っ赤だ。いよいよ始まるのだ。清矢郎は、やっと「こっち側」に来る覚悟を決めてくれたのだ。何度も何度も瞬きをして清矢郎の表情を確認する。それと同時に、何度も何度も頷いた。

「従兄妹なんだから、もし別れたりとかしたら、その後お前が苦しむんだぞ」

「せいちゃんは、別れるつもりあるの？」

「そんな気は、ない」

「だったら、いいじゃん。私もどうなっても耐えるよ。でももし、あ、赤ちゃんとできちゃったら？」

「出来ないようにする。もしもの時は、お前のこと一番に考えて、どうするか決める」

「なら、いい。それでいい。私、せいちゃんと、結ばれたいよ」

あさぎの言葉に黙ってしまった清矢郎の代わりに、あさぎの方から畳み掛ける。

「せいちゃんこそ、覚悟決まったの？ 恐いんじゃないの？」

「……そりゃ、恐くねえって言ったら嘘になる。でも、嘘は言っていない。踏み込むなら、今以上に心決める。お前のこと、大事にする

って」

「なら」

「でも大事にするなら、ここで止まるべきなんだよ。でも出来ない。俺はそんなに強くない。ずっと触りたいのに触れなくて、苛々してた。それで結局、負けてる。そんなの、四年前と変わんねえじゃねーか」

「だからいいの！　せいちゃんなら、いいの。なんでもいいの。全部、受け入れるの！　私が、守って……あげるから」

下から彼を見上げて真剣に訴えるあさぎ。清矢郎の汗が、あさぎの頬や唇にぼたぼたと落ちる。それでも二人は眼を逸らさなかった。「だから……」

涙で眼が潤みそうになるが、彼を守るならもう泣いてはならないとあさぎは思った。眼に力を入れて彼を真っ直ぐに見つめる。

「守りたいって、互いに言ったりや世話ねえな」

清矢郎が、ふっと笑った。あさぎも思わず笑って頷いた。

口だけなら、誰も言えることだ。後は清矢郎の言うとおり、どれだけ覚悟をして、どれだけ黙って耐えられるかだ。彼のようになれるだろうか、になりたい——あさぎは心からそう思った。

そしてこれも陳腐な言葉だな、と思いながらも、あさぎはこの先の全てを二人で乗り越える決意を固めるために、清矢郎に告げた。

「ずっとずっと、一緒に居ようね」

そして竹藪に囲まれた、古い匂いのする家の中で、一組の男女の身体が重なる。

緋色の金魚たちが花びらのように廻る渦の真ん中で、酸っぱい檸檬水を飛び散らせ、熱く荒い息継ぎをしながら。二匹の大きな赤と黒の魚が、身をくねらせて踊り狂う。そして、溺れるのだ。

第39話 はじめての時、はじまりの時

「それ」は一度始まると、意外と呆気ないものでもあった。どうしてもしたくてたまらないと、あさぎはこれほど思いつめていたというのに。なんだ、これだけのものかと冷静な感想を抱いてしまった場面があったこと、反対に頭の中が真っ白になってしまい、あっという間に時間が過ぎ去ってしまったことから、そう思ったのだらう。

あさぎにとっての初体験は、思い描いていたものとは少々違っていた。清矢郎が力加減を知らなかったことも、その一因かもしれない。十六歳の少女がその喜びを深く知るにはまだ早いということは、この時のあさぎには分からず、自分たちの身体の相性が悪いのかと不安になってしまった。

しかし清矢郎に不満があるわけでは決していない。あさぎは彼がそんな風を感じている自分に向かっていないかと心配になって、途中で何度も尋ねた。自分の反応がおかしくないかと。感じ足りないと思われているのか、それとも素直に声などを出してしまい、気持ち悪がられていないか。

だがそれに対する清矢郎の反応は、あさぎの心を十分満足させるものだった。もちろん甘い時間を期待しているのに素っ気無い返事をされ、苛立つこと、心配になることもあった。そこであさぎがしつこく問い続けると、彼は怒ることなく「だから、今のままでいいから。嫌なわけないから。言わせるな、恥ずかしい」と怒ったように吐き捨ててくれた。眼鏡を外した、この時の清矢郎の表情の可愛さといったらない。こればかりはこの行為の際にしか見られない顔なので、やはり自分は今、とても幸せなことをしているなどあさぎは思った。

何より印象的だったのは、初めて感じる清矢郎の手、唇、舌、肌

の温度、身体の重さだった。

自分で自分の身体に触れたことのあるあさは、軽い性的快感を既に体験している。だからいくら大好きな相手であっても、想像ほどの快感は得られなかった。自分でした方が……などと一瞬でも考えてしまう。

だがここにもしっかりと、あさは一人では感じられない悦びがあった。大きな手で肌を撫でられる、唇や舌といった有り得ないもので汗ばむ身体に触れられる、一糸纏わず身を寄せ合う。これは絶対に一人で出来ないことであり、まさにそれを夢に見ていたのだから互いに夢中になったり焦ってしまったりした時は見失うが、ふと動きを少なくし、ゆっくりじっくりと寄り添えば、心の底から幸福を実感する。伸ばした手の先に、自分に喰らいつく愛しい人がいる。癖になりそうだ。もっとももっとと求めたくなる、まさに悦楽。

だから大人は禁止しているのだな、とあさは納得した。きっとこうした、まだ未熟な自分たちには他のものが手に付かなくなりそうな強烈な刺激がいけないのだろう。

清矢郎のぬくもりにうっとり眼を閉じることもあるが、母親の声が耳の奥を過ぎり、罪悪感に胸が痛む。駄目だ、駄目だ。こんないけないことは今日限りにして、勉強に励もう。清矢郎にも、分かってもらおう。既に二度はしたくないと思われているかもしれないが。

だけど、あさはまたこれをした。期待外れの部分はあっても、それを凌駕するこの甘美な蜜を味わいたい。きつと数を重ねれば、互いに上手になっていき、いいなと感じる瞬間の方が増えるはずだ。そんな淫らなことを願ってしまう自分に、高校一年生のあさぎの心は葛藤で潰れそうになる。緊張で胸を壊れそうに高鳴らせたり、快感に酔い痴れたり、それが得られず考え事をしてみたり、切なさに泣きそうになったり。乙女心は千々に乱れる。

「清矢郎……」

だがそう呟いて広い背中を手を回せば、彼が抱き返してくれるの

は、やはり何にも変えがたい喜びだ。このようにのんびり考えていられるのも、最後の痛みや、その先のリスクがこの時点ではまだ生じていないからなのだが。

しかしこうした戸惑いがあったおかげで、行為の間、あさぎは金魚の幻影に悩まされなかった。もちろん赤い金魚は見え続けている。それが薄暗い部屋で大演舞を見せる中で、もぞもぞと二人で動いていたのだが、思った以上に清矢郎の動きや自分の身体に神経を向け、気が逸らされていたので金魚がいつもよりも綺麗に踊っていても興味をそられなかった。

——だからあさぎは驚いた。強い痛みを伴う最後の瞬間に、急に真っ赤な金魚たちが波のように襲い掛かってきたのには。

身体を引き裂くような激痛が、あさぎの身体を下から上へと走る。同時に血がほとばしったように、ぱつと視界に広がる金魚。頭からその血をすっぱり被ってしまったようだ。赤。赤。赤しか見えない。鈍い血の色。緋色。紅。時に鮮血。

今思えば前段階の幸せな時間は、ままごとのようなものだった。あさぎの人生において経験したことがないほどの痛みを必死で堪える。身体が割れる。息苦しい。もう嫌だ——止めたい。だが清矢郎には、止めて欲しくなどなかった。無理矢理にでも本懐を遂げて欲しかった。

ここで出来なかったということになる方が悔しい。これは愛情なのか？ それとも、間違っているのか。いくら愛とやらがあっても、痛いものは痛い。それでもどうしてこれをしたと思うのか、その理由も最早分からなくなる。

あさぎは開いた足先に力を入れ、眼をぎゅっと閉じると歯を食い縛った。逆に力を抜いた方が楽なのかと、意図的に息を吐いてみるがどうしても力が入ってしまう。床には縋るものがないので、真っ赤な幻影の中で手を伸ばして、清矢郎の肩や腕のあたりを握り締める。

苦しくて痛くて、あさぎは赤い闇の中、咽び泣く。それでも少しの間、耐えようと心を決めた。初めての、大好きな清矢郎との瞬間だ。せめて彼の顔を見たい。そうすれば少しは耐えられるかもしれない。あの堅物で無表情な清矢郎が、あさぎの身体の上でどれほど淫靡で雄々しい表情を湛えているのか。それがたとえ醜いものであっても見届けたかった。

だが何も見えない。眼を閉じてても開いても赤の世界。魚のようなものがうじゃうじゃと蠢いているだけだ。

――何これ、いやだ！

あさぎは痛みあまり失明したのではないかと、焦って何度も瞬きました。このまま外界が見えなくなってしまうような恐怖を感じた。逆にそちらに気持ちごとられたおかげで、身体の痛みは多少緩和した。

あの日、幼いあさぎが清矢郎に触れた時に金魚の幻影が見えたように、どうやら欲求不満の時だけでなく、性に関する危険から己の心や身体を守るべくあさぎの本能が働いた時に、こうしたまやかしを見せるのかもしれない。傷を麻痺させるために。

痛みと引き換えに、血痕の如き金魚があさぎの全てを埋め尽くした。耳の中まで入ってくる。音も聞こえない。あの四年前の量の比ではない。――だがこれでは、清矢郎の顔が見えない！

冷静さを失ったあさぎは、狂ったように髪を振り乱した。そして痛みも手伝い、泣きながら叫んだ。

「いやあ！！ どいて！！」

瞬間、清矢郎の身体がびくんと揺れたのが振動であさぎにも分かった。そこで彼女は我に返った。

あさぎはそこまで察しの悪い子ではない。今の言動は清矢郎に誤解させたとすぐに分かった。

そう思ったのもこれまでの行為において彼は無口で武骨で、貪るような激しさも見せる一方で、あさぎの反応を常に気にし、何をす

るにもこれでいいのかと何度も尋ねていたのだから。

これでは最悪だ。この行為の途中にそんなことを言われれば、誰だって誤解する。焦ってひやりとしたことで、金魚のカーテンが僅かに開いた。あさぎは涙で眼を洗おうと何度も瞬きをする。ぼやけた視界の中に、眼鏡を外した汗だくの清矢郎の顔がようやく確認できた。

「ご、ごめん！」

あさぎが慌てて謝ると同時に、

「そんなに、嫌なのかよ」

清矢郎は暗い声で呟いた。あさぎは懸命に首を横に振った。ここまで来て、最後まで出来ないことだけは嫌だ。だが、こうしている今も痛い。早く終わらせて欲しい。ロマンティックさの欠片もない。それが処女であるあさぎの本心だ。だが、話などをするだけの余裕もない。

あさぎは懸命に手を伸ばして清矢郎に抱きつく、叫んだ。

「いい、から。いたい、ただだから、やめないで、早く――」

上手い言葉など、思いつくわけがない。清矢郎に嫌われたらどうしようと思うが、あさぎもこの状況では多くを考えられない。正直な気持ち口についた。

清矢郎もたとえ気を削がれることを言われたとしても、ここまで来れば止められなかったのだろう。あさぎの答えによってはこの中止するつもりだったかもしれないが、彼女が積極的な言葉を吐いてくれたため、彼もまたかねてからの、もしかしたらあさぎ以上に募っていたのかもしれない衝動に任せて、全身を動かし始めた。

・・・・・・・・・・

どれくらいの時が経ったのか。意外にも短い時間であったのかもしれない。外を通る車の音がまるで遠い世界のもののように、薄暗い部屋の中では聞こえる。清矢郎はぼうっとしているあさぎの身体

を抱いてくれているが、小さな頭の上でしきりに汗を拭っている。確かに、暑い。筋肉質の彼にしてみれば、余計にそう思うだろう。

——終わったんだ……。

今は呆然としているあさぎ達であるが、行為直後は余韻も何もなく慌しかった。万が一誰かに見られては言い逃れが出来ないと、あさぎは痛みに顔を顰めながら急いで服を着た。清矢郎の動きも素早かった。彼が何をしているのかなど、あさぎは恥ずかしくて見られなかったが。

ようやく服を着て何事もなかったかのようにした後、あさぎにどつと疲労が襲った。清矢郎に倒れ込むように寄り掛かれれば、彼が優しく受け止めてくれたので、ほっとした。してしまった後、冷たくなるような男もいるから——これは仕方のないことだけれど、それをあからさまに態度に出すような奴には注意が必要だ、と夕映だけでなく幾人かの女子同士でも話題になったことがあるが、清矢郎はそうではないらしい。やっぱりいい男を選んだとあさぎはそっと微笑む。

しかし男性だけでない。終わった、と気が抜けてしまったのは、あさぎも同じだ。しかしセックスに対する憧れは前ほど狂信的でなくなっただけかもしれないが、清矢郎に対する思い入れ、執着心は少し方向を変えて強くなった気がする。ただ彼を振り向かせたいだけでなく、もっと深いところで分かり合いたいと思うようになっていく。心も、身体も。

そして事前にあれほど思いつめていた割には、不思議と感慨に涙しなかった。——きっとこれは、終わりだからではない、始まりだからだ。

秘密の恋の日々が、これから始まる。あの日以上に誰にも話してはならない、大きな秘密が出来た。従兄妹同士は結婚も出来るものの、あさぎたちの年齢が問題であり、知られれば厳しい二人の両親に高校生の分際で、とどれだけ叱責されるか分かったものではない。大人になるまで、大切な人たちには少しの間黙ってしよう。そし

て認められるような大人になるよう、日々を一生懸命過ごそう、それまで互いを諦めずにいよう。それには、少なくともあさが受験を終えるまでの三年間は時間が必要になる。とても簡単なことだが、とても難しいことであるということはあさぎにも想像が出来た。高校生にとつての三年は決して短いものでない。

だから今日は、そのスタート地点だ。従兄妹というだけでない、男と女の深い関係になった清矢郎との次のステップへの。両親に大きな嘘をつくことは恐くてたまらないが、何処かぞくぞくと興奮していた。エネルギーがないと乗り越えられないことなのだから、それでいいのかもしれない。

だが、ひとつ心配が残る。

「ね、ねえ。今の、嫌じゃなかった？」

初めての接吻の時もそうだったが、あさはいつも気になってしまふ。女性としてのコンプレックスがあるからかもしれない。こんな質問ばかりをしていたら、清矢郎の方も嫌になってしまうかなと心配しながらも上目遣いで彼を見上げた。清矢郎はあさぎの方を見ずに、長い指で彼女の黒髪を梳いたり頭を撫でたりしながら呟いた。

「そっちこそ」

彼もまたいつもと同じ言葉を繰り返すが、今回はあさぎにも身に覚えがあった。

「途中でやめるとか言うしさ」

続けられた言葉にあさは軽く首を竦める。ぶすりとふて腐れたように言う清矢郎は、やはり可愛い。あさに身体だけでなく心も開いてくれたのは、清矢郎も同じだろうか。だとすれば、嬉しい。とても嬉しい。

年上の大人びた清矢郎が自分に対し拗ねてくれるだなんて、彼が自分だけを特別と認めてくれているようで。そのうえ最後の時も今も、あさぎを守るんだ、という頼もしさが伝わってくる。しかし浮かれている場合ではない。

「そんなに、下手だった？」

既に眼鏡は掛けてしまったが再び陰りを帯びた表情で言われ、あさは「ううん、そんなことない！」と必死に否定した。上手くないことがあっても、彼なりにあさぎのことを思いやり、優しくしてくれたと分かっているし、その点については期待以上だったのだから。

そこであさぎは、俯いてしばし考えた。やがて決意したように顔を上げ、清矢郎の顔を見た。自分の眼を見て信じて欲しくてそのTシャツを引っ張ると、彼は恥ずかしいのかあさぎをちらりと横目で見下ろした。

「あの、ね……私、金魚が見えるの」

あさぎの突然の告白に、清矢郎の眼が驚きできょとんと丸くなる。何を言っているのだろう、といった顔だ。

あさぎは不安げに彼を見つめていた。こんなことを伝えて、気味悪がられるかもしれない。身体の関係にまでなっておいて、そうなのでも困る。それでも言わずにはいられなかった。始まりの時を迎えるために。彼と共に未来へ歩んでいくために。

誤解を解くためにも、真実を語るべきだと思った。それにあさぎも清矢郎のように心を開きたくなったのだ。全ての事実を知って欲しくなった。彼と心から結ばれるために。

金魚が見える自分も自分なのだ。こういう関係になったからこそ、清矢郎に丸ほど愛して欲しいと浅ましい望みが湧いた。二人は違う人間なのだから、そんなこと出来はしないのに。だが清矢郎ならば、受け入れてくれるかもしれない。逆にこれくらいのことすら受け入れられないならば、この先のことは乗り越えられないだろうとあさぎは男心を試していた。

更にはあの駅のホームで騒動を起こし、今回のセックスの際にも叫んでしまったように、今後まああさぎが金魚の幻影に飲み込まれる

ことがあるかもしれない。清矢郎に迷惑を掛けてしまう、そんな時こそ彼に理解して欲しく、支えて欲しかった。押し付けがましくとも清矢郎が原因なのだから。

だが清矢郎は、あさぎの心配を悉く打破してくれる少年だった。

「どういう、ことだよ」

彼は奇妙なものを見るような眼は一切せずに、真剣な表情であさぎを直視すると尋ね返してきたのだった。

第40話 金魚の焰

清矢郎と想いを重ね、肌を重ねたあさぎ。長い間もやもやとしていたが、ひとつの境界線を超えた。だがこれは終わりではない。新しく、苦しくもある世界に足を踏み入れてしまった。清矢郎とこの先いくつもの困難を乗り越えるために、彼ともっと分かり合いたい。独りよがりかもしれないが、自分のことをもっと知って欲しいとあさぎは思った。その結果、清矢郎とは切っても切り離せない、金魚の幻影の存在について話そうと決めたのだ。

気持ち悪いと思われるかもしれない。その恐れがあり、これまであさぎは言おうとしなかったのに、今日言う気になったのは、初体験の達成感から気持ちが高ぶっているからだろう。

金魚の件を告白したあさぎは、清矢郎の瞳が若干揺らいだのを見た。流石に驚き、戸惑っているようだ。心の病気かもしれないと心配になったのか。だが彼はそれを表情に出さないよう努め、冷静に事実を確かめようとしてくれている。自分にはない面を持つ彼に、あさぎは益々惚れ直してしまう。――が、今はそのような呑気なことを考えている場合ではない。

あさぎは清矢郎の温かい腕の中でぼつりぼつりと語り出した。今度は自分の番だ、と。

「四年前のあの時から、金魚が見えるようになったの。金魚鉢からおまつりできてきた金魚が飛び出して、目の前にいっぱい広がって……。それからせいちゃんのこと、考えるだけで見えるようになったの」

原因を聞いた清矢郎は軽く息を飲んだ。それはそうだろう。自分は幼い少女の心をショックで壊してしまったのだと、すぐに己を責め始めたらしい。あさぎがちらりと見上げた表情には、隠そうとしても苦悶の色が浮かんでいる。

「でもね、病気とかじゃないと思うよ。この前の電車の時とか、さつき——い、入れられた時みたいに、金魚で目の前が何も見えなくなるようなことなんて、滅多にないし。あの時も、さつきもそれでびっくりして騒いじやったの。嫌な思いさせて、ごめんね！ それが見えても普通に生活できてるし、いつも見えているわけじゃないからすごく困ってるわけでもないし」

心配されすぎて病院に行こうと説得されても困る。両親に原因、しいては清矢郎との関係を知られることになりかねない。あさぎは清矢郎との一件を周囲に隠し通したい一心で、必死に大丈夫だと訴えた。それにあさぎの精神に異常を来たしてしまったと清矢郎が深刻に悩み、悠長に恋愛など出来ないと言われても弱ってしまう。

「今でも？」

清矢郎の問いに、あさぎは頷いた。

「俺の、所為か」

返ってきた重く沈んだ声に、あさぎは今度は首を横に振る。

「せいちゃんがきっかけだけど、せいちゃんが悪いわけじゃないって！ それに思い出の金魚だから見て嫌じゃないし。第一、せいちゃんのこと考える時に見えてたから私、せいちゃんのこと従兄として見てるんじゃない、男の人って見てるんだなって気持ちに気付いたんだもん。それがなかったら、せいちゃんのこと好きだって気付かなかったかもしれないし、もうこんな関係になっちゃったんだから、今更、否定しないですよ……。それくらい、好き、なんだから」

それは思い込みであり恋愛感情ではない、と清矢郎に論理的に否定されてしまったらどうすればいいのか。彼への想いを信じてもらえなくなったら最後だ。これだけ深い間柄になってしまったのに。捨てないで欲しい。自分を信じて欲しい。何があっても彼に好きだと言って欲しい。今、これくらいのことを乗り越えられなければ、この先の辛いことに耐えられるわけがない。

嫌われるようなことを言い出したのはあさぎの方だが、自分の行動が甘えているのか正しいのか分からず、彼女は言いながら混乱し

てきた。

そこで心細げに清矢郎のＴシャツを握ったあさぎの頭を、彼は安心させるように撫でた。そこでようやくあさぎは、ほっとした。もしかしたら分かってくれたのかもしれない。あの事件の少年が初体験の相手となった――。そんな彼に見捨てられれば、金魚の幻覚を見るくらい繊細なあさぎの心がどうなってしまうのか、清矢郎にも想像出来たらしい。だから彼女を気遣い、受け入れる姿勢を見せた。だが彼も困惑しているだろう。先に身体を重ねて彼を逃げられないようにして、重い事実を突きつけ責任を迫る。脅したくないと言っておきながら、自分はどこまで卑怯者なのかとあさぎは辛くなってくる。このままではやはり清矢郎の方が、いつか追い詰められて離れていってしまわないだろうか。

だが無口な彼が口にするのに、嘘などない。あさぎのことを好きだと言い、この先の覚悟を決めたと宣言して抱いてくれた。自分にそれだけの価値がある自信はないが、意思が簡単に揺らぐような少年ではないはずだ。

「でも、せいちゃん関係なく、いらいらした時にも見えるから、せいちゃんだけの所為じゃないよ。きっと私の心がちよつと弱くて、おかしいの」

性的欲求を抱くと見えるようになる、とは恥ずかしくて言えないが、友人への劣等感など欲求不満の状態でも金魚が見えることがある。性に関する悩みの時が多いのは確かだが。あさぎは清矢郎の心の負担を軽くしようとそれも教えた。

「でも、あさぎが悪いわけじゃない」

そう言ってあさぎの肩を抱く清矢郎は、やはり自身を許せないでいるのではないか。清矢郎を恨んでいるからこの話をしたのではないことだけは、分かって欲しい。あさぎは両手で清矢郎の湿ったシャツを握り、暑かろうとも彼の胸にぴたりと沿いながら下から顔を見上げた。

「そんな気にして欲しいんじゃないって、こんな変な私でもいいの
かなって確認したいだけなの。え、えっちまでしちゃったし、これ
から先色々大変だろうし、心配になったの。ねえ、本当に私なんか
でいいの？ 引いちゃう？ 怖い？ 一緒に居て、重い？」

その質問自体が重いだろう、とあさぎは心の中で自問自答したが
不安は止まらない。それを全て肯定されたらどうすればいいのか。
どうか離れないで、と祈りながら。清矢郎はあさぎの眼を見返した
後、前を向いて答えた。

「重くはねえけど、」

「けど？」

「正直、どうしていいかわからないって思ってる」

やっぱり、だめなの？ とあさぎの心がぐらぐらと揺れるが、彼
の心までぐらついてしまわないよう、慌てて気丈に言い返した。

「いいの！ 何して欲しいわけでもないの。このまま、付き合っ
てくれればいいの！ でも無理にとかじゃなくて、私のこと、従
妹とか金魚とか過去のこととか関係なく、女の子として好きでいて
欲しいの。さっき約束してくれたみたいに、大人になってお父さん
とお母さんとみんなを説得するまで、傍にいて欲しいの――」

それだけでいい、と言いつつそれ以上の関係はない。そこまで一
緒に居れば後は、結婚するだけではないか。あさぎは途端に照れ臭
くなる。だが今は、それくらい思い詰めていた。十代で付き合う男
女のどれほどが結婚まで至るか分からないが、そこまで覚悟を決め
てくれないと、恐くて仕方がない。これからの様々な苦しみに耐え
られない。

心に抱える問題を共有させたうえに、何年も先のことで求める
など普通の男子ならば引いてしまいそうだが、そこは清矢郎だ。覚
悟を決めたという宣言どおり、あっさりと頷いてくれた。

「あさぎがそれでいいならそうするけど、それだけでいいのか？」

このような決断を「それだけ」と言い切る清矢郎も大したものだ

が、彼としては幻覚が見えるという症状の方をどうサポートしていけばよいのかと悩んでいるらしい。何もしなくていいというあさぎに、驚いたように問い返してきた。

「うん。私がいいなら、じゃなくて、せいちゃんが自分でそうしたいって、私と一緒にいたいって思ってくれれば、それで。それが一番、嬉しいの！　どんなことでも乗り越えられるよ」

どちらかが気持ちに無理をして付き合っていれば、いつかは関係も綻んでくる。清矢郎にも幸せになって欲しい。わがままかもしれないが、その相手が自分でありたいのだ。

だがそんなあさぎの要求に、清矢郎は単純に「分かった」と言い続ける。どこまで優しいのだろうか。だから彼を好きになったのだ
が。

「こ、こんな私でもいいなら、だけど……」

最後に今一度繰り返し返して俯くあさぎの耳に届いたのは、震える心をふわりと温かく包んでくれる言葉。

「お前は、俺でいいの？」

「だからいいって言ってるじゃない」

「ならいい」

「金魚見えるような、おかしな子だよ？」

「少しびっくりしたけど……、あさぎらしい」

清矢郎の顔を見上げると、その顔が少し微笑んでいるような気がした。雨戸を閉め切っているので薄暗いベールが掛かっているが、珍しい清矢郎の笑顔にあさぎの心に希望の灯がともる。

全部、受け入れてもらえたような感覚。それは、錯覚？　もしもそうならば、やはりこの人のために全てを捧げよう。何だってしよう。どれだけ強い逆風にも立ち向かっていこう。

ただ自分を認めてもらいたかった。誰かに心から必要とされたかった。だから恋をしたかった。清矢郎がその相手になると言ってくれた。しかも周囲に認められる大人になるまで、一緒に居てくれると。

ずっとずっと願っていたことが叶うのだ。これ以上の幸せがあるだろうか。あさぎは「ありがとう」と言うと清矢郎に抱き付いた。「ぎゅってして」と言うと、清矢郎は抱き締め返してくれ、天まで昇るような心地になる。

うっとり眼を閉じたあさぎの瞼の裏では、真っ赤な金魚が今なお燃えていた。

——どうして、まだ見えるの……？

清矢郎はあさぎに眼を向けてくれた、あさぎを一番大切にすると言ってくれた。そのうえ憧れていた初体験も終えた。性欲も解消されたのではないか？ それなのに、

「どうして……」

あさぎはぽつりと頷いたが、清矢郎には聞こえなかったようだ。

あさぎが幻覚を消し去るように広い胸に顔を擦り付けていると、肩に回されていた手が下りてくる。くびれた腰のラインを撫でるように。

「ん……」

あさぎは小さな声を上げた。一度素肌に触れられているからか、緊張もするが安心感の方が勝っている。そのまま耳を、髪を壊れ物を扱うように撫でられる。清矢郎もふっきれたのか、これまでよりも積極的に触れてくる。

そうされると性欲が解消されたはずでも、身体が再び熱くなってしまうのではないか。それと比例して金魚は赤味を増す。美しさも、増す。

ごうごうと音が聞こえてきそうだ。燃えているように。焰の先がゆらゆらと激しく踊る。酸っぱい透明な水の中で、溺れることも忘れて燃えている。

冷たいのに、熱い。だから消えることがない。そして燃やし尽くすこともない。じりじりと先端を焦がしているだけ。

不思議な光景に、あさぎはもう一度眼を閉じた。このまま、また

……？　などとほしたない想像もしてしまったが、今日はもう出来ない。あの痛みを初日から何度も与えられれば、大事な場所が傷ついてしまうかもしれない。それにこれ以上洋服を汚したくはないし、それこそ妊娠してもいけない。何より誰かに見られてしまうことが恐い。家にも早く帰らねばならない。

だから今日はこれで終わりだが、次の機会は一体、いつあるのか。

――嗚呼、触れたい。愛しい。

自然な欲求が身体の下から湧き上がり、あさは身震いした。このような淫らな気持ちは忘れようと清矢郎の胸を手で押したが、彼は意外にもあさを引き止めるようにより強く拘束してきた。あの彼がわがままを言っている。これまであさぎの意思を常に確かめ、触れることに怯え、慎重だった清矢郎からは考えられない行動だ。それが嬉しくて、あさは清矢郎の背中に手を回して縋りついた。

互いにぬくもりを求め、秘密の場所ですっかりと抱き合う少年と少女。

――本当はもう一度結ばれたい。なのにしばらくは出来ない。あさぎも本当は分かっていた。欲求不満の時に見える金魚は、これから見え続けるのだろう。清矢郎を求めるたびに。求めても今はまだいつでも会えるわけでもなく、手には入らないのだから、不満が解消されることはないのだ。

どれだけ彼の心を手に入れても、まだ足りないと思うだろう。もっともっと欲しい。全てを貪り尽くしたくなる。ずっと傍に居たい。毎日一緒に居たい。だけど居られない。もう一度あの快楽を味わいたい。次はもっと気持ちよくなれるかもしれないのに。

知ってはいけなかった甘い毒。強い葛藤と期待にあさぎの胸は激しく震え、これからも清矢郎のことばかりを考え、欲し、緋色の金魚の海に溺れ続けるのだろう。

それでも、よかった。

彼が自分を全て、受け入れてくれるなら。

その手があれば何も恐くないと、この時は思っていた。

ひぐらしの鳴かない、暑い都会の片隅の古い家で。黴臭い畳には金魚のような形をした赤い血の染みが、点々と残っていた。

第41話 青竹迷風 参

ざわり、ざわりと風の音。

空に近くなればなるほど、風は強くなる。枝の先では葉が絡み合い、苦しそうにもがき合いながら、それでも揺れる。

青空の下に、暗い夜空の下に。緑の葉の隙間から、雲も空も見せることなく。

ざわり、ざわりと心も揺れる。日々量を増やし、長く、高く、強靱にしなる緑の竹は、痛いほどの音を立てて。

——赤い金魚は、何処に居る？

.....

長いようで短かった、高校生活最後の夏休みもあと僅かで終わる。寝苦しさも多少は緩和され、ここ数日は熱帯夜というほどでもない。暗い部屋で窓を開け放せば、多少の風は入ってくる。しかし今夜は眠れそうもなかった。身体も精神も、未だに火照っている。

清矢郎はやけくそのようにベッドに横たわっていた。時刻は日付を超えたところ。明日は朝から用事があるわけでもないが、規則正しい生活をしている彼にとっては、いつもならば眠っている時間だ。それでも朝練をしていた頃の習慣で、毎朝同じ時間に早起きする清矢郎。多少睡眠不足でも辛いことはないが、「眠れない」自分自身を認めたくなく、何が何でも強引に眠ろうとしていた。合理的な彼にしては珍しいことである。寝れないならば他のことをすればいいだけなのに——だが散々、色々なことをして気を逸らした後なのだ。だから余計に馬鹿らしくて、これ以上何もする気になれない。

風呂に入った後だと言うのに、どうしようもなく落ち着かず外に

走りに行き、再びシャワーを浴びて母親に水が勿体無いと文句を言われたり。何もかも忘れようと、買ったばかりの受験対策の参考書を怒涛の勢いで一冊分解してみたり。

昨日の夜も同じような状態ではあった。何日か前もそうだった。そもそもあさぎと付き合い始めてから、こうしたことは度々あった。だがこれまでと今日とは、また置かれた状況が違う。最初はあさぎの気持ちに分からず、あんなことをした自分が傍に居てよいのかと思ひ悩んでいた。それなのに無防備に近付いてくる少女の柔らかなさに翻弄され、どこまで踏み込んでいいのか、その時はどんな感触だろうかと、迷いと理性と欲求の間で悶々とし、すっきりしない夜を過ごしてきた。

しかしあさぎの方はこちらの気を知ってか知らずか、清矢郎のことが好きだと懸命にアピールし続けてくる。そのうえ彼女の方から誘ってくれるようになり、いいのかと思ひながらも期待しているうちに、遂に昼間、身体の叫びに勝てず最後まで本懐を遂げてしまったのであった。

昨日の今頃は、本当に最後まで経験することになるのか、清矢郎自身も半信半疑で、考えることすらいけないようでこれまた葛藤していたというのに、あっさりと一線を超えてしまった。視界が一気に開けたような達成感があり——と言って見える景色は変わらないのだが——、ほっとしてただただ嬉しく、後悔など一切していない。だが初体験が終われば終わったで今度は、あんなやり方でよかったのか、という相手への不安や、もう一度、次するなら……などという予想もしなかった新たな欲望の噴出に身を持て余す羽目になっている。どれだけ心奪われても、受験だけは絶対に失敗するつもりはない、それ以上に避妊に失敗したくないと心に決めて。

いずれにせよ半日前、生まれて初めて女を抱いた。
それだけは清矢郎にとって、紛れもない事実なのであった。

電気を消した部屋で、清矢郎は何気なく伸ばした右腕の力を抜き、額の上に落とす。心の中では今夜も嵐のように風が吹き荒れているが、晩夏の夜更けに吹く弱風はささやきのように優しく、少しだけ冷たい。まるであさぎの手のようにだ。

そこで彼は舌打ちをして身体を横に倒した。一度彼女を思い出すと、次から次へとあれこれ思い出してしまうので、頭の隅へと追いやるよう努めていたのに。

昨日から寝不足で、今日も疲れているはずなのに、中々眠れない。肉体的な疲れと精神的な満足感から、一度眠ったらかなり深く眠れそうであるのに。それはそうだ。もう何年も鬱屈としていた気分から、解放されたのだから。

そこで清矢郎は携帯電話の存在を思い出した。だが元々連絡以外に使う習慣がないため、それで暇潰しをするという案はすぐに消えた。このような時間に友人から呼び出されることもなく、今は机の上で静かに横たわっている。流石にあさぎも、もう眠ったのか。メールはあれで最後だったようだ。

案の定、今夜も彼女からメールが届いた。思い返せば付き合うことになった時も初めてデートをした時も、会った後、彼女は必ずメールを送ってくる。自分から送るのが苦手な清矢郎は、求められるよりも向こうからくれる方がありがたい。今日のことも何やら心配していたようなので、「また今度会おう」といったような内容を返した。これで気持ちが伝わればよいのだが。

心配しているのは清矢郎郎も同じだった。思った以上に細く幼かった身体は大丈夫だったのか。壊れていないか。相当無理をしていたようなので、今は疲れてぐっすり眠っていることだろう。ただ清矢郎の母親も小柄であるが、生まれた時から決して小さくなかった清矢郎を問題なく出産しているため、女性というものは元来丈夫に出来ているのだろうと感心する。彼が抱いているのはそうしたあさぎへの憂慮もあるが、もうひとつ。

——『いやあ!! なんて!!』

いよいよ、という時のあさぎのこの言葉は、未だにショックが尾を引いている。あの後、金魚の幻影を見たからだと教えてくれたのでよかったが、本当にそうだろうか。

あさぎはとてもいい子だ。下手だの上手だの、そういうことをごちゃごちゃ言う子ではない……と思いたい。いずれにせよ、印象が悪いわけでないことを祈りたい。今回が駄目でも次回は——と思っても、彼女にこれで懲りたと拒絶されればそれまでだ。

そこで清矢郎は、ふと気付く。そんなことに悩むより前に、何か大切なことを忘れているような……そうだ、金魚のことだ。

先ほどの甘美な時間をふわふわと思い出しかけていた清矢郎だったが、そこであさぎから告白された金魚の幻覚のことを考える。最初は心療内科に連れていくべきかと焦ったが、あさぎは生活に支障がないから必要ないと言う。本当にそれでいいのだろうか。確かに、連れて行くならば彼女の父母にも親には話さなくてはいけなくなる。

——『四年前のあの時から、金魚が見えるようになったの』

あさぎが金魚のことを両親に隠したいのは、四年前のことが原因で見えるようになったからだろうか。あさぎは恥ずかしいからか、もしかしたら自分のために、互いの両親を傷つけないために、あの時のことは一生誰にも言わないと決めているようだ。

自分のことはどうでもよいが、あさぎがそうしたいなら隠すことに協力してやりたい。しかしその金魚とやらが、もしもあさぎの健康に害を及ぼすのであれば、自分との付き合いを止めてでもあさぎの両親にも協力をお願いするべきだと清矢郎は清矢郎で、一人で覚悟を決めていた。

ただ秘密にしたいのは、清矢郎とて同じだ。両親に全てを話してもいいが、いい顔をされなかった時が嫌だ。あさぎと今のようにつき合っていたい。あさぎと男と女の仲になれたことは、思っていた以上に心地よい。この空間を誰にも邪魔されず維持していきたい。気持ちのうえではもちろんのこと、今日覚えた快楽も、彼の清廉潔白

な心を既に甘黒い毒で溶かしていた。

だから今しばらくは静観しようと思った。何かあれば全力で守る、それだけのことだ。あさがあさぎらしく笑っていられれば、それでいい。所詮、違う人間で鈍感な男なので、あさぎの笑顔が本物かどうか本当のところは分からなくとも。

清矢郎にあさぎの言う金魚は見えない。だがあさは見えるというので、あさににとっては「居る」のだろう。清矢郎はあさを信じていた。

彼はとても明快で、単純だった。だから金魚についてこれ以上考察することを止めた。考えてもどうしようもないからだ。清矢郎には見えないのだから。そしてあさは居ると言うのだから。寧ろ、――『せいちゃんのこと、考えるだけで見えるようになっちゃったの』

その事実が面映い。自分の所為で、と思うと申し訳なくなるが、何やら特権意識を持ってしまう。清矢郎にはそういった短絡的な一面もあった。

なので後はこれから、金魚の見える可愛い従妹の一年生とどう付き合っていくか。それだけのことだった。それに付き合い始めた時よりもずっと、これからのことが見えてきた。あさぎの気持ちがあったからだ。こんな俺をどうして、と思いつつも、それでも自分が好きだと何度も何度もひたむきに伝えてくれた。

そのうえ先ほどの経験で、ここ数年嫌というほど抱いていた身体の悩み、特に忘れられなかった四年前の感触からくる欲望が、一気に弾け飛んだからだろう。急に全てが満たされたわけでもなく、新しい欲も生まれている。しかし行き場のなかった袋小路に、一条の光が射し、行く道を照らしている。まだぼんやりと見えづらいものでも。

ただ、あさを大切にすればいい。それは出会った時から、付き

合い始めた時から変わらない。だが想いと身体を重ねたことで何処まで、どのように大事にすればよいのか、もっと具体的にイメージが湧くようになった。

一度彼女に手を出すからには、あさが嫌がらない限りとことん、何処までも守るつもりだ。大人になって、経済的にも自立して、彼女の全てを守ってやれるようになるまで。

もちろんそうなる前に、自分たちの関係を周囲に話してもよいが、何かあった時に責任がとれないからと引き離されたくないのも、卑怯かもしれないが黙って付き合っていたい。慎重に行動しつつ、それだけの力を確実に身につけていきたい。

それでももし知られてしまったとしても、知られずに大人になれたとしても、身体の関係を持つということは、命を生み出す未来や彼女の身体を傷つけてしまうというリスクも見据えているということになる。だからあさがとは、いつでも添い遂げる覚悟はある――これも、あさが嫌でない限り。

互いにそのつもりなら、たとえこの先何があっても堂々と想い続けていればいい。一度は反対されてもいつかは認めてもらえるよう、じつと耐えて、行動で説得すればいいだけのこと。その努力を惜しまない覚悟と、あさぎの未来まで背負う覚悟を清矢郎は既に持っていた。

彼は一本気だった。まっとうなルールに沿い、強固な意志を定め、それを永遠に貫く――。言うはとても簡単だが、実はとても困難な道のりだ。けれども、これまでと一緒で諦めずにいれば必ず叶うことだと、清矢郎は自分を信じていた。いつの間にか、信じられるようになっていた。

これもあさぎのおかげだろうか。彼女と恋愛関係になったことで、これまでにない深い人間関係を誰かと築いたことで、少しでも自分に成長があったのだろうか。

それだけのことだ。これでいいんだ。そう思うと、清矢郎にふっと眠気が襲ってきた。やっぱり疲れていたようだ、身体も、心も。

今夜はよく眠れそうな気がした。聞こえるわけもない竹のざわめきが、耳の奥で響いていた。

ただ彼もまだ若かった。経験がないゆえに分からないが、この展望には若干の誤算もあったのだ。

今日覚えてしまった甘い蜜の味に、一度触れてしまったあさぎの白い肌に、思った以上に嵌ってしまい、心惑わされることになるなど、ひとまずの目標を超えた今は、安堵から想像も出来なかった。今は何でも出来るつもりでいた。あさぎを思った以上に寂しがらせることになるのも、この時にはまだ分からなかった。

ただ身体の方はそれをよく理解していて、まだ足りない、もう一度、と未だに疼いている。彼も何処となくそれを感じてはいたが、今は何も考えず眠ってしまいたかった。

……夢の中に、小さな可愛らしい金魚が迷い込んできた。あの日縁日であさぎと掬った金魚だと、清矢郎にも分かった。彼に懐くように寄り添ってきた。

頼りなく、すぐに死んでしまいそうなほど小さくて儚い。それでいて温かくて、とても可愛らしく愛しかった。その掌に包んで、慈しんだ。

——赤い金魚は、此処に居た。

——此処に、居て。

第42話 世界へと繋がる扉（前編）

遂に初体験をしてしまった。まだ十六歳になったばかりだというのに。派手なことをしているわけでも、男子に人気があるわけでもない。大人しい子というイメージが周りにもあるだろうに。

清矢郎との秘め事の帰り道、あさぎは不思議な気持ちに包まれていた。これは優越感なのか。こんな自分が、というギャップからの。もちろんそんな感情以上に、好きな人と心を通い合わせ、深く想われ、誰にも見せない姿を見せてもらった満足感がほとんどを占めているが。

いよいよ家の扉を開ける。駅のトイレの鏡で、衣服や髪の毛の乱れがないようしっかり整えた。残照もあさぎのことをまだ待っていてくれた。どうにか空に赤味が残っているうちに家に帰ってきたので、「ただいま」と中に入っても母親に文句を言われなかった。

運よく、夕食の支度も済んでいた。いきなり手伝いをしろと言われても心の準備が出来ていない。あさぎは不審がられないよう一旦自分の部屋に入り、心を落ち着けてから夕食に臨んだ。

この際、嘘をついていることへの申し訳なさは振り払わなくてはいけない。今の自分の年齢は分かっているが、それでも従兄で受験生の清矢郎と身体の関係を持ちたいと願ったのは、あさぎなのだから。そして清矢郎に「本当に覚悟を決めたのか」と問われ、頷いたのだ。彼にだけは嘘をつきたくない。

早く帰ってきていた父親と家族三人で夕食をとりながら、あさぎは四年前のあの夏の日のことを思い出していた。清矢郎に身体を触られたことを家族に懸命に隠し、心臓をばくばく鳴らしながらも平然とした顔で清矢郎と親類の皆と食卓についていた。食事の味など分からなかった。

今日も同じだ。いつもと同じように会話をするよう努める。「いつもと同じ」ってどんな風だったつけと意識するので、無駄に口数

が増える。そのくせ今日のことはあまり話さない。

空々しい自分の喋り方に、もしかしたら母親は、あの時も今も気付かないふりをしているだけかもしれないとあさはきは思えてくる。――いや、心配性な母親のこと、あさはきの変化に気付けば何があったのかと、きつく追及してくるに違いない。ならばやはり何も気付いていないのか。

緊張でいつもの何倍もの長さに感じる食事の時間がやっと終わり、あさはきはほっとした。その後の入浴では、身体の様子を調べる。まだ痛みがあるが、雑菌は入っていないだろうか。またあれだけ痛い思いをするのかと思うと憂鬱にもなるが、あれで終わりだと言われるのも寂しい。何度もすれば、慣れるのだろうか。

自信のない胸も、今日のことできなり大きくなるわけでもなかった。こんな貧相な身体に、清矢郎もよく欲情してくれたものだ。

内出血のような赤い痣を胸の下に見つけた。彼の名残だ。あさはきの胸がじんわり熱くなり、浴室の蒸気と関係なく頬が染まる。清矢郎の唇が此処に強く押し当てられていたのは、夢ではなく現実。あさはきに愛おしそうに吸い付いてくれた。あの感情を見せない、凛々しい少年が。

その事実にはたまらなくなり、あさはきは金魚の泳ぐ血の海のような湯船の中で自分の身体を抱き締めた。

――せいちゃん。せいちゃん。清矢郎。

だいすきだよ、の想いに締め付けられる胸。あさはきは叫び出したい衝動を懸命に堪え、唇を噛み締めた。

服を着てぼうっとした頭で部屋へ戻ると、勉強するふりをしながら清矢郎にメールをした。これも両親に勘付かれないよう、今の時間まで我慢したのだ。あの低い声が聞きたくなかったが、メールだけで我慢する。彼に鬱陶しがられたくもない。しばらくして、これまでのような返信が戻ってきてあさはきは一安心した。

やはり今夜は勉強などする気になれず、母親が二階に上ってこな

いか注意しつつ、ベッドの上で今日の出来事の残像を蘇らせ始めた。その輪郭をひとつひとつ丁寧になぞる。あんなことをされた、こんなことをされた。裸の清矢郎の汗の粒まで思い出し、目が眩むような、今でも信じられない気持ちに浸る。

胸が苦しい。そのくせ頬が緩む。性欲を解消したはずなのに、もう身体が制御できない熱を持つ。清矢郎が原因で見えるようになった金魚も、相変わらず数え切れないほどの群れをなし部屋中をたゆたっている。枕を抱き締めたあさぎは、それを呆然と眺めていた。

結局この金魚は、あさぎの欲望そのものなのだ。原因となる清矢郎と付き合い出したところで性に根ざしたものであるなら、彼を想っている限り見え続けるのだ。あさぎの欲望を餌とし、意識下で生き続ける金魚。いつまでこの幻覚が続くのかうんざりもするが、この秘密を清矢郎が共有してくれた。しかもあさぎのことを気味悪がず心から心配してくれ、受け入れてくれたのだ。おかげで二人の絆がより深まったようで、逆にこの金魚に感謝すらしてしまう。

——夢じゃないよね。金魚見えるなんて言っちゃったけど、せいちゃんに引かれてないよね。私の身体じゃよくなかったって、嫌がられてないよね。また会ってもらえるよね。また……して、もらえるよね。

メールをやり取りしているうちに、あさぎの文化祭に清矢郎が来てくれる約束になった。あまりしつこくしてもいけないので、そのメールで今夜は最後にする。

興奮や不安で眠れそうにないと思っていたあさぎだが、寝転んで取り留めなく想いを巡らせているうちに、いつの間にか眠ってしまった。思っていた以上に、身体も心もとても疲れていた。

だが気は高ぶっていたので眠りが浅かったのか、今夜もやはり金魚の夢を見た。いつかの赤い金魚と黒い金魚が、また有り得ない交尾をしている夢。ぴとりと身を寄り添わせ、尾びれをびくびく忙しなく動かして。水の中のはずなのに、何故か水草の代わりに竹がざわざわ揺れていた。

・・・・・・

そして夏休みが終わり、九月初旬。あさぎの高校で文化祭が開催された。金曜日から日曜日までの三日間行われ、土曜日が一般解放日、日曜日は体育祭となる。金曜日の初日、あさぎと夕映は別棟の図書館前に机を置き、そこに座って今日のために印刷所に発注した文芸部の部誌を販売していた。これは二日間、部員同士で交代して当番に当たる。

部活の方は、明日の割り振りは与えられていない。クラスの出し物は廃棄物で作った展示のため既に完成し、明日の午前中に夕映と見回りの当番になっているが、それ以外の予定はない。というわけで明日は学外の生徒も入場できることから、夕映は彼氏と遊ぶ予定を入れ、あさぎも清矢郎を呼び出したわけである。

自分の高校に清矢郎を招くのは恥ずかしさもあるが、夕映が居ないのは寂しく、手持ちぶさたになってしまう。何より学校に行く日の方が、通常の休日よりも家族に怪しまれないだろうと思ったからだ。二人が従兄妹であるからという以上に、あさぎの両親の考え方では高校生で身体の関係のある付き合いは許してもらえないだろう、とあさぎは懸念しているのだ。

悪いことだと思ふならしてはいけないのだろうが、もう止められない。あさぎも遠方から通っているため、この高校に二人の共通の知り合いや仲のいい中学校時代の同級生はおらず、よほどのことがない限り家の近所で噂になることはないだろうと考えていた。

今は中庭や校舎の方のざわめきに心を浮つかせ、少し離れた人波を眺めながら、夕映と二人で他愛無い会話をしていた。

「夏休み、彼氏とどうだったのよー」

学校が始まった日も早速聞かれたが、人目も気になり覚悟も決まらず、あさぎは今日まで言葉を濁してきた。

初体験後、初めての生理が昨日やってきた。あさぎは心から安堵したが、これからどういうことに気をつければいいのか、身体に悪影響はないかなど心配は尽きない。インターネットでも聞くこともできるようだが、両親の目が気になり、かつ不安に震えるあさぎは今は知らない相手から遠慮のない言葉が恐く、そうした内容のサイトは直視できずにいた。なのでやはり同じ蜜を吸っている、信頼のおける友人に尋ねることにする。文化祭という非日常的な状況も、あさぎに勢いをつけた。

所詮十六歳の子供同士。客観的で正しい意見ではないかもしれないが、夕映は自分の欲望に忠実でありながら、周囲に迷惑を掛けないようにしているとあさぎは見ていた。あさぎもまた誰にも否定されず、清矢郎に愛されるという甘い誘惑に溺れたかった。

「しちゃったの」と直接的に言うのは恥ずかしく遠回しに身体に関する質問をすると、夕映はすぐに勘付いたようだ。逆に「もしかして？」とあさぎに問いかけ、あさぎは顔を真っ赤にするとそれを認めた。そして遂に、「実は相手、従兄なんだけど」と付け加えた。相談するにあたって、身内と他人とではアドバイスも違うだろうと思ったからだ。

すると夕映は長い睫をしばし往復させていたが、一言だけ口にした。

「そうだったんだあ。よかったねえ」

流石は夕映だ。変に騒がれなくてよかったが、何やら清矢郎と絡んでいる裸の自分を想像されているようで恥ずかしい。だが夕映なりにあさぎを祝福し、不安を和らげるために同調してくれたのだろう。これまではこうした解釈ができなかったあさぎだが、夕映と同じことを経験した、自分を清矢郎に認めてもらえたと思うことからコンプレックスが薄れたか、前よりは真っ直ぐな目線で彼女を見られるようになったのかもしれない。

そんなことで人の見方を変える自分が、矮小な人間に思えてくる。やはり精神的にはまだ子供で、清矢郎の言う覚悟など持っていない

のかもしれない。あさは違いう意味で段々落ち込んできてしまい、彼や夕映への劣等感がまた新しい形で首をもたげてきた。

それでも折角のチャンスなので、あさは自己嫌悪はひとまず置いてお、夕映と性交や女性の体について照れながらも語り合うことにした。目の前を幾人もの生徒が足早に通り過ぎていくが、文化祭の喧騒の中、二人の会話が聞こえることはまずないだろう。冊子を買ってくる生徒の数もまばらだ。図書館や国語科職員室から誰か出てこないかだけはちらちらと気にし、あさは汗を拭いつつ夕映と過激な単語を交わしていた。

日陰の下に居ても、地熱が蛇のように這い上がってくる残暑の厳しい日だったが、空は澄んだ秋色で塗られている。その下で色とりどりの看板や紙テープなどの装飾にまぎれている、赤い点々。爽やかな青空と青春を謳歌する文化祭に相反する話題に興じていた二人の少女であったが、しばらくして話の方向性が少し変わった。

「じゃあ、この詩も彼のこと？」

夕映は文芸部の冊子のあるページを開いた。あさぎの書いた作品だった。ちなみに夕映には尋ねられたので清矢郎の下の名前だけは教えてあるが、あさぎが秘密にしたがっていることから基本的に名前を出さない。

意味深に笑う夕映に、あさは首を竦めて答えた。

「そ、そういうわけじゃないけど」

「そう？　だってなんか、すごく可愛いこと書いてるんだもん。彼のこと、大好きーって感じで、いじらしい」

やはり夕映はあさぎにとって、常にコンプレックスの対象のようだ。同じ年だというのに彼女は全てを見透かし、まるで年上の女性のように笑っている。

確かに正直なところ、それは清矢郎のことを思い浮かべながら、会いたいのには会えない切なさなどを綴ったものだった。付き合い始めてすぐの時に書き、逢引を重ねる合間に手直しをした。

緋色の酸っぱい檸檬水に溺れる金魚のことを、自分の長年付き合ってきた幻覚を、あさはそのまま拙い言葉で文章に落としたのだ。

第43話 世界へと繋がる扉（後編）

夕映に自分の作品を褒められたあさぎ。国語の成績は確かにまだ他の教科よりはよいが、美術の授業や学校の課題で「創ったものを褒められる」という経験は一度もなかった。しかし褒められたからと言って、小説家になるつもりも詩人になるつもりもない。将来就きたい職業すら漠然としかイメージできておらず、尋ねられると困ってしまうほどだ。

そもそも夕映の示すあさぎの作品も小説と呼べるものではなく、韻なども踏まえていないため詩とも言えない、たどたどしい文章。清矢郎への悶々としていた気持ちを、言葉にすることで気晴らししたくて書いた。その時一番心を締めている事象が、彼のことであったからだ。

だが不思議なもので、清矢郎と付き合う前は文章など何も思いつかなかった。頭の中がぐちゃぐちゃとして、かえって苛々するだけでまとまらない。だが他人と想いを通わせたことで、自信が少しばかり備わったのか素直な気持ちが書き表せた。これはこれで、あさぎにとってよい傾向なのかもしれない。

こうして少しずつ自分の心を開け、その扉から自分が足を踏み出したり、逆に柔軟に何かを受け入れたりと出来るようになるのだろうか。あさぎはこれまでにないことに照れてしまった。そして更に驚くことを言われた。

「琴音先輩もあさぎの気に入ってたよ。すごくいい、って皆に薦めてるの聞こえてきた」

「えっ？」

あさぎは眼を丸くした。琴音は文芸部の部長だ。はきはきとした喋り方で明るく友達も多く、年上の恋人もいれば、文芸関係のコンクールでも入賞し、大学では文学を勉強したいと聞いている。その彼女に――とあさぎが絶句していると、

「ほら噂をすれば」

夕映が立ち上がり、大きく手を振り始めた。二人の方へと走ってきたのは、制服にエプロンを掛けた琴音だった。

「暑い中、おつかれさま！ 二人で一個になっちゃったけど食べてっ」

琴音はクラスの出し物だという、あさぎの顔ほどもある大きなかき氷を二人の目の前に、どん、と差し出した。

「わざわざ、ありがとうございますー」

この暑さならば彼女のクラスも盛況だろう。二本刺さっているストローのうちの一本を手にとると、夕映はそう言って早速涼しげな音を立てて食べ始める。呆氣にとられていたあさぎだが、琴音はあさぎの方を見ると唐突に顔の前で両手を握り締めた。

「今回あさぎちゃんの書いたの、すっごくよかったよ！ 何だかとても大事なものが伝わってきた感じがして、こう、きゅんってした！」

抽象的な言葉を並べる琴音を、あさぎはぼかんと見上げていた。

夕映が隣で「ほらね」と言うように笑っている。細い指であるのに琴音の力は意外と強く、手入れされている爪が秋の日差しにきらめいている。彼女とは会えばいつも言葉を交わすが、特別親しいわけでもない。あさぎの性格もあり先輩である琴音にスキンシップをはかったことはなく、今初めて触れられた。互いの汗と生々しいぬくもりに、何故か心まで掴まれたような気がして、あさぎは固まってしまった。

琴音が勢いよく近付いた瞬間、埃の舞う中に甘い匂いがふつと鼻をついた。あさぎの好きな制汗剤の石鹸の香りとは、そもそも種類が違うもののような。よく分からないが、急に胸が高鳴りあさぎは顔を真っ赤にした。

「そう、ですか……？」

「うん！ ああいうのまた期待してるよ！ 頑張って書いてねー」

あさぎは「ありがとうございます」と消え入りそうな声を出すと、頭を下げた。彼女はあさぎの手を握ったまま何度か振ると、「じゃあねー」と風のように去っていった。

「よかったじゃんー」

あさぎの方にかき氷を移動させ、夕映はにやにやと笑っている。

「ん……」

どう反応してよいか分からず、あさぎは今し方握られていた手を股の間に挟み、スカート越しにもじもじと擦っていたが、この妙な胸の熱を冷まそうとかき氷を手を取った。しゃくり。夏の名残の甘味が、優しく火照った心を冷やしてくれる。

友人で鼯鼠目もあるだろう夕映だけでなく、憧れの先輩だった琴音にまで褒められた。複数の人間に自分の行動を認められた経験が、ここしばらくあさぎにはなかった。しかも別に道徳的なことをしたわけでもなく、醜い性欲に突き動かされそれを消化しようとしたものが、他人にときめきと小さな感動を与えたのだ。

あさぎにしか見えないちっぽけな金魚が、あさぎがコンプレックスを抱いていた少女たちの心を動かした。この複雑な喜びをどう表現していいのか分からない。喜んでよいのかどうかさえ。これくらいのことには思い上がっていけないと、過去の経験からあさぎは自分に言い聞かせる。だが多くの人に必要とされるかされないかの違いはあっても、実は彼女たちと同じステージに自分も乗っていると思っ
ていいのだろうか。

あさぎが不思議な高揚感に包まれていると、また金魚が現れた。

ぴちぴちと秋晴れの下を嬉しそうに跳ねている。今日は欲求不満で苛々したから現れたのではない。それが満たされたことで、卑しい心が愛撫され気持ちよくなってしまったからだ。――やはりこの金魚は、欲望の化身には変わりない。

「でも私、夕映や琴音先輩みたいに小説とか書けないし、詩みたいな綺麗な言葉が浮かぶわけでもないし、次はそんな風に書けないと

思うからかえって恥ずかしいし、がっかりされそうで怖いよ」

あさぎはもっともっとと認められ続けることを望んでしまいそうな自分を制するため、懸命に否定した。期待され、相手に失望されるのも寂しいものだ。

「そうね。今回は、気楽に書いたのがよかったのかもね」

夕映が過大評価することもなくそう納得したため、あさぎはやはりそれだけのことか、と残念に思いながらもほっとした。もう中学生の時のように、自分は「できる」と思い上がりたくない。現実で自分を認めてくれる人は一人で構わない。清矢郎の愛情があれば十分だ。

過去の失敗に怯えているあさぎは広い世界に眼を向け、飛び出すことを恐れてそう思っていたが、実は迷いもあった。それこそ清矢郎の姿を見ていて。もしかしたら清矢郎以外に眼を向けることが、逆にこれから大人になるにつれて必要になってくるのではないか。清矢郎にもっと愛され、彼を守り、父母など周囲の大人たちに一人前だと認められるためには。

突然世界へと繋がる扉から光が差し込み、あさぎはその眩しさに軽い困惑を覚えていた。小さな出来事だがこの扉を開けるか閉ざすかは、あさぎ次第――。

だがそこで賑やかに話をしていたのが眼を引いたのか、何人かが部誌を買いに来たので、この話題はそこで途切れた。全く見知らぬ学年の違う真面目そうな男子や女子のほか、夕映は顔が広いため派手な男子や女子までもが興味ありげに本を手取るのには、また驚かされた。夕映も売込みが上手く、相手に興味を持たせ快く買わせてしまうのだ。

「へー。あさぎちゃんも書いてるの？　なんて名前で？　教えてよ――」

クラスメイトなど、二人の共通の知り合いも声を掛けていつてくれる。あさぎと言えば「大したもの書いてないから――」と、赤い顔

で手を振っているだけだったが。

.....

文芸部の担当の時間が終わった後は、夕映と喧騒の中に入り、高校生活初めての文化祭を楽しんだ。物珍しさもあり各クラス、部活等の出し物を一通り見て回り、食べ物を買って日陰で休む。ここでもまた恋の話、他愛のない話に花を咲かせた。こうして一日目は思っていたよりも充実した時間が流れていった。

清矢郎と想いと身体を重ねたことで、この世に自分が生き、必要とされている実感を得たあさぎであったが、他人の力に頼らず自分が力を出すことで、人に認められることもあると今日知った。だが今回のことは、ただのまぐれもある。常にその状態になるためにはそれこそ琴音のように、研ぎ澄まされた感性や惜しみない努力、他人への心配りが必要となる。並大抵のことではないことだけは分かり、あさぎには今の自分がそこまで出来るとは思わない。

清矢郎に依存しているという事実、自分の足で立ってみることを、この日あさぎは初めて考えてみた。

しかし次の日が近付いてくるにしたがって、そんなことも忘れて浮かれ出す。初体験の後、初めて清矢郎に会える日が来たのだ。文化祭の一日目が終わり夕映と別れ、そわそわし出すと今日話していた時とは違う姿の金魚が見え始める。最近――特に身体が結ばれる前後から、清矢郎のことを想う時に見える金魚の様相が変わってきた。瑞々しいことには変わりないが、尾びれや背びれが絹のように滑らかで長く、悠然と泳いでいる。小さな可愛らしい金魚が見えることもあるが、清矢郎まで飲み込んでしまいそうなほどの大きさの金魚が現れることが増えた。

その理由が分からないまま、文化祭二日目の昼食後、あさぎは待ち合わせをした正門へと、清矢郎を緊張の面持ちで迎えに行った。

あさが到着すると、清矢郎は既に門に凭れて待っていた。背は高さは眼を引くものの、さほど浮いたようには見えない。それもそのはず、北高も東高も男子は黒の学生服であるため、夏の男子の制服はただの白いシャツと黒いズボンという格好になる。今日は私服の生徒也大勢いるが、彼は学校の帰りか制服姿でやってきた。

それにしても清矢郎は相変わらず時間を守ってくれる人だな、とあさは感心しながら彼の前まで走っていった。

「ごめんね」

「別に」

素っ気無く顔を背ける清矢郎。初体験の後なのに、とあの日の情熱的な瞳を思い出すと少しばかり寂しくなるが、確かに多少人の視線を感じている気がする。制服だろうと私服だろうと、カップルが居ればとりあえず知り合いかどうか、高校生は噂のネタを探しているのもあり眼に付くようだ。

夕映も今日は彼氏を連れてきており、同じように彼氏を自慢できるようにで嬉しい気もしていた。しかしこうして人目が気になるため愛を囁き合ったり、ましてや触れてもらえるなどまず無理なことだと、あさは今更気が付いた。

それは残念なことだが、折角清矢郎が来てくれたのだ。つまらないと帰って欲しくはないし、中々会えない相手だ。チャンスを生かして一緒に居たい。あさは彼の方をもう一度真っ直ぐに見上げると、勇気を出して話しかけた。

「勉強、大丈夫？」

「ああ」

「なんか怒ってる？」

「いつもどおりだろ」

「そりゃ、そうだけど……人に見られちゃうし、来てもらって悪いなって」

「いや、東高は練習試合とかで何度も来てるから、慣れてるし」

その言葉に、あさは付き合う前の練習試合の日を思い出した。

自分のことばかり考えていたが、清矢郎は三年生。部活動もしており、ましてや東高と交流があるなら此処に知り合いもいるだろう。

あさぎは尚更慌てたが、清矢郎は飄々とした顔で校舎の方を眺めていた。あさぎが困ったように目を泳がせると、口を聞いたことはないが顔だけは知っている一年生の女子と、一瞬眼が合い逸らされた。驚きの表情をされた気がする。隣にいる子に何か囁いている。一緒にいるからと言って付き合っている、とまで思われているかは分からないが、この状況は確かに怪しい。

優越感を抱く予定だったが、予想以上にあさぎは居心地が悪くなってきた。夕映はよくこの視線の針の中で、恋人と遊べるものだ。

「ね、ねえ、あのね、折角来てもらって悪いんだけど、やっぱ恥ずかしくて、でも一緒に居たいから、どうか空き教室で話すだけでもいい？」

昼食後に待ち合わせたのは、逆に正解だった。学校を抜け出すのは気が咎める。だからと言って清矢郎と校内を歩き回るのはどうしても照れ臭い。あさぎは申し訳ないと思いつつも、正直な気持ちを口にした。わがままかなと心配になったが、

「いいよ」

清矢郎があっさり頷いてくれたので、ほっと息をついて顔を上げる。「知り合いに会えりゃ会ったでいいけど、あさぎも気まずいだろうし」

彼は無表情であつたが、落ち着かないように首筋を掻いていた。もしかしたらあさぎと似た気持ちなのだろうか。

——一緒に居たい、でも気恥ずかしい。相手に嫌な思いをさせたくない、でも離れたくない。

あさぎの顔がほんのり染まると同時に色とりどりのリボンに巻かれたアーチに添って、大きな金魚が身を捻りながら青空を切った。

第44話 言葉にできない距離感

清矢郎と並んで校内を歩き始めたはいいものの、あさは恥ずかしくてたまらない。誰も知り合いに会わなかった花火大会では無邪気にはしゃぐことも出来たが、今日はまるで無理だ。顔だけ知っている生徒数人とすれ違い、意外そうな表情をされれば居たたまれなくなる。

顔から火が出そうとは、まさにこのことだ。予想していた幸福感や優越感は何処かへ行ってしまった。文化祭の今日は何処にでも生徒が沸いているため空き教室が中々見付からず、あさは諦めて図書館へと向かった。

階下では文芸部の冊子を副部長ら二年生が販売していたが、丁度友人と話をしていたため、あさは急いで階段を上り清矢郎を手招きした。図書館内にも生徒は居たが、入り口付近の廃棄本の配布コーナーや研究レポートの展示にいくらか人が集まっており、奥で本を読んでいる生徒の姿はまばらだった。

それに此処は思ったとおり本に興味のある生徒が多く、あさは現れてもじろじろ見られることはなかった。あさはその横をそくさと通り過ぎ、図書室の奥へと清矢郎を誘導する。窓際で借りる人も少ない分類が置かれている、カウンター周辺からも死角にあたる場所へと。入学当初、ここで語らう男女の上級生を見てあさの方が照れて逃げてしまったことがあるが、たった数ヵ月後に自分が同じ立場になるとは思わなかった。

行儀が悪いが二人して本棚に座ると、小さな声で会話を始める。「なんか思ってたより、恥ずかしくなっちゃった。折角来てもらったのに、どこも見せられなくてごめんね」

俯き、申し訳なさそうにするあさぎに対して、清矢郎は「別にいいよ」といつもと同じ素っ気無い声で返す。その態度に安堵しつつ

も、あさぎは本当にそうだろうかと心配になる。だが彼は頭を掻く
とこう言った。

「あさぎの方が恥ずかしそうで、見てて可哀想になってきた。こっ
ちこそ、来て悪かった」

「え？ ごめん！ 違うの、本当は嬉しいのっ」

こちらの照れ臭さを知られていたことに、益々顔が熱くなる。あ
さぎは頭と手を大きく振って否定した。

「わざわざ来てくれて、すっごく嬉しいよ！ 会いたかったし、い
つも会えるわけじゃないし……」

初めて肌を重ねた後なのだ。会いたかった。あの時の気持ちが嘘
でないと彼に言って欲しかった。早く、もう一度触れ合いたかった。
あさぎが目線を上げると、赤の世界の中で最初に飛び込んだのは
大きな手。そして襟元から覗く胸板。首筋。その上には血色のよい
唇。眼は恥ずかしさからとても見られない。

この少年と裸で抱き合った。この唇が肌を這った。そう思うだけ
で、息苦しくなる。赤い金魚の群れに溺れて、一緒にはくはくと息
づきをしたくなる。

あさぎは胸の前で手を合わせると、清矢郎に気付かれないよう、
はあ、とため息をついた。自分だけが欲情しているようでこれまた
羞恥心に襲われる。何を言えばよいか分からなくなった時、清矢郎
がぼつりと呟いた。

「叔母さんとか、何も言わなかった？」

あさぎはこくと頷くと、尋ね返した。

「せいちゃんちは？」

自分の母親の兄である伯父の恐さもあさぎはよく知っている。だ
が清矢郎は「うちは、男だし」と首を横に振った。それを聞き、ま
た安堵する。

どうやら二人が結ばれたことは、無事に誤魔化せたようだ。高校
生の性交を容認するような親同士ではないと、これも互いに理解し
ている。自分たちが愛されているがゆえと、ありがたく思っている

が。兄妹のように育ってきた身内ということも、打ち明けにくい理由である。

——でも、またしてみたいな。次、いつできる？ 私なんかでよかった？

そのようなことと言えるわけがなく言葉と一緒に唾を飲むが、清矢郎の方が先に質問を重ねた。

「体とか、大丈夫か」

あさぎは再度頷いた。自分の欲望を満たすのではなく、あさぎの心や体を一番に考えてくれる清矢郎の優しさが嬉しい。やはり自慢の彼女だと、あさぎは人目を憚らず抱きつきたくなってしまった。そこで彼女はきよきよと周りを確認すると軽く背を伸ばし、背の高い清矢郎の耳元近くに唇を寄せた。彼は恥ずかしそうにやや身を引いたが、あさぎの話に耳を傾けた。

「あ、あかちゃんも、できてないし」

生理が一昨日来たことを、彼に伝えた。このようなこと言ってもいかならないが、今はそれを一番恐れているのだから。

「ん」

清矢郎も反応に困っていたようだが、小さく頷いた。

「安心した？」

あさぎが顔を離して清矢郎の眼を覗き込むと、彼は「そりゃな」とあさぎの眼を見ないで答えた。

「……私のこと、嫌いになった？」

一度口を開けば、今度はあさぎの不安が堰を切る。

「だから何でそうなるんだよ」

流石にしつこいなと自覚しているあさぎに、清矢郎はむっとしながらも即答してくれる。

「そんなこと絶対ねえから。だから、何度も聞くな。寧ろ俺が信用されてねえのかって思えてくる」

「ごめん。そんなつもりないよ」

逆に珍しく清矢郎に怒られてしまい、あさぎはしゅんとした。

「怒らないで」

「怒ってねえし」

がしがしと落ち着かなく頭を掻く音。

――嫌ってないのに。

――嫌われていないのに。

何やら不安でもどかしい。

肌に触れていた時は、あんなに安心できたのに。何も恐いものはないと思っていたのに。

この距離感が、どうしてこんなにも不安なのか。子供ができる恐れもない、誰にも咎められることのない、この距離感が。

――触れて欲しい。

――触れたい。

ごつごつしたこの手の動きが気になって仕方ない。金魚の口先が、清矢郎の手の骨の形を啄ばんでいる。あさぎはそつと手を伸ばした。我慢出来ずに、その指先に触れる。

瞬間、清矢郎の温かい指先が、びくんと震えた。真面目な彼もあさぎ同様、人目を気にしているのかもしれない。清矢郎は軽く周囲を見回した。書架の影から抜け出すように、大きな身体を傾け確認する。あさぎも一緒に覗き込んだ。だが気兼ねされているのか、やはりこちらを見ている生徒は居ないようだ。

清矢郎は掌を上に戻すと、あさぎの指先に下から触れた。そろそろと指を動かし、白魚のような指を一本一本なぞる。僅かな力加減があさぎにとっては心地良い。

たった指と指だけ。手足を絡め合い、体の全て、誰にも見せない場所までも重ね合わせたというのに、今はたったこれだけで身体が痺れる。不思議なものだ。そしてあの時ほどではないが、少し安心できた。

金魚の見えるおかしい自分なのに、今でも関心を持ってくれる。相手が求めてくれる。必要とされている。そんなことが、あさぎに

はただ幸福で。

人には見えない赤い金魚のベールが、二人の周りを守るように包んでいる。握り合うことは出来ないが、うっすらと汗を滲ませる清矢郎の熱をあさは静かに感じていた。

しばらくそうしていた二人だが、やはり図書館に居る皆に対し申し訳なく思えてきた。このまま盛り上がってしまい、司書の先生に注意のひとつでもされてはいけない。清矢郎もそう思ったかあさぎから手を離すと、そっぽを向いて提案した。

「場所、替えるか」

「うん……」

それでもまだ二人で居たいと思ってくれるようだ。あさはぼうつとした表情で、清矢郎と図書館を出た。

だがあさが先ほどより大胆になってきた。清矢郎と雑踏の中へと行く――のではなく、そこからあえて外れ、青春を高らかに謳う明るく真っ青な空の下、愛しい少年を緋色の澱みへと、人の居ない方、居ない方、死角へ死角へ誘っていく。

続く特別教室棟には、屋上へと続く階段がある。運よく先客は居なかった。ようやく「おあつらえ向き」の場所が見付かった。今度は其処へ並んで腰掛ける。

これからどうしようか。生徒たちのざわめきをBGMに、二人は無言になってしまう。あさは黙っているのも気まずいと、昨日までの出来事や、母親に知られないか緊張したことなどを話し、清矢郎の受験勉強の状況などを尋ねる。声がやけに響くので、先ほどと同様囁くような小声で。清矢郎はあさが短い言葉で答える。これは怒っているわけではないと、先ほどの言葉と手のぬくもりをあさは信じることにする。

しかしあさがいくら頑張っても、会話の糸はぷつりと切れてしまう。黙って清矢郎を見上げると眼が合った。すると今度は、清矢郎の方から手が伸びてきた。あさぎの心臓が跳ね上がり、大きな金

魚もばしゃんと跳ねる。

——キスしてもらえるかな。したいな。

そう思ったが彼はあさぎの柔らかな頬をふに、と摘まんだだけに終わった。

「な、なによう！」

あさぎはむうっと膨れるが、ふにふにと二、三度頬を、武骨な指で捏ねられる。それでも彼から触れてくれた事实に、頬が緩んでしまう。だがやがてその指は顔から離れてしまおうとした。あさぎはがっかりした。心から物足りなく思った。

清矢郎は何を考えているのか。あさぎの顔をじいっと見据えたまま頬から首へと指先を下ろし、最後に黒髪を掬う。視線は、互いに互いの唇へと移った。こくん、と動く喉仏をあさぎは見た。——遂に我慢出来なくなったあさぎは少しだけ背伸びをして、眼を半開きにする。唇を魚が突き出すように微かに動かす。

するとまるで風のように、鳥が魚を一瞬で捕まえるように素早く、同じ魚肉のような粘膜が触れてくれた。優しく、ささやかな刹那の時間。学校でキスしちゃった、とあさぎの胸の弦が切ない音をかき鳴らす。

近付いては、深く触れられずに離れていく。もう深く触れ合った仲なのに。もっともっと、激しく余すことなく接したいのに。嬉しさの陪乗、もどかしさが募る。先ほどから、その繰り返しだった。

このままぎゅっと抱き合いたいと願うあさぎだったが、下から人の声が聞こえてきたため慌てて清矢郎から離れ、「行こう」と立ち上がった。清矢郎もいくらか距離を置くと、黙ってついてくる。途中で上級生数人とすれ違ったが、見知らぬ顔であった。

何をしていたわけでもないが、あっという間に時は流れ、そろそろ二日目の文化祭も終わりに近付いてきた。これから片付けがあり、夕方、後夜祭が開催される。後夜祭は自由参加であるが、クラスの出し物の片付けには行かねばならない。清矢郎と一緒に居られるの

もあと、僅かのようだ。

——受験勉強もあるだろうし、今日はもうお別れかな。待ってなんて、言えないよね。

今思えば清矢郎こそ東高の友人に会いたかったかもしれないが、それこそ今更である。あさがそう思って寂しそうな、申し訳なさそうな顔で俯いて歩いていると、その気持ちを察したように清矢郎は尋ねる。

「今から片付け？」

「うん、クラスの展示の」

「片付ける前に、それ見てっいいい」

「うん！ いいよっ」

「……あと、片付けてさあ、時間かかんの」

「え？ う、ううん！！」

期待していなかった問いにあさは驚き、急いで首を振った。

「終わったら連絡して」

「う——うん！」

「打ち上げとかあるならいいけど」

「大丈夫！ 明日、体育祭だから、明後日の昼間やるって言ってた」

「叔母さん、心配しねえの」

「遅くなると、されちゃう。だから少しだけけど……」

駅前で人目のつかないところで会うとなれば、またあの公園だろうか。生理なのであさが願っているようなことは出来ないが、先ほどの続きの深い口付けくらいは出来るだろうか。あさぎの胸がりんりんとうるさく鳴り出す。その音に合わせて金魚は踊る。清矢郎も同じことを考えていてくれる。文字どおり床から舞い上がってしまいそうになるあさがだが、呆れられてもいけないので平静さを装うよう努める。

すると人の少ない特別教室の一階で、生徒の上履きの音とは異なるサンダル音が聞こえてきた。ぺたぺたと、あさぎ達の進む方向

から。聞き覚えのある、古くなったそれが跳ね上がる時の音。あさが顔を上げると、向こうからやってたのは文芸部顧問の教師、荒芝であった。

とうとう、顔見知りという範疇でない人にまで見られてしまった。教師であることに安堵するべきか、それとも指導などされてしまうか。だが身体を重ねているところを見られたわけではない。落ち着け、家にまで連絡されることはないはず、とあさは自分に言い聞かせるが、担任を通して何か言われてしまうかもしれないと焦り出す。だがこれだけでは、清矢郎と自分が付き合っているかどうかなど証拠はないはずなので開き直るしかなかった。

「久しぶりだな」

「はい。おかげさまで」

荒芝が話し掛けたのは、清矢郎の方であった。そう言えば荒芝のことを、清矢郎は知っていると云っていた。

「覚えてくれてたんですね」

「当たり前だろー。剣道、結果どうだった」

「地区大会、四回戦まで進みましたが、それまででした。団体は僅差で初戦敗退でした」

「そっか。それでも北高にしてみりゃ健闘したじゃねえか。受験の方はどうよ」

「それなりに」

「お前さんなら目標さえ定まりゃ、大丈夫だろうな」

荒芝は北高からこの東高に来たと聞いているが、担任でなかったというのに、大勢の生徒の中でよく清矢郎のことを覚えているなあとあさは感心する。そう思い二人をきよろきよろと見比べる彼女に、荒芝はにやりと笑って説明を加える。

「加納の教科の担任持ってたし、こいつ、何だかんだで印象深えからさ」

彼はあさぎと清矢郎に繋がりがあつたことを今知つたようであるが、そのことについては何も詮索してこなかつた。そのまますぐに歩き

出そうとした荒芝にあさぎはほっとしたが、

「まあ、受験に失敗しねえよう、ほどほどにな。うちの生徒、大事にしてやって。よろしく、『先輩』」

荒芝は最後にそう言ってわざとらしく語尾を上げると、彼よりも背の高い清矢郎の肩に、ぽん、と手を置いた。そして後ろ手を振り、またぺたぺたという間抜けな音を立てて二人の前から去っていった。

——相手が荒芝でよかったと言うべきか、悪かったと言うべきか。二人の関係を何処までのものは別として、彼は察したようだ。一見ストイックで大人しい他校生同士。だからこそ一緒に居れば違和感があり、「付き合っている」という結論に達しやすいだろう。それにあさぎも以前、荒芝に北高のことを聞こうとして冷やかされている。

説教をされたわけではないが「何か」に気付き、暗示するような言い方で釘を刺され、あさぎはかえって羞恥心と罪悪感に見舞われた。

「やっぱり、あの先生、気をつけろよ」

「どうして？」

「やばい」

「何が？」

「……色々と」

清矢郎は詳しくは答えなかった。彼としても説明のつかない気持ちで居たのだ。

自分たちの秘密の関係を察せられているような気がしたのは、清矢郎も同感だった。同時に荒芝の眼に、あさぎが既にそういうことをしている「女」である、大人の荒芝に「近い」存在であると思われるような、何とも言えない嫌なものを感じた。ただ単に自分の女をそんな眼で見たくないという独占欲から、過敏になっているだけかもしれないが。

相手は大人の男。生徒のことは仕事対象にしか見ていないだろう

が、そういった事件もよく耳にする。多少の心配を抱いた清矢郎は、首を傾げるあさぎには何も答えず、ずんずんと歩いていく。

いくつもの言葉にしない想いが、いつも以上に騒がしい校舎の中で赤い金魚の回流と一緒に交錯していた。その想いは透明な水面を隔てているだけなのに、誰にも見えない。そうして二人は大人になっていく。いけないと分かっていつも互いの傍に居たいと願い、その誘惑に負けて世界の規律に反し、自分たち二人とあさぎの金魚だけが入れる水槽を作ってしまう。

あさぎの念願が叶い、二人がよく会っている公園の隅で深く深く唇を重ね合わせたのは、辺りが夕闇に包まれ始めたそれから一時間半後のことだった。

第45話 黒い金魚は窓からやってくる

楓が染まる。赤い葉が落ちる。舞い上がる炎のような、秋の色。

金魚か紅葉か、あさぎも遠目には分からない時がある。あさぎが袖を通すセーラー服も、再び黒の冬服へと変わった。清矢郎と付き合う前、久しぶりに顔を見た五月の法事の時に着ていたものと同じだ。制服の感触は変わらないのにあの日から四ヶ月以上が過ぎた今、当時とまるで異なる関係を彼と結んでいるのが不思議だった。

たった数ヶ月かの間に、色々なことがあった。あり過ぎた。これまでの十六年間であり得なかったことが次々に起きた。初めての恋人。初めての経験。幾つもの境界線を超えてしまったこと。しかも四年前からの苦しみまでが、ひとまず解決を見せた。

しかし幸せなことばかり、と言うにはまだ早い。既にまた別の深い沼に溺れている。会いたい、会えない、周囲に知られるのが恐い。その葛藤とたたかう日々だった。

それにしても清矢郎の影響力はすごいと、あさぎは毎日の生活の中で実感していた。彼のおかげで様々な気持ちを味わうことができた。付き合い始めてからはこれまでに知らなかった世界への扉を、たくさん示してもらった。これまで抱いたことのない、そして向けられたことのない感情が、あさぎを取り巻く景色の彩をより一層美しく、複雑にする。その色形を元に物事を見ることで、また新たな発見が生まれるのだ。

これからどのようなことがあるのか。鮮やかな色彩を眺めて期待に満ち溢れていたあさぎだったが、最近ふと不安に思うことがある。これから先、もしかしたらこの光景の明度が落ちてしまったり、灰一色になることだってあるかもしれない、と。

そんなことを考えてしまう理由は、ひとつだった。

一ヶ月前の文化祭の後、あさぎは後夜祭には参加せず清矢郎と駅裏の公園で再び待ち合わせた。いけないと思いつつも寄り添い、衝動に耐えきれず公衆トイレの目隠しの中で抱き合い、唇を深く重ねた。

場所が場所のためあさぎの心は落ち着かなかったが、止められない。夏休みの終わりの出来事が生々しく蘇り、もう一度あの情熱を清矢郎から向けて欲しくなったが、彼はやがて顔を離れた。唾液に唇を濡らしたまま残念そうに清矢郎を見上げたあさぎに、彼は低く呟く。

「……今日は、無理なんだろう」

その日は生理が始まって三日目だった。あさぎの鼻にもまだ酸っぱい匂いが残っている。この平常と違う重い身体では、いくら気持ち盛り上がっていても彼を受け入れるには抵抗があった。鈍痛を伴う場所にあの痛みと衝撃が再現されれば、今度こそ身体も心もおかしくなってしまうかもしれない。

「ごめんね」

とあさぎが言うと、彼は「いいよ」と言っただけ顔を上げた。

「怒ってる？」

あさぎが尚も尋ねると、

「俺って、そんなにそう見えるのかよ」

逆に彼の声が沈んでしまったので、彼女は慌てて首を横に振った。そういうことが出来ないからといってふて腐れるわけでもなく、清矢郎はただあさぎの身体を気遣ってくれている。それに感謝しよう。彼の優しさに。

あさぎはそれより、自分自身の気持ちの動きに呆れていた。このような状態の身体に無理矢理迫られれば嫌でたまらないはずなのに、「じゃあせいちゃんは、どうしてもやりたいってわけじゃないの？」などと矛盾したことを思ってしまう。自分の方がずっと嫌なやつであり、かつ清矢郎に抱いてもらえないことを残念に思っているはしない子だ、とあさぎは内心恥ずかしく思っていた。

なおこの場合、あさぎの求めるものは男性と接合する行為そのものではなく、より精神的なものである。彼があさぎに夢中になっている時に吐く息や、真剣な瞳、手指の動き、聞き慣れない淫靡な囁き、そして体表面に与えられる浅く甘い快感など。しかし男女で同じものを求めているわけではないかもしれないので、身勝手なことを考えている自分をあさぎは反省するのであった。

名残惜しいがその日はそれで二人は別れ、あさぎは母親が心配しない時間に帰宅しようと、残照の朱が残っているうちに電車に乗った。

それから一ヶ月経った、十月の今。清矢郎には受験が迫っており、あさぎも九月末にテストがあったことから、真面目な二人は週に一度会うことがやっとであった。

夕映のように、街でよく見かける学生カップルのように、週に何度も会っては人前でも常識の範囲で触れ合っている生徒は大勢いるのに二人の性格ではそれが出来なかった。

誘惑はある。会いたい。一人になれば、清矢郎のことを想ってばうっとしてしまう。電話代には上限が設定されているがパケット代には余裕があるため、毎日毎日メールをする。

一番気になるのは、やはり両親の眼であった。これまで帰宅部同然で早い時間に帰っていた娘が遅く帰るようになったり、休日に頻繁に居なくなるようになれば不審がられ、付き合いを反対されるかもしれないとあさぎは生活ペースを崩さずにいた。先日のとおり十代の性に関するニュースを見ては、母親はピリピリと心配しているのだ。

前は姉が家に居たため説教の量も二分されていたが、この秋から彼女は一人暮らしをするようになった。仕事が忙しくて生活時間を家族に合わせられず、母親とよく衝突していたからだ。独立して一人で自由に暮らすことにしたという。しかし母親は初めて家を出た二十代の彼女にも、こまめに電話をして無事を確認している。心配

させられるのはいつも親の方だ、と父親にも嘆いている。

しかしそれでも姉は成人しているので、最後は自分で責任を取りなさいと両親に言われている。あさぎは姉が羨ましかった。早く大人になりたいと思った。彼女にも仲の良い男性はいたようで、もしかしたら未成年のうちは悩んでいたのかもしれないが。

清矢郎は従兄なので、あさぎの両親をよく知っており、家庭の事情にも理解を示してくれるのが幸いだった。親同士が兄妹であるため、清矢郎も似た環境で育っている。だから彼はあさぎに無理を言うことも、我俣を言うことも一切なかった。

それはあさぎにとってありがたいことのはずなのに、感情を表に出さない清矢郎に対し不安の雲がもくもくと湧いてくるのだ。その雲はまたしてもあの黒い出目金の形をとり始め、あさぎの胸の中で増殖する。現実の出目金は可愛らしい魚であるが、あさぎの幻覚では実際のものとは違い、濁った沼に住み、ぎよろつく眼であさぎを探し、その淵に引きずり込もうとする不気味な生き物だった。

本当に、清矢郎は自分のことが好きなのだろうか。自分は狂おしいほど、彼に会いたいのに、彼はそんな風に思ってくれていないのではないか。彼の方は、――しなくても平気なのだろうか。

あさぎがこのような猜疑心に囚われ出したのは、まさに触れたくとも触れられないもどかしさが原因であった。ここ一ヶ月、清矢郎と会っても口付けまでしか出来ない。時にそれすらなく、駅の近くの店で別れることもある。あの夏の日のことは夢だったのだろうか。あさぎにはそれが心配で、寂しくてたまらなかった。

彼を信じたい、彼の思いやりと冷静な対応に感謝したい。それは頭では分かっているのだが、寂しさは心に隙間を作りそこから現れた疑念の金魚があさぎの胸を泳ぐ。そしていつの間にかそれがあさぎの内側を食い破り、幻覚の金魚の群れにまで黒いものが混じるようになった。重症だなとあさぎは思った。

そんな時は少しでも声が聞きたく、清矢郎に電話をする。予備校の授業中は電話に出てもらえないが、それ以外の時はすぐに応じてくれるためほっとする。時には周りに友達がいるのか、彼が周囲をあしらう声や、周囲からわざとらしい大声が聞こえてくることもあった。予備校に居る時や電車の中だという時も、必ず後から掛け直してくれる。

夕映にそんなことを打ち明ければ、「ほんと、いい人だねえ。愛されてるねえ」と彼女は眼を瞬かせて感激し、あさぎの頬を突いて冷やかしてくる始末。しかしながら清矢郎を絶賛する割には、彼は夕映にとって恋人として好みのタイプではなさそうなのだ。あさぎにしてみれば、よほど夕映の恋人の方が話を聞いていて怖いと思うのに。人の価値観とはそれぞれである。

清矢郎が「やりたい」と言わないのは、あさぎのことが本当に大切だからだと夕映は力説する。本当にそうなのだろうか。ただ単にあさぎに魅力がない、もしくは彼が淡泊でそうしたことに興味がなただけではないか――四年前は有り余るほどの性欲があったくせに、とあさぎは不満を隠せない。それに夕映こそそこまで褒めるなら清廉潔白な男性と付き合えばよいのに、そうしないということは、彼女もそんな「おあずけ」状態は嫌だからではないか、とあさぎはこっさり唇を尖らせる。

清矢郎のことだ。あさぎがしつこく尋ねれば、きっとそんなことはないと言ってくれるだろうが、同時に不機嫌になってしまいかもしれない。夕映の言うとおりあさぎのため、二人の未来のためを思っていることならば、疑われるのはその努力を認められていないように彼も気を悪くするだろう。

いつだって遠い先を見据えている、あの真っ直ぐな視線を思い出す。これまでの彼の態度も合わせれば、そう考えていてくれそうなのではない。あさぎのように眼の前のことしか見えていないのではない。性の魔力に負けているわけでもない。初体験の時もあれだけやめておくと、男の彼の方があさぎを説得していたのだから。

その心根と強さは尊いものだ。尊敬、という言葉をあさは生まれて初めて噛み締める。それなのに、女としては何も考えずに求められてみたいものだとも思ってしまう。貪欲な自分にあさは手を焼く。

これほど大切にされているのに。どうして相手の形ある行動ばかりを求めるのか。この、眼に見えない深い思いやりの方がずっと大事なのではないか。

『――どうした』

「ん、なんでもないんだけど……」

自分の部屋で窓から大きな月を見ながら、あさは枕を抱き締めてぼそりぼそりと清矢郎と会話する。どうしようもなくなり、彼の声を聞きたいと夜遅くに電話を掛けた。

今は母親が風呂に入っている。父親は母親はどうるさくはない。既に眠っているかもしれない。たった十五分でいい。不安だった。低い声の響きに包まれたかった。

「迷惑かけちゃいけないって、わかってる。けど」

『うん』

「会いたいなって……」

『……うん』

相手の声がやや沈んだ気がして焦る。

「う、ううん、せいちゃん三年生だって、受験大変だって知ってるもん。だからわがまま言えないもん。先週も会ってもらったし。でも」

それから十日が経っている。

『……別にいいけど。今度の日曜とか、なら』

「え！　いいの!？」

――嗚呼、彼はなんて優しいのだろうか。

だがそれでも不安の雲は尽きない。輝く月に黒い雲がじわりじわりと覆い被さろうとする。

「でもやっぱり、私からばかり、誘ってる気がする」

『そうでもねえだろ』

「ううん。メールも私からばかりだし」

『悪い』

「違うの！ 返事くれるだけで嬉しいの」

一体自分でも何を言いたいのか。あさは焦る。謝らせたいわけでない。どうすればこの気持ちが晴れるのかと、今のあさは自分のことばかり考えていた。彼と一緒に幸せになる方法までは考えられなかった。

黒い金魚が窓から入ってきた。夜の闇に心まで支配される。醜い色に染まっていく。胸の奥では赤黒い炎がくすぶり、身を焦がす。

「でももし本当は会いたくない、とかめいわく、とかだったりしたら」

——そんなこと言っではいけない！ 嫌われる。そんな女は嫌われる！

夕映や女子同士での会話、メディアで得た知識からそれも分かっている。それなのに清矢郎相手だと衝動が抑えられない。完全に年上の恋人に対する依存、甘えだ。彼だって受験のストレスで苦しんでいるだろうに。

『だから、違うっつってんだろ』

「ごめんなさい」

——ほら案の定、怒られた。何度も何度も言わせるな、と思われている。これでまた嫌われたかもと不安が黒く深く、あさぎの心を蝕んでいく。

短い時間でも声を聞き元気になろうとしただけなのに、最近いつもこうして余計に苦い気持ちで電話を切ることが多い。大好き、愛してる、など砂糖菓子のような言葉を囁き合いたいのに。どうしてそれが出来ないのか。残るのは塩からい涙だけ。赤い金魚もあさが呆れているのか慰めてくれることが少なくなり、愚かな彼女を無

視して勝手に泳ぎ、にじり寄ってくる黒い金魚からも救ってくれず、それがあさぎには益々腹立たしい。

———なによ、なによ。私なんて、だいきらいだ！

最後にはその結論に達する。折角色とりどりの世界を見せてもらっても、これでは清矢郎と付き合う前と何も変わらない。彼の方はあさぎと同じか、もしかしたらそれ以上に耐えて頑張ってくれているかもしれないのに。あさぎが嫌な女になってしまっても、それでもいつも必ず電話をとって向かい合ってくれるのに。自分はどうして自分のことしか考えられないのか。

このままでは嫌われてしまう。どうすればよいのか。あさぎはせめて次に会う時は、精一杯笑おう、明るく振舞おう、我俣を言わないでおこうと心に決めるのだった。

あさぎが底なしの沼に嵌ってしまった理由は、ひとつだった。

それを解消する方法を知っているのに、達成されないからだ。一度味を知ってしまった甘い蜜が与えられない欲求不満が、これまではまた違った種類のどろどろとした感情を生み出している。

女の子だというのに手を握り合い、抱き合い、唇で触れ合うだけでは安心出来ないのか。まだ子供のくせに。どうしてこんなに自分は激しいのか。クラスでは自分の意見も言えないほど大人しいのに。ストレスの全てを最も近い存在となった清矢郎にぶつけているだけではないか。

一度だけ抱かれれば十分のはずだったのに。今はもう一度、抱かれない、痛くてもいいから、もう一度したいと、あさぎは切なる願いに胸を痛める。そうしたら安心できるかもしれないと、終わりのない望みと共に。

次の日曜日、この想いを告げずに明るく過ごしましたストレスを溜めてしまうのか。言ってすっきりし、乗り気でないかもしれない、または耐えているのかもしれない清矢郎を悩ませてしまうのか——。その夜からもあさぎは熱い身体を持て余し続け、赤と黒の金魚の群

れに揉まれて悶々とする。制御せねばならないのに抗えない、身体や心の叫びに耳を塞ぎながら転げ回るのであった。

第46話 黒い金魚が消える時

そしてようやく日曜日がやってきた。顔が見える、声が聞ける。それだけで十分なのだから、と自分に言い聞かせつつ、あさは電車に揺られていた。

誰が乗ってこようと素知らぬ顔で車内を泳いでいる赤と黒の金魚。清矢郎への欲求不満が強くなってから、黒い金魚はほぼ毎日現れるようになった。その狂気の証に飲み込まれないよう気を付けなくてはならないものの、そもそもこんな幻覚を見ている時点で自分は気がふれているのかもしれない、清矢郎もよく自分などと付き合ってくれるものだ――そう考えているうちに、あさは段々落ち込んできた。

それでも清矢郎に会いたい気持ちには変わらない。気合を入れて服も選んだ。紺色のワンピースに明るい色のカーディガン、そしてライトブラウンのブーツ。涼しくなったので髪を結うのは止め、ドライヤーを使いボリュームを出す。化粧は相変わらずほんのりと発色するリップクリームや、眉を整える程度しか手を付けられないのだが。

いつもよりふわんふわんと広がる髪を肩の上で弾ませながらあさが改札を出ると、今日も先に来ていた清矢郎の姿が眼に飛び込んだ。彼が後に来たことは、過去数度しか記憶にない。生真面目な性格もあるだろうが自分と会うことが苦痛でない証拠かな、と無口な彼の場合、そうしたことを判断基準とするしかない。たとえ触れてもらえなくとも。

「待たせてごめんね」

「いいよ」

「怒ってる?」

「だから何でって」

「ごめん」

あさぎは俯いた。早速やってしまった。この拭えない不安は何なのだろう。食事をしても、街をぶらついていても、話をしていても、赤い金魚の群れの中に黒い金魚が汚れのように混じっている。どうしてだろうか、息苦しくてたまらない。隣に清矢郎が居て、新鮮な空気を送ってくれているはずなのに。

「つうか、そっちこそ、つまんねえ？」

遂には清矢郎の方からそんなことを聞かれてしまった。あさぎがはっと見上げると彼はあさぎを見ておらず、遠くのビルや行き交う人々を眺めていた。あさぎは「そんなことない！」と叫び、首を横に振った。こちらを向いて欲しかったが、そうしてもらえないため尚更すれ違っていることが恐ろしくなる。

全くそんなことはないのだが、相手にそう言わせてしまったということは、清矢郎もそう思っているのではないだろうか。感情は鏡のように映るものだと夕映から教えてもらったことがある。

清矢郎があさぎを好きだと言ってくれたのは、あさぎが清矢郎に素直に好きだと伝えたからかもしれない。最近のあさぎは生理が近いことも手伝って、苛々した状態が続いている。清矢郎が嫌いだからではないのだが、常に疑心暗鬼になっている。

それでも明るく会話しようとし、彼もいつもどおり応じてくれていたが、所々であさぎの方から突っ掛かってしまう。学校が違うので共通理解ができなかったり、年齢が違うので興味を抱いている物事が異なることにも焦りを感じる。

夕映なら、琴音ならどうするだろうか。あさぎは相手と話題を合わせることや、それを広げるような会話術を持っていない。だから友人が少なく、異性からも好かれないのだろう。それはさておき、他人の意見を「そういう考え方もある」と聞くことは出来なくもない。だが恋人である清矢郎を相手にすると、他人以上にそう出来る部分と出来ない部分が生じるのだ。

清矢郎を誰よりも尊敬し、その言い分の全てになるほどと頷くこ

ともあるが、彼に自分の考えを押し付けようとしてしまうこともある。自分を認めて欲しい。自分の全てを肯定して欲しい。自分が釣り合わない人間だと思って欲しくない。だからつい、「本当にそう思ってるの?」、「私と居てもつまんないよね」という可愛くない言い方をしてしまうのだ。自分を守るために。「そうじゃないよ」と言っていて欲しくて。

だが人の心は思い通りにならない。特に清矢郎は正直で口下手な少年だ。「あさがきがそう言うなら、そうなんだろう」と、裏を含む言葉でもそのまま受け取ってしまう。ある意味、あさがきの言葉や考えを一切否定しないとも言えるが。

最低だと分かっているけど、あさがきの方は自分を卑下する言葉を打ち消してくれるものを清矢郎の口から引き出そうとしているのに。彼は自分の思うようにならず、益々どうしてよいか分からなくなる。そうした醜い心が増すに従って、黒い金魚の数も増殖する。

「いつも俺にそうやって聞くし。あさがきの方が、そうなんじゃないのかかって」

続けられた清矢郎の言葉に、あさがきは頭かぶりを振る。

——そうじゃない、そうじゃないの。

清矢郎なりに悩んでいたのかもしれない。最近のあさがきの態度には。

嗚呼どうして二人は違う人間なのだろうか。だから求め合うのだ。が、ちっとも上手くないのだ。それがもどかしくてたまらない。これほど好きなのだから、いっそ水か空気のように溶け合っただけになってしまえば楽になれると思うのだが、現実を生きる人間は幻影のようにはいかない。

あさがきが焦燥感から頭の奥まで沸騰してくると同時に、赤い金魚と黒い金魚はぶくぶくと音を立てて融合し始めた。周辺に居た全ての金魚が次々に体を寄せ集める。それは程なく一体化したが、美しい流線形をとらなかった。それぞれの金魚の頭の形を腹や背にいば

のように残したまま、ただ巨大なひとかたまりとなり重そうな身体を動かし始める。

その不気味な様相をあさが鳥肌を立てて清矢郎の横で見ていると、大きな身体の側面にびっしりと詰まった小さな魚たちの眼が一斉に彼女を睨んだ。

「いやあっ!!」

あさは金切り声を上げると清矢郎に縋りついた。駅近くの路上であつたため、通り過ぎる人々がじろじろと二人を見ている。

「大丈夫か」

これだけ恥ずかしいことをしているのに、清矢郎は決して逃げない。あさぎの肩を支えて人混みから庇うように立っている。

何処まで優しいのだ、彼は。何処まで責任感が強いのだ、彼は。子供の頃、傷つけてしまったあさぎをいつまでこうして守ってくれるつもりなのだろうか。

そうは言っても、あの伯父の息子だけはある。厳しい面も持ち合わせている清矢郎は、最初にあさぎが金魚の幻影に飲まれてパニックになった時と同様、

「周りの人、びっくりするだろ。少し端にどけ。歩けるようなら、休めるところまで行くぞ」

と冷静に指示してくる。あさが恐る恐る顔を上げると、金魚は襲い掛かることなく二人の横をのそりと泳ぎ出した。あさはそちらを見ないよう俯いたまま、よろよろと歩き出す。通行人に医者や警察を呼ばれても困ってしまうからだ。

「――また、金魚か？」

知り合いに会うのが恥ずかしいため手を繋ぐことはないが、清矢郎が心配そうに尋ねてくれ、あさはこくと頷いた。少年を掴んで悲鳴を上げた少女が、顔色を悪くして歩いている。周囲の眼には怪しい光景に映っているに違いない。これではいけないと、あさは無理矢理作った笑顔を上に向けた。

「ごめんね、心配かけて」

清矢郎は驚いたようにあさぎを見ていたが、笑うことなく首を横に振った。

「とりあえず休むか。それとも、帰る？」

「まだ……帰りたくない」

あさぎがそう要求すると、清矢郎はすぐに言うことを聞いてくれた。あさぎの足取りが徐々にしっかりしてきたため、二人は暗黙の了解で駅裏にある公園へと向かった。

「まだ、見えてんだ」

金魚のことだと分かったあさぎは、首を縦に振った。

「変な子でごめんね」

「いや。元々俺の所為だし」

彼はあさぎの方を見ておらず、むっつりした顔で前方を睨んでいる。やはり罪悪感から優しくしてくれるのだろう。そうでないと何度も言ってもらっているのに、「それってただの同情とか償いなの？ 私のこと本当に好きなの？」としつこく問いたくなってしまう。この相手を信じられない弱さが、後ろを泳いでいる醜い魚へと変化したのだろう。

あの時と同じだった。こんな醜悪な気持ちから脱したい。だったらもう素直にぶちまけてしまおう。あさぎは心に決めた。だがそれはしてはならないことでもある。清矢郎を巻き込んでしまう。清矢郎の所為にして、彼を犠牲にして、彼の気持ちを操作することであさぎが気持ちよくなり、満足を得る。――私のため。私が嬉しいから。私を喜ばせて。

なんという利己主義。金魚を見るようになったのは、突然性の対象に見られた恐怖で心が壊れたからだと思っていたが、それがどうしてこのような歪んだ自己主張に変化したのか、あさぎにも自分の心理が分からない。だがもう、限界だった。また大衆の前でこのように金魚の幻覚に襲われても困る。爆発してしまおう、そう決めた。「あのね……今叫んだのって、また変な金魚が見えたからなの」

日が傾き始めた公園の入り口で、あさが告白すると清矢郎はやっぱり、と言うように彼女を見た。小学生たちが数人、喋りながら自転車で飛び出してきたところとすれ違う。

「せいちゃんに初めてああされた日から、金魚が見えるようになってたって言ったでしょ？」

哀しむことを分かっている、一番毒の力が強く尖った針を清矢郎の心に突き刺す。強く固い、彼の心を揺さぶるために。二人の足は自然と、先月の文化祭の後に唇を重ねた公衆トイレへと近付いていく。

「だからせいちゃんのこと考えると見えるし……初めてした日みたいに、ああいうことすると見えるの」

初体験の時の話をするのは恥ずかしい。繋がる最中に金魚を見てあさが混乱に陥ったことは、清矢郎も相当ショックだったようだ。彼は沈痛な面持ちで頷いた。

「でも普段は赤い金魚が見えるんだけど、さっきまた黒かったり変な金魚が見えたってことは――」

ぶくぶく太った巨大な魚が、あさぎの後頭部から背中、果ては腰の下の膨らみにかけて、いやらしい口付けをするように幾度も幾度も啄ばんでくる。

「私、せいちゃんと……もう一回、したい、んだと思う」

その時、醜い金魚はぽあんと花火のように弾け飛び、花卉のような赤い小さな金魚と花影のような黒く小さな金魚に分かれ、二人の周りをはらはらと舞った。

「したいって……何をだよ」

清矢郎が眼を泳がせながら、掠れた声で聞き返す。そんな反応が愛しくもあり、もどかしくもある。どうして盛りのついた獣のようにがばつと襲い掛かってくれないのか。

「……っち」

小さな小さな声であさぎは「それ」を示す俗語を口にした。恥ず

かしさに俯いたが、きちんと言わなかったことで清矢郎にはぐらかされたくないと思い切って顔を上げた。彼は困ったようにあさぎを見ている。あさぎは清矢郎のTシャツを握った。

「だってあの日からしてなくて、寂しいんだもん！　せいちゃん、私のこと嫌いになっちゃったんじゃないか、私がいなくてもいいんじゃないかって」

「やらないからって好きじゃねえわけでもねーだろ。大事だから、しねえんだろうが！」

清矢郎はあさぎの言葉が予想外だったのか、それとも薄々感じていたのか、狼狽しながらも即答した。やはり彼も同じことで悩んでいたのか。

「分かってる！　せいちゃんの気持ちすごく嬉しい、でもしたい」

「大丈夫なのかよ。なんかあったら困るだろ」

「だから、ちよつとだけでいいの。もう一回、全部くつつきたいの！　不安でしようがないの。だからいっぱい『怒ってる？』って聞いちゃうの。少し触れられたら、きつとまた頑張れるし、せいちゃんのこともこれまでに信じるし、我慢するから――」

あさぎはやけくそのように清矢郎の胸に飛び込んだ。厚い胸板にしっかりと抱き付き、広い背中に手を伸ばす。苦い汗の匂いを胸いっぱい吸い込めば、眼の前が真っ赤な血の色に染まり、ちかちかと赤光が点滅する。眼が眩みそうだ。懐かしさも感じるこの匂いが大好きなのだ。

清矢郎はあさぎを抱き返してこなかった。あさぎは恐くてたまらなかった。だが彼はあさぎに尋ねた。

「……今日、危ない日じゃねえの？」

ほっしたあさぎは黙って頷いた。思わず頬が緩む。生理は順調な方だ。周期は月によって数日異なるが、ここ一週間ほど生理前の症状が見られるため、今月のそれも間もなく来るのだろう。基礎体温も測るようにしている。母親には逆に生理不順だから測っていると誤魔化してあるので、今のところ怪しまれていないはずだ。

「せいちゃん、持ってる？」

だがいくら気分が盛り上がったても、避妊具なしでの性交は出来ない。安いものではないが、持っていないのなら買ってきてと要求してしまおうか迷った。だが意外なことに、彼は仏頂面で頷いた。

——なんだ。せいちゃんも、私としたいと思ってくれてたんだ。

そう思うと安心した。そわそわと落ち着かなくなる。どうしてだか急に彼が信じられるようになり、更に愛しさが増す。

不思議なものであさぎのことを考えずにしたいしたいと襲い掛かってくるような相手であれば、身体だけが目的なのかと疑ってしまったかもしれない。反対に、慎重になっっている清矢郎をあさぎは自分なんかとはしたくないのではと疑っていたが、そうではなく彼もまた求めていたが、あさぎのことを思っ着我慢してくれていた。あさぎへの劣情と恋情——やはり両方を持っていて欲しいのだ。我儘でもそんな感情を彼から目一杯浴びたいと、あさぎは願っていた。「でも……いいのか。ここ以外に場所ねーぞ」

あさぎはもう一度、恥ずかしそうに頷いた。この際、人目につかなければ何処でもよかった。

「それにこんなところでしてたら、すぐに噂になるし」

それはやはり駄目だということだろうかと心配になったあさぎだが、清矢郎は唇を噛み締め、複雑な顔でこちらを見下ろしている。本当にあさぎのことを大切に思ってくれているようだ。二人は何度も後ろを確認しながら公衆トイレの中へと入っていった。

安心したい。痛くてもいいから。

安心を伴う、肉の裂ける痛みを、ください。

コンクリートの壁に染み付いた臭気に吸い込まれるように黒い金魚はいつしか消え、赤く可愛い金魚だけが排泄物の汚れを覆い隠すように狭い個室を染めていた。

不思議だった。肌のぬくもりを重ね合わせるだけで、あさぎの黒

い不安が緋色の幻影の中に溶けていく。酸っぱい泡がぱちぱちと弾ける。絡み合う二つの熱い吐息、視線。ワンピースの裾が捲れ、壁を擦る。密やかな囁き声が、秋の夕暮れに沈んでいく。

清矢郎は今日もあさぎの願いを叶えてくれた。倫理よりも何よりも、あさぎの気持ちを受け入れてくれた。彼の思いやりや自制心は尊いものだが、あさぎのこの醜い情欲を受け入れてくれる不安定な部分も彼の魅力に感じていた。

だが清矢郎のおかげで、あさぎも暴走するだけでなく自省と自戒をすることができる。子供が出来ても責任が取れない、性病等の病気も恐い。だから清矢郎のように、自分を愛してくれる人々と未来のことを考えてこれからは自制しようと、あさぎは甘い声を漏らしながらも心に決めるのであった。

だがまたしばらくすれば、再び黒い金魚の沼に溺れてしまうのだろうか――。あさぎは背後に伸びる影に捕まらないよう、この瞬間しか見られない清矢郎の熱い瞳を必死に見つめ、彼にしっかり縋り付いていた。

第47話 青竹迷風 肆（前編）

センター試験まで残り一ヶ月。弱々しい日差しはすぐに夕闇に飲まれ、凍てつく空気に身を縛られれば気分まで下降する。閉ざされた暗い世界へと、追い詰められているように。

大学受験を控えた清矢郎とその周辺の会話は、英単語に数式、解けなかった問題の理解出来ないままの回答、嘆きや強がり、クラスメイトや家族への恨み言、慰めにならない気遣い、時に気持ちを奮い立たせてくれる優しい言葉――この時期でしか聞けない様々な色合いの言葉が舞っている。そして授業も進路や受験科目によってこれまでの時間割と異なっているため、鬱屈したエネルギーと相まって異様な空気が三年生の教室棟には漂っている。

だがどのような状況でも、どのような言葉を投げ付けられても基本的には動じないと決めているのが、清矢郎という少年だ。中学生の時に苦い経験をし、子供の頃から父親にもきつく叱られていたため、ある程度の負の感情や言葉に対して耐えられる自信がついていた。無論、社会に出れば更に卑劣な悪意や利権の絡む問題と向かい合い、複雑な構造の中で生きることになるだろう。だがいい意味でも悪い意味でも、子供の頃に培った心の基盤はそう簡単に崩れるものではない。

だからこの時期、精神的な問題からも成績の明暗が別れてくるが、清矢郎の成績は全く変わらなかった。寧ろ部活を引退したことで、やや上向きになっている。更にはあさぎと付き合い始めたことで過去のわだかまりが解け、自分を受け入れてもらい、精神は以前より安定している。何より彼女との関係を守るために、この受験は失敗できないという覚悟がある。後は剣道の試合と同様、自分の実力の範疇なら確実に勝ちを取りにいけばよい。

清矢郎はそうして自分なりに心のバランスを保っていたが、スト

レスもあつてか下品な欲求の方まで堂々と言葉にする生徒もいる。元々男子が集まればそうした話題はよくしていたが、最近ではそんな余裕もない、または願掛けに断っているという者まで現れ始めた。だが逆にそうになると、受験だの何だので抑えつけられどうにかなりそうだと、周囲の眼も関係なくこれまでと変わらず口にしたがる者も現れるのであった。

そうなると同じタイプの誰かが一緒になってふざけたり、憐れんで真剣に話を聞いてやったり、適当に受け流したりとしているが、清矢郎の場合、そのような猥談を振られても言葉に窮してしまう。正直なところ、未経験の時ほど切羽詰ってはいないのだが、淫らに狂う自分やあさぎのことを人に想像させたくなないので体験談を語りたくもない。いつも黙って相手の話を聞いているだけだ。

だが「加納はいいよな」と、恋人が居ることを知っている友人が――言つてはならないが、寂しさから冷やかしたいのか――突っかかってくることがあるので、そういった時は対応に困る。第一、話すことで思いがけなくあさぎの家族の耳に入ったり、あさぎに嫌な噂が立ってしまうかもしれない。彼女に迷惑は掛けたくない。それを一番に考えて、だんまりを決め込んでいた。幸い清矢郎もそれほど友人は多くないが気のいい仲間たちに恵まれていたため、そうした態度をとってもあからさまに気を悪くされることはなかった。

いずれにせよ、清矢郎があさぎと付き合つて損になることは一切なかったため、外野の言い分は放っておき、最初に決意したとおり彼女の生活を乱したり自分の勉強時間を減らさない程度の、節度を保った付き合いを彼は受験期でも続けていた。

午後十時。かたかたと窓に打ち付ける風の音。清矢郎の部屋の窓枠は朝になれば凍りついているが、部屋の中はヒーターひとつで十分暖かい。夢中で走らせていたシャープペンシルの芯がぼきりと折れた。カチカチと新しいものを出す。しかしまた折れた。集中力が途切れてしまったところで、清矢郎は伸びをすると今日この数学の

参考書を開いていた時の会話を思い出した。

一緒に勉強していたうちの一人は、夏休み前の駅での一件を目撃しており、その後にもあさぎの姿を見たらしく、「結構可愛かった。一年生でもいい。誰か付き合いたい」とぶつぶつ言っていた。結構とは失礼なと思うが、あまり褒められても彼女をいやらしい眼で見られているような気がしてこれまた複雑な気分になるのだが。

「羨ましい」と何度も言われるのは、どうやら触れたい時に触れられると勘違いされているようだ。――そんなわけがない。確かに付き合う前の、四年前の事件への罪悪感、負い目、自己嫌悪、笑わなくなってしまったあさぎの表情、あの時触って以来遠ざかってしまったからこそ気になる女性の身体……などに惑わされていた時期を思えば、今の状況は幸せすぎるほどだ。

あさぎと何でも話し合えるようになった。自分の心の拠り所ができた。彼女と一緒に生きていきたいと思うことで、この先の明確な目標すら見えてくる。それらがあることで安定、堅実志向の清矢郎は、益々心が落ち着いてくる。苛々する度合いが昨年よりずっと減った。それでもあさぎを怒らせたり哀しませてしまった時は、これまではなかった種類の戸惑いや苛立ちが生まれ、時には竹刀を振りに行くものの。

それでも今の方がずっといい。このままで居たい。同級生からは一度経験したら嵌ってしまい止められなくなった、という話も聞いたことがあるが、清矢郎は成績に影響しないで済んでいる。だから両親に叱られることも減った。そもそも母親は清矢郎のことを信じてくれており、過度の期待もかけず、自由にさせてくれていた。父親も素行が良く第一志望の大学の合格ラインに達していれば、時折釘は刺すがこの年齢になった息子に怒鳴り散らすこともなくなった。管理職として仕事の方が気になっているのかもしれない。つまりあさぎと付き合ったことで、清矢郎にとってマイナスになったことはやはり何もないのだ。

一心不乱に勉強に打ち込んでいた清矢郎だが、一旦気が逸れると取り留めのない思考が次から次へと溢れ出す。小腹も減ってきたため、このまま休憩することにした。下に降りても父親はまた出張、母親も夜勤で居ない。自分で簡単な夜食を作って食べた。

腹も満たされたところで、二階の部屋に上がる。先ほどの参考書がページをそのままにして清矢郎を待っていた。早く数式の世界に戻らなければいけない。――だが、それにしても、と珍しく清矢郎の現実逃避は続く。

この参考書を一緒に開いていたあの友人、今日は「いきなり子供でもできちまって、就職したりしねえよな」などという下世話なことを心配してきた。受験直前に何を考えてるんだと思ったが、先月の……は大丈夫だったよな、と清矢郎もあさぎの生理が来たか来なかったかを思い起こしているうちに、記憶の底に封印していた前回彼女と肌を重ねた時のことまで思い出してしまった。

最初は、好きに触れてよいのかどうかさえ分からなかった。壊してしまいそうで。四年前の続きが出来る喜びもあったが、あの日のようにまたあさぎが笑わなくなったらどうしようと心配していた。女の子のことはよく分からない。だから慎重になり、遠慮していた。初体験の後は清矢郎とてあまりの快感にのめり込みそうになり、当時は勉強への影響に今より不安があったため、文化祭以降は若干意識してあさぎを避けていた。

それでもあさぎの方から「どうしてしてくれないの」と詰め寄られ、あさぎを氣遣っているのにどうしてこんなに怒るのかと、困惑すると同時に少しずつ分かってきた。あさぎも同じように考えていてくれるのだ。同じようにこんな自分の身体に触れたがってくれている。あんな下手くそな行為でもいいと言ってくれた。女の子にも性欲があるのだ。それが分かった時は、清矢郎もほっとした。

これまでに繋がったのは確か、三度。互いに気持ち昂ぶり、繋がる前までの行為なら――もう少し多い回数。どれも公衆トイレの

個室や、公園や川原などの外で。それもどうかと自分でも呆れてくる。衛生上も公共マナーとしてもよくない。それでも欲望には勝てなかった。これは我慢強いはずの清矢郎の、唯一の弱点。受験のために全ての性欲を断つことが彼にはできなかった。こんなことをしてはいけないと分かっていたが、我慢で余計にストレスが溜まると判断した。

だが最近はやさしい寒さや模試などの忙しさも手伝い、そうした機会も減った。しかし繋がれはしなくとも、分厚い上着の下にこっそり触れる機会があったので、あさぎも安心してくれているのか。秋の頃のように不機嫌になることはなかった。だが今月に入ってから「寂しいな」と言っ、白い息を吐きながら手を繋いできたことがあった。小さな、温かい手だった。

いくら志望校が合格範囲にあるところで、とても大事な一次試験の目前。本番で何が起るかも分からない。だからそんなことは駄目だ———と思いつながら、一度思い出したあさぎの存在は参考書の力よりも強力な色香で、清矢郎の心を撫でるように誘惑してくる。

最近周囲では「灰色のクリスマスだー！」などとも、うるさい。十二月半ばの街やメディアは、受験生にはお構いなくクリスマス商戦一色。清矢郎は今年も賑やかだな、くらいにしか思っていなかったが、今の彼らは自分たちの苦悩に関係なく、イベントを楽しむ世間のことすら腹立たしく思うのだろう。

しかし清矢郎とあさぎにしてみれば、初めてのクリスマス。朴訥な彼でもこの行事に乗じた方が、相手に喜ばれることは理解している。「彼女」のあさぎに何か贈った方がいいのかと、清矢郎がまたしてもあさぎのことを考え始めた瞬間、ふっと胸がざわめき出した。外は木枯らし。粉雪が舞っている。それなのに、どうしてか。心の中は真夏のよう。竹の葉が窮屈そうに重なり合う音と、むわっとした草いきれで息苦しいほどだ。ざわざわ、ざわざわと胸を逸らせ、身体の方はぱちぱちと勢いよく燃え上がり始める。——しまった、と思うがもう遅い。

こんな形容をするようになったのも、金魚の見えるあさぎの影響だろうか。あさぎを抱きたいとひとたび思えば、自分でも制御できない欲望が頭を擡^{もた}げてきてしまう。

——本当は、俺の方が。

……自分が狂っていることは、四年前から知っていた。清矢郎は再び一階に下り、誰も見ていないのに妙にどぎまぎしながらカレンダーを確かめた。

——いつなら、大丈夫だ。

確か先月末は大丈夫な日だと、彼女は言っていた。十二月中の冬休みに入ってからで、昼間、家族が確実に家に居ない日を清矢郎は探した。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

クリスマス直前は冬至にあたり、夕方でも街は闇に包まれている。クリスマスイブは冬休みに入ってからの上えに、その前日は清矢郎の通う予備校で模試がある。そのため二日前の終業する日に、清矢郎とあさぎは学校帰りの束の間の時間を過ごしていた。最後は人目につかないよう、駅前のビルと駐輪場との間で闇に紛れての立ち話。ここなら冷たい風もいくらかしのげる。

あさぎは清矢郎への少し早いクリスマスプレゼントに、剣道の防具のチャームを集めて手作りしたストラップを渡してきた。それからもう持っているかとも言いながら、同じくお手製の防具袋を模した小さな巾着袋に竹刀のチャームが添えられ、そこに合格祈願のお守りを入れたものも贈った。

「不器用でこんなものしか出来なくてごめんね。せいちゃん、何があるのかよく分からなかったし、バイトするようになったらもっともっとと高価なものあげるからね。それに無事合格しますようにって、いっぱい願掛けもしたからっ」

初めてのプレゼント。このような安物でよいのかとあさぎは焦る

が、清矢郎は「別に何でもいいよ」と微かに笑って受け取る。

「何でもいいのか？」

喜びを示したつもりが不満げな顔をされた。女の子というものは本当によく分からない。だから「あさぎのくれるものなら」と恥ずかしいが素直な思いを付け足してみると、今度はえへへと赤い頬を綻ばせて笑う。どうやら合格点だったらしい。

そして気に入られなくて元々と、清矢郎もまたあさぎへとぶつきら棒に包みを差し出した。

「え！？ いいの？」

期待していなかったのか意外そうに眼を瞬かせるあさぎに、清矢郎はむすりと頷いた。

「こっちこそ安物だけど」

「ううん！ すっごく嬉しい」

清矢郎からの気持ちなら、何でも嬉しい。それはあさぎも一緒だと言うように、彼女は満面の笑みを浮かべた。袋の感触を確かめながら「開けていい？」と聞いてくるので清矢郎が頷くと、彼女は紙袋から金魚柄の和手拭いを取り出した。他にうさぎ柄の手拭いも入っている。

思いもよらない和風の「クリスマス」プレゼントに、あさぎはきよんとした後にくすぐったそうに笑い出した。少し可笑しくとも剣道を連想させる和手拭いが清矢郎らしいと思ったことと、あさぎが金魚を大切にしていることを理解してくれていることが彼女にとっては感激だった。

「せいちゃん、ありがとう！」

――よかった。

あさぎの笑顔に清矢郎は心から安堵した。読みは無事、当たったようだ。あさぎと言えば思い付くものは金魚だった。だがそれは四年前につけた心の傷の象徴でもあり、自分の所為でそれが見えるようになってしまったことを彼女は悩んでいるに決まっている。だか

ら逆にショックを受けさせるのではないかと憂慮していた。だがあさは金魚のグッズをいくつも所持しているなど、金魚自体は好きらしい。幻覚も別に気にならない、今は金魚掬いもいい思い出と言っている。単純なところもある清矢郎は乙女心の裏は読まずに、それならば喜んでくれるかもしれないと考えたのだった。

年齢的に高価なものを購入するのは彼も抵抗があった。安いアクセサリーを買うことも考えたが、それこそ何を選べばよいかわからないし、誰にも聞きたくない。女の子用の雑貨売り場などに恥ずかしくて足すら踏み入れられず、通りかかった生活用品売り場の一角で運よくその柄の手拭いを見付けた。

こんな柄もあるのかと、彼にとっては新鮮な発見だった。手拭いは剣道で馴染み深く、他の雑貨よりは抵抗が少なかった。だがクリスマスが近いことと、清矢郎と柄の可愛らしさがそぐわなかったためか、プレゼント用にラッピングしようかと丁寧に尋ねてくる女性店員。かえって羞恥心をくすぐられた。清矢郎なりに焦ったり照れたり剣道の試合以上に緊張する思いの中、どうにか包装してもらったそれをあさに渡したのであった。

「ごめん。でも明日模試だから、もう帰るけど」

「うん。うちも日が短いから危ないって、最近余計心配されてるし」それこそまだ高校生であり、受験生なのだ。クリスマスイブに会おうという約束はしなかった。だが清矢郎は、そこでさも今思い出したかのように、あさに尋ねた。

「東高も明日から冬休みだろ」

「うん」

「二十六日って、空いてる？」

「う、うん！ 空いてるよ？」

「うち、親居ねえんだけど……来ねえ」

「え!？」

受験生だから冬休み中、いやその先もしばらく会えないだろうと諦めていたあさは、弾かれたように顔を上げると小さな眼と口を

丸く開けて清矢郎を見た。

その言葉の意味を考える彼女の胸がどきんどきんと大きく高鳴っている。あさぎの視界の中では建物の影の中で、隣に見える華やかなイルミネーションには似合わない、だがそれよりもずっと妖艶な光を抱く緋色の金魚たちが、ぼうつと清矢郎の周りに浮かんで見えていた。

第48話 青竹迷風 肆（後編）

「緊張する……」

弱々しい日が申し訳程度に照らす、十二月末の寒い日。玄関で清矢郎の顔を見るなり、あさは困ったようにそう言った。清矢郎も緊張していないわけではないが、自分の家という安心感と、それ以上これからことが頭を占めており、どう進めようかとしか考えていなかった。初めてでもないのに「家族に黙って、こっそり家で会う」というシチュエーションが、互いの気持ちを焦らせているのだろうか。

クリスマスイブはメールや電話をするだけで我慢したが、模試が終わり、いつもと同じように問題が解けたからという理由で、センター試験の直前だというのに恋人と会っている。こんな時期に何をしているのかと清矢郎は己の不心得に自分でも呆れてくる。

頑張っている友人にも厳しい両親にも言えないことをしていると分かってはいるが、自分が止められなかった。受験くらいでストレスを溜めたくないにあさが格好つけたくせに、ここで鬱屈したものを吐き出さないと次に踏み出せないような気がするほど、順調な成績でも精神的には追い詰められていたのだった。

聞いた話のように願掛けのため性欲を断つ、ということが結局清矢郎にはできなかった。それだけ心が弱いのだと彼自身、自覚している。第一、あの程度の出来事で中学生の時に従妹の、小学生のあさがに手を出した時点で己の弱さと、性欲への依存度を認めざるを得ない。真面目を気取っているが、中身はこんなものかと自分に絶望し、耳障りな竹のざわめきや身体を切り付ける葉から逃れようと竹刀を振るうが、最後にはそれも竹に還って清矢郎のことを締め付けてくる。

剣道と言えば高校受験でも今回の受験でも、部活を引退した後、時折道場に顔を出したり素振りをしたりと、完全に剣道を断つこと

はしなかった。成績には影響しなかったので両親にも止められなかったが、「大好きなものを遮断できない。それに頼ることで自分を保つ」という心持ちは元々持っていたようだ。

それでもあさぎに対してだけは、誠実でありたい。剣道とあさぎ以外のものに依存する気はなかった。だからこそ余計に、彼女に助けを求めて鬱積の全てをぶつけてしまう。こんな自分は正しいのかどうか清矢郎にも分からないが、あさぎの方はそれでいい、と言ってくれることがせめてもの救いだった。

——と言いつきを並べたところで、受験本番前の重圧から逃れるようにあさぎを抱きたくなったことは否めない。こんなことをしている場合ではないのに。だがそれにより集中力を削がれる恐怖よりも、一時の安らぎを求める方が彼の中で優先された。

清矢郎の葛藤が砕かれたのは、これで最後だ、と今日を境に受験が終わるまであさぎに会わない覚悟を決めていたからだだった。自分勝手であさぎに甘えているにすぎないので、自己嫌悪の後味は苦く残るが。

清矢郎の部屋に入ったあさぎはきよろきよろと辺りを見回し、部屋の様相や本棚などを眺めている。時には興味を持ったものに手を伸ばし、感激したり驚いたりとしている。外で会っていても、はしやぐか緊張して固くなるかどちらかのあさぎは、今日も忙しない小動物を清矢郎に思い出させる。

「せいちゃんの部屋って、こういう風だったんだ。入ったことあんまりないし、それも小さい時だったから、初めて見るみたい」

少しは二人きりの空気に慣れたのか、あさぎが笑顔を見せた。確かにあさぎの家族が清矢郎の家に来たこともあったが、幼い頃は皆のいる居間などで遊んでおり、狭い清矢郎の部屋に入ることはほとんどなかった。あの事件の後にも二度ほど家族で訪ねて来たが、清矢郎は勉強が忙しいと部屋に籠っていた。

だがあの件からあさぎのことを意識していた清矢郎は、空々しく降りてきては、叔父と叔母に挨拶する際、気付かれないように彼女のことも視界の端に捉えていた。そして昔と違い表情を固くし、髪の毛の伸びてきたあさぎに何とも言えない感情を抱き、その晩は必ずあの夏の日のことを思い出し、虚しいことをしたものだ。

「なんか、不思議な感じ」

あさぎがクッションを抱えて顔を埋める。石鹼に似た香りが漂っている。不思議なところか、清矢郎としては心躍る気持ちだった。

苛立ちも苦悶も昔から一人で抱えていたこの空間に、今は一番大事な子が座っている。一度は閉ざした心を開いてくれた。記憶の中の柔らかな幻影でなく、本物のあさぎが触れられる距離に居るのだ。望んでいた光景に、清矢郎の心は簡単に満ち足りる。これで受験が終わっていたり、あさぎが高校生でなかったりすれば、もっと浮かれていられるのだろうが、それはまだ互いに子供の部類のため仕方がない。

そんなことを思っているが清矢郎の頬が緩むことはなく、寧ろ感慨深くなればなるほど複雑な、難しい顔になってしまう。それがあさぎを心配させているようで、彼女はクッションに縋りつくと隣に座った清矢郎を心配そうに見上げた。

「勉強の邪魔して、ごめんね」

「そんなことない。今日誘ったの、俺だし。息抜きしたかったから」
「うん。珍しいから、びっくりした。でも嬉しかったよ！」

あさぎはクッションから顔を上げると、膝の上に肘を置き宙を眺めている清矢郎の表情を覗こうとする。

「でも、センター直前なのに大丈夫？」

「っってもう来てんだから、色々言うな」

「ごめん」

「だから、あさぎが悪いわけじゃねえし」

話をしているだけでも十分だ。あさぎと居ると落ち着く。昔からあさぎに会うことは楽しみだったが、四年前の罪に決着をつけると

同時に付き合えることになってからは、一層その気持ちが強くなった。

だけでもっと傍に近付ければもっと幸せになれる。腕一本分の距離すらもどかしい。だが「それ」が今日の目的だとは、言いたくなかった。あさが望まないことはしたくない。傍に居てくれればそれでいい。それでも誰も居ない日を選んだこと、今自分の思っていることを足し合わせれば、自然とその答えが浮かび上がってくる。

男の欲望など単純なものだ。だけど、決してそればかり考えているわけではない。だからと言って今日何もせずに彼女を帰せば、内心ではがっかりしてしまうだろう。最低だと思うが、倫理観や気持ちとは別のところにある欲求がコントロール出来ないでいる。この矛先をあさぎ以外に向けたと思ったことなどないが、受験前の今、それに身を任せることが合格点かと問われれば、やはり人に話せない時点で不合格だろう。

思うだけなら自由だ。だがその果実に手を伸ばすのは、間違っているのかいないのか。回数を制限することと、自分の受験と数年後のあさぎの受験に影響させないことだけは常に気にしているものの。

ストレス解消と言い訳すれば許されるのか。いつそ受験も落ちて、全てが滅茶苦茶になってしまえばいい、と竹藪の奥で蠢いている何者かが唆す。悪魔の囁きに耳を貸すつもりはないが、最後に「それを見たことか」と笑われる可能性は零ではない。

自分の心の弱さを、またあさぎで埋めようとしているだけなのだから。これでは四年前と何も変わらない。もうそんなことはしないと決意し、清矢郎もあさぎを避けようとしたのだが、彼女と恋人関係になってしまったことでかえって甘美な誘惑にのめり込んでしまった。それでも彼女に誠実な態度を示せば、罪の償いになると思っていた。

では、この行動はあさぎを大切にしていると言えるのか。清矢郎が分からなくなってしまう黙り込むと、とん、と肩に柔らかな感触

が届いた。あさが凭れてきたのだ。ちらりと見下ろすと、彼女は少しかり照れたように微笑んでいた。今の状況を喜んでいるのは、触れたいと言ってくれた彼女も同じだろうか、と思わず期待してしまう。

「伯父さんと伯母さん、まだ帰ってこないの？」

「今日はどっちも夜遅い」

肩に頬を寄せて尋ねた言葉はあさぎからの意思の表れかと、清矢郎は都合よく考えてしまった。

「……でも、せいちゃんには受験落ちて欲しくないし」

「それは俺の問題だから、どうにかする」

「大丈夫？」

「ああ」

清矢郎は身体を起こし、あさぎの眼を見ると約束した。この狂気から脱することが出来れば後は心を定め、集中して完遂するだけのこと。剣道の昇級、昇段審査と同じだ。

ただどこで清矢郎が受験に失敗すれば、今日の所為だと優しい彼女は自分を責めるだろう。自分が悪いのにそんな思いはさせたくない。彼はあさぎの両肩を掴むと、その表情を確認しながら語り掛けた。

「ごめん。勝手に悪いけど、これから受験終わるまで、会えねえけど、いいか」

あさぎの眼が見開かれた。黒い海が揺れる。――泣く。そう思った。昔から、この表情はそうなる時のシグナルだ。

しかし彼女は泣かなかった。小さな眼を精一杯見開き、結んだ唇を震わせ、少し鼻を吸った後、無理矢理作ったと分かる笑顔で頷いた。

「うん、私もそのつもりだった。受験、頑張った」

あさぎは優しすぎる。勝手な奴だと自分でも分かっていた。もう大学生になるというのに、完全に年下の彼女に甘えている。自分の好きな時に会いたい、会いたくないと言っているだけなのに。

「ごめん」

「謝らないで。当然のことだもん。今日も……もう帰った方がいい？」

「何で？」

「なんでって、勉強の」

「嫌だ！ 分かってる。そんな時じゃねえって。でも俺が、我俣言ってる。自分のストレス溜まったからって、センター直前なのにお前呼んで、それでその後は会えねえなんて勝手なこと言ってるって」

「でも、それでも今日呼んでくれて、私、嬉しかったよ」
怒ることもしないあさぎを、清矢郎は言葉を失って見下ろす。

「だって、せいちゃんが今一番辛い時で、そういう時に私に会いた
いって思ってくれたんだから。でもそれで失敗させちゃったら私の
所為だし、そういうことしたいただけで呼ばれたっていうなら哀しい
けど……」

「そうじゃねえ！ したいだけとかじゃねえ。でも、しちまったら、
結果的にそういうことになっちまう気がしてる」

「でもしてくれないのも、私に魅力ないのかなって寂しい」

「……って、どっちだよ。今お前も、そういう理由だけで呼ばれた
ような気がするって」

「だからどっちかに偏るのが、寂しいの！ せいちゃんが心配で不
安で、私なんかのこと呼んだって言うてくれるなら、後はどうなっ
てもそれでいいのっ」

そう言いながらあさぎは清矢郎のパーカーの胸元を握った。

「だから、そうだったってるだろ！」

初体験の時と同様、何やら言い合いのようになってしまうのは兄
妹のように育ってきた仲の良さゆえか。清矢郎は再びあさぎの強さ
に背中を押されると、彼女の身体をベッドの方へと放り投げるよう
に持ち上げ、仰向けに倒した。

「情けねえけど、甘えてる。あさぎに。今日なんて特にそうだ。自

分は大丈夫だって思ってた。でも受験に集中してえけど、何か落ちつかねえ。あさが手が軽にできる相手だからとかいう理由じゃ、絶対にならない。だからあさが嫌なら何もしねえし、お前を安心させてえなら止めとくべきだって分かってる。俺だって分かんねえんだよ。でも今日会えたから、さっき言ったみてえに受験終わるまでは俺も我慢して、そっちに集中する。合格したらまた会いたい」

格好つけるのに失敗した。意気地のない姿を晒しているのは恥ずかしかったが、清矢郎はあさがに現在行き詰っている気持ちの全てを話していた。

意地になることも考えたが、昔のように何も言わずに彼女を抱いて傷つけることも、何もせずに彼女を帰すこともしたくないと思っただからだ。だが気持ちを解放すると傷つくリスクがあると同時に、ともすると思いがけない幸せが訪れるのだ。初めて世界の向こうに手を伸ばした、あの日のように。

「……いいよ、甘えて。私ばかりせいちゃんに甘えてるみたいだもん。年下だからって頼りにされないの、やだもん。私とこの先もずっと付き合ってくれるなら、いっぱい甘えていいよ。甘えるって言ってもきつとどうせ、せいちゃんは一人で抱えて解決しちゃおうとするだろうけど、もつと話して。今、我慢しなきゃいけないのは分かっている。本当は今日も止めなきゃいけないのかもしれないけど……でも今日からは、私も我慢する。寂しいけど受験頑張ってる。三月に会えるの、待ってる。それに四年間、口も聞かなかったんだし、それまでは半年に一度しか会ってなかったんだから、今までと一緒にって思えば、大丈夫」

四年前のことだって、「謝るな」と言ったこの少女は――。

無性に、抱き締めたくなった。

一生、守ってやろうと思った。

一生、傍に居たいと思った。

もっと自分が成長しよう。もっと地に足を付けた大人になって、あさぎからだただ快楽を貪ったり、その細い身体を蹂躪するだけでなく、心から安心して笑わせてやれるように。

この行為の先に続く、今以上に広がる、大勢への喜びを与えるためにはどうすればいいか。現実になんか出来るだけの力をつけられるように――。

それから二人が初めて布団の上でした行為には、思った以上に愉しみを覚えてしまった。服を脱いだ解放感と、姿勢がこれまでよりずっと楽であることから、互いに今までにないことを試してみたり、深く感じる事ができた。それは二人にとって驚きと発見の連続だった。これからしばらく会えないという気持ちの盛り上がりも手伝って、この場所ですることは病みつきになりそうだと、口には出さなかったが互いに思っていた。

あさぎの方も終わった後に、裸のまま照れ臭そうに言った。これまで痛いと思うばかりであったことも、体勢や場所が違ったり、誰にも見られないと思うだけで、いつもよりそう感じなかった、と。彼女のいじらしさに清矢郎は再び押し倒したくなってしまったが、抱き付くだけで我慢しておいた。

今日のことは三月まで我慢出来なかった自分の負けであることは、確かだ。ならば三月までは「あさぎ断ち」をして、未来を掴み取りたい。視線だけでも前を向き、竹藪の奥から己を誘う禍々しい闇に對し、お前には負けるものかと突っぱねよう。生まれたままの姿で絡み合っている時点で、とうに闇の中に飲まれているのだろうか、それでももがき続ける。

あさぎを守りたい、大切にしたいと思う強い心と、快楽に勝てない弱さだが、闘ぎ合い、闘う。これはきっと大人になって安定した関係を得るまで続くのだろう。今は欲望になど溺れていないで、子供を作る危険など冒さないで、たくさん経験をして心の豊かな大人になりなさいと言ってくれる、周囲の人々を心配させないような

年齢になるまでは。ただし大人になればなつたで、第三者を巻き込んだもつと難しい問題に直面するのだろうか。

そう思うと何歳になつても思い悩むのは、清矢郎の生真面目な性格ゆえかもしれない。彼はきつとこの先も、竹藪の中で迷うことだろう。青々とした竹は吹き付ける風の中で傷つけ合いながら揺れ続け、伸び続けていく。

それでも赤い金魚が傍に居てくれさえすれば、少しはその心も癒され、立ち向かう勇氣も湧いてくる。清矢郎はそんな気がしていた。

第49話 水槽の中に置き去り

そしてまた春がやってきた。旅立ちの春。何かが起こりそうだと誰もが一度は思う希望の春。桜咲く、の言葉どおりあさぎたちにも小さな幸せが訪れた。清矢郎から第一志望の大学に合格したと電話があった時は、あさぎまで泣いて喜んでしまった。大学受験の結果を、まるで自分のもののように待ったことなどなかった。

また会えるようになったという安堵もあったが、それだけではない。好きな人が頑張っていた。ストレスの溜まった胸の内も打ち明けてくれた。清矢郎がひとつの壁を乗り越えられたことが、あさぎも嬉しかったのだ。

それだけではない。この受験に失敗していれば、きっとあの日身体を重ねたからだ、自分が受験生の彼に我俣を言って恋愛にうつつを抜かせ、勉強の邪魔をしていたからだと自分を責めただろう。結局、自分のための喜びだった。

更にはこの受験が成功したことで、両親の説得にまた一步近付けた気がする。本当に将来結婚でもするならば、その前に交際していることが明るみになれば、従兄妹同士結婚はできても両親は戸惑うことだろう。それでも自分たちが信じてもらえるような行動をしていれば、あっさり認めてもらえるかもしれない。清矢郎が、あさぎが行けるわけもないレベルの大学に合格したことは意味が大きく、後日伯父と電話をして知った母親もこれまで以上に彼を褒め、あさぎにも頑張りなさいと発破を掛けてきた。――そうなのだ。これからあさぎの受験が待っている。今度は自分が頑張らなければいけない。

ともかく、また少し未来へと近付いた二人。あさぎのテスト終了後すぐに春休みが訪れ、早速清矢郎と会うことになった。

最後に会った日から三ヶ月近く経った。ようやく顔が見られる。

あの冬の日の情交を思い出すと、あさぎも照れ臭くなってしまうが、一体この冬、何度思い返していたことか。何度も何度も記憶を最初から再生しては、胸と身体を熱くさせていた。初めてのバレンタインデーもチョコレートを渡したいのをぐっと堪え、受験が全て終わるまで会わないという決意を互いに守った。その禁欲の分、余計に踊る金魚の色も濃く。

残像に想いを馳せる。痩せた身体を這った、清矢郎の指や舌。柔らかな布団の上で心置きなく悶えたこと。清矢郎の肩越しに見ていた、金魚たちの泳ぐ彼の部屋の天井。うつ伏せになった時の布団の匂い。シーツに突っ伏していたら、髪の毛を引っ張るように顔を持ち上げられたこと。

何よりも、自分の身体の変化。女性は精神的なものが感じ方に作用すると――男性の方はよく分からないが、あさぎは十六歳にして知ってしまった。環境が違うだけで、あれだけ違うものかと。

また部屋で、布団の上で、あのように転げ回って感じてみたい。もっと自分の身体を知り、清矢郎にもできれば知ってもらって、楽しい性生活を送りたい――などこの年齢で考えてしまう自分に、あさぎは恥ずかしくなる。母親に知られたら嘆かれるどころか、発狂されてしまいそうだ。だから気付かれないよう顔にも態度にも出さず空々しく振舞う自分に、居たたまれなさを乗り越えて恐怖すら感じる。

それでも早く清矢郎に会いたい。特に成績が落ちることもなく進級が決まり、母親にもさほどうるさく言われなかった。あさぎはその日一日、清矢郎との逢瀬を楽しんだ。

最初は前回の自分や清矢郎の痴態が脳裏に過ぎり、少し気まずかったがすぐにこの状況が楽しくなってきた。途中、公共の場所であるのに人目を忍んでまた触れ合ってしまった。あの日ほどではないが、やっと会えた安心感から十分悦楽に浸れた。

.....

それから一ヶ月。清矢郎は大学に通うようになり、あさぎは二年生に進級した。大学生は授業やアルバイト、サークル活動で忙しいようだ。だが高校時代とは違い、平日もあさぎに合わせて時間の融通をきかせられるとのもので、それについてはほっとした。ただ剣道のサークルに入ったらしく、全国大会などに出るようなレベルではない同好会だが、休みの日も練習や交流戦があるという話を聞けばやはりこれまでと変わらないようだ。それこそあさぎにも受験勉強があるし、模試の予定も入っている。高校生らしく節度を守るべきで、遊んでばかりもいけない。

四月に会った時にそんな話をしたが、受験という大きなハードルを越え、大学で日本中からやってきた人々と話をしているからか、あさぎには清矢郎が一回り大きくなったように感じていた。「外」の空気を吸い、私服が当たり前になったことも手伝って、まるで大人の男のように見えてくる。

学生服の彼にはもう会えないと思うと、「卒業おめでとう」とメールを送った卒業式の日のように切なくなるが、これはこれでまた素敵だった。そう自覚し、あさぎの胸がとくとくと高鳴り出す。幼い頃から知っているのに、この従兄の成長ぶりには何度でも惚れ直させられてしまう。

だがそうになると、今度は新しい心配が生まれる。帰宅後、あさぎは鏡に映る自分と睨めっこをする。いくら大人びた格好をしようとしても似合わず、滑稽になるばかり。自分に似合う格好をするとひどく子供っぽい。

清矢郎は成人していると言ってもおかしくないような顔立ちだ。様々なことが自由になる大学では価値観も多様になり、落ち着いて真面目な清矢郎のことを好ましく思う大人の女性がきつと現れるだろう。高校時代までは女子にあまり話し掛けられなかったという清矢郎だが、大人になればなるほど彼のような男は認められるようになるのではないか。清矢郎を狙う、彼にもっと似合う女性がいるこ

とを思うとあさぎの胸がもやもやとしてくる。昨年も三年生の女子に妬いていたが、大学は未知の世界である分、まだ見ぬライバルが物恐ろしく思える。

そんな考えに陥ると、楽しそうに泳いでいた金魚の住む水が急激に濁り出す。黒い金魚も背後からわさわさと増えてくる。

「大学とかバイト先で、浮気しないでね」

新学期になってから二度目に会った時のこと。あさぎが真面目な顔でそう言うと、清矢郎は驚いたように彼女を見た後、心底嫌そうに顔を顰めた。

「それはねえ。つうか、俺ってそう見えてんのかよ」

怒らせてしまった、と思ったあさぎは謝ろうかとも思ったが、「だって私、まだ高校生だし、大学って綺麗な女の人いっぱいいるし、清矢郎もかっこよくなっちゃったんだもん」

自分も「大人びた」風を装いたいたため、わざと彼を呼び捨てにすると、ふてくされながらも正直に話してみた。

「んなことねえけど」

彼には怒った顔のままそう言われたが、頭を優しく小突かれたので、疑ってしまった罪はこれで許されたと思いたい。

実直な清矢郎にしてみれば、信じられていない方が不愉快だろうということは理解できる。あさぎだって逆の立場になれば怒るだろう。こんなことを聞いてばかりいては、それこそ愛想を尽かされてしまうかもしれない。年上で、あさぎよりも先に社会に出た彼に、惚れ続けていてもらうためには何をすればいいんだろう。あさぎはそんなことを悩み始めていた。

.....

「むずかしいねえ」

久しぶりに学校帰りに夕映とファーストフード店に寄り、その件

について相談すると彼女も鼻の上に皺を寄せた。夕映とは同じ文系を専攻したが、残念ながらクラスが別れてしまったので、久しぶりにこんな話をする。メールでのやりとりは続けており、クラスが変わっても未だに誘ってくれる友人の存在はありがたい。

夕映は相変わらず、あさぎとは口も聞かないような派手な女子や男子が周りにいて、新しいクラスでもすぐに友達が出来たようなのに。結局夕映の場合、こうした人との繋がりを大切にし、色々なタイプの人間と付き合うことを恐れず、面倒臭がらないような子だから、皆に好かれるのかもしれない。

だがあさぎとして自分の世界に籠るばかりでもなく、友達と話をし何かを得たいと思っている。大概はそれこそ夕映の時のように、同じように友人と別れて一人でいる女子に声を掛けてもらうパターンだが。

二年生の新しいクラスでもそういった女子がいて、まだよそよそしさはあるものの話も合うので、彼女とも仲良くなれそうだとあさぎは予感していた。夕映とはまた違い男性的な一面を持ち、剣道と日本舞踊を個人的に習っているという独特の雰囲気のある女子だ。そのためその彼女は部活には入っておらず、あさぎの周囲では部活の繋がりがそのまま友人関係に繋がっていることが多いため、半分帰宅部のようなあさぎと一緒にいるようになったわけだ。

同様に文芸部という共通点のあるあさぎと夕映は、一年生の頃からの習慣のように、今でも時々一緒に放課後の時間を過ごしていた。

ファーストフード店のガラス窓に映る自分たちの姿に、あさぎはふと眼を遣る。対照的な白い鳥と赤い金魚。空を自由に羽ばたく美しい夕映と、清矢郎という小さな水槽の中であっぴゅと溺れているあさぎ。それなのに女性としての悩みは、ある時を境に共有するようになった。

言ってしまうえば、二人とも性行為が好きなのだ。外見など関係なく嗜好の問題だ。それに対する価値観が合うから仲良くしていられ

るのだろうか。子供なのに、と周囲の大人に断固反対されることをしていても、好きな人に触れたいと願う情熱的な女子二人。それゆえに悩み、誰にも話せないことをこうして密談する。

「そうねえ、バイト先の社員さんが言うには、男は若い子が好きらしいよ。『高校生』ってだけでいいんだって。肌もやっぱり違うつて。犯罪になっちゃうから余計に憧れがとかなんとか。でもあさぎのところは二つしか違わないし、あの彼はそんなこと考えてなさそうだよねえ。あ、だから若いって言っても、武器になるわけでもないのか」

難しい顔をしながらも大きな口でハンバーガーを頬張る夕映の言葉に、あさぎは複雑な気持ちになる。

中学生の時に初経験を済ませたという夕映は、性に対しあさぎとは更に異なる価値観、考え方を持っている。まだ十六歳なのにこれだけ「社会」に接し、危険な目に遭わないかとあさぎの方が心配になるほどだが、そこは彼女や彼女の家族を信じて、時々ちくりと釘を刺すだけにとどめている。あさぎのそういった距離感が、夕映にとっては話しやすいのかもしれないが。

それにしても言われたとおり清矢郎とあさぎとの関係では、やはりあさぎが若いことは有利にはならないらしい。解決の糸口が見付からず、あさぎは深いため息をついた。男性は若い子が好き、というのはあさぎのような容姿に自信のない女子でも、図書館などで見知らぬ青年に声を掛けられて驚き、その場から逃げ出したことがある。もしかしたら、あれはそう意味だったのかもしれない。

だが清矢郎は、彼らとは断じて違う。色々と問い詰めるうちにあさぎの小動物みたいなところがどうこうとは言っていたが、年齢だけで付き合う相手を選ぶほど単純であったり、「あさぎ」を見ていないわけではないだろう。そんな人ではない。だからこそ一度あさぎ以上に信頼できる人に出会えば、「浮気」などではなくってしまいいそうに案じているのだ。

「そうだよ。綺麗でしつかりした人、いっぱいいるもんね、大学って」

あさぎはそう嘆息すると、ぬるいシェイクを啜った。残り少なくなったそれは、空気も一緒に飲み込んでしまい益々美味しくない。

高校生にとっての「大学」は辛い受験を越えた先にあるからか、光り輝く御殿のように見える。実際あさぎの姉は大学時代、勉強もサークルもアルバイトも、様々なことを楽しそうにしており、子供心に羨ましくなるほど青春を謳歌していた。

もう清矢郎とは住んでいる世界が違うのだ。高校の時も学年の違いから、話が噛み合わないこともあった。それでも昨年までは受験という同じ目標を目指していた。同じように制服に身を包み、大人の下で管理されていた。

だが彼は今、自由だ。自分の意思で働く場所も、勉強する場所も選んでいる。来年になり成人すれば、更に自分の力だけで何でもできるようになる。女性関係だけでなく、そちらの世界への魅力が「子供」の世界に留まっているあさぎよりも勝っていれば、自分は清矢郎にとって要らないものになってしまうのではないか。

「そうねえ。そりゃ高校生はぴちぴちだとは私も思うけど、包容力とか知識とか色気も大学生にはあるだろうし、恋愛以上に夢中になるものを見付けちゃうかもしれないし、逆に順序なんかつかないかもしれないし。でもいくら年上に好かれても、『高校生だから』とか幼いから可愛いとか言われるのもむかつくけどさ」

夕映も珍しく上手いフォローが思いつかないようで、あさぎの方を申し訳なさそうに見ながらぶつぶつと言っている。だがあさぎの表情がずうんと沈んでしまったため、慌てて言葉を付け足した。

「でもそれは二人の問題なんだって。あさぎの彼氏が、あさぎのことうつごく大切にしているのは私だって聞いて知ってるもん。そんな人が大学生になったからって、簡単に見捨てたりするかなあ。二つ違いうくらいなら価値観とか、そんなに差はないような気もするし」

「見捨てられる」という表現になるのは、既に身体の関係にある

からだろう。これがまだ子供の立場のくせに、子供の関係ではないという厄介なところだ。肌を重ねた分だけ相手に深く依存し、心まで預けてしまっている。今別れようと言われれば、あさは困るどころの騒ぎではない。想像するだけでぞっとする。どうやって生きていけばいいのか、息の仕方すら分からなくなりそうだ。

清矢郎に、嫌われたくない。好きでいて欲しい。そのためにはどうすればいいのだろう。若さを武器に誘惑すればいいという問題ではない。彼ほど頭のよい青年なら尚更、話をしていて得るものがないければあさぎと一緒に居てもつまらなくなるのではないか。「癒し」として求められているなら、まだどうにかなるかもしれないが。いずれにせよ清矢郎を満足させられなければ、いつかその心は離れてしまうだろう。

次に清矢郎に会えるのは、五月。まだ一週間以上ある。あさぎの年齢から、これ以上頻繁には会えない。この間に誰かに言い寄られてしまったりしないだろうか。確かに大人になる彼が、高校生などに頼っているようでは困る。清矢郎が立派な大人になればなるほどあさぎもときめき、将来への希望も見えてくるが、自分だけが取り残されているような気にもなる。

夕映の言う一部の青年男性の例と同様、大学生と付き合っているというあさぎ側の醜い優越感以上に、不安の方が大きくなっている。どうやら人の心は、ひとつの不安が解決すれば次の不安が湧いてくる仕組みのようだ。今はそんな瑣末なプライドよりも、大好きな清矢郎にこれから自分が必要とされるかどうかの方が重要だった。

——どうしたら、せいちゃんにもっと好きになってもらえるのかな。

凜々しいあの立ち姿を思い出す。先日以上に成長しているだろう清矢郎との再会を思うと胸が踊る。だが同時に自分だけが狭い水槽の中へと置き去りにされているように感じ、あさは戯れてくる小さな金魚たちと震える身を寄せ合うのであった。

第50話 恋心と嫉妬心

「自分が結婚するなんて、想像つかない。ずっと他人と一緒に暮らすなんて、ただ共同生活していればいいわけじゃない、相手の心も身体もいつも支えなきゃいけないわけだ。煩わしい親戚付き合いたってある。その前に自分が誰かを好きになること自体、想像がつかない。本当にどきどきなんてするのか？ それとも本能でこの人の子供が欲しいとか抱かれないって思うのか」

気持ちのよい五月晴れの下、賑やかな歓声が聞こえてくる運動場の隅で、あさは同じクラスの友人、杉原 透流トオルの発言に思わずたじろぐ。

今日は球技大会。あさぎも一応、中学時代はバレーボール部に所属していたのでそのチームに組み込まれたのだが、足を引っ張るわけでもなければ戦力になるわけでもなく他のクラスに一回戦で負けてしまった。同じクラスとなったばかりの透流も剣道は得意でも球技は不得手らしく、同じチームで一緒に負けた。別の競技ではクラスメイトが勝ち残っているのも、特に仲がよいわけでもないが応援には行く。だがそれ以外の時間は、全ての試合が終わるまでこうしてぼうつとする羽目になっているのであった。

さてジャージ姿の女子二人が、何故今日もこのような生々しい話を始めたのかと言えば――最初は他愛のない雑談をしていた。球技以外のスポーツや勉強、ファッション、芸能界等の話に花を咲かせていたが、ふと国語教師の荒芝の姿を遠目に見付け、あの遊び人と呼ばれた彼も遂に結婚するらしいという話題になったのだった。彼には昨年国語を担当してもらっただけでなく、あさぎの所属する文芸部の顧問でもあるため、唯一と言っていいほどあさぎが気軽に話せる教師であった。

と言って真面目な清矢郎とは正反対のタイプである荒芝を、特別気に入っているわけでもない。荒芝は複数の女性の間を渡り歩き、

一生独身でいるようなイメージがあつたためこの話にはあさぎも驚いていたのだった。透流もそう思ったようで、そこで「結婚」というものを二人で考察するに至った。

荒芝が一人の女性を愛し、父親になる姿など想像がつかない。だが所詮人事なのに、あさぎは彼が幸せになることが少々面白くなかった。あさぎの方の恋愛は上手くいっているはずだ。清矢郎は相変わらず優しい。だが人間は欲深いもので、彼が大学に行ってしまったことで不安が募り、その心配を払拭するためにもっと甘い言葉を囁いて欲しいのに、と不満を抱いてしまっている。だから社会的に安定した関係を手に入れられる荒芝が羨ましくて、嫉妬してしまうのだった。荒芝はあさぎがしたくても出来ない甘い秘め事を、仕事の後に恋人と愉しみ、次の日に何もなかったように教壇に立ち子供たちの前で笑っていたのだ。そう思うと、言いようのない苛立ちを感じる。

この身勝手な劣等感は一体何なのだろう。誰に対してもそんな感情を抱く自分があさぎは嫌になる。彼は誰にも迷惑をかけていないのに。あさぎもそれこそ将来結婚して家庭を支えるために、若いうちにはたくさんの健全な経験をし、勉強に励まねばならないのに。

あさぎの複雑な心境はさておき、荒芝の結婚に何かしら感じたのは、これまで恋愛の話をあまりしなかった透流も同じようだった。彼女はあさぎよりも長く真っ直ぐな黒髪を持つ日本人形のような容姿だが、背が高く声も低くて男の子のような口調で話す。そして人を好きになったことがないと言っている。だが彼女も十七歳を目前にして、色恋や性に全く興味が無いわけでもないらしい。

はじめは無口に見えた透流だが、一旦心を開けば話し出すと止まらないようだ。そして夕映のように気を配りながら話すタイプでもなく、齒に衣着せない物言いをする。しかしそれをあさぎが不快に思うことはなかった。彼女の言葉に嘘や人の悪口は含まれないので、自分の意見を上手く伝えられないあさぎは話を聞くのがとても楽し

かった。

透流はきわどい言葉でも平然と交えながら、荒芝の噂話から男女の仲について考察を発展させていた。

「あさぎちゃん、彼氏は？」

そこで唐突に尋ねられ、グラウンドの砂に棒切れで魚の絵を描いていたあさぎはぎくりとした。金魚たちが絵の魚の上に集まってきたが、あさぎはそれを追い払うように顔の前で手を振った。

「あの、えっとね」

「あ、ごめん。聞いちゃいけなかった？　もしかして別れたとか」

「いいいや、そういうわけじゃないんだけど」

「へえ。じゃあいるんだ。どういう人？」

「あの、ね、」

あさぎは言葉に詰まった。家族や清矢郎相手ならば饒舌にもなるあさぎだが、それ以外の人々に対しては口下手になってしまう。だから聞き役になっていることが多いが、と言って聞き上手でもない。そのため友達が少ないのだろうとあさぎ自身分かっている。

そのうえ嘘もつけない性分だ。透流に何かを言う前に、慌てている仕草だけで恋人がいるということを察せられてしまった。一年生の頃、「北高生と付き合ってるって本当？」と知らない女子にまで話しかけられたが、透流の耳には目立たないあさぎの噂は入ってこなかったようだ。あさぎもしどろもどろになっているだけなので周囲にも次第に興味を持たれなくなり、最近は人の視線もあまり感じなくなったが。

「へええ、大学生！　剣道やってるなんて、私と一緒にじゃないか」

透流はあさぎに対し、興味津々に追及してくる。あさぎは彼女に聞かれるままに、「彼氏」の話をした。夕映ともそうであったがあさぎの場合、友人と恋愛や性の話ができるようになると親しさが増したような気がしてしまう。自分の内側にまで興味を持ってもらえたことに、あさぎは嬉しくなってしまうのだ。もちろんその相手が

ただ噂の種を探しているのではなく、親身になってくれ、こちらもためになる話が聞けるかによるが。

それにしても何から説明すればよいのか。人目につかないよう触れ合っていることなど話せるわけがない。従兄妹同士ということも、両親に隠しているからか何やら言いづらい。だからひとまず透流との共通点である剣道——これも実は羨ましさを感じているのだが——を清矢郎もしていると話したところ、「どこに住んでる人？ もしかして私、会ったことあるとか？」と余計に興味を持たれてしまった。

まさか知り合いじゃないだろうか、とあさが心配を過ぎらせながら清矢郎の住んでいる市の名前を言う——。

「すごい偶然。私、小学生の時、そこで少し剣道習ってたよ！」

案の定、今日はポニーテールにしている黒髪を背中で跳ねさせながら、透流が嬉しそうに言うではないか。あさはどきりとした。透流もまた綺麗な女子の部類に入っている。劣等感から殆どの女子がそう見えるあさがだが、彼女の顔立ちは清矢郎のように端整であり大人びている。中身もそれこそ竹を割ったような気性だ。実は二人が知り合いで再会して、恋に落ちることはないか——。清矢郎も同じように剣道を頑張る女子の方が話が合い、好みだったりするのではないか。

あさは妄想を膨らませては、再び不安の藻に心を濁らせる。あまりに考えが飛躍しすぎて、黒い出目金が登場するのも追いつかないほどだ。

「まさかとは思うし名前も覚えてないけど、言われてみればひとり、独特の雰囲気の良い上級生がいたような気も」

「だ、だめっ！！」

あさは思わず大きな声を出すと、身を乗り出して透流を手で制した。その切羽詰った様子に透流も眼を瞬かせ、後ろを通り過ぎて行く知らない男子たちも何事かとあさを振り返っていく。しかしそこで透流は、はっはっはっとはと大声で笑うと、あさの細い肩を叩

いた。

「ごめんごめん。調子に乗った。もしそうだったとしても、別に好きだったとかではないし、人のものを盗るようなことはしないから、心配しないで。第一その人は、あさぎちゃんのが好きなんだろう。私はまだ好きとかいうのはよく分からないし、そういうのはまだいいと思ってるから。それに同じ人かは分からないけれど、その人のこと格好いいって思ったのは、強くてすごいとか、同い年の男子みたいにかきっぽくないとか、そういう意味だよ。抱きつきたいとかそういうのじゃない。別に彼が今、誰と寝ていても構わない」

あさぎは小学六年生の時に清矢郎に身体を触られて以来、性の誘惑に溺れているわけだが、透流は男性というものにどういう意識を持っているのか。彼女の過去の全ては分からないが、少なくとも中学生の時に行為を経験している夕映ともまた違う考え方のようだ。だが透流も性に嫌悪感があるわけではないようでその手の知識を持っているが、人事のようにこうして話す。身体の方の欲求はないのだろうか。自分は抑えきれないほどののに——とあさぎは己の性欲の強さを自覚し、ひとり焦る。

「じゃあ、あさぎちゃんもどきどきしているんだ」

今度は自分の心の動きについて尋ねられ、あさぎは照れながらもこくと頷いた。透流の表情が、あさぎの想いに感動してくれているように見えたからだ。

その時あさぎは、青空を泳ぐ緋色の金魚の影を確認した。——そうだ。きっと、あの日より前から清矢郎のことを好ましく思っていた。性の対象として意識したのはそれからでも、幼い頃から体格の違いは明らかで自然と相手を異性だと認識していた。剣道に打ち込む姿も、物語に出てくるヒーローのように見えていた。

泣いているあさぎを慰めてくれるところも、一人伯父の叱咤に耐えて素振りをするところも「男の子」として頼もしく見え、そんな彼に守ってもらいたいと思っていた。そんな淡い想いがあの夏の日

に性欲の業によって壊され、焦がされ今の関係となったわけだが。

色々悩んでも、清矢郎に胸をときめかせていることには変わらない。この肉欲も彼でなければ嫌ならば、恋心の一種と言ってよいのかもしれない。これから大人になりゆく彼の背中を追いかけていたい。許されるならば、一生傍に居たい。

「それって、どんな感じ？」

そこで更に透流は質問してきた。劣等感を抱くほどの彼女が、「あさぎ」だから教えて欲しいと言っている。そんなことまで聞くなとは思わない。何より自分が今、みつともないほど必死になっていることに興味を示してくれているのだ。あさぎはもやもやとした気持ちを整理するためにも、訥々と語り出した。爽やかな汗を流している生徒たちを横目に。

「どきどきって言っても、昔から知ってる人だから、」

「すごい！ 幼馴染ってやつか」

「うん、だからいつからどきどきしてるかとかは、よく分からなくて、」

あの件のことまでは言えないので、あさぎは言葉を探してたどたどしく表現する。

「でも上手く言えないけど、なんか『いいな』ってずっと思ってた、何年経っても何をしてても『いいな』って思うようになって、『一緒にいるなら、私はこの人がいいな……』って思ったから」

「小さい時から？」

「その時は分からなかったけど、今思えば、ずっと前からそうだったかも。向こうが大人みたいになってから、自覚するようになったんだけど……」

「すごい！ なんかすごい、可愛い。あさぎちゃんって一途だね！で、両想いってことは相手の人もそうだったわけだ？」

真っ赤になって首を傾げるあさぎに、透流は感激したようにあさぎの手を握ってきた。その手は熱いくらいであった。

「あ、あとね、『こんな人になりたい』とも思った」

「よし、それもメモしておこう！ いい関係じゃないか！ ああうらやましいっ」

あさぎも透流のように思い切って心の内を話してみたが、それはとても勇気が要ることで、どっと疲れてしまった。だがあさぎの気持ちを彼女が丸ごと全て肯定してくれたことは、とてもありがたいかった。人に頼っていては本物ではないかもしれないが、こんな小さなことが自信と勇気に繋がる。その反対のことが起こった中学時代にあさぎは自信を失ったのだから。

それでも「いい関係」だと夕映だけでなく透流にも褒められて、未だに両親には言えないものの、彼女たちがそう言ってくれるならば清矢郎との関係に自信を持ってもいいのかな、とあさぎは少しばかり思い始めていた。清矢郎の方の気持ちには、まだ不安があるものの――。

・・・・・・・・・・

そんな会話をした次の日。あさぎは久しぶりに国語科職員室へと足を向けた。文芸部に顔を出したものの、すぐに出てきてしまったのだ。実はこの部活には、昨年ほど面白味を感じていなかった。その原因は文章を書くということとは別にあった。

前部長の琴音も三年生となり部長の座を新二年生に譲ってからは、既に受験勉強に入ったのかあまり部活に来なくなった。あの眼鏡を掛けた元副部長らも。彼女たちの代が仕切っていた頃は上級生だから余計にそう見えるだけか、話題も豊富で、世間知らずのあさぎにとってはそのだけで勉強になり楽しかった。だがあさぎたちの学年と代替わりしてからは、何やら雰囲気が変わってしまったのだ。

昨年は恋愛問題も含めて様々なことをテーマに談笑していたのに、今はまさに創作の際の手法や好きな本や作家、果てはアニメの話やインターネット上のコミュニケーションツールなど狭いジャンルで深い会話をするようになったからかもしれない。もちろん、部活の

趣旨には合っているのだろうか。

文章に興味があり誰とでも仲良くできる夕映でさえもあさぎと同じような気持ちになったらしく、嫌になったわけではないが少し足が遠のいていると言っていた。別に何もおかしいことはしておらず、同学年の部員一人ひとりとは会えば楽しく話ができ、部長を選出したのも自分たちなので今の体制に協力するつもりではあるが。

変わらないものなどない。文芸部もこうして変化を見せる中、今日は夕映もおらず三年生も不在、特に活動もない日であったため、あさぎは部室を抜け出して隣の職員室で一人暇そうにしている顧問の荒芝のところへとやってきた。

「よう。元気だったか？」

荒芝はあさぎを見上げて眼を細めた。今年の国語は違う教師が担当している。だが大人しいあさぎのことでも彼は覚えていてくれたらしい。

パソコンに向かって仕事に関係があるのかなのか分からないサイトを見ていた荒芝は、椅子に凭れると隣の空いている席を顎で指した。「座れ」ということらしい。この教師に興味はないのだが、自分には分からない会話をしている生徒たちの輪に加わりたいとは思わないため——もちろんあさぎの日常生活に支障がない範囲でだが——、言われるままに腰を下ろした。

荒芝は遊び人という形容も納得いくほどくだけた調子で、派手な女子生徒とも親しげに話をしている。それなのに担任教師にすらあまり話しかけられないようなあさぎでも、分け隔てなく接してくれているような気がする。自分などと話を合わせるのは大変だろうとあさぎも自覚しているが、荒芝はそういうことに息苦しさや煩わしさを感じない人物なのかもしれない。

だから荒芝のことは、他の男性よりも意識することなくいられた。だがこの親しみやすさは恋愛感情とはまた別で、それを証拠に彼と一緒に居る時にはあまり金魚の姿を見ない。

だが今日はいつもと違った。あさが自分の恋愛に不安や不満を抱いており、荒芝の結婚話でそれを増幅させられ苛立っている——つまり、欲求不満の状態だからだろう。珍しく彼の周りに赤い金魚がちらほらと現れ始めた。

「先生、結婚するんですってね。おめでとうございます」

「そりゃどうも」

祝いの言葉を述べている割にはにこりもしない仏頂面のあさを、荒芝はにやにやと面白そうに笑って眺めていた。

第51話 ビー玉金魚

今日は荒芝の周りを金魚が泳いでいる。不思議な心地だ。だからあさぎもいつも以上に変なことを考えてしまうのか。この人はもう誰かのものになるのだ。甘い愛の言葉を囁き、その人をとっても大切に思い、その人と身体の関係を持ち、子供も欲しいと思うから結婚を決めた。愛情と切っても切り離せない性欲。人に見せてよい部分とよくない部分をこの教師もまた、使い分けている。

荒芝の手が机の上に寝転び、指で甲板を叩く。まだ未成年である清矢郎の手の方が大きく見えるのは、竹刀を力強く振っているイメージがあるからか。荒芝よりも彼の方が背が高いということも一因だろう。あさぎが黙って荒芝の手を見ていると、やがて彼は引き出しを開け何かを取り出し、彼女の方へと放った。

飛んできた小さなそれを、あさぎは落とさないよう掌に収める。

開いた手の中には、透明なガラス球の中に赤い模様の入ったビー玉があった。

「拾った。やるよ」

「もう。小学生じゃないんですから」

そう言いつつも落し物ではあるが、素直に感謝してしまうのがあさぎという少女だ。それにしても荒芝からはよく物を貰う。以前手伝った時にイチゴ味の飴玉を渡された程度であるが。人に物をあげるのは、下心があったりその人のことを特別に思っている時か、どうでもいい人に要らない物を押し付ける時か、どちらかだ――と夕映がアルバイト先の男の先輩から貰ったというアクセサリーを見ながら、語っていたことがある。

相手は荒芝だ。飴やビー玉ならば、後者の理由だろう。それに彼なら同じ女子生徒でも、大人びた元部長の琴音などの方がずっと好みなのではないか。口下手なあさぎと違い、彼女とはいつも仲良さそうに話が弾んでいた。結婚も決まっているような大人の男に、自

分が特別扱いされるわけがない。

そう考えると清矢郎という恋人がおり、荒芝などどうでもよいはずなのに、あさぎはやはり苛々としてきた。彼のこの余裕が妬ましいほど羨ましい。自分も早く結婚したい。周囲から認められ、清矢郎と好きな時に一緒に居られるようになりたい。彼に愛されていると自信を持てるようになりたい。

それにはまず受験を終えて社会人になって、自分で責任を負える年齢と立場にならなければいけない。早く大人になりたかった。会いたいのに会えない。したいのに、できない。ただ幸せになりたいだけなのに――。溢れんばかりの欲求不満にあさぎは苦しんでいた。清矢郎の方は殆ど大人になった今、あさぎほど欲情していないのかもしれないのに。

あさぎはビー玉を親指と人差し指で挟むと、額の上に掲げて覗き込んだ。すると透明な丸いガラスの中で、捻れた赤いガラスがくるくると回り始めた。それはきっと、あさぎにしか見えない動き。中の模様がとても小さな金魚に見えてきたのは、最早ただの思い込みに過ぎないのか。

――これは私だけに、見えるものだもん。

この幻覚も自分を特別な存在と思いたいだけかもしれない。だから誰かに否定されたり治そうと言われることが恐い。清矢郎に「あさぎらしい」と認めてもらえ、支えてもらえるならば両親に相談しようとも、病院に行こうとも思わないのだ。あさぎは一度眼を閉じた。本当は金魚なんて居ないのかもしれない。自分で見たいと思っているだけかもしれない。そして開いた。だがやはり丸いビー玉の中では、赤い魚が泳いでいた。

あさぎはそれを握り締めると、ひとつため息をついた。

「どうした。恋の悩みか」

口端を歪めた荒芝の笑顔に、頬を赤らめる。

「先生はそういう風にしか考えられないんですか？　自分が女の子

大好きで、もうすぐ結婚できるからって」

この言い方では彼に僻んでいっているようなものだ。荒芝も分かっているのか、にやにやと笑い続ける。だがもう引っ込みがつかない。あさは唇を尖らせると、わざと少年のように少し開いた膝の間にスカートの上から両手をついて、睨むように彼を見上げた。

「そういうつもりはなかったけど。違うのか」

そこで「違う」と嘘もつけない正直者のあさが。自分の丸裸の心を見て笑っている荒芝のことが、非常に腹立たしい。

「それよか、新しいクラスはどうだ。何かありや、宮坂だって相談乗ってくれるだろ。あの子も時々危なっかしいけどな」

しかし荒芝はそれ以上追及するつもりはないようで、別の話題に切り替えた。彼なりに内気なあさぎの交友関係を心配しているらしい。ちなみに宮坂とは夕映の苗字であるが、荒芝は彼女のこともそれなりに案じているようだ。相談の点については、言われなくとも夕映ならば助けてくれるだろうとあさが信じているが。

「男子とはあまり話してないから知らないけど、女子は皆いい子っぽいし、部活入ってない子もいて仲良くなれたし、夕映とも今でも遊びに行きますよ。最近、部活には来たりこなかったりだけ」

「そっか」

あさは見栄を張ることなく、友人の少ない自分の現状を話す。部活での様子を見ていればあさぎの大人しさは分かるだろう。だが孤立はしていないと強調したので、荒芝も安心したように頷いた。そして「まあ、お前さんのことはそう心配してねえけどな」と付け足した。

それを聞いたあさぎの中で、妙な自負が蠢き出す。夕映は心配されているのに、自分はされていない――。だがそれは、まるで醜泥のような感情だった。夕映は一番頼れる友人だというのに、自分はどれほど性格が悪いのだろうか。

ふと視線を感じて、あさは改めて荒芝の方を見た。彼はあさぎの眼をじっと見つめている。あさは首を傾げた。生徒を見るにしては、少々見つめ過ぎではないか。それとも自意識過剰か。

いや、このしつこい目線は、知らない青年に声を掛けられて驚いた時のあれに少し似ている。値踏みでもされているような——そう、本能的に察する、「女」として見られている時の。

そう思ってしまうのは荒芝という男が、性に乱れていそうだというイメージがあるからだろう。しかしそこで、あさは気付いた。彼はあさぎのことを「心配していない」と片付けたように見えるが、実はそうではないのかもしれない。既に処女でないことを、この男は匂いで察しているのかもしれない。担任を通して両親に連絡でもされたら——という懸念から敏感になり過ぎているかもしれないが、あさぎの脇から冷たい汗が湧き出した。

だがあさは感情を隠すことができない。全ては顔に出てしまっているだろう。結婚する荒芝に絡んでいる時点で、恋愛関係で悩んでいると思われるもおかしくない。そのうえ高校生の恋愛ならば、身体の関係は当然心配されること。

何より彼には昨年 of 文化祭で、清矢郎と一緒にところを見られているのだ。あの時も、元教え子の清矢郎に釘を刺していた。だがあれから、あさが妊娠騒動などを起こしたわけでもない。それなりの付き合いをしている、と信じてもらえているかもしれない。他にも男女交際をしている生徒はたくさん居るが、特に指導されたという話も聞かない。余程のことがなければ大丈夫だろう。心配性のあさは自分にそう言い聞かせた。

それにしても女であることは、因果なものだ。何故これほど自分のこと、人のことで悩まなければいけないのか。それは男も同じだろうが。あさは居たたまれなくなり荒芝から眼を逸らした。全く関係のない彼の周りにまで金魚が見えることが、実に厭わしい。

「ほんと私って、嫌な奴ですよ。もう二年生なのに他の子よりも

子供っぽいし、いつも僻んでばかりだし。だからみんなにも相手にされないんだろうし」

夕映につまらない優越感を抱こうとしたり、荒芝に変な眼で見られていると思ったり、幸せそうな彼に八つ当たりをしてしまったり。あさが不貞腐れてそう言うのと、荒芝は「そうかい？」と肩を揺らした。今度は屈託のない笑顔だった。椅子に凭れて腕組みをし、あさぎを見下ろすとこんなことを言った。

「それでもねえだろ。新しい友達も、宮坂も大事にしてくれるんだろ？ そりゃお前さんが素直だからだよ。ちつとばかり繊細で、感受性が強くて、経験がまだ少ないだけで」

通知表にはない表現をされて、あさぎは首を傾げた。それは人間としての「評価」になるのか。中学生までは自身の内面までも採点されてきたが、高校、そして大学の様子を聞けば確かに価値観は多様になってきている。つまりこれからはもっと、様々な面から自分を認めてもらえるようになるのかもしれない。

だがこの言葉は褒めているのか。あさぎは荒芝の表情を確認した。自分が世界で一番だといつでも誰かに言って欲しいものだが、それはないだろう。きっと夕映や琴音にも同じものがあり、彼女たちの方が個性的で自由自在にそれを表現でき、周囲に賛美されるだけの才知を持ち合わせているように見える。あさぎだけが特別なわけではないようだ。

しかし荒芝は「大丈夫」と根拠のない断定をすると、更に語った。「でもそれは、お前さんなりのもんだから、大切にしろ。親御さんに大事にされて、愛されてる子は見たりや分かる。だからお前さんは大丈夫だ。子供っぽいとか色々考えてたって、ちゃんと年相応に大人になってくって。そのうち、嫌でも年とるんだから」

あさぎは今度は眼を逸らすことなく荒芝を見た。彼はいつもどおりのやる気のなさそうな薄笑いを浮かべてはいたが、その眼から嘘でないことは伝わってきた。

「今のままの醜い自分」でもよいということだろうか。それでも、

大丈夫なのだろうか。別に賞賛されたわけでもない。だが恋人以外の人間にありのままの自分を受け入れてもらえるのは、決して悪い気分ではない。荒芝はそれだけ言うと、パソコンのマウスに手を添えた。かちりと音がすると、番号を身に付けた馬の写真があさぎの視界に入ったが見なかつたことにしてやる。

それこそやんちゃな子供のような大人がどうしてこんな話をしたかはよく分からないものの、荒芝が先入観なく彼なりの視点で「あさぎ」を見てくれていることは分かつた。

――私、金魚が見えるんです。

荒芝の周辺を泳ぐ金魚を見ていたら、あさぎは思わず口走りそうになつた。が、それは止めた。

それこそ荒芝から担任教師に相談され、両親の耳に入っても困る。何より金魚のことは五年前の事件も含めた、清矢郎との秘密だ。それをたとえ教師であつても他人、しかも男性に話すということは、二人のあの秘密……言わばあさぎの恥ずかしい姿や性欲を清矢郎以外の男に知られるということだ。それはいけない。まるで浮気でもしたような後ろめたさに見舞われそうだ。

恐ろしい考えを追いやるように、あさぎは頭を振った。毛先の揃つたロングヘアがセーラー服の肩で跳ねる。このままでは清矢郎が従兄であることまで話してしまいそうだ。彼のことに話が及ぶ前に、あまり面白くなくとも部屋代わりの準備室へと戻ることにした。

「ありがとうございます」

頭を下げると、あさぎは席を立つた。ビー玉と自分への励ましの言葉への礼だった。荒芝に特別な感情はないが、先ほどの言葉はこのビー玉を見るたびにこれからも思い出すだろう。

「ま、困ったことがあります、また相談に来な」

荒芝の笑顔に、あさぎは頷きながらも憎まれ口を叩いた。

「そう言って先生、結婚のことで頭いっぱいじゃないの？ 奥

さんになる人と、もうできてるかもしれない赤ちゃんの方が大事でしょ？ 私たちよりも」

「馬鹿野郎。教師、なめんな」

彼は唇を歪めて不敵に笑うと、即座にあさぎの言葉を全面否定した。たとえ大人の口車であったとしても、彼なりに仕事へのプライドがあるのだなあさぎは感じた。そして同時に、たとえ本音でも建前でも彼がそんな風に言い切らなければ、このビー玉を何処かに投げ捨てていただろうなとも、十七歳になる彼女は考えていた。

・・・・・・

もしかしたら荒芝の言おうとしていたことは、清矢郎が金魚が見えるあさぎを「あさぎらしい」と形容してくれたことと同じかもしれない。自分の部屋で金魚の入ったビー玉を眺めながら、あさぎは考えていた。

私はそんな子じゃない。誰も私を分かってくれない――。中学時代、そして清矢郎と付き合う前だったら、荒芝の言葉を聞き入れられずにそう思ったかもしれない。一年前だが、随分昔のことのようだ。

付き合う前の自分にはもう戻れないのだから同じ感じ方は二度とできず、過去の自分で仮想しても仕方なく、今眼の前の現実と感情に向き合うしかない。そう思うと清矢郎との交際を通して、あさぎも少しは成長したのだろうか。

今のあさぎは荒芝の言葉をそのまま受け取っていた。あの教師は生徒におべっかを使ったり、いたずらに褒めるような人ではない。淡々と事実のみをいつも指摘する。ただし国語教師だからか、目に見えないものでも彼の言葉でさらりと口にする。そこが清矢郎との一番の違いだ。

だが人によって見えているものが、それこそこのビー玉の柄のよさに違うので、荒芝もあさぎのことを「正確」に表しているわけで

はないかもしれない。だがあさぎ自身、「そんな子じゃない」と意地を張っていた中学時代よりも自分で自分のことがよく分からなくなっている。だから荒芝の言葉にも単純に、もしかしたらそんな一面もあるかもしれない、と思えてきた。

清矢郎にあさぎがどう見えているかは彼にしか分からないが、同様にあさぎが思っている自分とは違って見えているかもしれない。彼ならあさぎには金魚に見えるこのビー玉の赤い模様を、何と表現するだろうか。

その数日後、あさぎはようやく清矢郎と会った。あさぎ側の小遣いの事情で、今でも定期券を持っている駅から家までの範囲で会うことが多い。最近では通学で乗り降りする駅の一つ手前の駅近くで見付けた、川沿いの橋の下という死角で語らうことが増えた。

アルバイトを始めたから遠くに行くなら電車代くらいは出そうかという清矢郎の提案に、あさぎはどう答えてよいか分からず弱ってしまった。いくら相手の方が稼いでいるといえども金銭的負担をかけるのは、子供のあさぎにはよいことかどうかまだ判断がつかないのだ。それに清矢郎の大学がある大都市の駅近くで会った方が誤魔化しやすいかもしれないが、近場の方が会える時間自体は長くなるのだし。

「また考えるか」と言われこの話は終わった。もしお金を出してもらえるならば、そういったことをするための、あのいかがわしい建物にも行けるように――？ いや、それこそ子供が行くべき場所ではない。母親に知られたらどうなることか、考えただけで背筋が凍る。そもそも清矢郎が高校生のあさぎにそんなことは提案しないだろうが。しかし公共の場所で身を寄せ合うのも問題ではないか。高校生として、好きな人との性の関係を一体どのように持てばいいのか。

あさぎが黙ってしまうと、清矢郎も無言になり川のせせらぎを眺めていた。眠っているのかと思うほど、静かだ。あさぎはこっそり

と吐息を零した。

「何だよ」

だが清矢郎は敏感に反応する。最近この繰り返しだ。あさは慌てて会話を探した。

「あのね、荒芝先生、結婚するんだって」

「……ふーん」

「相手は生徒とか先生じゃないってのは噂で聞いたんだけど」

「気になるの？」

「え？ 別に。ただ意外だなーって。いっぱい女の人と遊びたい人だろうって思ったから。赤ちゃんとか育てられるのかなあ。先生やってくるくらいだから、子供好きかもしれないけど」

「どーでもいいーけど……」

結婚への憧れが最近強いあさぎとしては、清矢郎が結婚や子育ての話に対し素っ気無いのが少々気になった。まさか自分とそうするつもりはないのか、そもそも結婚に興味がなければどうすればいいのか。だが問い詰めて重い女だと嫌われてもいけない。あさは話題の矛先を変えた。

「でね、そんな話してるうちにどんどん自分が嫌になってきて、思わず荒芝先生に金魚のことまで話しそうになっちゃって」

「話したのかよ」

すかさず清矢郎に聞き返される。薄い氷のように空気が張り詰めた。あさは息を飲んだ。それほど冷たい声だったのだ。

「ううん！ 金魚はせいちゃんとの秘密だもん！ 話すわけないよ」

清矢郎はもう一度「ふーん」と言うと、立てた膝に頬杖をついて前を見た。心なしか不機嫌にも見える。あさは密かに、愛されている証として彼に独占欲を見せてもらうことを期待している。まさかと、逸る胸を押さえながら尋ねてみる。

「ねえ、私が他の人に金魚のこと話したら……どうする？」

「そうしてえなら、そうすれば」

「したいわけじゃないけど、そうしたら怒る？」

「あさがしたかったら、勝手にすりゃいいだろ。俺が怒ることじやねえよ。ちよつと面白くねえだけで」

その言葉にあさぎの鼓動が速まる。

「第一、お前あの先生の話ばっかするよな」

それは二人の数少ない共通の話題だから、あえてそうしていたのだが。あさは意外な答えに眼を瞬かせると清矢郎の横顔を見つめた。

第52話 水槽の中に、二人

そう言えば清矢郎は、以前から荒芝に気をつけろと言っていた。

それは彼が二人の仲に——しかも身体の関係にまで気付いているから、それを「大人」にとにかく言われないうにという意味だとあさはか思っていたが、彼が男など分らないぞと言っていたことも思い出す。

「だ、だってせいちゃんとの共通の話題って少ないし。第一、先生なんだし」

「それは分かってる」

清矢郎は立てた膝に頬杖をついた。まるで拗ねているかのような態度に、あさぎの胸の高鳴りがとくんととくんと大きくなってくる。

——まさか、妬いてるの？

あさぎから顔を背け、そっぽを向いている清矢郎の頬を金魚が突く。大学生になり、子供の自分など相手にしてくれなくなるのではと心配していたのに、まさか。

「じゃあ、なあに？」

——もつと、言っただけだな。

あさぎは期待して、清矢郎の膝を揺り動かし顔を覗き込もうとするが、彼は「うるせえよ」と吐き捨てる。と片膝に額をつけてしまった。

「ねえ。もしかして、荒芝先生とのこと疑ってる？」

「疑っちゃねえけど……あの先生、やばいって言っただろ」

「私なんかは何もしてこないって」

「『なんか』じゃねえって、前も言わなかったか」

清矢郎は顔を上げると、川面の方を睨む。確かに前も同じような会話をしたことがある。清矢郎と付き合い始めた頃、荒芝の話をしていたら手を出されないよう気をつけろと心配されたものだが、ついまた話に出してしまったようだ。

あさぎにしてみれば荒芝の持つ空気から自分のようなタイプは対象外だろうと感じていたので、あまり気にしていなかったが、男と女で捉え方が違うのだろうか。清矢郎に心配されるだけでなく嫉妬すらしてもらえることは、跳び上がりたいほど嬉しいことだが。

「私だってせいちゃんが大学生になって、綺麗な女の人いっぱいいるだろうから、とられちゃうんじゃないかっていつもやきもちやいてるよ。そう言ったたら怒られちゃったけどさ」

「悪かった。あさぎを信じてないわけじゃない。でも、なんで俺なんだって思うことはある」

あさぎは驚いて、胡坐をかき直した清矢郎の方を見た。過去の負い目ゆえか。どうしてこれほどの青年が自信を持てないのか。

「私こそ私なんかをどうしてって、今でも思っちゃうのに。可愛くもないしまだ高校生だし、好きな時に遊べないし、好きな時に……して、あげられないし。大学生同士だったなら、もっと自由に付き合えてせいちゃんも楽しいんじゃないかって」

「『あさぎ』と付き合いてえんだから、何ができるとかできないとかは関係ない。今の自分らの年齢に合ったことすればいい。だからそういうのは気にするな」

「うん」

あさぎは笑顔を浮かべて頷いた。清矢郎のそういうところが好きだった。以前よりもはっきりと言葉にしてくれるようになったのは、彼も大人へと成長しているからだろうか。「私なんて可愛くない」の部分も否定してもらえらるともっと嬉しかったが、それは求めすぎだろうと話を続けた。

「私だって同じ気持ちだよ。だからせいちゃんもそんなに不安にならないで」

「……分かった」

「なあと、その間^ま」

釈然としないような清矢郎の態度に、あさぎは彼のTシャツを引っ張り言葉も一緒に引き出そうとする。

「……でもお前にそのつもりなくても、周りがちよっかいかけてくるかもしれねえだろ」

「だから、私なんかにありえないって」

「今はそう思っても、そのうちそうじゃなくなる」

「そういうもののなの？」

彼は口をへの字に曲げて首を縦に振った。どうも清矢郎は、荒芝に限らずあさが誰かに手を出されないかと心配しているようだ。

清矢郎ならまだしも自分は有り得ないと思うあさがだが、これから大人になるにつけそういう可能性が増えると思は予言している。大学というところで、彼は一体何を経験しているのだろうか。

それは少々不思議に思ったが、そんな風に案じられると彼に女として価値を認めてもらっているように感じる。あさは清矢郎の肩に頭を置いた。珍しく妬いている彼が可愛い。幸せ色に心が染まる。二人の周りから川の上空にかけて回遊している金魚の影も、今日はやけに可愛く映る。

しかし呑気に喜んでいるあさぎに対して、清矢郎は難しい顔をし、舌打ちまでしている。

「って、何言ってるんだって感じだな」

「どうして？ 妬いてくれて嬉しいよ」

素直に言ってしまったあさぎの言葉が、彼のプライドを刺激したらしい。余計に顔を顰めてしまった。

「そんなん駄目だ」

「どうして？」

「どうしても」

男心はよく分らないが、あまり心の奥まで踏み込みすぎると相手が心を閉ざしてしまったり、不快感を露わにされこちらが傷つくかもしれない。それは中学生の時に、男子が苦手になった事件で経験している。だから清矢郎にもっと妬いて欲しかったが、これ以上は言わない方がいいかもしれないとあさは一旦口を閉じた。

しかし彼は恋人で誰よりも近い存在だ。親しき仲にも礼儀あり、だが少しのことでは関係は壊れないかもしれない。自分のことをどう思っているか知りたい、よかったらもう少し聞かせて欲しいと願いながら、あさは横から清矢郎の分厚い胸に両手を回してみた。川のせせらぎと車のエンジン音、そして彼の力強い心音以外は、何も聞こえてこない。

どうやらそれは効果的だったようで、清矢郎は自分の気持ちの続きをぼつりぼつりと語り出した。

「……お前が金魚のこと、荒芝さんに話したっつうから」

「結局、話さなかったよ？」

「うん、分かっている。話したのかって焦っただけだ。あの人にはそういうことまで話せるのかって。でもあさに困ったことがあって、俺よりもそいつの方があさの力になれるなら、好きに頼ってくれていい。あさに辛い思いさせたいわけでもない。だからつまらないこと言ってるって分かっている」

清矢郎は落ち着きなく頭を掻いている。自分を責めて、やり場のない苛立ちを抱いているように。「あの人」とは荒芝のことだろう。相手は教師であるのに一人の男性のような表現をするあたりに、彼の言いたいことをあさは察する。

「ううん。つまらないことじゃない。そう思ってくれてすごく嬉しいよ。そりゃ学校であった問題とかはしょうがないけど、一番頼れるのも頼りたいのもせいちゃんだもん」

あさの言葉に、清矢郎は益々恥ずかしくなったらしい。横から抱きついていたあさの肩に手を回し、自分の顔を見せないよう引き寄せてきた。あさの軽い身体が、自然と彼の膝の上に前のめりになる形になる。

「そう思ってくれるなら——本当に嫌じゃないなら、金魚のこと、誰にも言うな」

「うん……」

「でも叔父さん叔母さんには言いたきゃ言ってもいい。元々俺の所

為なんだし。悩んでるなら大人や専門家に頼るしかねえだろ。荒芝先生にだって、したきや相談すりゃいい」

「そんなの話せるわけない……って今言うなって言ったばっかなのに」

「言った。だからどっちも本心だし、ただの我侭だ。俺だけが知ってたことを誰か他人に知られることが嫌なだけだ。だから気にするな。あさぎを追い詰めたいわけじゃねえ。だから言うななんて言えない。そういう意味じゃなくて」

「分かるよ」

あさぎを抱き、珍しく必死に語ってくれる清矢郎の言いたいことが分からないわけがない。

「こんなの独りよがりで、間違ってるけど——俺の金魚、だ」

俺があさぎに見せた。俺の所為で生まれた、金魚。

丸い透明のガラス玉がぱあんと爆ぜ、金魚の花火が青空に上がる。解放。自由を求めて飛び出した。この幻影の魚は、清矢郎のために泳いでいるのだ。これまでも、これから。

彼もきつとそう思ってくれている。自分の存在を認めてくれた清矢郎に、金魚たちは懐くように寄り添い、数を増やして二人の周りを泳ぎ出す。しかしこの緋色の魚たちはいつも気まぐれで、時に残酷だ。清矢郎のことは餌程度にしか認識していないのかもしれない。あさぎという性欲の。

それでも今は清矢郎もあさぎの金魚が見えているような気がして、あさぎの心は次から次へと泡のように弾けていく。

いや、きつともう「見えて」いるのだ。彼が幻影の金魚の存在を共有してくれた時点で。それと共存するあさぎを認めて、金魚ごと欲してくれた時点で。眼には見えなくとも彼の心にも金魚は住んでいる。同じひとつの閉鎖的な水槽の中に、あさぎも清矢郎も金魚も住んでいる。同じ空間に全てが在る。それはなんと、喜ばしいこと

だろうか。

彼の心の中にはあさぎの金魚。金魚は愛情の証。相手が清矢郎に限られるのならば、性欲の証であってもそう言っていいたいだろう。

「うん、ありがとう。あげる。せいちゃんに、金魚あげる。絶対誰にも言わない。私とせいちゃんの金魚だもん。もしかしたら私、頭おかしいのかもしれないけど、それでもよければ皆で一緒にいよう」
言いながらあさぎは自分で自分が恐くなる。本当に病院にでも行った方がよいのかもしれないが、日常生活が問題なく営めるならば、金魚の秘密——二人だけの秘密の思い出と、互いにだけ主張する性欲、愛情、絆の象徴——を清矢郎とだけ共有していいだろうか。それを彼が望んでくれたことが何よりも幸せなのだから。

気分が昂ぶったのか照れ隠しか、清矢郎の大きな手があさぎの身体の上を這いずり始めたが、彼女は抵抗することなく受け入れた。いやらしい欲求と狂気も含めて、彼が自分を求めてくれていた。それを丸ごと受け入れ、そんなあさぎの心を独占したいと言い、その醜い世界と一緒に住もうと言ってくれている。

それをどうしてあさぎが拒絶するだろうか。彼女は自分の精神世界に清矢郎が入り込んでくることや、そこまで深く愛されることを恐れてはいなかった。逆にそれがどういうことか考えられるほど、まだ大人になりきれていなかった。

今は自分を守ってくれる人、いつでも共感してくれる人が傍に居ることに、あさぎは真綿に包まれたように安堵していた。そうされることを望み、彼に依存していた。

全く意味のない金魚のカーテンの内側で、人目を気にしつつも服を着たまま、互いに触れられる限りの場所に触れ合った。どうしても止められなかった。外だから、年齢が達していないから、と様々なものから禁止されていたとしても。

.....

——本当は事が済んだ後も寄り添っていたいあさぎだが、誰に見られるか分からないので、清矢郎とやや距離を置いて座る。先ほどの熱い情交が嘘のように無表情に戻っている清矢郎に、あさぎは頬を膨らめてしまう。あさぎに迷惑を掛けたくないよう気遣い、あえて素っ気無い態度をとっているのだろうが、事後ももう少し甘えてきて欲しいものだ。

「高校生ってつまんない。もっといっぱい一緒にいてくっつきたいのに」

終わってしまった後の虚しさに、あさぎは思わず愚痴を零した。いつの間にこんな乱れたことを言うようになってしまったのか。信じてくれている両親に申し訳ない。自分を律さねばならないと頭では分かっているが、理性の方が負けてできないでいる。

「大人になるまで、我慢しろ」

清矢郎は真面目ぶってそう言うが、彼があさぎに場所を問わずに触れるようになってもうすぐ一年になる。当人も矛盾していると思っただのか、首筋に手を当てた。

「分かるけど、だからせいちゃんが大人の女の人の方がいいって言わないか、やっぱり心配なの」

「だから何度も言ってる。別に何もしねえで帰る日があっても、俺は構わないから。そういうことするためだけに、付き合ってるんじゃないんだろ。今言っても説得力ねえし、信じられてない俺が悪いんだろうけど」

「べ、別に私だってそれだけが目的で、付き合ってるわけでも会いたいわけでもないもん！」

あさぎは頬を染め、語気を荒げながらも共感を示した。彼の言葉に安心できたのも、互いの性欲が解消された後だからかもしれないが。だが清矢郎として行為の折にはして欲しいことを色々と要求するので、あさぎと同様に欲望を抱いているものと思われる。つまりはただ節度を保って、我慢していいこうという話なのだ。

「あさがしたくねえなら、無理しなくていい」

「そういう意味じゃなくて！」

怒っていると清矢郎に誤解されてしまったので、あさは広い肩を叩いた。だがその表情から今日は冴えている彼女の勘が、またひとつの答えに行き当たった。

「もしかしてせいちゃん、照れてる？」

清矢郎は黙り込んだ。どうやら今日は珍しく清矢郎の鉄仮面が剥がれている日らしい。彼も人間だ。そういうことはあるだろう。素顔が見られることはあさぎにも大歓迎だった。

冷静な表情や行動、年の差から清矢郎は精神的に安定しているとあさは勝手に思い込んでいたが、過去の事件もさることながら、彼にも感情の浮き沈みはあるようだ。当然将来共に生きるならばそこを支えてやるべきだが、今は単純にそんな姿を可愛いなと思ってしまう。「自分のことが好きだから」と思えば、尚更。

あさが再び清矢郎のTシャツを引っ張ると、彼は「うるせえよ」と彼女の顔を見ないよう立てた肩膝に顎を乗せた。

「情けねえこと、言ったな」

妬くことが本当に悔しいらしい。逆に彼がそういったことをもう口にしてくれなくなることをあさは懸念し、慌てて口を開いた。

「だから私はほっとしたのに。私ばかり妬いてるんじゃないんだって。高校と大学って全然違って、ずっと不安だったから」

「それならよかったけど、そう思ってるのはこっちだって同じだ。あさがだって同じ年のやつとかの方が話合うだろ。今は違っても、これからとか」

「私は清矢郎じゃなきゃ、嫌だもん」

名前の呼び方で少しだけ「大人びた」を演出してあさが微笑むと、彼は「ん」と言い、腕を伸ばしてあさぎの頭を撫でてきた。

「せいちゃんは？」

そしてその手の温かさと重みに心を預けながら聞き返すと、彼は「俺も」とあっさり答えてくれた。

五月の爽やかな風と金魚の群れの流れに心を解放することは、快樂よりも何よりも気持ちがいいものだった。この日あさは、荒芝に会った時とは打って変わった表情になると、鼻歌すら口ずさみながら帰って行くことになる。――残念ながら、またすぐに欲求不満になってしまうのだが。

眼の前を赤い幻影が覆うか、緑の風景が広がるか。二人の眼前に広がる世界も生活している世界も違っているが、心はいつも小さな水槽の中に二つある。時に壁にぶつかりながら、水草に絡まり、寄り添い泳いでいる。

同じ醜い心を持っている。色も形も異なる魂を持っているが、一部は同じものを感じ取っているのだ。その欠けているところすら今は愛しい。

帰宅後、机の引き出しから荒芝に渡されたビー玉を取り出して中を覗くと、あさはくすくすと思ひ出し笑いを浮かべた。現実のビー玉は弾けておらず赤い模様はまだその中にあったが、汚れだろうか、黒い金魚と一緒に泳いでいるように見えてきた。

――この小さな空間の中に、二人で居るの。

荒芝のおかげでこんな話ができたのだし、このままビー玉をお守りとして持ってもいいかなとあさは現金にも思うのであった。

第53話 オンナノコ

季節は流れ、修学旅行や夏休みを終えるとあさぎたちの学年も大学受験を視野に入れた模試を受けるようになってきた。社会を知らないあさぎには、ぼやけた陽炎のようにしか見えない成人した自分をどうにか思い描き、志望校や将来の夢を具体的に絞っていく。

不純な動機だと思いつつも、大学に入っても清矢郎と一緒に居たため、彼の通っている大学と同じ市にある別の大学名を志望校欄に記入している。同じ大学など到底無理なので、幾分ランクの低い学校となる。これでは高校受験の時と変わらない。あさぎは劣等感にため息をつきそうになるが、入学してから一年半が過ぎ、彼と自分の「違い」に少し慣れてきた。何より清矢郎がそんなことを気にせず、あさぎと恋愛関係を結んでいてくれるのが救いだった。

そもそも金魚が見える変な子だというのに、彼は「俺の金魚だ」とまで言ってくれ、あさぎを丸ごと受け入れ、守ってくれている。守られてばかりなのも情けないが、こんな自分をあの清矢郎が求めてくれている。あさぎはそう思うことで自分たちは対等に付き合えている、と言い聞かせていた。社会的な立場はまだ対等でなくとも、いずれにせよ、あさぎの志望大学については両親も反対していなかった。高校入試の際は清矢郎と比べるような発言を母親が口にしたが、今のところあさぎの成績は横ばいなので、こんなものだろうと期待をやめたようだ。それはそれで虚しいが、裏を返せば自分を信じてもらえているのかもしれないと両親に感謝を覚えてみる。

そうは言っても陰で男性と――しかも親戚と、何度も秘密で身体を重ねているのも事実。信じてもらえているのに、と思うたびあさぎの心は痛むが、清矢郎の傍に居るためには必要な嘘に違いないと、金魚の幻影を見ては心を麻痺させ、何も考えないようにする。確かにそれ以外の時は真面目にこつこつと勉強をし、テスト対策も早めに行っている。主席にはなれないが、あさぎの成績は「上の下」とい

ったところで安定していた。

心配されて仲を裂かれたりしないよう、知られないように。成績を下げないように。自分の身体を守って――。あさぎなりにそのバランスを懸命にとっていた。

そして二度目の文化祭も終えた後。清矢郎もアルバイトや大学のサークル活動で忙しく、会えない日が増えてきた。先述のとおり彼に会ってばかりいれば成績に影響が及び、寄り添えば身体へのリスクも増えるため、あさぎは寂しかったが耐えていた。

それに会えなくともメールや電話で相手をしてくれ、会える日も嫌な顔ひとつせずやってきてくれる。だが人目につかない場所に誘うのはあさぎの方からが多いため、あさぎが「せいちゃんはしたくないの?」と拗ねれば、「あさぎが大事だからって言ってんだろ」といつものような軽い言い争いが始まる。

そこは清矢郎を信じるべきところだろう。あさぎはいつも浅はかな自分を反省するが、彼はそんなあさぎに文句も言わず、時に激しく求めてくれる。十九歳の青年ということを思えば浮気でもされないかといつも気に掛かるが、その点も信じなくてはならない。時に切ない思いもするが、たった一人の男性に必要とされていることはあさぎの毎日に彩を与えていた。勇気を出して強くなり大人になっていかねば、本当の意味で彼と対等になれない。周囲にも認めてもらえないのだ。

と言っても、会える時間が増えるわけでもない。最近、清矢郎は昔通っていた道場で子供たちを教える手伝いを始めたようだ。ボランティアに等しいが、やはり好きなことだから声を掛けてもらえて嬉しかったと語っていた。

一般企業でのアルバイトは寡黙な彼がちゃんと話せているのか、笑えているのかと心配になるが、こちらについてはきっと大きな声を張り上げて元気に教えているのだらう。しかし自分と会えるはず

だった時間を子供たちの育成や剣道に充てていると思うと、胸がじりじりと焦げ、あさぎの周りには金魚が増える。

恋とは別問題のことだと、頭では分かる。だがあさぎが一人で寂しがつている時間に、見知らぬ子供たちは清矢郎の真剣な声が聞けて、真っ直ぐに向かい合ってもらえているのだ。彼は剣道が大好きなのだから。

——羨ましいな。

身体を鍛えている健全な小学生にすら妬いてしまうあさぎ。自分でも馬鹿みたいだと思うが、彼らは清矢郎と好きなものを共有し、彼に思いをかけてもらっている。あの勇ましく伸びる竹の力をそのまま与えられているのだ。

ああ。この嫌な気持ちを払拭するためには——。あさぎはそこで嫉妬のあまり、妙なことを思いついた。

.....

「どきどきする……やっぱり、やめた方がいいかなあ」

「何言ってるんだ。あさぎちゃんが行きたいって言ったんじゃないか」「そうなんだけど。ごめん……」

秋晴れのある土曜日の昼下がり。二人の女子高校生が某市の剣道場へと向かっていた。ここは清矢郎の住んでいる市。つまり彼が今、子供たちに剣道を教える手伝いをしている場所である。

会えなくてもいいから、一目見たい。自分が絶対に入れない、あの竹の世界に入りたい——即ち、清矢郎が子供たちに剣道を教えている姿を見に行こうと思いついたあさぎだが、いざとなると足が竦む。いっそサークルの試合の方を見に行けばよかったのだが、交流試合が主でギャラリーも少ないらしい。何より彼が自分だけの楽しみでなく、あさぎ以外の存在のために時間を遣い、無償で手をかけていることに嫉妬してしまったのだ。

馬鹿げたことをして、迷惑になるというのに。あさは清矢郎が金魚の世界に立ち入ることは歓迎しているが、彼は逆のことを嫌がるかもしれない。確かに文芸部で書いたあさぎの文章を清矢郎に読みたいと言われたら、嬉しいような恥ずかしいような、やっぱり見せられないような気持ちになるかもしれない。

しかし今は、片想いの状態ではなく恋人同士。この程度で仲が壊れることはないかもしれないと、一年以上交際を続けた結果、思える。そこに付け入るのは甘えだろうか。

同じクラスの友人、透流に計画を打ち明けたところ、剣道を習っている彼女は興味を持ち、あっさりと協力を申し出た。そもそも彼女はあさぎを通して恋愛を研究している部分もある。こっそり聞き出した道場の名前を教えたところ、どうやら透流が一時期通っていた場所のようで彼女は益々その気になった。

「面白そうじゃないか。もしかしたら私が気になっていた人がいるかもしれないし、それが初恋だって証明できるかもしれない」

透流の言葉に、あさはひやりとする。協力はありがたいが、もし綺麗な透流の初恋の相手が清矢郎だったら、どうすればいいのか。一人で行く勇気もないくせに、そんな疑念や不安を抱いてしまう自分を、あさは大嫌いだと思った。そのうえ透流は、「あ、すごく好きだったわけでもないし、もしあさぎちゃんの彼氏がその人だったとしても、横恋慕するとかいうことはしないから」と言ってくれる。そんな彼女の優しい気持ちと淡い思い出を利用しているような自分も、最低だと思った。

けれども欲望には勝てないあさは、金魚たちと共にいざ道場へ踏み込む。スポーツセンターの門がしなった竹に見えてきた。透流の家のように自前の剣道場を持つ場合もあるが、清矢郎が剣道を習っていた道場は市の施設を使用している。施設の名前もあさがさりげなく聞き出し、知っていた。

「昔より綺麗になっていくけど、やっぱり私が行ったことあるとこ

だ。小学校の夏休みに、少しだけ来てた。その頃は父親の友達が師範やっていて、たまには俺以外に習ってこいって言われて通い稽古にね」

透流の家の事情は分からないが、彼女はずっと剣道部に入ってこなかったようで、その分こうして修行のように余所でも習うことがあったらしい。「入ろうよ」と促してくれる透流の積極性に感謝する。玄関には大勢の人々が居たが、剣道場に近付くにつれ誰も居なくなっていく。スポーツをしそうにない格好の女子高校生が、薄暗い廊下をうろうろしているのは何ともそぐわない光景だ。

長いポニーテールの先を背中中で弾ませて歩く透流を、あさぎは慌てて追いかけた。道場は案の定、体育館のように四面を壁で覆われており、ドアを開けねば中が見えない。

「や、やっぱり恥ずかしい」

「片想いじゃないんだから、堂々としてたら」

「相手に恥かかせちゃう」

「今更、何言ってるんだ」

透流は呆れたように言くと、一旦ドアから手を離れた。我俣で甘えん坊な自分をあさぎは恥じる。

「ごめん。行こう。がんばる」

あさぎがやっと決意して頷いたので、透流はにいつと笑うと、重い鉄のドアを押した。

ドアを開けた途端、耳に飛び込んできたのは子供の甲高い掛け声や竹刀のぶつかる音、床を踏む複数の足音だった。誰かに見付かって追い出される前に、とあさぎが素早く視線を泳がせると、袴や胴を身につけた清矢郎が見付かった。面をつけていないので探しやすい。子供たちの方を真っ直ぐに見ている。気付いて欲しいが気付いてくれない。それが彼らしい。

「もっと心を入れて打て！」

前に聞いたことのある、あさぎの前では出さない清矢郎の大声に

胸がぞわぞわとくすぐられる。こんな場所なのに欲望が湧き上がり、金魚が舞い立つ。道場は竹藪になる。だがそれにうっとりとするような心の余裕などない。人目が恐い。やはり逃げよう。あさぎはそう思ったが透流は「懐かしいなあ」とその場を動かない。

「あさぎちゃんの彼氏は誰？ 私の言ってた人、眼鏡かけてるし、あの人似てそうだけど」

あさぎが彼女の言葉にぎくりとしているうちに、

「君達、どうしたの？ 見学かい？ それとも誰かのお迎え？」

五十代と思われる胴着姿の男性に声を掛けられてしまった。

「あ、いえ。私、小学生の時に少しの間、こちらに通っていたんです。もう引退されていると思いますが、安藤先生に教えていただいています。近くまで来たので懐かしくなって、ちょっと立ち寄らせていただきました。練習中にお邪魔して、すみません」

透流も大したものである。見知らぬ男性に堂々と、礼儀正しく答えている。実際、彼女は嘘をついていない。だから迷うことも怯えることもなく答えられるのだろう。あさぎはそれに続いて、「お邪魔してごめんなさい」と頭を下げることにできないというのに。

子供たちが、ちらちらとこちらを見ている。清矢郎も一緒になって見ているのだろうか。――何をやっているんだろう。恥ずかしい。申し訳ない。

あさぎは、「突然すみませんでした」と頭を下げると道場のドアに隠れるように身を引いた。中にまで入るつもりだったか、透流は「え？」と驚いたように振り返ったが、あさぎが「ごめん」と呟いて頭を振るので、これはどうにもできないと思ったらしい。

「お邪魔しました。見せていただき、ありがとうございました」

現在の代表であろう彼に頭を深々と下げると、あさぎもそれに続いて頭を下げ、二人はそそくさと道場を後にした。自分の背中にひとつの視線が向けられていることも知らずに、あさぎは逃げるように駆けていった。

「ほんつと、いくじなしだなー、あさぎちゃんは。せっかく入れるチャンス作ったのに」

「ごめん……」

二人でスポーツセンターのベンチに腰掛け、先ほどの失態を振り返る。折角の休みに透流を付き合わせておいて、この体たらくだ。あさぎは泣きそうな顔で謝ったが、悔やむくらいなら最初から言い出さなければよかったただけだ。反省したところで、何になる。

愚かな自分がまた大嫌いになる。だが友人には恵まれる運を持っているようで、透流は困り顔でため息をついた後、突然笑い出した。「恋人同士だっていうのに、何で照れるかなあ。まるで片想いみたいだ。変なの」

屈託ない表情に救われるが、自分が悪いことには変わらない。あさぎは益々小さくなった。「ごめんね」ともう一度謝った後に、あさぎはふと顔を上げる。

「透流ちゃんの、その、懂れてた人って……やっぱり」

「ああ。あの眼鏡の人？ あんな感じだったような気がするけど、相手も小学生だったから変わっているだろうし、自信はないや。でも若くて高校生でもなさそうな人ってあんまりいなかったし、もしかしてあさぎちゃんの彼って、その人？」

透流は眼がよく、勘も鋭いようだ。あさぎの視線も察していたかもしれない。少し迷ったがあさぎは赤い顔で頷いた。

「うーん、そっか。でも彼ってことにすると、あさぎちゃんが悩んじゃうだろうし、今どうなりたいわけでもなし、思い出は思い出つてことにしておいた方が綺麗な気がする。あーあ、私も恋してみたいなあ」

「そんな、」

あさぎが謝らなければいけない側なのに、透流に気を遣われてしまい胸が痛む。しかし透流にしてみれば、初恋相手が清矢郎であっても今更どうにもできない。これは彼女の優しさであり、もしかしたらうじうじと悩みたくないという性格の表れかもしれない。あさ

ぎは彼女のようにもなりたいたいな、と思うのであった。

二人が取り留めなく反省会をしていると、思っていた以上に時間が経っていたらしく練習が終わったようだ。防具を持った小学生たちが出てきた。あさが期待と緊張で固まると、透流もそれにつられて黙った。

今度はあさが逃げるつもりはなかった。謝った方がいいだろうか、やめた方がいいだろうか。いっそ逃げた方が彼の迷惑にはならないだろうか。だが今日は元々、会えない日だったのもう少し近くで見たかった――嗚呼、なんと我俣なことだろうか。これでは本当にストーカーのようである。清矢郎にも自由な、彼の時間があって当然なのに。そこまで束縛していいわけがないのに。

やがて子供たちの後ろから、指導者である大人たちが姿を現した。清矢郎もその中に居た。

彼は声を掛けてくれるだろうか。こんなところまで来るなど、怒って無視するだろうか。あさが眼の前の金魚を見つめながら小さくなって俯いていると、彼らは二人の傍を話しながら通り過ぎていった。そもそも自分たちの関係は、人に言わないようにしている。それは清矢郎があさを心配してのことだと知っている。ここには清矢郎の両親の知り合いだって居るかもしれない。だとすれば来るのを歓迎されたり、人前で話し掛けてもらえるわけなどない。

あさが自分の愚かさを噛み締めながらちらりと顔を上げると、通り過ぎざま清矢郎と一瞬だけ眼が合った。

「――」

その表情は、怒ってはいないようだった。やや驚いたように眼が見開かれている。その唇が小さく動いた気がした。

――『あとで』？

そう見えた気がした。携帯電話で連絡をしてもいいのか、くれるということか。あさぎの胸がとくんと高鳴り、金魚が弾け飛んだ。

「優しい人だねー」

それを代弁したのは透流だった。

「こっち見てたね。気付いてたんだ！」

あさぎの腕を組み、柔らかな身体を押し付けながらはしゃぐ透流の清涼な匂いに、あさぎの身体が熱くなる。この火照り出した身体を今の時間から、まだ皆と一緒に居る彼に委ねることなどできないので、透流の肌のぬくもりに頼るように寄りかかる。次に会える時はあの広い胸に縋りつきたいなと思いながら。

もうこんなことはしないでおう。清矢郎には清矢郎の世界がある。そこで一生懸命学んで、社会の一員として人のために何かをしている。それを邪魔してはいけない。自分も自分の力で頑張らねばならない。彼は自分を忘れているわけではないのだ。それが分かっただけでも、ここに来てよかった。

これまで困らせてきたように、女のあさぎと違い、男である彼にとってはあさぎや他のものとは、順番をつけられるものではないのだろう。だけど清矢郎の世界の片隅に自分は生きているのだと、あの視線で教えてくれた。彼だって時にはあさぎの世界を共有してくれる。

清矢郎に憧れていたかもしれない透流を思うと心苦しいものの、彼女の幸せも心から願うから。譲れないものはあるけれど、彼女のこと大好きだから。

「うん。ああいう人に、なりたい。透流ちゃんみたいにも、なりたい」

それを聞いた透流も、顔をくしゃくしゃにして笑うと、「私もあさぎちゃん、大好きだよー」と彼女をぎゅっと抱き締めた。スポーツセンターから出て行く人々は、一体何をしているのだときゃあきやあ騒ぐ女子高校生たちを眺めているが、彼女たちは彼女たちでとても心地良い時間を過ごしていたのだった。

第54話（番外編） 恋走情流（前書き）

※リクエストもいただいた、透流視点の番外編になります。

第54話（番外編） 恋走情流

幼い頃から両親に言われるまま当たり前のように、剣道と日本舞踊を習っていた透流。だが彼女はそれらに決して嫌々通っていたわけではなかった。冷たい床も最初は重く感じた竹刀も、着物を身に纏って姿勢をよくした時の空気も、耳に響く様々な音も幼心にとっても心地良かった。

変わり者だと言われてばかりの学校生活よりも、師や同じ目的の仲間と稽古をしている方がずっと楽しかった。些細なことに流されず、その世界に心を集中することは爽快な気分だった。それに一人っ子の彼女に対して厳しい両親だったが、稽古事を黙々と頑張る透流の姿をいつも認めてくれていた。

しかしこれまで脇目も振らず生きてきた透流であったが、十七歳を迎える今、進路や今後のことも考えるようになってきた。一人の人間として社会に出なければならぬ。この居心地の良い空間から出て、自分で行動しなければいけない時がやってくる。

ふと周りを見てみれば、色気づいた少女たちの姿。そう言えば、自分も女だった。自分も同じ身体を持っている。自分は将来、どんな「大人の女性」になりたいのか――。

.....

「ありがとうございました」

透流は大きな声でそう言うと、面をつけた頭を深々と下げた。相手も高い位置から静かに頭を下げる。そこで厳粛な空間は終わり、相手の男――背の高い透流よりも更に長身の青年は面を外した。今日の稽古はこれで終わりなので、彼女もそれにならって防具を脱ぐ。

「お茶淹れてきます」

「おう」

稽古をつけてくれる年長者、しかもこの道場の師範代にそうするのは当然だ。透流はそう言って道場横の自宅へと戻り、私服へ着替えた後に同じく着替え終わったその青年の元へと湯茶の準備を持って戻ってくる。

「こんなところでお茶飲んでないで、家に上がらばって母さんいつも言いますよ」

「挨拶はして帰るけど、上がるのは申し訳なくてできねえよ。それにお前もそんなに気、遣わなくてもいいんだけど」

「それはいけないって父さんが。走輔さん、わざわざ仕事休みの日に稽古つけに来てくれるんだからって」

「……」

走輔と呼ばれた青年は困ったように眉間に皺を寄せた後、透流の入れたお茶を啜った。

「その割にお前、淹れ方下手だな。薄い」

「そうですか。この前よりお茶の葉増やしましたが」

「蒸らす時間の問題だろ」

「そういうものですか」

透流は納得したように頷いた。こうしたやりとりはいつものことである。剣道のことでだけでなく、生活上の指導も彼にはよくされているのだ。

父親は一人っ子の透流に剣道を教え、男の子のように育ててきた。それを見た母親は女の子なんだからと自分が長年習っている日本舞踊の師匠の元に透流を通わせたものの、女性の心情を表現するしとやかな動きができていないいつも注意されている。

そして今の走輔の言葉に見られるように、女性であればつい期待されてしまいそうなのが透流は全て苦手だった。仕事の傍ら道場の運営をしている父母は、透流を厳しく躰けてきた反面、忙しにかまけて放っておくことが多かったからかもしれない。そんな透流を心配し、子供の頃から道場に通っていたこの古賀走輔が、いつしか彼女の世話を焼くようになった。

剣道も中学、高校と進学を機に辞めていく子供が多い中、走輔は段位を取り続けたいと社会人になってもこの道場に通っている。成人してからは師範代として透流の父親と共に門下生を教え始め、今でも高校生になった透流をしごいてくれる大切な先輩でもある。

透流には将来の夢がまだ描けていなかった。剣道も日本舞踊も好きだったが、免許を取りたいというほどの覚悟はない。身体を動かす楽しさは存分に感じているが、それ以上の何かを求めるだけの情熱はなかった。そういう意味では走輔の方がずっと芯が通っているので、父親は彼に道場を継がせるのだろうと透流は昔から思っており、両親にもお前が跡取りになれという重圧はかけられなかった。両親はただ、娘が自分たちの好きなことを好きになってくれたことが嬉しいだけで、後は透流の自由な意思に任せてくれている。それはありがたかった。

だからこそ走輔は透流の家族にも可愛がられており、彼女にとっても家族の一員のようなものだった。よって会話が途切れたところで、今日はこんな質問を試してみた。

「時に走輔さん、お付き合いされている人はいますか？」

すると、次の瞬間にお茶を吐かれた。可哀想なほど咽ている。聞いてはいけないことだったのだろうか、それとも、

「すみません。お茶そんなに不味かったですか」

「……いや、そうじゃなくて……」

秋も深まる日曜日の夕方。誰も居ない道場の片隅に座り込んでいた二人だったが、走輔が継るものもなく前のめりになって苦しんでいるため、透流は彼の広い背中を撫でてやった。

「何でいきなりそんな質問するんだよ」

しばらく休んだ後、彼は正気を取り戻したようで、透流の手を戻させるとまた元のように背筋を伸ばして尋ね返した。

「今まで剣道のこととか日舞のこととか、食い物がどうか、学校の成績がどうか、昔の時代劇がどうかしか話さなかった奴が」

そのとおりである。走輔はこうした話題にも付き合ってくれるが、同級生とはどうも会話が弾まない。だから彼と話していると、透流も楽しくて時間を忘れてしまう。ただ二年生で同じクラスになった、少々不思議な雰囲気だが人当たりのよい友人は、この手の話にも興味を持ってくれるのでありがたいのだが。

「うーん。私も十七歳になるので、そろそろこれじゃいけないような気がしまして」

透流は腕組みをして、今の思いを正直に答える。

「剣道は好きだけど、父さんや走輔さんみたいに誰かに教えようとまでは思っていない。ましてや日舞の方は表現が苦手だから、ものにはならないでしょうし。だから将来何になろうかと思った時に勿論仕事にも就くけれど、女の身体に生まれたんだし子供を産むなどもっと色々できることがあるんじゃないかって考えまして」

「……成程」

走輔にも変わり者だと言われているが、慣れているので反応は気にしない。それに彼は年上ということもあって、余計な茶々を入れずに話を聞いてくれるから。

「だからそのひとつに、恋愛もあるかなと。流石に私もこの年ですから、そんなにいいものかなと思うようにはなりました。それに二年生になって仲良くなった子が、恋してるからかな、とても可愛いんですよ。学校では大人しいのに、その人のことになると行動的になって、きつとその人の前ではもっと大胆になるんだろうな」

「それで？ お前もそうなりてえの」

「分かりません。でもそこまで人を駆り立てる恋心って何なんだろう、と私も武士道や日本の芸能文化以外にも興味を持ってみるわけですよ。実際、踊りの方は女心が全く表現できてないって師匠にも母さんにも嘆かれてますし」

「で、俺をサンプルにしたいと」

「すみません」

「ほんとにな」

透流はすぐに謝ったが、走輔の機嫌が何やら悪くなってしまった。そんなに聞いてはいけない質問だったのだろうか。もしかしたら、恋人と別れたばかりなのかもしれない。そうだったら申し訳ない。いやそれとも剣道一直線だったので、彼女の一人も未だにおらず、実はコンプレックスがあるのかもしれない。

ということは彼も未経験か、と妙な連帯意識を持ってしまう透流。女を口説く走輔など、透流には想像がつかない。しかし友人である、あの少々地味なあさぎも経験しているらしい性の――営み。人は見かけにはよらないので、走輔とて分からない。だが彼ならば剣道、または竹刀が恋人という名言くらいは吐きそうだ。

「何か変な想像してねえだろうな」

すると自分の考えを読んだように走輔に睨まれ、透流は首を竦めた。いつも正直にものを言いすぎて、彼に拳骨を食らうこともある。しかしそこで話が終わるかと思っただ、走輔は湯飲みを盆の上にとんとんと置くと透流への質問を続けた。

「で、実際、透流はどうなんだよ」

「はい？」

「好きな奴とか居たりするのか」

彼らしいストレートな問いに、透流は首を傾げるばかり。そんな彼女をじっと見ていた走輔だったが、急に自嘲的に笑い出した。何で彼が笑ったのか分からない透流は、馬鹿にされたのかもしれないと思い、焦って言い訳をした。

「でも、ほら安藤先生の道場、知っていますか？　××市の」

「ああ。覚えてる。俺も一度先生に言われて通ったことあるから」
ちなみに走輔の言う「先生」とは透流の父親のことである。

「そこに、この間久しぶりに行ったんですよ」

「何で」

理由を話すと更に馬鹿にされるような気がした透流は、わざと真相を隠して告げる。

「昔、そこで会ったことある人がいないかな、と」

「どういうことだよ」

ひゅううううと、外の秋風が二人の間に侵入してきたように場の空気が冷える。走輔は昔から機嫌が悪くなるとすぐに表情に現れる。そのくせ理由を言ってくれない。正直者と言えば正直者で分かりやすいのだが。どうして彼が怒っているのかよく分からないままの透流であったが、自分の考えを素直に伝えることしかできなかった。

「だから私だって、初恋みたいなこと、したことあるかもってことです」

もしかしたら走輔は剣道が恋人かもしれない。どうだ、こっちは生身の相手だぞ、と透流はTシャツを押し上げている胸を逸らした。幼い頃から自分を鍛えてくれ、感謝も尊敬もしているが何処か対抗意識も抱いている走輔に、勝ったような気になっていた。

その効果はあったのか走輔の機嫌が益々悪くなってしまったのが、長い付き合いだ、彼の吐息ひとつで分かる。しかし何故こんなに苛立っているのだろう。彼も透流と同じく、性の悩みを抱いているのだろうか。それにしてももう大人なのだから少年のようにむきにならなくてもいいだろうに、と未成年としては思ってしまう。

しかしいつの間にか彼との「競争」のように考えていた自分に、結局自分もクラスの女子と同じようないやらしさがあり、友人のあさぎにもいくらか劣等感があったのかな、と透流は少々反省した。すると走輔のふて腐れたような声が耳に届いた。

「だから？」

「だからって何ですか」

「それでお前は どうするんだよ」

「どうって」

「切ないとか、そいつとどうこうなりてえとか、実際進展があったとか」

「別に何も」

「は？」

透流がいつもどおりの自然な表情でしれっと答えるので、走輔の方が肩透かしを食らっている。

「実は私もあまり記憶が定かでなくて、そこに居た人が子供の頃すごいなと思った人に似てるな、くらいしか思わなかったんです。そのうえその人が、なんとクラスの友達の彼氏だったんですよ。だったらもう、『無かった』ことにした方がいいじゃないですか。言い換えれば、私なんてその程度の気持ちしか抱いたことがないんです。ごめんなさい。結局、私にはまだ、恋ってよく分からないです」

年長者の走輔に一瞬でも「勝った」などと生意気な気持ちを抱いてしまった自分を恥じ、透流は見栄を張ったことを謝った。

「謝ることじゃねえけどさ」

大人気なく不機嫌そうな態度を取っていた割には、走輔は複雑な顔をして頭を掻き始めた。そして大きなため息をつく、思い切つて、といった様子で顔を上げて透流を見た。その勢いに押されるように透流も再び顔を上げた。

「とにかく、焦るなよ」

「はい？」

「俺らの時もそうだったけど、高校生って何も考えずに突っ走る奴ら一杯居るけど、お前はお前のままでいろ。ご両親が教えてくれたように、お前が信じるように、今のまま周りに流されねえで、お前のペースでお前が正しいと思うことすればいい」

「はい」

「だから焦って、適当にその辺の奴らと恋愛ごっことか、軽々しいことすんなよ」

「しませんよ！」

流石は走輔だった。彼の言うとおりだ。彼は年長者としていつもこうして透流に道を示してくれる。「他人」だからだろうか、場合によっては世代が違い、忙しそうな両親の言葉よりも的確で分かりやすく、そして心に染みてくる。偉そうに言われても、透流のこと

を考えていてくれることがよく分かる。

ただ今のことはいくら恋愛に興味があってもそんなことをするつもりはなかったもので、透流も少々むっときたのだがそれは走輔にも伝わったらしい。

「別に透流のこと、信じてないわけじゃねえけど、お前も女だからな」

その言葉にいつもと違う何かを感じ、透流は引っかかる。ややあって、いつも自分のことを子供扱いしていたくせに、急に「女」と性差を突きつけられたからかな、と理解した。その時だった。

「だからお前って何も分かってねえし、無防備で心配だから、変な相手にするくらいなら、俺が」

——へ？

「相手に、なるから」

……この表情は何なのだろう。窓から入ってくる夕日に照らされた走輔の顔も、声もいつものように怒っているだけなのに。透流の眼を真っ直ぐに見ているところも変わりないのに、どうしてだろう。不思議だった。自分の奥深くまでを見つめられているような気がして、透流の身体がぞわりとした。

だが居心地が悪く気恥ずかしい割には、身体の下の方からそわそわとくすぐったいものが這い上がってくるのだ。——何言ってるんですか、どうしたんですか、という言葉を返そうかとしたものの、そんなことは必要なかった。

走輔のことは透流なりによく知っている。彼も透流と一緒に愚直で、正直すぎる人間だ。

だから今言った言葉に、嘘偽りなどひとつも、ない。

こんな会話を彼と、いや「男」としたのは生まれて初めてだったが、透流は相手が走輔であるからこそ、彼が本心を口に出していると

すぐに分かった。信じるという概念すら要らない。本能で、もう分かっているのだ。

ではこの言葉が真実ということは、彼が言いたいことは何なのか。透流は走輔の眼を負けじと見つめ返す。自分の恋の相手に彼がなってくれると言った。つまり、

「恋愛の指南もしていただけるんですか」

透流が大真面目にそう言うや否や、

「違うっ!!」

走輔は身体のバランスを大きく崩した後、やけくそのように透流に怒鳴り始めた。

「つうか、違わねえ! それなら、いいか。他の奴に絶っ対『指南』なんか頼むなよ! いや、お前が頼みてえなら、それでいいよ。お前がそいつのこと好きなら……って、それはそれで許せねえけどな。でも俺は指南とかそういう意味で言ったんじゃないやねえ。そういうもんは教わるんじゃないくて、お前がしたいかどうかだろ。だけど俺はお前以外にそういうこと教えようとも思わねえんだよ、分かるか!」

「えーと……」

昔からよくどやされていたが、今、自分に落ち度があったとは思えず、説教されても透流も困ってしまう。何を彼は怒っているのか、そして何を言いたいのか。

だが走輔は透流以外にそんな心配はしないと言う。それにはほっとした。尊敬する師範の娘だからかもしれないが、これからも走輔は自分のことを導いてくれるようだ。彼に見捨てられれば、透流もきっと悲しい気持ちになるだろう。

「ではご指導、よろしくお願いします」

「って分かってねえよ!」

「分かってますよ。私だって走輔さん以外に頼むつもりはありません」

「……」

「本当です」

分かっているないと頭ごなしに怒鳴られた透流だが、自分も彼に対して誠実な答えを言っているのだと、唇を曲げて走輔を直視した。彼は透流の眼をじろりと見返したが、やがて逸らしてしまった。

いつの頃からだろう。走輔が悪いことをしたわけでもないのに、彼の方から眼を逸らすようになってしまったのは。それとも実は気付かないだけで、自分の方が悪いのか。秋の涼しさの中、透流が不安になっていると、走輔が再び自分の眼を見たので安堵した。だが何やら切なげな瞳をしていて胸が痛んだ。

「本当に、分かっているのかよ」

意味が分からない。自分は嘘など言っていないのに、どうして何度も疑われなければならないのか。透流が弱りながら今一度頷くと、彼は遂に観念したように吐き捨てた。

「俺がお前にそうしてえってことは、俺がお前にそういう感情持ってるってことだろうが」

そう言うとき走輔は立ち上がった。

「六つも下の高校生に社会人がこんなこと言っちゃいけないことくらい、分かっている。分かっているけど、こっちもずっと悩んでたからお前の変な発言につられた。でもお前は俺には逆らい辛いだろ。だからこれは、卑怯なことなんだ。先生にも小さい頃から世話になって、色んな心得教えてもらってきたのに、何やってんだって思う。だから剣もぶれてたと思うけど、もしかしたら先生にはもう分かっていたのかもしれない。でも、言ったことは取り消さねえから」

そんなことはないのに――。自分の存在が彼を悩ませていたようであるが、透流は走輔に彼自身を責めて欲しくないと考えた。自分の気持ちにひたむきでいて、何がいけないのか。迷いを真正面から打ち砕こうとする姿勢が、透流が彼に学んできたことなのに。走輔の言葉に透流の胸までも締め付けられてきた。

不思議なことに、一切の嫌悪感がなかった。たとえ彼が予想外のことを言い、自分に対して感情をぶつけていても。そしてどうかそ

んな顔をしないで、いつものように元気に自分を叱って、そして厳しいけれど優しい彼に戻って欲しいと願った。

「だからお前が何も知らない子供だからってそれにつけこんで、なんて考えてねえ。お前の気持ちがついてきてからでいい。相手が俺でいい、指南とか言うんじゃないかって俺と恋愛したいって思えるようになるまで、待ってるから」

そう言うのと走輔は透流の頭の上に、ぽん、と手を置いた。稀に褒められたり慰められる時にもらった時と同じ手なのに、どうしてだろう。その重みも温かさも大きさも、そして初めて感じる微かな恐怖も、何もかもが違っていた。

「——なんて格好つけても、他の奴の方に行かれたら、腹立ってたまんねえけど。だけど剣道と先生には嘘つきたくねえから、だから稽古は稽古で、これからもきっちりつけてやる」

手が離れた。透流はほっと息をついた。微かに笑う口元。彼はこんな唇の形をしていただろうか。だが今の言葉をまだ処理し切れていない透流のことを、待っていてくれると言われて何より安心した。剣道が大好きだった。それを教えてくれた父親への尊敬はもとより、父親に代わって面倒を看てくれ何年経っても情熱を失わないこの青年のことも、失いたくない存在であることは確かだから。そのために無理のない方向に、自分の気持ちが「進化」していくこともあるだろうか。

オレンジ色の光が射す道場から走輔が消え、彼の残した言葉を透流が約十回、頭の中で反芻した後だった。

——まさか走輔さんが、私にこ、こ、恋してるって、ことなのか……！

彼の自分への気持ちがある表現できるのだということに透流はようやく気付くと、へなへなど道場の床に崩れ落ちた。いくら精神統一のためとは言えども、今だけは動揺して剣が振れそうになかった。何より身体に力が入らず、竹刀すら持てないだろう。そしていつの

間にか生理的に反応していた身体が恥ずかしく、道場に掲げられている理念の文字すら罪悪感で見られない。

そして言われてみれば友人のあさぎの恋のシチュエーションと同様、走輔もまた自分にとって「幼馴染」と言えばそうなのであった。つまりは考えもしなかった相手が、実は恋愛候補として長年傍に居たのである。

——こ、これも『運命』って、やつなのか……！？

恋とは摩訶不思議なものだと、透流は心から思った。

「あさぎちゃん、どうしよう……」

次の日、杉原透流は人生初の恋愛相談を同じクラスの友人、山本あさぎに打ち明けたのであった。

第55話 少女から大人へ

高校三年生に進級した、あさぎ。卒業まであと一年。大学生となればまるで世界が変わる。十八歳を超えると成人に近い扱いとなり、成人してからは尚更様々なことが許可される。自己責任で何でも出来るようになるのだ。

これまでの守られた空間もそれなりに居心地よかったが、恋を知って以降、あさぎは早く大人になりたいと願っていた。自分の恋人が先に成人するからということもある。焦っていた。早く誰にも憚らず堂々と清矢郎と付き合いたい。できれば毎日一緒に居たい、一緒に住みたい、家族になりたい――物静かながらも思い込みの激しいあさぎは、十七歳にしてそれほどの願望を持っていた。清矢郎という青年には、十分その価値があると思っていた。

きっと両親はこのように周りが見えていないあさぎを心配して、今全てを打ち明けたとしても交際を認めてくれないかもしれない。そこはあさぎも冷静に考える。清矢郎が身内である以上、すぐに結婚できるわけでもないのだから親戚付き合いのことも気にしそうだ。何より高校生で身体の関係を持っていること自体が許されないだろう

しかし清矢郎のことは母親も気に入っている。得度も知らない男と付き合うより反対されないかもしれない。逆に身内だからよく見えているだけではないか、まだ幼いから周りの男性が眼に入っていないだけではないか、と言われる可能性もある。心配性の母親に言われそうなのは次から次へと想像できる。

どうなろうとも家族を説得するつもりがあさぎだが、やはり自立できる年齢になってから話した方が両親も信用してくれるだろう。だからあさぎは早く高校、そして大学を卒業したいと思っていた。急ぐ分、その時期に学ぶべきことを疎かにしているかもしれないとも。

ある朝、あさが三年生の教室に入ると背後の黒板にいたずら描きがされていた。女子の名前が何人か書かれている。近くの席の女子が「男子に順番つけられてるんだって」と、ぽかんとしているあさが教えてくれた。そこにあさぎの名前があるわけもなく、自分には関係のないこととあさぎは何気なさを装って席についたが、心の中はもやもやとしていた。

何やら気持ちが悪い。これは劣等感か。懸命に生きていても、魅力がなければ人から評価されない。しかしこれは容姿や愛想の問題だけではないように思われる。魂が輝きを放っていないければ、誰にも相手にされないのではないか。

これが学校外でのいたずら描きであれば女子生徒ももっと恐がったかもしれないが、所詮男子の猥談の延長だろう。だからあさぎも知らないところで男性に変な眼で見られているという恐さよりも、自分が女性として評価されなかった歯痒さの方を強く感じていた。気にしないでおきたくとも、眼の前をちらつく金魚に欲求不満状態になっていることを自覚させられてしまう。

つまりは「自分も注目されたいな」という羨望だ。名前を挙げられた少女らは、何かしら人目を引く魅力を持ち、相手の心を高めることができる力を持っているのだ。当人にしてみれば性の対象として見られているようで不愉快かもしれないが、彼女たちが肉体だけで選ばれたわけでないにあさぎは感じている。たとえば胸が大きくても、話題にならない大人しい女子も居る。それ以外の憧れる要素が黒板の少女たちにはあるわけだ。

だが「そちら側」に自分が行くことは到底無理だ。それはあさぎも中学生時代に身を持って知った。それでも清矢郎と付き合い始めたことで、あさぎの世界は変わった。

——私にはせいちゃんがいるもん。せいちゃんだけが、私のことを好きでいてくれればいいもん。

そうお守りのように自分に言い聞かせる。自分にも魅力があると

暗示を掛けているのではなく、自分などでも誰かの支えになれるということを心の拠り所にしていた。しかしたった一人からだけ必要とされるのではなく、多数から憧れられているという事実はずいことだとも思う。

そうは言っても、黒板に他人の名前を書いて、にやにや笑っているような男子のことは好きではなかった。「あさぎは潔癖だしねえ」と夕映あたりは言いそうだが、清矢郎ならきっと「興味ない」と切り捨てることだろう。彼も男性なので本心は分らないが、知らないところで人のことをとやかく言っただけの結果を人目に晒すことを、彼は好まなさそうだ。そう言う意味であさぎは最初に気持ち悪い、と感じたのかもしれない。そんな清矢郎の澄んだ心が好きだった。

こうした出来事があると、益々早く高校を卒業したくなる。大人になるに従って価値基準が変わっていくことに期待を抱いて。もちろん女性である以上、男性には評価され続けるだろう。だが今度は性的な魅力だけでなく評価自体がもっと多様化するはずだ。

だからと言って、何の取り得もないあさぎがすぐに人に認められるほど甘くはないだろう。社会に必要とされることはより難しく、自分の無力さに失望するかもしれない。やはりあさぎの根底が変わらない限り劣等感は抱き続けそうだ。それでも希望を持つくらいは、悪いことではないだろう。自分のためにも。

まだ早い時間のため黒板の字は残ったまま。間もなく今年も同じクラスだった透流が教室にやってきた。彼女は黒板を視界にすら入れず、あさぎと挨拶を交わして席につく。彼女にこの出来事を話したところで、「へー、そう」と言われて終わりそうだ。本当にどうでもいいのだろう。そんな透流のこともあさぎは一目置いていた。

他人から見た自分を気にし、仮初の投影を欲しがらるあさぎ。本当はそうではなく、透流や清矢郎のように絶対的な自分だけの生き方を見つけないのに。

結局評価される女子のことや、する男子のことは関係なく、そう

なれない自分を嫌悪しているのだ。今のままの自分では、大人になってもきつと同じ事を繰り返す。

焦りと願望。それでも清矢郎が傍に居てくれるうちは、あさぎも心の安寧を得ていた。

.....

——それなのに。これだけ素敵な恋人がいるのに、どうしてだろうか。醜い気持ちが膨らんでいくのは。

たゆたう金魚。——私を、助けて。しかし幻影の金魚は助けくれない。

あさぎの気持ちを囁し立てるように、ただゆらゆらと陽炎のように揺れるだけ。時には火の粉を巻き上げた炎のように。

また別の日の放課後のこと。今年も違うクラスになったがまだ仲の良い夕映と一緒に帰ることになったあさぎは、彼女が高校一年生から二年間、付き合っていた男子と別れたという話を聞いた。男子と言っても彼はひとつ年上のため、もう青年と呼んでいいだろう。

「卒業して専門学校に行ったけどさあ、あんまり勉強もしてないみたいだし、やんなっちゃって」

進学したものの遊んでばかりの彼は、どうやら新たな出会いや経験に心を浮つかせているようだ。だから夕映が別れを切り出した時も引き止めはしたものの、そのうち連絡もこなくなったらしい。

「物事深く考えない人だったから一緒に居て気楽だったし、別れる時もこじれなくて助かったけどね」

ファーストフード店で淡々と話す夕映が、あさぎには大人の女性のように見えた。二年も付き合い、身体も許した相手と別れた。まだ十七歳の少女だというのに。それなのにあさぎの前では落ち込む様子も見せない。

「そりゃ寂しくないって言えば嘘になるけどさ。相手に燃えられな

い、自分にも燃えてもらえない人の傍に居てもつまないじゃん」
自分自身に言い聞かせているようにも聞こえるが、そのとおりである。夕映と付き合っているのだから相手も大人であるように感じていたが、所詮世間を知らない子供だったということだろうか。もっと素敵な人を見付けた方が、夕映のためになるような気があさぎにはした。

「夕映にはもったいい人見付かるよ」

月並みな言葉しか言えないが、彼女には幸せになって欲しいと心から思う。

「そうね。早く見付けたい。あさぎはいいなあ」

紙コップの中の氷をかき回しながら眼を細める夕映に、思わず背筋をぞくりとさせたあさぎ。

——そうか。私の方が、幸せなんだ——。

それは比較するものなのだろうか。恋を失い、落ち込んでいる友人に一体どんな顔をすればいいのか、どんな感情を持てばいいのか分からない。

第一夕映も幸せになりたいと思う割には、清矢郎のような生真面目な男性は好みではないらしいことが分かってきた。いつそそういった青年を選べばいいのに、と思ってしまう。そうしないということとは、彼女の心にも何かしらの願望があるのだろう。あさぎの金魚のように。その正体は分からないが、これまでそういう男性を選び、その傍を居心地よく思う、何か心の働きがあるはずだ。

そう思うと夕映の幸せとは何なのだろうか。幸せになりたいと伴侶を探すのに、その人とはなれない——。永く続く愛を手に入られていない薄幸な夕映が、この時あさぎにはとても頼りなく見えた。今まで「大人」の女性のように憧れていた夕映。マニキュアは塗っていないくとも整えられた光る爪を見れば、自分にはない「女」としての憧れ、黒板に名前を書かれた少女たちを感じたものと同様の羨望は捨て切れないが、身体を預けた相手とは心が離れていく夕映。教師の荒芝が夕映について、「あの子も時々危なっかしいけどな」

と言っていたことを思い出す。

あさぎは不思議な気分に陥っていた。欲求不満というわけではないが、この感情があさぎの欲望に関係していないことはないのも、赤い陽炎が夕映の後ろで薄く揺れている。

どうか、彼女にも幸せになって欲しい。まだ学びたいならば今は子供を作って欲しくはないし、この年で結婚すれば相手が余程しっかりした人でなければ夕映や子供が辛い目に遭ってしまう。そうではなくとも、自分の身を大切にして欲しい。自分は清矢郎と何度も肌を重ねているくせに、あさぎはそんなことを祈っていた。パートナーが固定されているのは重要なことだから。

しかし夕映を「薄幸」と言ってしまうのも失礼だろう。それこそ彼女を見下げているようではないか。夕映はいつも空を駆ける白い鳥のように自由で、「後悔」という言葉をあさぎと違い一度も口にしたことのない。それでも今のままで彼女はいいのだろうか、と不安に思ってしまうのは、

「私も、幸せになりたいなあ」

夕映自身がそう言って寂しそうに笑うからだ。誰だって自分だけを一生大切にしてくれるかけがえのない相手に出会いたいものだ。だからこれは優越感ではなく、彼女を純粋に心配しているのだと思いたい。

どんな言葉で元氣付ければいいのか。あさぎはもどかしく申し訳ない気持ちで、大切な友人の話をただ黙って聞いていた。

二年連続クラスが違うため一年生の頃よりもずっと話す機会が減った夕映だが、清矢郎と付き合った当初からいつでも親身になって相談に乗ってくれた、よい友達だ。だからあさぎはこれから友達で居たいのだが、彼女の役に立てないようではそのうち愛想を尽かされてしまうだろうか。現に夕映は新しいクラスではあさぎとは親しくなりそうにない、華やかで澁刺とした女の子と一緒に居る。

大学に入れば互いにたくさんの人と出会うのだし、全てをこの手

から逃さないことは無理かもしれないが。そのうえ、彼女よりも自分の方が実直だから幸せだ、などと卑小なことを考える自分などは――。

・・・・・・・・・・

こうした醜い感情を、あさは更にもう一人の友人に対しても抱いてしまっていた。

二年生から同じクラスの友人、透流は十八歳を目前に初めての恋をしたようで、最近よくそわそわしている。それを可愛いな、と思うあさは自分も清矢郎のことを相談した時に、夕映に同じように言われていたことを思い出す。

透流にも幸せになって欲しいものだが、相手は社会人のようで一筋縄ではいかないようだ。だがやはり素敵な子だから大人の男性も惹かれるのかな、とあさは羨ましくなってしまう。

清矢郎が居るのに、何を考えているのか。無論相手の人とうとうなりたいたいではなく、興味もない。だがそんな透流を見て、近くの席の男子が「杉原って最近さあ……」云々と透流の噂話をするのを聞けば、また複雑な気持ちになる。透流はその相手と恋をすることで、益々魅力的になっていくというのに。清矢郎以外の人によく思われなくてもいい、というのは本心なのに、どうして人に褒められる女性を見てそうなりたいと思ってしまうのか。

自分でも自分のことがよく分らない。

優しい恋人に愛されていて幸せなのに、不幸な友人を見ては私の方が、と優越感を抱き、ちやほやされる友人を見ては、自分を磨く努力をしてないからだ、と劣等感を抱く。あさは自分自身に呆れていた。

金魚はいつだって助けてはくれない。六年前からずっと、美しいまやかしで心を慰めるだけ。自分がつまらない欲に翻弄されていることを、緋色の魚影で示すだけ。眼を閉じても瞼の裏に影が残り、

眼を開けてもやはりそれは残っているから、あさぎは逃げることもできずにただ早く大人になりたいと受験勉強に励み、己と向かい合い続けるのであった。

・・・・・・・・・・

我執からは逃れられない。欲望は尚も尽きずに、金魚は青竹の中にぬるりと滑り込む――。

「私って性格、悪いよね」

またある晴れた日曜日。清矢郎の横であさぎは大きなため息をつくが、彼は「そうか？」と言うだけだった。本当に心の広い人である。こんな風になりたいものだ。

「俺だって、ろくな奴じゃねえし」

「どうして？」

あさぎは首を傾げた。ちなみに此処は車の中だ。それは昨年からアルバイトをしてお金を貯めた清矢郎が購入した車で、止まっているのは人気のない山道。都市部も近いが、少し走ればすぐに山間部に入るような地方に住んでいるのだ。あさぎに聞き返された清矢郎は困ったように頭に手をやった。

「……高校生の子、こんなところに連れてきてさ」

「もしかして……」

車を購入したのはサークル活動の移動が便利になり、アルバイトの選択肢も広がるからだと聞いていたが、まさか。

「月一度しか、会えねえなら」

清矢郎の言葉にあさぎの視界の金魚が増える。浅ましくもその言葉に女性としての欲求が満たされる。

あさぎが部活もほぼ引退状態で休日に学校へ行く用事もなくなり、両親が一層受験の心配をするようになったことから、土日に会うのは月一回と回数を減らしている。平日の放課後もあさぎが制服のため短時間、話をする程度だ。前より自制するようになったのも、二

年も付き合って心に余裕ができたからだろう。清矢郎への執着が将来を見据えて前向きに落ち着いたことにあさは安堵しているが、寂しい時もある。その分休日は両親に嘘をついても密度の濃い時間が過ごせるよう、清矢郎の車に乗って二人きりになれる場所に行くようになったのだ。

若葉の色濃い六月。あさぎも十八歳になった。昔よりは人目を気にしなくなったが、それでも高校生と知られれば騒動になるだろう。だが折角の逢瀬だ。止められない。清矢郎の言葉に、あさぎの胸が期待に膨らむ。

「もしかして、私とゆっくり会いたいから……車買ってくれたの？」
自意識過剰なことを聞くのもどうかと思うが、それが真実であれば嬉しい。すると清矢郎はぶすりとした顔ながらも、「ん」と頷いてくれた。

なんと可愛く、いとしい青年だろうか。あさぎは思わず清矢郎に抱き付いていった。車の後部座席で寄り添う二人。高校生にはあるまじき姿と分かっていても、何か言われても従兄だから、と都合のいい時だけ親族を理由にしようと考えていた。

それでも服を脱いでしまえば、職務質問された時に言い訳はできない。だから着衣したまま、触れたい部分だけを現して。自分を最も安心させる、最も存在を確認できる、かつ蕩けるほど甘美な時間を過ごそう。

細い身を抱き返される。「だいすき」とつぶやけば「ん」と答えてくれる。「せいちゃんも、すきって言って」と甘えて請えば、「……好き、だから言わせんな」と照れたように呟かれる。長い髪を乱されながら、言葉を封じるように顔を重ねられる。

——せいちゃんは、こんな私でも好きでいてくれるんだ。

胸が苦しくなる。私なんかをどうして、と切なさ泣きそうになる。滲んだ視界の中に、金魚の姿がぼやけて見えた。初体験の時は赤いカーテンの如くあさぎの視界全てを覆っていた金魚だが、今は車のウィンドウ越しに、緑の枝を縫って泳いでいるところが見える。

まるで眩暈でもしているかのように、幻影は遠く離れたところぐるぐると廻っている。

興奮のあまり「けっこうんしたい」とあさが眩けば、「分かっている。どうにかするから、だから今は我慢しろ」と苦しそうに答えてくれた。

「ほんと？　じゃあ我慢する。頑張る。寂しいけど――」

「ごめん。でもお前もちゃんと卒業しろ。勉強なんて今しかできないんだから。この先もずっと、一緒に居るんだから」

清矢郎も行為の最中で気が昂ぶっているのだろう。耳元で囁かれる言葉は麻薬のように、あさを誘惑する。しかし彼はあさを騙すために言葉を発しているのではなく、彼女を幸せにすべく全力で誠意を尽くしてくれている。こんな自分などに――。

だからだろうか。どれだけ優しくしてもらっても、自信がないからとあさは飽くなき欲求不満に身を焦がし、友人にまで変な感情を抱く。

「せいちゃん」と縋るように頬を寄せる。「清矢郎」と彼にも感じてもらうように胸に顔を埋める。

これ以上、何が足りないのだろう。毎日一緒に居られないという寂しさ故か。二年もの間優しくされすぎて、感覚が麻痺してしまっただか。

何処までも欲望に溺れる金魚。底は果てしなく見えない。当初あさがに寄り添っていた小さな金魚たちは愛を知ってからは二人を取り巻くばかりの大きさに変化し、最近では金魚の形を留めずただの赤い和紙が千切れたように細く薄く、空の光すら透過するようになってきた。

求められなくても不安になる。求めてくれても不安になる。一体私は何を望んでいるのか――。

不安定な心はまだ金魚を見せ続けるが、十八歳の夏を迎えるあさぎには、これまでとは少し違う光景が見えるようになってきていた。

第56話 脱皮、蜘蛛の巣

「いたた……」

あさぎは首筋に手をやると、顔を軽く右に傾ける。傷みを意識させられるからか、余計に汗が湧き出る気がする。

いよいよ高校生活最後の、そして大学受験を控えた夏休みがやってきた。それでも昨日は一ヶ月ぶりに清矢郎に会った。一ヶ月ぶりに、彼の車で肌を重ねた。結果、このように、身体が痛くなってしまうわけだ。

——変な格好で、したからだ。

狭い車の中のことだ、仕方ない。外や公共の場所での行為よりは、ずっと落ち着いた状態で相手との時間を過ごせる。しかし午後になっても、まだ痛い。起き抜けは今以上に痛みが酷く、あさぎが顔を顰めていたところ「母親にどうしたの？」と見咎められてしまった。理由を言えるわけもなく焦ったが、「寝違えたんでしょ」とあっさりと言ってもらえて助かった。

胸の谷間にも、両親には見せられない赤い花が咲いている。母親は今でも時々清矢郎を褒める話をするので、そのたびにあさぎはどきりとする。だがいくらお気に入りのお甥が相手であれ、受験生の娘が性交することは許さないだろう。そのうえ、車の中で月に一回……という乱れた実態が知られれば、どんなことになるか、想像するだけでぞっとする。

明るく若作りなあさぎの母親だが、感情の起伏が激しく内面は真面目なのだ。この行為をあさぎが一年生の頃から重ねているということまで知られれば、どうなるか。学費を出してくれる親としては、年頃の子供を心配するのは当然のことだ。色々な経験をしなさい、と両親からは言われているが、それに性体験は含まれていないだろう。

それにしても、とあさぎは今日も不思議な気持ちにたゆたう。いつかの黒板の落書きのように、自分は周囲の男子には「女性」としてカウントされていないのに、こんないやらしいことで悩んでいるなんて。

クラスメイトにも、昨年一昨年を目撃情報から「地味で可愛くもないけど、学校の違う人と付き合っているらしい」という認識はあるようだが、それ以上の噂もなく大人しいあさぎにそのことで話しかけてくる者は居なくなった。

最近清矢郎と会う回数も抑えているので、知り合いに見られることも減った。それにあさぎが制服の時はあえて会わないようにし、私服の時でも人目に付く場所では話をする程度に留めているため、東高の女子生徒が大学生と不純な交際をしているという話が学校や両親の耳に届くことはないようだった。

どうしてそこまでそこそとするのか。いつそ両親に打ち明けて理解してもらった方がいいだろうか。だが反対されることが恐い。きっと受験が終わるまで会うと言われる。それは嫌だった。理解してもらおうとする勇気が持てず、嘘について快楽を影でこっそり味わっている。

あさぎもまた母親に厳しく叱られてきたことで、両親に怯えているのかもしれない。怒られることだけでなく、あの母親の性格なら心配のあまり、取り乱すだろうことも恐かった。

だからあの幼い夏の日のことも、誰にも言えなかったのだ。けれど荒芝にも言われたように、両親に愛されていることは知っている。だから、大人になればきっと信じてもらえる。そんな未来を信じ、欲望には容易く負け、葛藤しながら前に進んでいるつもりでいた。

それはさておき、こうしてあさぎは一日中、誰にも言えない首筋の痛みに苦しんでいたのであった。

——次はあの格好でするのは、やめよう。

一人きりの帰り道で昨日の行為を最初から思い返し、清矢郎の囁

きや逞しい身体つきを脳裏に蘇らせては、あさは真つ赤な金魚に囲まれていた。

今日は学校で補習があったが、透流とは選択した授業が異なるため独りぼっちの帰り道となっている。透流以外にも一緒に帰れるような友達はあるが、相変わらずクラスの女子全員と上手く話せるわけでもない。

こんなことばかり考えて、孤独に金魚と戯れる自分が虚しい。清矢郎と学校や学年が違ってよかった。独りぼっちの自分を見られたくない。それでも通学途中は暇なので、首筋の痛みが気になって余計に昨日の行為が頭から離れない。

そうだ。ベッドの上ならば、こんなことにはならなかったかもしれないのに。それこそあれは一年生の冬の日――清矢郎の受験直前のことだった。我慢していたけれどストレスがたまった、という彼に、彼の部屋のベッドで抱かれた。受験期のストレスを性欲で解消したいのは自分だけではないようで、あさは思い出してほっとした。

あの時はどんな体勢をしても楽で、リラックスして感じる事ができた。ああいう場所でまたしたい、と願ってしまうが、伯父伯母の居ない家に上がり込んでの行為など申し訳なくてできず、その逆も自分の両親に申し訳ない。暑苦しい金魚の群れの中で、あさぎの妄想は止まらない。

――いつそ、ほ、ほてるとか行ったほうが楽じゃないかなあ……って、そんなのだめ！ 大学生になってからじゃなきゃ。本当は二十歳超えてからの方がいいのかなあ。私もアルバイトとかして、お金稼ぐようになったら、行っても、いいよね？ まずは、ちゃんと大学生になるようにがんばろう。

長くなった黒髪を、暑いので二つに分けて縛っているあさぎ。スカートも膝小僧がぎりぎり見えるくらいの中途半端な丈。どこからどう見ても真面目そうな彼女なのに、真剣な顔でそんなことを計画していた。

十八歳の時点で、いやそもそも十六歳の頃から月に一度以上「あれ」をしていることは、恵まれていると言わべきか、乱れていると言わべきか。十代の性がどうあるべきか、あさぎには分からない。大人に相談もしていないのだ。自分の培ってきた価値観と、二つ年上の清矢郎が教えてくれること、判断材料はその二つだけだった。時に同学年の夕映のアドバイスや、インターネットで得た見知らぬ大人からの情報や助言も加わるが。

妊娠もしていない今、この現状を誰か大人に相談した方がいいのかどうかも分からない。離れろと言われるのが恐いから、この二年間、清矢郎と二人で迷いながら自分たちのルールと将来の展望を定めて、触れ合ってきた。

——あつついなあ……。

あさぎは口元に水玉模様のタオルを押し当てた。鼻の下の汗が吸い取られていく。眉を整えること、スキンケア、日焼け止めなどの対策はしているが、化粧は未だにすることがない。だから化粧が落ちることも気にせず、汗を拭う。

こんなお子様な自分が綺麗な女性に囲まれている清矢郎に相手にしてもらえないことは、未だに不思議で幸せなことだった。考え方が卑屈すぎないかと友人に指摘されたこともあるが、今はどうすれば自信が持てるのか分からないまま、日々を一步步づつ生きている。大人になれば考え方も変わるだろうか。十八歳のあさぎには分からないことだらけだ。

誰かが地面に落としたらしい、アスファルトにでろりと横たわる茶色と白のアイスクリームに気が付いてそれを避ける。端に小さな黒い蟻が集まってきている。あさぎの思考も暑さともどかしさでどろどろに溶けたのか、醜い思考が止め処なく繰り返される。

もうすぐ駅だ。電車の中で涼もう。そうすれば頭もすっきりするかもしれない。あさぎがそう思った時だった。

「よう」

文芸部顧問の荒芝が、道沿いにあったコンビニエンスストアの駐

車場を横切って声を掛けてきた。

彼はいつもタイミングよく現れるが、ただ単に、あさが一人で居ることが多いからだろう。教師として気を遣って話し掛けているのかもしれない。そうは言っても、二人で話すのも数ヶ月ぶりだった。三年生になってから荒芝は教科担任ではなくなり、文芸部にもいよいよ行かなくなったからだ。

「今日は電車通勤ですか？」

「おう。ちよつと用あつてな」

夏休み中とはいえ、よれよれのズボンにサンダルでの出勤とは。家でくつろいでいた中年にしか見えない。結婚はしたはずだが、もう少しちゃんとしなものだろうか。あさぎの直感で言えば、こういうタイプは妻に甲斐甲斐しく世話を焼かれるか、互いに干渉し合わないかどちらかに見えるが、彼は後者であるようだ。結婚で人が変わるほど、素直な男でもないようだ。

しかし清矢郎にもそういう頑ななところがあるような気がした。自分を強く持っていることは素敵なことだが、自分が影響を与えられたように、もっと彼の力になりたいのに思ってしまう。あさがまたしても取り留めのないことを思い巡らせているうちに、自然に荒芝と駅まで歩いていくこととなった。

「また飲み会ですか？」

「またって、そんなに行ってねえよ」

「奥さん寂しがりますよ」

「余計な世話だ」

この教師とこんな風に話せるのも、あと半年で終わりだ。

「そーいや部活、最近来てねえなあ」

「……ごめんなさい」

「まあ、三年生は勉強しろって感じだけど、また来たり書いたりしてみたら？　気晴らしになるかもしれないねえよ。後輩にとってもいいことだし」

顧問からの言葉に、あさぎも頷いた。文章で食べていきたいほどの情熱もなく、今のメンバーには行きたくなるほどの魅力を感じていなかった。自分を必要とされたがっている割には、傲慢なものがある。せめて琴音のしてくれたことくらいは部活に返すべきなのに――だがあれだけのこなれた文章も書けず、人間的魅力もない自分が、後輩に何をしてやれるのか。ただ一步を踏み出せばいいだけなのに、身動きがとれない。

じりじりじりりと、痛む首筋が焦げる。胸も焦げる。

「中村が卒業して寂しいんだろうけどさ。あいつ、お前さんの文章褒めてたしなあ」

「おとしの文化祭のことじゃないですか」

荒芝に言われて、懐かしい出来事を思い起こす。

――五ヶ月前の卒業式の日、当時二年生だったあさぎと夕映は式の後、部室に顔を出した。一、二年生で花束を用意し、文芸部の卒業生たちに贈るためだ。

無事卒業して、文学部に進学する琴音も後輩一人ひとりに手紙をくれた。あさぎにも。

小さな手紙には、入学したばかりのあさぎが夕映ときよろきよろしながら部室に來た時のこと、あの文化祭の時の文章――緋色の檸檬水に溺れた金魚の作品への感想が、綺麗な文字で綴られていた。桜の模様の小さなレターセットからは、琴音の匂いがするような気がした。実際に、花の香を染みこませてあった。

「ありがとう、あさぎちゃん」

お礼を言うのはこちらのはずなのに。琴音の言葉は温かった。こんなに綺麗な女性の心を、自分などが少しでも動かせた。それはあさぎにとって、もしかしたら高校生活で唯一、金魚の幻影に侵されない清爽な思い出であるかもしれない。

この気持ちは、もしかしたら一生忘れないかもしれない、とあさぎは思った。握手を求められた琴音の手の柔らかさと、桜色の爪と

共に。

仲が特別よいわけでもない。友情関係にも恋愛関係にもない。憎み合ったわけでもない。向こうはきつと忘れてしまう。だけど自分はきつと忘れない。一期一会。人と人とは不思議な縁で結ばれている。

それがあさぎにとって、高校時代に部活をしていて一番嬉しいことだった。憧れていた先輩に褒められた。ふわりと心が浮き上がった。しばらくはそのことで跳ね続けられるくらいに。

しかしまぐれのような一回きりだけの奇跡は、やがて色褪せていく。同じことを思い辿っている自分が恥ずかしくなり、飽きがきたのだと言い聞かせて考えないようになる。

それでも荒芝が今でも覚えていてくれたことが嬉しくて、あさぎははにかみ笑いを浮かべた。高い日差しの下で、久しぶりに優しい気持ちになる。自信は相変わらず持てないものの、少しはこの高校で学んだこともあったのだろうか。今はよく分からない。

そんなあさぎの横顔を見ていた荒芝は、は、と短く笑った。

「お前さん、綺麗になったなあ」

あさぎは「はい？」と怪訝な顔をした。少しだけ金魚が見えそうになったが、見えないふりをした。

「奥さんいるのに、ひどくないですか？ それに『先生』にそんな風に言われたら、ショック受ける生徒もいると思いますよ」

大人しい彼女でも、年上で教師の荒芝には甘えもあってはつきりものが言える。逆にあさぎにしてみれば相手が荒芝なので、ショックを受けるほどいやらしいものには感じず、膨れ面で指摘する。彼も「悪い悪い。山本はしっかりしてるな」と肩を竦めて謝ってきた。容姿だけでなく内面も褒められたようで、あさぎは単純に気分をよくする。

「それはさておき、後悔ねえように受験頑張れよ。どの学科志望だったっけ？」

荒芝も容姿のことを言いたかっただけではないのかもしれない。
生徒であるあさぎの成長を喜び、心配してくれるのだろう。軽く進路指導に入ってきた。

そこで誰かと付き合っているのか、どういう付き合いなのかまでは詮索されないので安堵する。だからあさぎも荒芝に反抗することもなく、自分の今の考えを話した。大人に信じてもらいたいならば、自分もそれなりに誠意を見せねばならない。

こうして誰かが気に掛けてくれることは、やはり嬉しい。性の実情と葛藤について否定されれば放っておいてくれと反発したくなるが、荒芝はあさぎを信じてくれているような態度を取る。腹の中はどうか分からないが、だから生徒にもそれなりに好かれるのだろう。

やがて二人は駅の改札前までやってきた。

「じゃあな。勉強しつかりやれよ。彼氏とはほどほどにな」

「もう！」

あさぎの相手がまだ清矢郎だと思っているのだろうか。荒芝は最後に彼らしい釘を刺すと、行き先が反対方向のため先に改札口を通っていった。

あさぎはふう、とため息をついた。二つの髪の毛束のうち、一方の先に指を絡める。少しは成長した、と褒められたのかもしれない。こんな自分でも。これまでたくさんの子供を見てきた教師に言ってもらえたのだから、それについてはいくばくか自信を持ってもいいのかな、と思える気がした。

そして孤独かと思っていた帰り道であったが、人に会う日は偶然が重なるものである。それとも荒芝の言うとおり、あさぎの笑顔に変化が現れたからなのか――。

「何、お前、オッサンと付き合ってるの？」

突然不躰な声が聞こえてきたので、あさぎはびくん、と身体を竦ませて声のした方を見上げた。そこには髪を染めた違う学校の制服

を着た少年が、にやにやと笑ってあさぎを見下ろしていた。一瞬、誰だろうとあさぎは警戒心を強めたが、その顔には見覚えがある気がした。

「ひっさしぶり。同窓会も何にもしてねえもんな。お前もこんな遠くの高校来てるし」

久しぶりと言う割にはぞんざいな口調だが、それにも聞き覚えがあった。あさぎは忘れ去りたかった記憶の底からどうにか掘り出した名前を口にした。

「えっと……熊谷、くん？」

「忘れてたのかよ」

あさぎが自信なさげに、間を置いてから名を呼んだのが気に入らないらしく、少年はあからさまにむっとした顔をした。その態度からあさぎは益々確信を得た。

背は更に伸び、肩幅も広くなり肉付きもよくなったものの、数年前と変わらず、すぐにふて腐れる話しぶり。あさぎは、どうしようとして一人まごついた。この男子は昔から、不器用なあさぎからすればどう接してよいか分からない、困った部類の人なのだから。そしてあさぎが、男性を苦手とするようになった原因の一端となる人なのだから。

中学二年、三年の時と同じクラスだった、この熊谷 陸という少年は。

第57話 水面の壁

「すげえな。あの山本が、あんな年上と付き合うようになったのかよ。って、いいのか？ 犯罪じゃねえの？」

「違うよ！ 学校の先生」

「ふうん。その割にはやけに仲よそうだったじゃねえか」

「ああいう人だよ」

大きな誤解をしている熊谷に、あさぎは思い切り頭を振った。二年半ぶりに会った人間によくここまで不躰な物言いができるものだ。決して仲がよかったわけでもない、寧ろあさぎのことをからかい、嫌っていたような男子が。だから今でもそういう意地悪を言うのかもしれないが。しかし彼は、意外に察しがよいところもある。

「何、俺にびびってんの？」

突然凶星を指され、あさぎの全身に緊張が走った。背中に流れている冷や汗は見えていないだろうが、眼の逸らし方や僅かに身を引いている様子から早々に気付かれてしまったようだ。

そう言われても、恐いものは恐い。どうしても過去の出来事を引きずってしまう。それに清矢郎よりは背が低いものの熊谷自身、あの頃と比べて身長が伸び、広く分厚くなった肩幅や胸筋に圧迫感がある。ただ口の端を吊り上げた小憎らしい笑い方は変わらない。どうやら中身はあまり変わっていないようだ。

「だって。久しぶりだし、何でここにいるのかなって」

あさぎが小さな声で言い返すと、熊谷は視線を駅前広場に向けつつ答えた。

「ああ。塾、この近くだし。俺らの校区、デカいところねえじゃん」
彼もまた、同じように受験勉強に励んでいるらしい。熊谷が通っている高校は確か、あさぎの家の最寄駅からバスでないと行けないような山の近くに建っている。そのため彼と会うこともなくなっていた。そして学習塾も清矢郎は現在通う大学がある大都市の有名校

に通っていたが、熊谷の通う高校からは遠過ぎる。

「うちから一番近くてそこそこ知られてる学校って言えば、このへんのやつだろ。電車通学って一度してみたかったしな。でもこっちまで高校来てる奴なんて、ほとんどいねえじゃん。そんでやっと知り合い見付けたと思ったら山本で、三年ぶりだなって思ってた。あの頃よりいい感じになってたから声かけたけど、髪伸ばしたんだな。化粧はしてねえか」

褒められているのか、けなされているのか。あさぎにもよく分からないが、過去の態度からすれば好かれているとは思えないので、多少の棘を含んでいるのかもしれない。

いや、それも実は棘のつもりではないのかもしれない、と今なら思える。彼はただ単に齒に衣着せず、思ったことを正直に言っているだけなのかもしれない。どちらにせよ十八歳にしては少し子供っぽいな、と当時の清矢郎と比較して思う。

このように怯えつつも冷静に男性を観察出来るのも、年上の清矢郎と付き合うようになったからだろう。中学生の時に熊谷のことをここまで理解していれば、あのようにならなかったかもしれないが、そもそもあの頃はあさぎも子供で、付き合ってくれる男子も居なかったのだ。

——なんか、恐いな。もう帰りたいな。

クラスの男子ともあまり話さないのも、久々に会った少年と何を話せばよいか分からない。それに熊谷は、清矢郎や自分とは住んでいる世界が違う気がする。元クラスメイトと居るこの場が息苦しい。あさぎはそう感じていた。

しかし残念ながら、金魚はこの現実から逃避することを助けてはくれない。それも当然だ。赤く美しい幻影は、あさぎと清矢郎のためにあるのだ。もしくは彼女が劣等感、言い換えれば憧れを抱く対象との間に見えるもの。

今、熊谷の背後に見えているのは、せいぜいあさぎの不安を象徴するように、濁った水底で藻が黒い陰を揺らしている程度であった。

だがあさぎの心もとない思いなど関係なく、熊谷は更に意外なことを提案してきた。

「なあ。時間あるなら、ちょっと話してこうぜ」

中学生時代の彼も絡んだ一件を通して、あさぎは男子が苦手になり、それから必要以上に話をしなくなった。恋人は居ても、異性の友人は未だに居ない。その原因となった一人であるこの彼が、一体自分などに、何故。

ぽかんとしていたあさぎは、そのまま熊谷のペースに巻き込まれてしまった。同級生との再会という懐かしさよりも、もう思い出したくない、関わりたくない、という恐怖の方が大きい。それでも先ほどまで荒芝と話をして少しばかり気分が高揚しているのか、教師に三年間の成長を認めてもらった勢いからか、自分も過去に決着をつけたという僅かな期待を持って、あさぎは熊谷の背中を追って歩き出した。

「なんか食いに行こうぜ。腹減った」

駅から外に出ると、昼間の残熱が下から二人を襲ってきた。それと同時に、伸びをした熊谷があさぎを誘う。こんな自分なんかを髪の毛も明るく染め、服もだらしなく着崩したような少年が誘うのかと、あさぎは驚きに固まってしまった。しかし我に返った彼女は、また首を横に振る。

「何でだよ」

「時間、ないから」

それを言い訳にした。一番の理由は、清矢郎以外の男性と――しかも親しくもない相手と、飲食店までは行けないと思うからだ。それに同じ学校の生徒に見られれば、また新たな変な噂を流されるかもしれない。二股を掛けていると思われるのも嫌だ、と経験のないあさぎは食事ひとつで悩んでしまっていた。

それに補習と知っているのだから今すぐ帰らなくとも母親もとやかく言いはしないだろうが、夜遅くなっていいわけではない。成績を心

配されて、外出禁止令など出されても困る。

「なんだ。つまんねえ」

熊谷はあさぎのつれない態度に少々気を悪くしたようで、唇を尖らせた。その態度にあさぎは首を疎める。そしてどうにかこの場を丸く収めようと、妥協案として近くの自動販売機を指差した。

「でも喉渴いてるから、何か、飲も」

「じゃあねえなあ」

しかし熊谷も昔よりは穏やかになったのか、あさぎの要求をすんなり聞き入れてくれた。そのうえ、飲み物まで奢ってくれたことはあさぎも更に驚いた。

互いにまだ保護者に養われている身だ。そのことを母親にもきつく言われている。だから熊谷に金銭を払わせるのは抵抗があり、あさぎは何度も彼に小銭を渡そうとしたのだが、

「俺、バイトしてるし。お前してねえんだろ」

熊谷はどうしてもあさぎに買ってやろうとするので、最後には「ありがとう」と頭を下げることになってしまった。これも清矢郎が居るのに、何やらいけないことをしたような気になってしまう。少なくとも彼には言いづらい。

飲み物一本でここまで考え込んでしまうあさぎだったが、経験によってこうしたことへの考え方、他人への対応が変わっていくことを彼女はまだ知らない。だが十八歳の今は、どうしようどうしようという焦燥感でいっぱいになっていた。

清矢郎以外の男子と植え込みの前に座って、一緒に飲み物を飲んでいる。その事実が違和感を伴ってあさぎの胸を逸らせる。熊谷と言えは何ひとつ気にする様子もなく、喉仏を豪快に動かしてごっきゅごっきゅと炭酸水を飲み干していく。

電車の時間は数本遅らせるくらいなら問題ないだろう。あさぎが同じ炭酸水をちびちびと飲んでいると、彼は同級生たちの近況を語り出した。

噂話でもあることないのではなく、知り合いの現在の様子を聞くのはあさぎも苦にはならない。他の学校の生活もそれなりに興味がある。熊谷の主観を交えつつも、誰と誰が付き合った別れた、どんな悪いことをした、という話に花が咲くのはどこの高校生も同じようだ。しかし熊谷は昔から危険な香りを漂わせているように、人の功績よりも誰は警察の世話になったとか、誰は子供ができて結婚するとかいった高校生活以外の事情に詳しい。あさぎとは仲がよくなかった相手の話のため、同い年でもそういう子も居るのかと不思議な思いで話を聞いていた。

だがあさぎと清矢郎も人目を偲んで野外でああいうことをしているわけなので、一步間違えれば熊谷たちの噂の対象――警察の世話や、学校や親に迷惑を掛けることになってしまうのだ。水面のように薄く透明なもの一枚を隔てているだけで、こうも人生が変わるものか。そしていつ、その水面が動き波がひっくり返るか、魚が飛び出してしまうかは誰にも分からないのだ。

自分も気を付けようと思ったあさぎは、適当に相槌を打って熊谷の話を聞いていた。それはそれで人生勉強をしている気がした。

「熊谷くんは？」

あさぎに尋ねられると、彼は「俺？」と嬉しそうに会わなかったこの二年半について語り始めた。熊谷は中学生の時も授業中によくお喋りをして、教師に注意されていた。話すのが大好きなのだろう。本当に清矢郎とは正反対の少年だ。

時にひやりとするような悪行を自慢げに語ったりもするのが若さだろうが、それでも彼はまだ警察沙汰にまではなっていないようだ。あさぎに意地悪を言い、弱い者いじめをするようなグループの男子とも仲がよかったが、彼自身がいじめに携わっていたことはなかった覚えがある。

将来の夢まで語ってくれた。服飾の仕事に就きたいらしい。あさぎよりもしっかりと目標や夢を持っているのは楽しそうに語る姿から分かったため、その点についてはあさぎは彼のことを素直にすご

い、そして少し羨ましいと思った。

そこまで話した後、熊谷は「で、山本は？」と今度はあさぎについて尋ねてきた。

「私は――」

恥ずかしながら話すことなど何もない。文芸部のことも清矢郎のことも、地味な高校生活のことも、熊谷には面白くも何ともないだろう。そう思ったあさぎが困ったように俯くと、

「付き合ってる奴とかいねえの？」

彼は突然核心を突いてきた。あさぎはがばつと顔を上げる。その頬は熱かった。

「そ、そんな、ひと、」

居ると言うべきか、居ないと言うべきか。熊谷の家はあさぎの家とはかなり離れており、あさぎの家族と彼の家族が知り合いということもないが慎重になるべきか。

「いねえから、俺にびびってんだろ？」

しかし熊谷の勝ち誇った――悪く言えば、気弱なあさぎを見下げたような一言には、彼女もかちんと来た。中学生時代もそうだった。そうした話し方が、嫌だなと思っていた。過去と決別するためにも、彼と対等になるためにも、あさぎはきっぱりと言い放った。

「付き合ってる人くらい、いるよ」

それ以上の情報は言いたくない。あさぎはつんと横を向いた。

「誰だよ」

「誰でもいいじゃん」

「言えよ」

反抗的なあさぎに、熊谷はやや苛ついているようだ。その命令口調があさぎの心を更に逆撫ですが、これ以上彼を怒らせ昔のように傷けられるのはやはり恐かった。

「違う学校の……人だよ」

付き合った当初は高校生同士だったので、そう表現した。大学と高校も違う学校と言えばそうだ。嘘は言っていない。だがその他のこ

とについて言及するのは、彼に妙なことを言いふらされそうな気がし、それが巡り巡って誰の耳に入るか分からないとあさぎは口を閉ざした。

「へえ。やっぱりじゃん。あの山本がねえ。どんな奴か気になるな。顔見せてよ」

携帯電話の中に彼氏の写真がないか、と尋ねられるあさぎ。清矢郎が照れるのであまり写真を撮ることはなく、両親にも見られないよう携帯電話に画像は保存していない。あさぎはまた首を横に振った。

熊谷はその俯く姿を横から、頭からつま先まで眺め回してくる。あさぎはその視線を、まるで値踏みでもされているように感じていた。

「でも山本、昔とあんま変わってねえしなあ。髪とか伸びてちよつとは女っぽくはなったけど」

それはどういう意味か。「ちよつ」という部分にも引っかかるが、あさぎを通して恋人のことも値踏みしているのか。つまりあさぎが地味なら相手も地味だと。彼よりも格下だと？

しかし清矢郎は格好に無頓着で、無口で、地味かもしれないが、姿勢はいいし、頭もいいし、剣道一直線だし、何より芯のある、心の清く優しい男だ。それが何よりであり、それ以上のことは何も求めていない。あさぎのことをどれほど大切に想ってくれているか、あさぎが一番よく知っている。

熊谷を前にすれば、自信のないあさぎも珍しくそう言い切ることができた。他人に言われた時だけ相手を信じられるというのもおかしな話だが、心の中で金魚の炎が赤々と燃え出したのは、せいちゃんのほうがずっといい男だもん、と熊谷に対抗心を燃やしているからだろう。

「ちえっ。そうかよ」

すると熊谷は足元の小石を蹴り飛ばすと、わざとらしく大きな舌

打ちをした。あさが首を傾げると、彼は空のペットボトルを足元に落とし踏みつけた。そしてあーあ、とつまらなさそうに腕を伸ばす。

「な、なによ。何か悪い？」

清矢郎を好きだという想いは尊いものだ自身に酔っていたあさは、なおざりな反応を返されて気を揉んでしまう。まるで自分がつまらないことを信じていると言われたようで、むきになって言い返した。

「さっきのオッサン見た時もびっくりしたけどさ。あっちはまあ、ありえねえかもって思ってたから、なんか今の方がショック」

「何で？」

あさは意味が分からないと言うように眉を下げ、この久しぶりに会った元クラスメイトの大きな反応の意味を問う。

「だってお前変わってないし、大人しいから、絶対誰とも付き合ってたねえだろうって思ったんだけどなー」

熊谷は何を言いたいのか。その言葉はまた見くびられたようで不愉快だったが、言っていることは正しい。清矢郎は従兄で幼い頃からの縁があったからあさぎでも付き合えただけであって、ただの先輩後輩の関係であれば、学校も違えば接点もなく、話しかけられることもなかっただろう。そういう意味では、あれだけの男性と幼馴染であることは運がよかったとあさぎも思う。だから熊谷の感想は、一般的な男子のそれということか。いつかの黒板の落書きが表していたように。

だが男性とは不思議なものだ。そして、恐い。何を考えているのか、女性のあさぎには分からない。清矢郎が時々、女の子のことはあさぎのことは、よく分からないと困った顔をするように。

しかし力の差がある分、男性との違いはあさぎには畏怖として映っていた。そして清矢郎よりも、荒芝よりも、熊谷こそが過去も今もあさぎにその疑問を抱かせる存在なのであった。

「なーんか悔しいなあ。付き合いえてって思ったのに」

「え？ 誰と？」

「だからおめえと」

「はい？？」

あさぎは思わず素っ頓狂な声を上げた。何が何だか分からない。彼はあさぎのことを女として認識していなかったはずだ。認めてくれなかったはずだ。中学生の時は。

それが「一般的な」男子の印象だと、あさぎは刷り込みのように思い込むようになり、彼に言われた言葉を胸に刻み付けて自分を見失っていたのに。

その人が、一体何を言っている――？

「カレシ居るの面倒でやだけどさあ、今からでも、俺にしねえ？」

そもそも恋人が居るといふ女の子に、心変わりを迫るような時点であさぎとしては恋愛対象外となるのだが、熊谷の背後にあった黒い水草の澱みから、金魚たちが一斉に飛び出してきた。

――この、苦手としていた「男」が、自分を「女」として見ている。

奥二重の大きな眼が、あさぎの小さな眼を捕獲するように見据えていた。

第58話 緋色の蛇

二年半ぶりに会った同級生、熊谷陸に突然告白されたあさぎは、ただぽかんとするばかりだった。当時の出来事からすれば、彼は絶対に自分のことを嫌っていると思っていたからだ。

思い出したくない思い出というものは、逆にショックから記憶が抜け落ちることもある。強烈なシーンをひとつだけ、切り取ったかのようにそれだけが内側にこびり付く。

幼い頃の清矢郎とのことは、今となればそこまで辛い思い出でもない。しかし中学二年生の時の出来事は、あさぎにとっては今でも思い返したくないことだった。清矢郎も同じ学年の時に学校や家庭でやるせない思いをし、あさぎに手を出してしまったらしい。そもそも中学生とはそういう時期なのだろうか。それとも二人の心が弱く、堪えることができないだけなのだろうか。

それはさておき、あさぎが中学二年生の冬のことだった。清矢郎の前では恥ずかしさからめっきり大人しくなってしまったあさぎだが、学校では運動部に入っていたため髪も短く、「元気」に分類される少女であった。しかし内心では清矢郎にされたことへの恐怖から、男性への不信感も芽生えていた。それを認めたくなく、異性とはわざと強気に話をしていた。それが裏目に出てしまった。

ある日の休み時間、男子とつまらないことで言い争いをし、負けず嫌いだったあさぎは口でどんどん相手を追い詰めていった。言い返せなくなったクラスメイトの男子はあさぎを大声で罵倒すると、彼女を突き飛ばしてきた。一応手加減はしていたものの、男子と女子だ。あさぎは簡単に床に転がり机の足に頭をぶつけた。

休み時間で教師はその場におらず、女子の一部も素直すぎるあさぎを鬱陶しく思っていたのだろう。あさぎが床から皆を見上れば、呆れたような人の視線が注がれていた。親しい友人でさえもどうフ

オローしてよいか分からずおろおろしており、結果、床に倒れたあさぎのことは誰も助けてくれなかった。だがこのトラブルは自業自得だからと、あさぎはその時妙に納得していた。

小学生の時は、異性間でも取っ組み合いの喧嘩をしていた。小競り合いもよくあった。けれど男女の体格に差が出てきてからのそれは初めてであった。思った以上に強い力に、あさぎは徐々に愕然となる。叩かれた肩の痺れに今頃気が付いた。身体も呆気なく跳ね飛ばされた。

そして声変わりの終わった低い声で怒鳴られたことも、今になって恐くなってきた。人には笑われそうな小さなことでも、相手男子への「恐怖」があさぎに叩き込まれた瞬間だった。そしてあさぎが怯んだのを見た他の男子が、彼女の容姿や欠点を口々に揶揄し始めた。

次の授業が始まるまでの間、あさぎは泣くことしかできなかった。心配性の母親の顔が過ぎり、騒ぎになるのは面倒だと泣き顔を教師に見られないよう授業が始まるまでに席についた。

しかし幸い、それがいじめに発展することはなかった。その男子が短気なことは皆知っており、すぐに機嫌もよくなるタイプだからだ。彼はあさぎなどに時間を使おうとは思わないらしく、その後もきつい言葉でからかったりはしたが、それ以上のことは何もしてこなかった。あさぎがその時のショックから、言葉に気を付けるようになったこともあるだろう。

逆に一部の女子がそれに乗じてあさぎに嫌味を言ったり、無視をしてきたのは哀しかったが、それも一過性のものだった。三年生になりクラス替えて彼らと別れ、無視をしていた女子とも部活を引退してから縁がなくなった。新しいクラスは二年生の時よりも雰囲気がよく、あさぎも無事に中学校を卒業できたのであった。

だが考え込みやすい彼女は己の失敗を悔やみ、惨めな姿を恥じて自分と正面切って向き合えなくなってしまう。そうした事情から清矢郎があさぎを一人の女性として求め、優しく包んでくれたこと

は、彼女に大きな自信を与える出来事であり、だからこそ彼に一生を捧げてほしいと思うようになったのだ。もちろん清矢郎がそれに足る、尊敬できる人物だからだが。

さて熊谷がその事件にどう関わっていたかと言えば、先ほど彼の話に出てきた「警察沙汰になった男子」があさぎを突き飛ばした張本人であり、熊谷は二年生当時、彼と親しかった。

ショックからやや記憶は曖昧だが熊谷は最初その場には居らず、騒ぎが起こった後にやってきて、あさぎを揶揄する男子らの方に加わり、笑ってこちらを見ていた気がする。何よりその騒ぎ以降、彼はあさぎの容姿などを一層嘲るようになった。

そのうえ熊谷とは三年生でも同じクラスになってしまい、前よりも大人しくなったあさぎに他の男子は何も言わなくなったのに、彼は一番長い間あさぎをおちよくっていた。だから彼女の中での熊谷のイメージはいいものではないのだ。

——といったことから、あさぎは熊谷に会えば苦い思い出が蘇ってくるのである。男性への恐怖心は小学生の時の清矢郎との一件に中学時代のその件が加わって、「一体何を考えているのか分らない、怒らせると力を行使する恐い生き物」としてあさぎの中にインプットされてしまった。

自分を怒鳴った男子と熊谷は別人だ。だがあの時彼が自分を笑って見ていたうえに、長い間あさぎを馬鹿にし続けたことで、あさぎには熊谷のこともいくらか恐怖の対象に見えていた。

その熊谷が告白してきたのだ。全くもって理解不能だ。ただ再会していきなり、という相手の気持ちを考えないところはとても熊谷らしい。そこだけはあさぎも頷ける。

「何言ってるの？ どうして私なの？ どうして？」

熊谷はあの日のことなど覚えてはいないかもしれない。けれど流石にあさぎを二年間からかっていたことくらいは覚えているだろう。

「どうしてって、理由とかいるのかよ」

しかし熊谷は、あさがどうして戸惑っているのか分からないという顔をしている。ここまできると、怒りを通り越して呆れてくる。「だって中学の時私に、嫌なこと言ってきたじゃない。ぶすだとか、とろくさいとか」

万年補欠だった、部活のバレーボール。容姿だけでなく部活で失敗した姿も真似されたりもしたものだ。今思えば実に子供染みた冷やかしだが。

「それがいきなり、そんな風に思うものなの？　いきなりすぎて、わけ分かんないよ」

「お前は相変わらず、頭いーなー」

今度は感心したような熊谷の言葉に、あさは面食らった。どうやらあさが即座に反応することが彼にはそう見えるらしい。母親にも親戚にも「あさは東高か」と清矢郎と比較されてきたもののに、不思議なものだ。

「真面目だしさー、俺らができねえこと偉そうに注意してくるしさ。だからムカついてたんじゃねえか」

腕を組んで自分を正当化するように説明する熊谷を、あさは黙って見ていた。

「お前の方が頭良くて、何言ってもすぐ言い返してくるんだから、そしたら適当に顔とかバカにするしかねえだろ？」

不条理な話をふんぞり返って言われても困ってしまう。だが当時も言うに事欠いてるな、というのは伝わってきた。だからこそ言い返しようのない揶揄や、何をしてしも嗤笑しょうされることが悔しくて泣けてきたのだ。相手にそんな汚い言葉を言わせるような自分に原因があると思うと、尚更。

「でもそれと、今のつ、付き合いたいかいいうのと、どう関係があるのよ」

熊谷は二年間同じクラスで、班が同じだったこともあるため、何

だかんだで一緒に過ごした時間が長い。話しているうちに、恐いと言いつつ昔の調子を取り戻してきた。

及び腰ながらもあさがくってかかると熊谷は、「なんだ。大人っぽくなったかと思えば、お前も昔と変わんねえじゃん」とまた口を歪めて憎たらしいことを言った後、予想もつかない解説をした。

「だからお前に負けたくなかったんじゃない。お前より、威張りてえんじゃない」

「だから何で」

「お前のことが、好きだったから」

「な……？　だ、だって、あの時、中二の時、笑って見てたじゃん」

「は？　何のこと？」

「田川くんたちと私が喧嘩した時、笑ってたじゃん！」

「あ？　そんなことあった気もすつけど……よく覚えてねえよ」

本当にすっかり忘れていたらしい。彼にしてみれば、あのような喧嘩は日常茶飯事だったからか。熊谷は眉間に皺を寄せて少し考えていたが、そんなことはどうでもいいように足を投げ出した。嘘をついているようには見えない。羨ましい性格である。なお田川とは、突き飛ばしてきたあの少年の名前だ。

「そんな人に好きって言われても信じられないよ。私も悪かったけど、あの時もみんな恐かったし、熊谷くんには三年生になっても色々言われ続けて、私だって嫌だったんだから」

——そうだ。自分も悪かった。それは分かっている。こうしてむきになって自己主張するところが厭われていたことも。けれど自分の気持ちをきちんと伝えてわだかまりを解決しないと、熊谷の気持ちが無理解で、彼の告白に対して正当な返事などできない。

そう思う半面、あさは心配になる。こんな風に強く問い詰めていたら、今度は熊谷がああの時の少年のようにあさがに攻撃的にならないだろうか。すると強気だった熊谷が急にしおらしく視線を伏せた。

「笑って見てたのは、ほんと覚えてねえ。でも悪かった。それにお

前がそんなにやな思いしてるなんて、思ってた。それも悪かった」

彼に謝られたことなど初めてなので、あさは調子が狂った。変わったいてないと思っていたが、流石に彼も少しは大人になったのだろうか。あの時は幼いだけだったのか。

「多分二年の時に笑ってたつうのは、そこで女助ければこっちが何か言われそうで嫌だったからだと思う。お前のこと好きになったの、三年で一緒の班になった時だし」

「――」

なんと。嫌われているとばかり思っていたが、あさは少々思い違いをしていたようだ。熊谷は本当に何も考えず、その時その時の自分の要求に従って生きていただけらしい。啞然としているあさに、彼は更に畳み掛ける。

「だからさあ、男子なんてガキなわけ。自分がイジめられるのは嫌だし、気に入った女子はイジめんの。こっち気にして欲しいから。って本当に嫌いな女もいるし、全部当てはまるワケじゃねえけどな。それに何か言えば、お前絶対に言い返してくるじゃん。それが面白かったから色々言ってたんだよ。でも途中からダチに冷やかされたから、意地になって告白とかはしなかったけど」

「でも……あんなこと言われたら誰だって嫌な気持ちになるし、二年半も連絡なくて偶然会って好きって言われても、実感わかないし、説得力ないよ」

あさは軽い目眩すら覚え、どうにか腕で身体を支えて熊谷に訴える。何が何だか分からない。苦々しい過去に決着をつけられそうであるが、新たな謎も呼んでいる。

「そりゃそうだけどさ。なんか連絡しそびれてた」

「それにさっき、この前まで誰かと付き合ってたって言ってたじゃん」

「……まあな。今は別れたけど」

言われてみれば、熊谷は中学二年生の時にも彼女が居たのだ。その時もすぐに別れたようだが、この見かけでお喋りが好きなら常に恋人を探していそうだ。そして先ほどの話ぶりでは、おそらく彼も初体験はとうに済ませていることだろう。

「じゃあ私じゃなくてもいいじゃない」

あさは冷たく突き放したが、意外にも熊谷はそこで怒り出さなかった。どうやらそこまで無神経でもないらしい。再会した時の威嚇も、もしかしたら「自分を気にして欲しい」「優位に立ちたい」の表れであつたかもしれない。

「そう言っちゃえばそうだけどさ」

彼はあっさり認めた後に、また勝手なことを語り出す。

「なんか派手な女って疲れんだよ」

「何それ。人のこと顔が悪いとか言っておいて」

「だから中学の時に可愛いなんて言えるかよ。周りに何言われるか分かんねえよ。なんかもー最近、地味なのがいい。お前みたいな真面目で、頭いいのがいいって思うようになった。で、偶然会えて可愛くなったって思ったら彼氏居るとか言うし、なんかモヤモヤしてつい言っちゃった」

言っていることがあさぎには滅茶苦茶に聞こえるが、それが今の熊谷の「要求」で彼はそれに従って生きているだけなのだろう。やはり昔と変わらないようだ。

先ほど女絡みで喧嘩をしたという話も少ししていたが、前の彼女を巡ってトラブルでもあったのだろうか。それならば益々御免だ。清矢郎にも心配を掛けるし、やはりこの男子にはあまり関わらない方がよさそうだ。あさぎでなければ嫌だ、というほどの情熱も感じないのは幸いだ。

行動の理由が一貫していないことや、本心と違う行動を取ること、自分の身を守るため人を傷つけることを厭わない人を清矢郎以上には好きになれない。当然あさぎにもそういう面はあり、そういった人を否定はしないが。

だからあさぎはこれ以上熊谷を追及することなく、静かに答えた。
「そう言ってくれて、ありがとう」

それは本心だった。嫌われているとばかり思っていた人が、自分を好きでいてくれたのはありがたいことだ。

「でもやっぱりいきなりだし、それにさっきも言ったでしょ。私付き合ってる人いるから、無理だよ。ごめんね」

あさぎは熊谷の方をちらりと見たが、金魚の幻影は眼に入らなかった。そんな自分に安堵していた。彼に女として見られていても、あさぎは彼に性的欲求を抱いてはいないようだ。

自分を否定したと思っていた少年は、実は違っていた。自分を女性として求めてくれる男性は、幼馴染の清矢郎以外にも居た。それは自分のことを認められるひとつのきっかけとなりそうだ――が、それだけだった。自分勝手かもしれないが、熊谷の言葉はそれ以上の意味を持たなかった。

「ごめんね」

あさぎはもう一度呟いた。清矢郎の背筋が伸びた後ろ姿を、心中の赤いカーテンで包み込む。

それにしても奇妙な告白をされたものだ。重い言葉よりはよかったかもしれないが。あさぎが小さくため息をついたその時だった。

「何だよ。駄目なのかよ」

やはり熊谷は空気よりも軽い男である。そこで急にあさぎの肩に手を回して、強引に引き寄せてきた。

「いやっ！」

あさぎは悲鳴を上げて熊谷を振り払った。ぞわり。全身にどろどろの藻が絡みついてくるような不快感、恐怖。清矢郎以外の男の汗の匂いやべたつきなど、嫌悪の対象以外の何物でもない。

流石に熊谷も人目を気にし、今すぐ力づくであさぎをどうこうするつもりはないらしい。ちっ、と大きな舌打ちをしてその手を引いた。やっぱり男はよく分らない。熊谷の力に怯えたあさぎは、彼

から一步後ずさった。

「変な声、出すんじゃないよ。お前、『まだ』なの？」

自分が悪いくせに捨て台詞を吐く熊谷に、あさぎは無言で応えた。言葉のタイミングと視線で、「まだ」が何のことだか今のあさぎになら分かる。「それ」なら二年前に経験済みだ。昨日だって抱かれている。熊谷と会わなくなってから五ヵ月後には、清矢郎の腕の中で女になっていたのだ。そんなことは言いたくもないが。

「ごめんね。ほんと、付き合うとかできないから。私、帰るね」

きわどい話になってきたのであさぎがいよいよこの場から逃げようとしたところ、「待てよ」と熊谷に腕を引かれる。あさぎは困り果てた眼を彼に向けた。しかしまた悲鳴を上げられて通行人に通報でもされれば、熊谷も弱るようだ。すぐに手を離すと、今度はやけに声を柔らかくしてあさぎに提案してきた。

「卒業したら、多分中三の時のクラスで同窓会すつからさ、メアド教えとけよ」

どうしようかと思った。中学生の時の思い出や、今肩を引き寄せられたことへの恐怖が蘇る。三年生の時のクラスメイトのことは嫌いではないが、積極的に会いたいとも思わない。だから高校だって遠くの学校に決めたのだ。

熊谷の眼が、まるで蛇が身体を締め付けるようにあさぎを見据えている。彼に関わってはいけない。危険を本能的に感じていた。しかしその時、あさぎの心の空白に何かが入り込んだ。

——それでも、熊谷くんは謝ってくれた。

確かにその一言で、あの嫌な思い出はそのままでも、そこから今までの時間の色彩と熊谷への印象は、あさぎの中で少なからず変わった。

熊谷が自分を想っていたと思うと、自分も女性として捨てたものではないのだろうかという気がしてくる。彼の言うとおり、あさぎ

と正反対の派手な女の子に興味があったような人なのに。

すると現金なもので、彼に好感は抱かなくとも自分を認めてくれる存在があったことで、過去の割り切れなさや自己嫌悪も多少和らいでくるような気がしてくる。過去の出来事が今の醜い感情に繋がっているのだとすれば、彼と少しでも仲良くなれば、欲望の金魚も見なくて済むようになるかもしれない。この強い劣等感から少しでも解消されるかもしれない――中学時代とそれからの自分と真っ直ぐ向き合えないようなままでは、何も変わらないのではないか。誘惑の蛇があさぎの心でうねっていた。その色は金魚と見間違えてしまうような緋色をしていた。

人に頼っているようでは、本当は何も変わらないのに。意外な告白を足掛けに前向きになりたいと願ったあさぎの中に、緋色の蛇は既に息づいていた。結局熊谷を振り払うことはせずに、あさぎは彼とメールアドレスの交換をしたのであった。

第59話 転がり、変われ!

滅多に会えないのは寂しいと、あさは清矢郎とほぼ毎日メールを交わしている。けれど必ず毎晩というわけでもない。これも彼と気持ちが離れてしまったようで焦った時期があったが、清矢郎にとって重い存在になりたくない、なってはならないという気持ちも芽生えた。

それに清矢郎も言っていた。メールをやり取りしないからといって嫌っているわけでも、嫌われているとも思わないから信じていいいと。だからメールに頼らない日も最近ではある。

だが今日、あさは中学時代の同級生から告白されてしまった。過去の出来事や馴れ馴れしく肩に手を回されたことは言うつもりもないが、告白の事実だけでも伝えた方がいいのか。折悪く今は大学も夏休みで、清矢郎は剣道サークルの合宿に出かけている。友達と楽しんでいる時に込み入った話をするのもどうだろうか。付き合い始めの頃であれば狂ったように電話をかけていただろうが、あさぎも十八歳。相手の立場も配慮するようになってきた。

——もう。「彼女」がこんなに困っているのに。

あさはベッドの上でむくれるが、それは一度は言ってみたかった台詞だ。

同時に二人の男に言い寄られる。密かに憧れていたこの状況に、酔っていたいのだろうか。だからその期間を引き延ばすために、理由をつけて清矢郎に話そうとしないのか？ まさか——。

あさがそこで嫌な予感に背後を振り向くと、赤い金魚が泳いでいた。いや、金魚ではない。それよりも長い。赤い腰紐のようなものが、身をくねらせている。

——なに？ 幻覚？

そもそも金魚自体が幻覚なのだが、これまで金魚以外のものを見たことがなかったあさは、咄嗟にそれを「ありえないもの」とし

て視界から遮断した。これは自分の心の中の象徴として認めてはならない、金魚以外のものは存在させてはならない。

何故なら、金魚はあさぎと清矢郎だけのものだから。

この狭い水槽の中に、他者の侵入を許してはならないのだから。

金魚が示しているものは、清矢郎への想いの丈と言い切れるほど美しいものではない。けれど清矢郎とのかつかけに見えるようになり、十二の夏からそれだけに囚われて生きてきた。これまでの自分を、自分たちを否定したくないなら。

その時、あさぎの携帯電話にメールが届いた。一瞬期待したものの、熊谷の名前を見てがっかりしてしまった。

清矢郎は友達との時間を大事にする。あさぎから連絡をした場合は、心配して会話を中断してでも返信や電話をくれるが、余程暇でない限り他人と一緒にの時に彼からメールを送ってくることはない。無口な清矢郎はべらべらと喋っているわけではないだろうが、仲間との会話に集中したいらしい。

今日の告白を確認するように繰り返し、どうでもいいような話題を織り交ぜた熊谷からのメールは文字数が多い割に、言葉の少ない清矢郎のメールからのような安心感は得られなかった。同じデジタルの文字だと言うのに絡みつくような視線、もしくはいつ氷が割れて水底に突き落とされるかもしれぬ不安が浮かび上がってくる。ただ単に彼が好きではないからだろうか。

しかしあさぎは自分だったらメールを無視したら悲しいなと思ってしまう、つい律儀に短めの返信をした。熊谷がこんな風にメールを送ってくるのも、あさぎが交際を断ったからかもしれない。熊谷の性格ならあさぎが落ちるまで躍起になって口説き倒し、万が一にも彼に本気になればそこで飽きられてしまいそうだ。

清矢郎以外の男子と仲良くなった経験がないため、過去の清算やそこからの劣等感の解消のためにも、熊谷と友情を築こうかと画策

したあさぎだが、思ったようにはいかなさそうだ。浅はかな自分をあさぎは早々に恥じる。

あさぎがメールを返したことで、熊谷から更に返信が届いた。これからもメールは送られ続けるのか――。その不安は的中し、それからしばらくの間、熊谷からのメールが毎日続く羽目になった。

真面目に返信を続けていたあさぎだが、毎日というのは流石に少々辛くなってきた。熊谷もメールでは気さくで、嫌なことを言われているわけではない。しかし自慢話も含めた彼の話にどう付き合っ
てやればいいのか、どんな言葉を返せば喜ぶのかよく分からず、メールだというのに気疲れする。一度は電話が掛かってきてしまい困ったが、丁度母親に呼ばれ、すぐに切ることができてほっとした。

もしかしたら熊谷は自分のペースで、自分を大事にされることに慣れているのかもしれない。あさぎが清矢郎にしてもらってきたように。

残念ながらこの一週間清矢郎とは時間が合わず、メールで相談するには難しい話かと思い、この件をまだ相談できずにいた。合宿後、電話もしたが母親の眼や料金が気になりいつもどおり短時間で切ってしまう、結局言いそびれてしまった。

それに熊谷とはメールだけで、何の関係も始まっていないのだ。だから顔が見えない状況でややこしい話をして、清矢郎の気を揉ませたくなかった。

何よりあさぎ自身、後ろめたさがあるのかもしれない。こんなことになっているのは、そもそも連絡先を交換した自分の所為だ。昔の嫌な出来事が少しでもいい思い出に変わらないか、人を頼って自分のコンプレックスを解消できないかと、軽率な行動をしてしまったかもしれない。ただ単にちやほやされたかっただけと思われるも仕方ない。

夏休み中の友人にも会えない一週間、一人で熊谷との微妙な関係に臨んでいたあさぎだったが、遂にそのままではいられない時がやってきた。

熊谷はやはり相手の都合を考えない少年のようだ。時間を考えずにメールを送り、時に即答を求めてくる。無論、あさぎやあさぎの友人にもそういうところはある。けれど清矢郎は、そういうことを減多にしない。大体あさぎが眠る前や休日の退屈な時、放課後などにメールを送ってくる。授業時間中にも送られてこない。

だから夕食の際に一通のメールが届いた時は、あさぎも熊谷からだとすぐに分かった。うっかり居間に置いたまま、マナーモードにもなっていないかった。母親がじろりと睨んでくる。携帯電話料金は約束の範囲で収まっているものの、受験生で年頃の娘ということもありちくちくと心配してくるのだ。

「相変わらずメールばかり。受験生なのに、何やってるのよ」

成績は安定しているがもっと勉強して偏差値の高い大学に行けばいいのに、とも言われている。あさぎが私立大学を志望しているので、金銭上の文句もあるようだ。と言って、自宅から通える公立大学は清矢郎の通っている学校しかない。今の学力では到底無理だ。

父親は相変わらず黙っている。母親に同感なのか、逆らってこれ以上彼女の機嫌を損ねたくないのか。

あさぎが返信をしなかったので、熊谷からのメールが立て続けに届いた。母親は更にむっとした顔をして、あさぎを一喝する。

「電源、切っておきなさい！」

しかしそれくらいのことを金切り声で叫ばれ、あさぎも今日はきちんと来てしまった。生理が近いからか。熊谷からのメールに辟易としていたからか。清矢郎にしばらく会っていないからか。この不安を誰にも話せないでいるからか。好きでもないのに、嫌とも言えず清矢郎以外の男子とやり取りをしている自分に苛立っているからか。つい反抗的な態度をとってしまう。

「分かってるよ。うるさいな」

「何よ！ その態度」

「だってお母さんうるさすぎ。別にごはん食べないでメールしてる

わけじゃないじゃん。他の家の子、そんなに言われてないよ」

「あんたが土日ふらふら出かけてるから、心配してるんでしょ！
本当に勉強しに行ってるの？ 変な人と付き合ったり、変なことし
に行ってるんじゃないの！？」

「大丈夫、だって！ 勉強もしてる！ 受験もがんばる！ たまに
は息抜きしたっていいでしょ！」

「やめなさい」と父親は一応止めるものの、おっとりした彼の言
葉はヒートアップしている母娘には届かない。

あさぎにしてみればメールが好き放題できる熊谷も、好きな時に
好きな人と会える夕映も、稽古事は大変でもそれ以外のことは口う
るさく言われず、気になる年上の人も両親に気に入られているとい
う透流も、皆が羨ましかった。

だったら清矢郎との関係を両親に打ち明ければいいのだが、そう
したところでこの母親が、じゃあいつでも会ってもいいと言ってく
れるわけでもないだろう。受験生の立場で、不健全な――車の中で
肌を重ねるような男女交際を許してくれるとは思えない。それでも
「それ」がしたい以上、清矢郎との関係を話すならせめて大学生に
なってからにしよう、もっと自由に行動できるようになってからに
しよう。あさぎはそう考えていた。

好きな人を好きと言う感情を解放できず、会いたいのに会えない。
そんな抑圧に苦しむのは、年齢が足りないからではなく、この過保
護で心配性な母親の所為なのか――？

熊谷の登場により、これまでに積み重ねてきた不満が爆発してし
まったあさぎ。金魚は母親の方へと攻撃するように口を開ける。け
れどそれは小さく弱いもの。高圧的に怒鳴られれば、彼女は眼を潤
ませて黙るだけ。

いつも人の所為にして、堪えることでこの場を凌ぎ、いつか自分
の願いは叶うだろうと何もせず待っている。そして自分で未来を
掴み取って生きている人を羨んでいる。清矢郎と付き合っても、何
も変わっていない。

それにしてもやはり、母親は母親だ。男の影を薄々感じ取っているようであさはどきりとしたが、証拠は残さないように心がけてきた。清矢郎が高校生だった時に公衆トイレでしていたことや、現在車の中でしていることを誰かに通報でもされなければ誤魔化せるはずだ。

第一、従兄なのだ。あの行為以外は、連絡を取り合っていたと言ったところで叱られることではない。要は時々結んでいる男女の関係について、とやかく言われたくないだけで。

それでも母親は見ないふりをしているのかもしれない。彼女なりにあさを信じて、時にこうして叱って。そんな母親に対してううった態度を取ればいいのか分からないが、「勉強はしている。受験も頑張る。息抜きがしたい」、この言葉に尽きる。「息抜き」に性交が入っているのは否めないが、そればかりしているわけでもない。自分の性との付き合い方を、甘い部分はあっても考えているつもりだ。

だからこれ以上話すことはない、あさは押し黙った。母親はまだぶつぶつ言っているが、あさがそう言う以上どうにもできないようだ。父親が二人の喧嘩が収まるのを、黙って待っていてくれるのは助かった。

ただ最後に「土日、あんまりふらふらするんじゃないわよ」と、釘を刺されたのは痛かった。入試まであと半年。これ以上心配かけないためには、受験が終わるまで月一回の逢瀬も危うくなるのだろうか――。本当はもっと反抗して、今すぐ大人の権利を勝ち取った方がいいのか。だが養われている身でそれはできない。あさぎとて自分の受験を成功させたい。まずは大学生になることだ。あさぎはどっと疲れた顔で自室に戻った。

もしこの人の子供でなければ――などと一瞬でも考えてしまったあさぎだが、すぐに反省する。そんなことは絶対に言ってはならない。命がけで産んでもらい、育ててもらったのに。それはあまりに

幼いと、一人になったあさぎは冷静に考える。第一、産んでもらえなければ清矢郎とは出会えなかった。そのうえ大学卒業まで学費も出してくれ、後悔なく勉強して欲しいと願うからこの身を案じてくれるのだ。厳しくともたくさん抱き締めてもらい、人として生きる知恵や正義感なども教えてもらってきた。

いつか荒芝に言われたとおり、自分が両親に愛されているのは確か。だから今は、感謝の代わりに勉強に専念する時かもしれない。外出禁止令を出されたわけでもない。

家族内のルールはその家族にしか分からない。山本家の場合、子供ができるかもしれない行為は慎重にしろということ、以前より教えられている。だからあさぎが母親に一人の女として恋人の存在を認めてもらうには、どうやら成人してからの方が簡単に話が進められそう。

——うん、言おう。大学生になったら、お父さんとお母さんに、せいちゃんのことをちゃんと話そう。

社会に出るまで黙っていようかとも思ったが、嘘をつき続けるのも良心が咎める。二人の関係を話して理解してもらった方が、交際ももっと気軽にできるかもしれない。身内ゆえに大変なこともあるかもしれないが、それでも成人していれば口出しされなくなるだろう。

——頑張って、大学生になろう。

清矢郎と対等になりたい。彼ともっと会いたい。そして愛されている「子供」ゆえに縛られている様々なものから、解放されたい。あさぎはあさぎなりに両親に感謝した結果、そんな決意を固めた。

そうになると、自己中心的ではいられない。過去とそれが原因で抱いている劣等感に決別するためにも。そのためにも他の男に眼を向けられていたい、などという醜い感情は捨てねばならない。

——強くならなきゃ。前に進まなきゃ。

あさぎは熊谷のメールを一読したものの、その夜は返信せずに画面を閉じた。

・・・・・・・・・・

まだ夏休みは終わっていないが、今日も補習があった。この日は透流もあさぎと同じ授業を受け、彼女が居ればクラスの女子とも話しやすい。授業後、久しぶりにクラスメイトたちと談笑をした。

女子だけが残っていたため、やがて恋愛の話題へと移っていく。文芸部に限らず、女子同士が集まればそういう流れにもなる。だが今日の内容は丁度、あさぎが今気にかかっていることと重なった。「だからさあ、一生ずっと一人の人とだけって、あたしは、やなのよ」

その少女はまだ男性と付き合ったことはないが、最初に肌を重ねた人と添い遂げ、他の男性を知らないまま人生を終えるのは嫌だと言うのだ。同調する女子、大人にならないと分からないという女子、その人が好きなうちはそうは思わないだろうという女子と居たが、言葉に詰まったあさぎと透流は顔を見合わせた。

透流はほんのり頬を染めて首を傾げている。好きな人のことを思い出しているのか。透流の性に対するこだわりは、あさぎよりもずっと淡泊な気がする。だから彼女なら今好きな人に一生を捧げることに、何の迷いもないだろう。肉欲などに目を眩ませず、大事なものを手放さず、真っ直ぐに生きていきそうだ。

そんな透流が眩しかった。今度は境遇が、ではない。その廉直な魂が。彼女なら熊谷のような男に言い寄られても、心をぶれさせないだろう。そもそも隙を作らないかもしれない。あさぎは「私も透流ちゃんと同じだ」と宣言するように、彼女に笑顔を向けた。

——そうでありたい。清矢郎だって、そう言ってくれるかもしれないのだから。男性なのに、まだ若いのに。浮気もせず、最初に抱

いたあさぎの身体だけで一生構わないと表情も変えずに言いそうだ。
あの日あさぎの心を壊した負い目からだけでなく。

誰でもいい、女扱いされたい、愛されたい。清矢郎と気持ちを通
い合わせる前は、どうしてそんな欲望に振り回されていたのか。

けれど今は違う。清矢郎は自分を信じてくれている。こんな自分
でも、心から。

どうして心がぶれた？ どうして他の男のことなど、考えられる

？ 金魚を見せた自分に愛情を感じ、金魚ごと自分を受け入れてく
れた彼以上に、この世界に自分を想ってくれる人間が居るとでも？
その彼をどうして、裏切れる？

金魚を見せてくれた、竹のような姿に魅せられた、あの人のよう
になりたい。

恥ずかしくない、自分で在りたい。

あさぎはその日から、熊谷のメールへの返事を完全に止めた。母
親に叱られた時から頻度を落としていたが、彼に気持ちを察しても
らうよう祈り、ようやく一切の返信をしないことにした。かえって
熊谷を傷つけたかもしれない。自分が悪かったと分かっている。そ
れでもメールが届き続けても、冷たく跳ね除ける。

同窓会の連絡も来なくなりそうだが、全ては自分の撒いた種。強
くならないと。自分の方が過去を受け入れてやらないと。そのため
に、過去と決別するのだ。

回り道をしたことがよかったのか、分らない。だがこれが、十
八歳のあさぎが出したばろぼろの結論だった。

・・・・・・

そして八月も明日で終わりという日。すれ違いが続いていたあさ
ぎと清矢郎は、久しぶりに会うことができた。今日も車で出かけた
が、山の中ではなく見晴らしのよい都市公園へと連れて行ってもら

う。

セックスができなくてもいい。今日はゆっくり話をしたい。清矢郎には悪いがあさがそうお願いすると、彼女の意思を彼は尊重してくれた。

そんな清矢郎だから。いつもいつもあさぎのことを一番に考えてくれる彼だから。あさが彼のことを考えなければならず、自分本位であってはいけない。心配かけたくないと黙っていたが、自分の醜い感情を知られたくなく、このまま何もなかったような顔をしていようと思っていたが、やはりそれではいけないのだ。

「あのね、せいちゃん」

清矢郎からサークルの合宿の様子などを聞かせてもらっていたあさが、駐車場から降りて風通しのよい高台まで歩いてきたところで思い切って告げた。夏休みの間に起こった、一番重要な出来事を。

「えっとこの前……ど、同級生から告白、されちゃったんだけど」
その言葉を聞いた途端、清矢郎の眼が大きく見開かれた。

第60話 なきがら花火

過去の事件と正対して従兄妹同士で付き合うことになった時や、身体の関係を追った時を除いて、清矢郎の表情が崩れたところは、あさぎもほとんど見たことがない。だが今の報告を聞いて、清矢郎に何か衝撃が走ったのは確かだ。思っていた以上の反応に、あさぎは焦った。

「言わない方が、よかった……？」

熊谷とは何もなかったというのに。かえって心配になり、そう尋ねたあさぎだが、

「んなわけ、ねーだろ！」

清矢郎に吐き捨てられ、びくんと肩を竦ませる。馬鹿なことを聞いたとまた自己嫌悪に陥る。弱い自分と過去と決別するために話そうと決めたのに、何をしているのか。

だが清矢郎にこんな顔をさせたかったわけではない。彼に信じて欲しいと願っている。だが清矢郎以外の男性に言い寄られた時点で、今までどおりではいられないのだろうか。

あさぎの怯えたような顔に気付いた清矢郎は、はっとしたように首を振った。

「悪い」

あさぎも首を横に振った。清矢郎が悪いわけではない。彼が黙っていた方が嫌だったと言うなら、やはりこの判断でよかったのだろう。

「――って、何かされたとかじゃ、ねえよな」

すると清矢郎から更に追及され、今度はあさぎが驚いて眼を見張った。彼は高台の鉄柵に頬杖をつき、髪の毛をぐしゃぐしゃと掻き回した後、あさぎの方を横目でじっと見据えてくる。

「な、何にもされてないよ！」

まさか身体の関係でも疑われているのか。そんなことをするわけ

がない。だがあさぎにその気はなくとも幼い頃、清矢郎があさぎにした程度のことは、「男なんて分からない」とよく言う彼は疑っているのか。だが、そんなこともされていない。

慌てるあさぎの首の動きに合わせ、ポニーテールの髪が後頭部で一生懸命跳ねる。一瞬熊谷から肩に腕を回されたことは言わないでおくことにした。身体がぶつかっただけと思おう。すぐに振り払ったのだし、何より思い出したくもない。

「でも、メールはよくくるけど……」

その代わり、これについては話をした。熊谷も友人としてよりも下心があつてのようで、あさぎも少々困っているからだ。怒られると覚悟したが、清矢郎は「ふうん」と不機嫌そうに返事をしたただけだった。

「いつ、告白されたわけ？」

どうやら彼は、まず先に事実関係を確認したらしい。無口な清矢郎には有り得ないほど、質問を続けてくる。あさぎの脇の下に汗が滲む。成人した清矢郎は、あの恐ろしかった伯父と声や視線がしっかり似ている。だが激昂しないところは違うようだ。伯母が怒る姿は見たことがないが、きっと彼女の方はこんな風に静かに怒りを表すのかもしれない。

ということを、呑気に考えている場合ではない。清矢郎に問い詰められ、あさぎはメールだけで悪いことをしていたような気分になる。清矢郎にだって女性の友人はいるだろう。それなのにあさぎに罪悪感があるのは、自分の過去を塗り替えたために熊谷に言い寄られたことを利用としようとした後ろめたさがあるからか。

「えっと先々週の……せいちゃんが、剣道の合宿行ってる時」

清矢郎が益々大きく見え、あさぎは叱られた子供のように萎縮した声で言う。清矢郎の軽い舌打ちが耳に届いた。

「何ですぐ、言わなかったんだよ」

「だってせいちゃん合宿中だったから、電話したら困ったでしょ？」

今までだって友達の一緒の時って、連絡くれなかったし……」

「そういうのは、別だろ。大丈夫だったのか？」

「え？」

「俺がすぐ行かなくても」

先ほどの「何かされたのか」の問いと合わせて考えると、「俺を呼べばよかったのに」という意味に解釈してよいだろうか。まさか合宿をキャンセルして、あさぎの元に来てくれたということも有り得たのか。

「う、うん。とりあえず何もされてないし、大丈夫、だったよ」

「とりあえずって何だよ」

「だから、メールがよく来るくらいで……でもちゃんと付き合ってる人いるって言ったし、今は返信してないよ！」

清矢郎はそれを聞くと「分かった」と頷き、今度は鉄柵に肘をかけて空を見上げた。あさぎが彼の反応を待っていると、やがて清矢郎は再び頭を掻き始めた。そしてその姿勢のまま動きを止めると黙ってしまったので、あさぎはおずおずと尋ねる。

「も、もう終わり？」

説教されているわけでもないが、この話をどうやって終わらせていいのかも分からない。

「それ以上何もねえなら、どうしようもねえだろ」

「でも、せいちゃん怒ってるし……」

あさぎが白いスカートをいじっていると、彼はぶっきらぼうに言い放った。

「怒ってねえよ」

「怒ってるよ。こわいもん」

「だから別に……ただ、」

清矢郎はそこで口を噤み、額から外した自分の掌を見て何事か少し考える。しかし結局何も言わず、その手を鉄柵について身体を起こすと、あさぎから顔を背けた。

「ただ、なあに？」

あさぎは清矢郎の前に飛び出した。一番恐いのは金魚の住む二人きりの世界に第三者の存在が介入し、清矢郎の心が離れていくことだ。この閉鎖された水槽の中で二人、ひっそりと寄り添っていたいの。

清矢郎はあさぎを見下ろすと、また頭を搔く。言わないつもりだったのに、つい口走ってしまった、という様子だ。前にもこんなことがあった。やがて彼は、あさぎの必死な視線に観念したように言葉を吐き出した。

「告白されたとかメールしてるとか、聞けばムカついちゃう。でもそういうこと言ってくれねえのは、もっと嫌だ。でも、メールぐれえでごちゃごちゃ言ってる自分も嫌だ」

きよんとした顔で清矢郎の言うことを一旦飲み込み、考えていたあさぎだったが、どうやら清矢郎は何故か彼自身を責めているらしい。

「誰とメールしててもあさぎの自由だけだし、お前のこと好きだとかいう奴とするのは、なんか気に食わねえんだよ」

やけくそのようにそこまで一気に喋りきった清矢郎は、話はこれで終わりだと言うように、はあ、と大きくため息をついた。

「つまんねえこと言ってるんな、俺」

「そんなこと、ないよ！ 嫌な思いさせて、ごめんね」

いつの間にか、金魚の舞が始まっていた。いつか見た小さな金魚たちの集合体であるあの巨大な金魚が、久しぶりに太い体をくねらせ大円舞を繰り広げる。――内心では、あさぎが悦んでいるからだ。清矢郎の自分への想いが嬉しくて。

もしかして今日自分が清矢郎に告白の件を話したのは、彼の愛情を確かめたかっただけなのだろうか。そう思えてきてしまうほど、金魚は夏の光の下で赤々と燃え盛っている。

――違う。違う！ そんなつもりじゃない！

そう思うのに、どうして金魚は舞うのだろう。一番醜い感情など

誰しも見たくないものののに、あさぎは幼い頃からいつもそれを視覚で感じさせられ続けている。もう長い間、普通なら隠れているはずの奥底にある欲望を突き付けられているから、いつだって醜い自分と向かい合う羽目になってしまうのだ。

そこまでのことは清矢郎にも言えない。だが彼の心配があさぎを想う故であれば、その気持ちには感謝したかった。

「心配してくれたのは、こういう言い方おかしいかもだけど、嬉しい……よ？　もちろん心配させたり、誤解されるようなことしちゃいけないし、私も信じてほしいから、そう思われないようにしなきゃいけないけど」

母親の場合は放っておいて欲しいと思うあさぎなのだが、清矢郎からメールをしてくることや、言葉で心配されることは少ないので、余計に有り難く思うのだろう。

「それなら、いいけどさ……」

清矢郎はまだ気にしているのか、ばつが悪そうにあさぎの方をちらりと見た。先ほどまで舞っていた大きな金魚が、久しぶりに清矢郎の傍へと寄ってきた。そして彼に絡み付き、その頬に接吻をする。もっともっと心配して、と言うように。

――駄目だよ。そんなこと考えちゃ、もう駄目なんだよ。

爪の痕がつくほど、あさぎは掌をぐっと握り締める。強くなると決めたが、一体どうすれば迷路から抜け出せるのか。いつそ己の欲望そのものを、丸ごと認めてやればいいのか。結論が出たはずなのに、清矢郎の優しさを前にすると甘えてしまいそうになる。

「でも、せいちゃんは？」

「は？」

そこで急に質問してきたあさぎを、清矢郎は改めて見下ろした。にこりともしないが、いつもの彼に戻ってくれたようで、あさぎは少しだけ手の力を緩めた。

「大学で、誰かに告白されたりしないの？」

「されねえよ」

「嘘」

されないわけがない。これだけの人が。

「お酒が入ったら誘われたりするんじゃないかって、夕映が」

「ねえよ。そんなことあったとしても、ほっとく」

「じゃあ、一度もそういうことなかったの？」

「……」

「あったんだ」

「っってお前と付き合う前のことだし、よく知らない子だったから断ったし」

「でも私に言ってほしかったなら、今度そういうことがあったら……せいちゃんも、私に言ってくれる？」

「分かった」

これも束縛になってしまいうるか。だが清矢郎もあさぎに話して欲しいならお互い様である。ひとまず今の時点で互いに秘密にしていることはなくなったはずだ。心に重く圧し掛かっていたことが解消され、あさぎがやっと安堵した時だった。彼女の携帯電話からメールの着信音が鳴り響いた。

家族からの着信音ではない。――もしかして、と携帯電話を見たあさぎの顔色が変わったのを、鈍感な清矢郎でも流石に察したらしい。ぴくりと眉を吊り上げて、彼を申し訳なさそうに見たあさぎを睨んでくる。

「そいつから？」

嘘をつきたくなく、あさぎは小さく頷いた。

「どうすんの？」

「返事しない、よ。折角の時間、邪魔されたくないもん」

その時清矢郎の口端が僅かながら上がったのを、視線を下に向けていたあさぎは確認できなかった。

「そんなの、ほっとけよ」

「うん」

偉そうな命令も熊谷からであると苛立ったり、恐怖を感じたりとするのに、清矢郎からだとして支配されている感覚が心地よいのか。それは、相手への信頼感が桁違いだからだろう。清矢郎があさぎに対して立場が上のように振舞うのは、子供の頃から兄貴分としてあさぎを守ろうとしてくれているからだ。あさぎのことを心から大切にし、尊重してくれていることはあさぎも十分実感している。――でも。

あさぎが一抹の不安を覚えて携帯電話を眺めていると、清矢郎も長い付き合いだからか、彼女の考えていることが分かったらしい。

「本当に、大丈夫なのかよ」

「どういう意味？」

「キレて変なことしてくるとか、ありそうなのかって」

そういう事件はニュースで時々聞く。熊谷はどうなのだろうか。幸い彼はそこまで思い詰めるような性格には見えず、あさぎに深く執着しているようにも思えない。今のところそういう意味では助かっている。あさぎにのめり込み過ぎて、危険な行動に走られても弱ってしまう。

「大丈夫だと思うけど……メール、見てもいい？」

清矢郎が頷いたのを確認してから、あさぎはメール本文を読み始めた。

案の定、熊谷からは『どうしても、最近返事くれねえんだよ』とメッセージが送られてきていた。寂しいと訴えてくる。自分が彼の立場だったら、と思うと仲間外れの経験があるあさぎは胸が痛む。無視されるのが辛いのはよく分かる。当人に見れば、ただ話をしてももらいたくて必死なのだ。けれど男女の関係にはなれないのだから、熊谷の絡みつく蛇のようなメールにはどうしても答えられない。「そいつ、しつこいの？」

清矢郎も、男としてすぐに熊谷の性質を見抜いたらしい。種を蒔いたのは自分なので熊谷に悪いと思う気持ちはあるが、清矢郎に誤

解されないようあさは同調して頷いた。

「言ってやろうか」

「え？」

「あさが変なことされたり、困ってるくれえなら、はつきり言うから。俺が」

——何を？

その時、あさが見たものはその巨大な赤い金魚が、いつかあさが見ないふりをした赤い蛇を飲み込む姿だった。ごくんと一口で無慈悲に。美味しそうに、恍惚の表情を浮かべて。

「わ、悪いよ」

「いいよ。つうか、そういうもんだろ」

——俺はお前の……なんだから。

そう言われた気がして。その途端、大きな金魚は夏の名残の花火のようにぽあんと弾け、血の花弁を降らせた。その中には緋色の蛇の屍もきつと混じっていることだろう。だから二人が住んでいる水槽の中の水は、もう元のように澄むことはない。

けれどあさはこれから清矢郎という名の水槽でしか生きられず、そこ以外で生きるつもりもなかった。それは弱さだと思っていたが、今は自分の生きる指針にしたいと考えている。清矢郎の隣に立つのに、ふさわしい自分になれるように。

「何かあってからじゃ遅えだろ」

清矢郎はそう言って腕を組む。あさはくすぐったそうに肩を竦めた。

「うん、ありがと。でも騒ぎになって、お母さんにばれちゃったら……」

「んなことより、あさの方が大事だ」

実は心配性な一面もあるらしい清矢郎にぴしゃりと言われて、あさはこんな時だが頬を染めた。

「じゃあ、お母さんとか伯母さんにばれちゃっても、いいの？」

顔を上げたあさぎの眼に、泰然とした清矢郎の眼鏡面が飛び込んだ。

「当たり前だろ。そのうち、話すことなんだし」

大学生になったら全てを打ち明けようと考えていたあさぎだが、清矢郎も同じように、近いうちにと考えていてくれたらしい。あさぎは緩む頬を押さえて、ポニーテールを揺らし何度も首を縦に振った。

「だからそいつに何かされそうなら、俺が家まで送ってやってもらいし、その時は叔父さんや叔母さんに俺も一緒に話してやるから」
「うん」

ただしそこまでの事態になれば、浮かれてなどいられないだろう。あの母親ならば、今度は熊谷に対して怒りを剥き出しにし、警察沙汰にすらなりそうである。そこまで騒ぎを大きくしたくはないので、清矢郎に送ってもらうという選択肢はできれば避けたいが、彼との関係が公認になる日を二人で具体的に想像でき、あさぎは久しぶりに心から微笑んだ。

ただただ、両親に引き裂かれることだけを恐れていた。子供なのに身体の関係を経験してしまった自分に負い目があったから、勝手に誰のことも信じられなくなり、勝手に誰にも二人の仲を認めてもらえないと思い込んでいた。すべきことはひとつなのに、それに立ち向かう勇気がなかった。

もちろん受験が終わってから説明するのが望ましいという状況には変わりないが、それほど恐れなくとも、清矢郎は自分から離れていかない。こんな自分などでも、絶対に守ってくれると言っている。それは分かった。

自分に自信はないままだが、もっともつと清矢郎を信じよう。そして今度こそ自分も強くなって――心を落ち着けて、たくさんのものを受け入れて、乗り越えて、彼を守ろう。幾度も考えていたことが、今、本当の意味であさぎの心に落ちてきたのであった。

「せいちゃん」

そう呼びかけると、清矢郎は「ん？」と何と言うこと無い顔で聞き返してくる。あさぎの心を救い、人生観を決定するほど大きな力を持っているくせに、全く無自覚であるようだ。そんな鈍感な彼に言う。

「ありがとう。大好き」

——と。そしてまた、「ん」とだけ頷いた清矢郎に向かって背伸びをすると、あさぎは彼の唇に自分の唇を重ねた。人に見られたかもしれないが、どうしても今、触れたかった。こんな自分でもよければ、これからも彼に触れさせて欲しいとあさぎは思った。

突然の口付けに清矢郎は軽く息を飲んだが、あさぎの頭を引き寄せて己の胸に押し付けてきた。今度はあさぎが眼を瞬かせる番となり、接近したTシャツの柄を凝視する。

「つうか、そいつの所為であさぎが悩んでると思うと、すげえ腹立つ。今日だって、だから元気なかったんだろ」

その言葉の裏にある清矢郎からの密かな「欲求」を察したあさぎは、嗅ぎ慣れた匂いを思い切り吸い込んだ後、彼の胸に頬を擦り寄せこう囁いた。

「心配させて、ごめんね。今日はできなくて、ごめんね。次は、ゆっくり会おうね」

先ほど散った赤い花弁は、寄り添う二人の周りをいつしか渦巻き出した。それは上昇気流を起こすと、鯉が竜へと変わるように青空の彼方へ飛び去っていった。

第60話 なきがら花火（後書き）

あと2話で10章が終わる予定です。11章で終了予定なので、3月か4月には最終回かなーと思われれます。

ほんと、少ない数でもこういった内容でもいただく感想では、どれも拙作を丁寧に読み込んでいただけて、私も深く考えさせられております。ありがとうございます！詳しくは今回、個人ブログや活動報告で語っていますので、よろしければお目をとおしてやってくださいませ。

いずれにせよ、残りのお話でどこまで書けるのか、あさぎたちはどんな結末を迎えるのか、今度こそ最後のプロットを煮詰めたと思います。（決まりきった内容でも、自分なりに書けるのかすごい不安なんですけどね。でも何がなんでもお話はちゃんと完結させますし、後悔もないよう精一杯がんばるですよ〜がくぷる；）

こうした展開&ゆっくり更新にも関わらず、連載にお付き合いくださる方々には本当に心より感謝申し上げます。それでは今回もお読みくださり、ありがとうございます！

お気に入り登録、拍手、ご感想などいつも大変励みになっております。ご評価入れてくださった方も、ありがとうございます。次回更新は、12/12頃を目指します。

※携帯の方は小説案内ページに更新情報チェックサービスのサイト様へのリンクがありますので、必要でしたらご利用ください。ついったーでも随時、製作・更新情報を流しておりますので、更新予告日が近くなったり、それを過ぎてしまっている時はチェックしてやってくださいませ（個人サイトよりリンクしています）。フォローもお気軽にどうぞですー！

※この作品にもしものもしものでコメントいただけます場合は、拍手メッセ（内容非公開／ブログでお返事／ご意見を一部引用させていただきます）が、または作品最終ページの感想欄（公開／感想欄でお返事）をご利用くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5075i/>

幻影の金魚は緋色の檸檬水に溺れて

2011年11月27日08時49分発行